

Lost Materials

てんぞー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深く——深く、眠り続けるように。

目次

Death	II	185
Death		176
Bleeding	IV	168
Bleeding	III	161
Bleeding	II	149
Bleeding		142
Melting	VI	134
Melting	V	124
Melting	IV	116
Melting	III	107
Melting	II	99
Melting		90
Innocent		
Reflection	IV	81
Reflection	III	72
Reflection	II	63
Reflection		55
Seaside	City	47
Seaside	City	39
Seaside	City	32
History	Lost	24
History	Lost	17
History	Lost	1
Prologue		

W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	W i n d i n g	D r e a m i n g	D r e a m i n g	D r e a m i n g	D r e a m i n g	D r e a m i n g	D r e a m i n g	F a r E a r t h	D e a t h	D e a t h	D e a t h	D e a t h
U p	U p	U p	U p	U p	U p	U p	U p	U p	U p	VI	V	IV	III	II			VI	V	IV	III
X	IX	VIII	VII	VI	V	IV	III	II												
343	335	327	319	311	304	296	289	281	274	266	258	251	243	235	228		220	212	200	193

Prologue

History Lost

「はーん、ここが海鳴か」

バスから降りた場所は海鳴という都市を一望できる丘の上だった。そこから海へと向かって広がる海鳴の姿を眺めながら、自分が住んでいた海の向こうの姿を思い出し、率直に思い浮かんだ言葉を口にす
る。

「田舎だな」

そんな言葉しか口に出なかった。メインに見えるのは住宅街だ。繁華街や多少のビルの姿が見えて来るが——基本的には田舎だ。大きな港がある訳でもなく、普通に生きていく為の都市。海が近いというだけで、それ以外にさしたる特徴は見えない。都会と呼ぶには少々物足りなさを感じるような場所だった。とはいえ、静かに、穏やかに暮らしていく分にはそこまで悪い場所である様には思えなかった。少なくとも海の方から吹いてくる風は心地よさが混じっている。空気も悪くない。或いは住み着けば気に入るような場所なのかもしれない。そんなことを考えながらポケットの中に手を伸ばす。

その中に突っ込んであるスマートフォンを取り出す。繋いでいるイヤホンのコードが揺れるのを視界の端で捉えながらスマートフォン
のメモアプリを開き、そこに入力してある住所を確認する。それを
グーグル先生のマップアプリと連動して、住所を入力する。再びスマートフォンをポケットの中に押し込む。

イヤホンの向こう側からはお気に入りのロックが聞こえる。少し古い曲だが、最新が常にベストであるとは限らない。80sのロックは今でもレジェンドと呼べるものがいくつもある。最新のよりは、こちらの方が好みであるという部分は確かにある。やっぱり、趣味が入っているかもしれない。そんなことを考えながら右手でイヤホンのコンソールに触れて音量を調整しつつ歩き出す。

向かうべき場所はスマートフォンがガイドしてくれる。電子音声

によるナビゲーションは今の時代、そこまで珍しいものではない。目的地までXメートル、右折、左折、直進、そういう事を一つ一つ音声で指示してくれる。

流石にそのたびに音楽の音量がその時だけ下がるのがやや難点というか、どうにかすれば修正出来るのだろうかあいにくとそこまで機械関係に明るいわけじゃないし、設定のどこを弄ればいいのかわからない。その上で面倒だという部分もある為、もうそのままでもいいやと放置している。不快さも付き合っていればそのうち慣れてしまう。不快である事が日常的になつて忘れてしまう。

人間とは結構シンプルに出来ている生き物である。慣れてしまえば大体、どうとでもなる。

「……」

気持ちのいい風にアウターシャツが揺れる。空は晴れており、車の通りは先ほどのバスを除けばない。降りた場所が降りた場所だから住宅街の並びに人の気配を感じるが、全体的な雰囲気の良い感じは感じる。大都市と比べると騒々しさに対するちよつとした物足りなさは感じられるが、それでも静かに、そして平和な日常を暮らしてゆくのであれば、こういう場所も悪くはない。そういう雰囲気は感じられる場所だった。とはいえ、土地の値段はそれなりに高そうだ。

並び立っている家は庭が広かったり、三階建ての家や屋敷がそれとなく見えてくる。所謂高級住宅街という訳でもないのに、この規模の家なのだ。ステイツであれば家の一つ一つの大きさがステータスである為珍しくもないが、日本ではそれなりに珍しいものだとは聞いている。ここら辺、結構住宅地としては金がかかっている場所なのだろうと、勝手に考える。

実際にそうであるかどうか、なんてのは調べやしない。

面倒だし。

興味ないし。

そんなこともあり適当に暇つぶしに景色を眺めながらスマートフォンの方へに従い、道を歩く。子供の笑い声が聞こえた。

視線を声の方へと向ければ、其方には公園の姿が見える。まだまだ

幼い子供たちが母親に見守られながら公園を走り回っている姿を見て、小さく息を零してから視線を外し、再び歩き出す。

『Another 200meters straight』

スマートフォンから200メートル直進とのナビゲーションがやってくる。知っている場所ならともかく、初めてやってくる国では流石にこのナビゲーションなしで歩き回るのは無謀だよなあ、とこの国に来て、電車というシステムを利用して思った。余りにも交差しすぎていてとてもだがまともに歩き回れないと。都心の連中はそれでも毎日あの中を歩いているというのだ。

狂気としか表現できない。アイツら日常的にダンジョン攻略を挑んでいる冒険者か。

日本人という生物の狂気を感じ取っていると、やがて住宅街を抜けて海鳴の商店街へと到着する。そんなに規模の大きくない商店街はしかし、活気で溢れていた。まだ時間が昼前であるという事を含め、通りを歩いている人たちは昼食のための買い物をしているのが見える。どこことなく、その中に混じっている外国人の比率が多めのように見える。外国人街でもあるのだろうか？

『Navigation complete』

と、そんなくだらない事を考えている間にスマートフォンのナビゲーションが終了した。

足を止めながらスマートフォンをポケットから取り出しながらアプリを開いて現在位置を確認する。そしてもう一度メモに入力されている住所を確認し、今、自分がそこに立っていることを認識する。そうやってスマートフォンを片手に握ったまま、視線を自分の横へと向け、それからもう一度スマートフォンを確認し、顔を持ち上げた。

「Humph……」

小さく息を吐き出しながら空いている右手で頭を搔いてから自分が目的としていた右側の土地へと向け、正面を合わせた。

そこに広がっているのは空き地だった。

店と店の合間、そこに柵によって仕切られている土地があり、中は雑草が伸び放題となっている。その様子から数年はそのまま放置

されているというのが見える。少なくとも数か月でこうなった訳じゃないのはこの空き地の荒れ具合から伝わってくる。つまり結構前からこの土地はこのまま、放置されているという事実だ。

「……困ったな」

スマートフォンを確認する限り、この荒れ地が間違いなく目的地だった筈なのだ。態々ステイツから海を越えてやってきた結果がこれだ。帰りの飛行機のチケットはないし、財布の中身も割かしヤバイ。こちらに到着したらしばらくは住み込みで働かせてもらい帰りの旅費を稼ぐつもりだったのだが、

「まさか目的地が潰れてるとかなあ……解ったもんじゃないな」

親父がここに来たという話も数年前の話だから、ありえない話ではなかった。だがまさか、跡形もないとは思ってもいなかった。少しだけ困りながらどうしたもんか、と考える。肩に引っ掛けているショルダーバッグの中には親父の遺言に合わせて持って来たものが幾つか存在している。だから、高町士郎という人物に会わなければいけなかったのだが、これは困った。

「電話が通じなかった時点で察するべきだったかなあ」

とはいえ、ここまでのこのこと出てきてしまった自分にも問題があるのだろうか。いや、律義とでも表現すべきことだろう。ともあれ、その律義さが原因で完全な徒労という結末へと至ってしまったが。

「困った、実に困った——困ったなあ」

空き地を眺めながらわざとらしく言葉を口にする。だがそれを察して助けようとするような人間は近寄ってこない。昼前でそれなりに人通りが多いのに、ここで全く知らんぷりして歩き去っていく姿は流石、日本人と評価したい。

「だが割と真面目に困ったな。この俺がどれだけイケメンでも無から有は生み出せないぞ」

つまり存在しない人と話をして、遺言を果たす事が出来ない。

冗談を抜きにして真面目に考えれば、恐らく数年前に引っ越したという辺りだろうか？ となると周りの人に話を聞いてみれば良いだろう。特に昔からあった店であれば事情を知っているだろう。まあ、

困っている様子を放置するけど、

「流石に話しかければ答えてくれるだろう」

流石に話しかけて無視されるようなことはないと思いたい。その場合は……まあ、素直に諦めるしかないだろう。とはいえ、出来る事ならなるべく諦めない様にしたい。少なくとも、海を渡ってまで苦労したのは親父の遺言を叶える為だ。それを出来るならこんな所で諦めたくはない。

故にさっさと行動に移す。近くの店へと視線を向けて、この空き地が見える位置にある八百屋を見つける。イヤホンを耳から抜いてポケットに押し込みながら音楽を消して、八百屋の前で売り込みをしている中年に話しかける為に近づけば、物凄い困ったような表情を浮かべられ、

「あ、あい・きやんのつと、イングリッシュ」

「日本語で問題ないぜ」

「お、おお？ 悪いな……困っているのは見えてただけど英語はなあ……」

「まあ、そんなもんだろ」

片手で軽く髪をかき上げる様に黒髪を後ろへと流す。ぶつぶつと一人で喋っていたのも悪いし。それはともあれ、本題にさっさと入る。空き地の方を指さしながら、

「たぶん【翠屋】って言うんだが、知らないか？」

【翠屋】か」

中年はその言葉に腕を組みながら傾げ、はて、と声を零した。

「ここで30年商売しているけど、あそこはずっと空き地だった筈だぞ」

「——んん？」

◆

「What in the fucking hell is happening」

そんな言葉しか出て来なかった。

財布に残された最後の1000円札を使つて購入した缶コーヒーを片手に、臨海公園のベンチに座る。海が良く見える公園だった。もう、財布の中に札が一枚も残されていない事実には流石にちよつとしたヤバさを感じていたが、それよりもシヨッキングなのは自分が遭遇した事態だった。

「存在しないってどういう事だよ……」

購入した缶コーヒーの中身を軽く飲みながら、聞いて回つた話を纏めれば——翠屋なんて店は存在してなかったと言われる。高町という一家も存在しない。商店街で聞き込みをした結果がそれだった。引越したり、事故で死んだとか、それだったらまだいい。だが話がまるで違っていた。

そもそも存在していない。

それが回答だった。

最初から存在しない一家を追いかけている事になった。何度、誰に聞いても最初からそんな場所はない、と答えられてしまう。そのホラー染みた状況は流石に精神的に参る——という訳はないが、それでも歩き回つて成果が存在しないという事実になると、首をかしげたくなつてくる。

「Humph……出来の悪いホラー映画に紛れ込んだ気分だ」

スマートフォンを取り出してチェックする。一日中充電せずに使いつづけた事もあつて既にバッテリーは三割を切っている。とはいえ、音楽を聴いている以外にやる事も特にない為、節約するという概念はない。

スクリーンを親指でスライドとタッチで進め、画像フォルダから画像データを引つ張り出す。そこにはスキンヘッドの大男の姿が写されている。

「幽霊と友達にでもなったのか親父？」

唯一持ち込んできた親父の写真を見て、言葉をつぶやき、答えが返ってくる筈がないと解っているから、それをポケットの中に押し込む。空になった缶コーヒーの缶を軽く弾いてから蹴り——それを

近くのゴミ箱へとシュートを決める。

「ふうー……さて、昼飯どうすつかなあ」

財布に残された資金は僅か。昼飯を食ったとして、晩飯を食えるだけの金は残るのだろうか？ その前に寝る場所も確保しなければならぬ。まあ、その気になれば数日ぐらい野宿するぐらいのバイタリティはあるが、なるべく取りたくはない手段だ。警察に見つかった場合、そのまま強制送還ルートへと放り込まれそうで怖いからだ。とはいえ、目的の人物に会えないのであれば、日本に残っているだけ意味もない。

「帰るにしてもチケットをどうすつかなあ……」

チケットの代金はこつちで稼ぐことをアテにしていたのも問題だ。ちよつとばかし、無茶をしすぎただろうか？ 元カノから金でも借りて来れば良かったかもしれない。今からでも遅くはない、電話を入れれば、

と思つたが、此方からフツておいて、困つたら頼るのは恥ずかしいにもほどがある。流石に止めておこう。だが本当に困つたら場合は頼る事として、選択肢に入れておく。とはいえ、可能ならなるべく現地調達で済ませたいのが事実だ。

「はあ……」

酒が飲みたい。まさかこんな形で予定が狂うとは想定していなかった。

「翠屋と高町家……wonder where it disappoints」

親父の遺言も後はこれでラストだ。海外だからと、最後に回していたらこれだ。一番最初に、まだ金があるうちに全部片づけておくべきだったと後悔する。とはいえ、それを嘆いた所でどうしようもない。とりあえず今あるお金で昼食を食べて、お腹をいっぱいにしたらそれで何か、アイデアが降ってくる事に祈るとしよう。

「やい——」

「Excuse me」

そう呼ばれた事に振り返ったのは、日本語ではなく母国語——英

語を向けられたからだだった。ぶつちやけ日本語で話しかけられたら、英語で対応して逃げる程度には憂鬱だった。だがその選択肢を潰されたのであれば、対応するのも仕方がない。

「今、翠屋って言いましたよね」

が、その言葉で一気に興味が出てきた。振り返りながら見たのは、まだ恐らくは中学生頃の茶髪の少女の姿だった。眼鏡を装着し、そして手に握っているビニール袋を見る限りは、恐らくは買物物の帰りなのだろう。英語に続く言葉に、日本語を出した少女はおっと、と声を漏らした。

「英語の方がいいですか？」

「どっちも出来るから好きな方で良いぜ」

「それは良かった。なんだかんだで日本語に慣れてしまいましたからね。こちらの方が話しやすいですから」

少し恥ずかしそうに、早口に言葉が続けた。その姿が可愛く思えた。とはいえ、まだ数年口説くには若いなあ、とは言うしかない。惜しい。実に惜しい。まあ、それはともあれ、彼女が翠屋という名前を口にしてくれたのが重要だ。

「もしかして知っているのか、翠屋がどこにあるかって」

「ええ、正確には知っていたという言葉が正しいのですが。一応高町一家とも面識があります」

その言葉に息を吐いた。

「そうか、存在してたのか……良かった。誰に話を聞いても昔からいないって言われるもんだから俺だけ異世界に迷い込んだのかと思っただよ」

だが安心した。これで何とか親父の最後の遺言を果たすことができそうだった。そうなればあとは金を溜めてこの島国から何とか出て行くだけだ。小さく拳を握りながらよし、と呟きつつそれで、と話を続ける事にする。

「で、なるべく早く会いたいから出来るなら知っていることを教えてもらえたら嬉しいんだけど……」

「そうですね——」

言葉を紡ぎながら、視線は少女の手元、買い物袋へと向けられている。少女も同じように持っている袋を思い出し、少女がそれを見てから視線を此方へと返してくる。

「流石に長い話になるので、ウチに来ませんか？」

「そりゃあいい、ゆっくり話せるほうが良いからな」

片手をそれに合わせて差し出される。

「シユテル——シユテル・スタークスです」

それに応える様に片手を差し出して握手を交わす。

「ノアだ」

◆

「……ここに住んでいるの？」

「ええ。ホームステイ先ですが」

シユテルに連れられて歩いてきたのは隣町だった。バスに一度乗って向かった隣町である暁町、その中でもひととき目立つ建築物があった。広大な敷地に大きな建物の姿は決して屋敷と呼べるような形状ではなく、寧ろ表現としては家や店ではなく、施設という言葉の方がしっくりと来る。そういう形状をしている施設を端的に表現するのであれば、

研究所という言葉が正しかった。

実際、敷地に入ってすぐの所に【□□□□研究所】と書かれている看板が存在していた。何故、最初の四文字がまるで消されたかのよう存在していないのかは不明だが、それでも迷う事無くIDで敷地内から研究所裏手の居住区域に入れた辺り、普通にここに住んでいる子であるというのが解る。とんでもない子だったかもしれないな、何て事を考えながらついて行き、

シユテルと共に入った所で、シユテルが口を開けた。

「王、レヴィ、ただいま戻りました」

「王……」

だが考えてみればキングという名前も珍しくはないし、王という名前の人物もいるのだろう。そう思いながらシユテルに従って家に上

がる前に靴を脱ごうとしていると、奥の方から走って出て来る姿が見えた。こちらも年ごろはシユテルと似たようなものだが、珍しい水色の髪にツインテールという恰好の少女で、玄関まで走ってくるのでいったん足を止め、お、と声を零した。

視線はシユテルから此方へと向けられ、そして再びシユテルへと向けられる。

「シユテルんが男を連れてきた……!」

「おい」

「王様——! シユテルんが悪そうな男を連れてきた——!!」

「レヴィ、待ちなさい。おい、待ちなさいおい」

レヴィと呼ばれた少女はその言動をガン無視し、そのまま奥へとダツシユする。それを追いかける様にシユテルが靴を脱ぎ終わったら走って追いかけて、奥の方へと消えていった。子供はバイタリテイで溢れていていいなあ、ともう少しだけ若かったころを思い出し、話し合う時間を与える為にゆっくりと靴を脱いでから上がり、廊下を抜けて、シユテルとレヴィの消えた方へと足を進める。先へと進んで行けば、少女たちの話し声が聞こえて来る。

「だからそういうのではありませんってば!」

「えー、でもほら、シユテルんも最近恋愛小説とか読んでるし」

「何で知っているんですかそれを!」

「え、漁った」

「貴様は勝手に人の部屋を漁るな……全く。それよりも高町家を認識できるというのは……?」

少しだけ騒がしいが、早口で何かを語り合った後は少し大人しくなり、此方が歩いてリビングにやってくるのを見ると、落ち着きを取り戻していた。それを見てシユテルはこほん、と軽く咳ばらいをして平静を取り戻そうとしていた。その様子を微笑ましく思いながら、レヴィの他に増えたエプロンを着ている、白髪に毛先が黒くグラデーショナル的に変色している少女の姿を見た。レヴィ、シユテル、そしてこの少女揃って美少女ばかりとは中々に羨ましい環境だが、

「大人はいないのか? それとも仕事か?」

「大人は居らん。ここは我らだけで預かっている」

大人と呼べそうな奴がいけない事に軽く言葉を零せば、そんな返答がエプロンの少女から帰ってきた。大人が居らず、この研究所を子供だけで預かっているという状況は、余りにもおかしすぎる状況であり、冗談にしか聞こえなかった。まあ、実際、今は仕事に出ているという事なのだろうと解釈しておく。

……どこことなく、面倒の気配を感じた。

「あー……取り合えず、翠屋と高町の話を教えてくれないか？ 終わったらすぐに出ていくから、えーと、ミス？」

「私の事はディアーチエで結構だ。年下だしな」

「レヴィだから宜しくね」

「お、おう……？」

偉く好意的で少し気後れする。あまりに都合が良すぎたり、優しかったりすると後でロクな事にならないというのが自分の経験則だ。つまり、この優しさには裏がある。それはまず、間違いがない。人の善意程怪しいものはないからだ。故に見知らぬ男に対して何かを求めているというのは解るものの、

「——ランチセットはサービスについてくるか？」

「……」

言葉をそう返せば呆れたような視線を向けられるも、ディアーチエは小さく笑い声を零しながら答えた。

「豪胆な男だな。昼の余りが幾つかあるからそれを出そう」

◆

ディアーチエが作ったらしき昼の残り——つまりはスパゲティ・ジェノベーゼのソースの余りだったらしく、ササッと慣れた手つきでパスタをゆで始めた時には驚いた。そこまでの手間を求めているつもりではないが、二人分のパスタを茹でると自分の分だけではなくレヴィの分も作り、いつの間にか水色の髪の少女が自分の分のパスタを平らげていた。

そうやってランチをごちそうになって腹を満たしても、誰かが帰ってくるという事はなかった。

研究所に人の気配はなく、出入りしている様子は見えなかった。どうやら、本当に大人は居らず、ここにいる三人の娘しか今、この研究所には居なかったようだ。もうその時点で怪しき全開だった。だが存在するはずなのに存在しなかった翠屋と高町家の話を聞き出す上では、ここ以外にヒントが存在しないのも事実だった。

どことない嫌な予感と居心地の悪さを感じながらリビングのソファに座り、正面に並ぶ様に座った三人娘と相對していた。

「So」

言葉を置き、三人娘に話しかける。

「美味しいランチをありがとう。それはそれとして本題に入ってもいいか？」

「どういたしました。まさかおかわりを要求されるとは思いませんでしたけど」

「美味しかったからな」

味に罪はない。そして味への評価はシンプルな言葉で評価、表現できる。

そう、カロリーだ。それはともあれ、本題だ、本題。早い所、どこに高町一家が消えたのかを知りたいのだ。だからそれを教えて欲しいという意味を込めて視線を向ければ、

三人娘たちが互いに視線を向け合った。

「どうしますか王」

「どうする王様」

「いや、我に頼られても……。そもそも完全な一般人にどう説明するのだから？ 流石にそういう経験、我にもないぞ」

「言うだけ言っちゃえばいいんじゃない？」

「信じなければ実演して、信じればそのまま話を続けるというのはどうでしょうか？」

「採用で」

「では——誰が話を切り出しますか？」

「シユテるん」

「シユテルで」

「王にお任せしますよ」

「でもレヴィの方が切り出しやすそうだな」

「シユテるんが連れてきたからシユテるんの責任で」

「……」

三人娘が同時に黙り込み、無言で拳を構えてからじゃんけんを始める。何度目かのあいこを繰り返してから最後に残ったのは——シユテルだった。全敗した少女は溜息を吐きながら此方へと改めて向き直る。そこで数回、深呼吸を繰り返してから、意を決すように視線を合わせ、

メガネの端を軽くポーズを決める様に持ち上げながら、

「——Do you believe in magic?」

「Magic」

「Yes, magic」

「……」

「……」

素っ頓狂な事を言い出し始めたシユテルを前に、腕を組んで、首を傾げ、再び聞き返す。

「Magic?」

「Yes」

「Hm……」

——どうしよう、これ。

だけどその発言を前に同時に成程、と納得した。目の前の少女たちは大体、年齢が14歳ぐらいの様に思える。つまりは中学生で、思春期で、そういう要素に対してあこがれを抱いたり、幻想を抱いたりする年ごろでもある。そうなる则自分の発言に、設定みたいな部分が引つかかってしまったのだろうか？

「あ、物凄い優しい目をしてる」

「完全に勘違いされているな、これは」

「だから嫌だったんですよ切り出すの……」

「まあ、まあ、まあ」

両手を突き出しながら落ち着け、とシユテルにジェスチャーを向けてから、

「そうか……君たちがインフィニティストーンの守護者だったのか……」

「Dr, ストレレンジじゃないですから」

「でもアレエクザミアって実質的にインフィニティだよね」

「それはそうですね」

「で、俺もアヴェンジャーズに誘われるのかトニー」

「いや、確かにスタークとスタークスですけど、違いますからね？ レ

ヴィも王も成程って顔をしないでください」

違っていたらしい。もうちよつとノリがいいものだと思っていたが、こつちの設定では納得がいかないらしい。とはいえ困った。あまり日本のアニメーションには詳しくはない。マーベル関係も映画系列のをちよくちよく挟んでいる程度で、そこまで詳しいという訳ではない。これでダメとなると、もう少しファンタジーなタイプを求めているのだろうか？

首を傾げ、どう対応してあげるべきかを考える。

「ああ、やっぱり言葉では伝わりませんよね……」

「まあ、解っていたことだな」

「いやいや、解る。解るさ。何、俺も前世は魔法使いだったからな」

「その微妙な優しさが辛い」

昼飯をこちそうになったのだから、ちよつとした茶番ぐらいなら付き合う程度の寛容さはある。まあ、相手はまだ子供なのだし、ここで本気で対応しても大人げない、という奴だ。ヒントが途切れた事に関しては少々残念ではあるものの、昼食代が浮いたと考えればそれはそれでよし。

「仕方があるまい——レヴィ、ちよつと驚かせ」

「はーい！ あ、僕手加減とか苦手だからごめんね！」

そんな事を考えているとテーブルを飛び越えて、レヴィが接近してきた。どうやら遊ぶ気満々らしい。仕方がないなあ、と思いながら対

応を考えていると、

「そりゃー！」

そんな掛け声とともに、

片手で体を持ち上げられた。

「——ん？」

一瞬、その事実には思考が固まる。レヴィと呼ばれる少女は、片手でソファに座っている此方の尻の下に滑り込ませると、そのまま片手で此方の体を持ち上げたのだ。そこにはワイヤーも、トリックもない。完全に成人男性の肉体を、少女が片腕で支えていたのだ。しかも苦しうにではなく、明らかな余裕を見せて。その状態を数秒維持してから、

「えいやっ」

「んん？ ……んんん?!」

体が放り上げられた。座った姿勢のまま放り上げられ、それを飛び越える様に飛び上がり、天井に両足で立ちながら放り上げられた体を掴んだ。両手で、投げられた自分の体の両肩に手を通す様に掴み、天井から宙づりになる様な姿勢でぶら下がる。

「もうそれぐらいで良からう」

「はーん」

そう言うのとレヴィが両手を解放してきた。それに従い自然と体は落ちて、不格好な状態でソファに衝突する様に着地する。半分ソファから転げ落ちているような姿勢で着地し、ポーズをそこから変える事無く頭上を見上げた。

そこにはレヴィがスカートをひっくり返した状態でパンツを丸出しにしたまま、天井を足場に立っている姿が見えた。色気のかけられない景色だが、そんな事実よりも今の自分の経験の方がはるかにショッキングだった。上を見上げ、視線を地上へと戻し、見下ろす様に対面側のソファに座っている少女たちを見る。

「M a g i c」

「Y e s , m a g i c」

オーケイ、オーケイ、と言葉を零す。

「実はジエノベーゼの材料が全部マリファナだったとかない？ ほんら、最近流行ってるし」

「ここ、アメリカではないので」

「だよな……だよな？」

もう一度天井を見上げ、ダブルピースを向けている少女の姿を見てから、シュテルとディアーチエへと視線を戻す。

「Ok……特別にだけどこれは信じてもいいかもしれない」

その言動にディアーチエとシュテルが視線を見合わせ、小さく笑った。

History Lost II

「魔法は存在します。そしてそれに魔法の世界がこの次元の外側に存在していたというのも解っておいてください。この話における大前提ですから」

「Ugh……おう。解った」

一瞬だけ茶化そうかとも思ったが、少なくとも先ほど自分が直面した現象は、とてもだが自分の脳味噌で理解できる範囲を超えていた。一回、完全に騙されたものだと思つて少女の——シユテルの言う事を完全に聞いてみる事にした。それを信じるかどうかは、その完全な証明がなされた時でいい。それまでは話半分聞いて、とりあえずは知識にしておく方がいい。その為、言葉を挟まずに話を聞き続ける。

「簡単に言うとパラレルや異世界とは違う構想、壁を超えた向こう側に次元の海が存在し、世界の一つ一つがそこに漂う島だと想像しておいてください。これが次元世界構造であり、基本的に私達が存在するマルチバースです」

「解りづらいからホワイトボード持って来たぞ」

そう言つてダイアーチエが小型のホワイトボードを持ってきて、そこにマーカーで次元世界論を絵にする。デフォルメの少女たちや世界の絵を描いており、どこことなく可愛さを感じる。

「で、この次元世界には魔法技術と魔法文明が存在していました。この世界、地球はちなみに魔法文明も技術も数年前までは存在していませんでした。大体は【時空管理局】によって監視、制限されていたりするんですが、ちよつとした事件でこの海鳴の一部だけ魔法技術が広がっていたりしました……まあ、これは本筋と関係ありませんか」
横に置いておく、とシユテルが話を続ける。

「私達は基本的にリンカーコアという魔法器官を体内に備えています。これを保有する事によって生物は魔法を使用する為の魔力を体内に溜め込み、使用する事が出来ます。魔法文明の発達にはこれが必要であり、これにたどり着いたからこそ、魔法文明は開化しました」

ですが、まあ、とシュテルが言う。

「この魔法文明が絶滅しました」

「んん??」

「というか魔法概念そのものが大体滅びました」

「んー??」

ホワイトボードに Magic wiped out、と文字が書かれ、宇宙の絵に大きなバツ印が追加された。流石にマテ、と言葉をそこには挟み込むしか出来なかった。

「今のはちよつと理解出来なかった。無職の23歳児にも通じる言葉で頼む」

「これ以上なく悲惨な言葉のチョイスに逆にこちらが困るんですけど」

「やーい、無職やーい」

「レヴィー！」

「俺に相応しい職がそのうちやってくる」

「真顔で言いよつた」

軽く茶番を挟み込みつつ、シュテルにもうちよつとわかりやすい様に説明を求める。それにシュテルがそうですね、と言葉を挟み込む。少し悩んでからもう一度そうですね、と小さく呟きながら首をかしげる。

「簡単に、と説明されると少々難しいものですね。説明しようとするばするほど専門用語を使う必要になるので。なので魔法文明と技術がほとんど全て死滅した上で、唯一生き延びる事に成功した私達のリンカーコアやエグザミアでの供給とかを話した所で通じるかどうか怪しいですし」

「Ah……まあ、確かにいきなり細かい設定を語られても困るな」

「今、完全に設定って言い切った」

「まあ、確かに設定と言われてもしょうがない話ではあるからな」

「ダイアーチエが頷いている。まあ、細かい話は分かりづらいという事で省いてくれているので、解りやすく話を求めれば、」

「このウィザーディングワールドが消えて」

「イギリスにホグワーツはありませんからね」

魔法文明が消えた、という言動をまとも受けるのであれば、その魔法文明に関して高町一家が深く関わっていたのであれば、つまり魔法の消失に合わせて高町一家も綺麗にデリートされた、という話なのだろうと思える。荒唐無稽だが一応は話を通る、ほとんど妄想染みた内容である事さえ意識しなければ。

「それに高町一家も消えた。そしてあー、お前らは何とか残った」

「本当に残っているだけ、の状態だな。そしてそもそもこれが正しい、という風に認識も変わっている筈だ」

「だが覚えている」

「そうだ——そこだ、何故貴様は高町の事を覚えている……？」

デイアーチエが腕を組みながら視線を此方へと向けて来る。だがそれに対する答えは両手を広げてさあ？ としか答えることが出来なかった。知っているから知っているとしか答えようがなかった。そもそも魔法とか、ファンタジーな要素は23年間の人生の中で今日が初めてなのだから、疑われてもしようがない。

「しかもしっかりとリンカーコアを備えている……何故だ？」

「俺が知るか。親父の遺言果たす為に海を渡って訪ねた相手が歴史から消え去ったって話を聞かされた俺の身にもなれ」

「まあ、確実に被害者側ですよね」

そもそも今している話の時点でちんぷんかんぷんなのだから、原因とか理由とか原理とか、そういうのを求められても困る、しかも魔法は信じてもいいが、それを取り巻く要素に関しては半信半疑だ。だが遺言を果たせないのは困る。その為に関係も家も財産も全部遺言を果たす為に投げ込んで日本までやって来たのだ。

何の成果もなく終わる事だけは、本当に困る。

それじゃ何もしないのと一緒だ。

「H m m……」

腕を組みながら天井を見上げる様にソファに倒れ込み、考えを巡らせる。

結局の所、

「何がしたいんだ」

「元の世界を取り戻したいんです、私達は。もしかして何か知っているかもしれないと思いましたが、まあ、反応から魔法を全く知らないって事は解りましたけど、それでもまだ希望はありますから……」

その言葉に少しずつ、シユテルの言葉が弱々しくなってくる。その希望という物にも、余り自信がない様子は見て取れる。少なくとも思いつめる事が出来る程度には、この話に関しては本気なのだろう。不安や恐怖、絶望感という感情は何をどうあがいても偽る事は難しい。演技と本物というものは、その空気からしてまるで違う。

シユテルから感じられる絶望感は、本物だ。

「——さて、話も煮詰まってきた所だ。一旦頭を切り替える為におやつにするか」

デイアーチエが空気を一瞬で切り替える様に手を叩いた。それにつられるようにレヴィが瞳を輝かせる。シユテルも軽く深呼吸をして空気を入れ替えた。一瞬で空気を入れ替え、そしてそれに適応できる三人娘の仲はそれなりに良好らしい。見た感じ、リーダーはデイアーチエの様に感じられた。良い娘たちだと思う。言っていることが真実かどうかは別として。

「とりあえず、何か複雑な事情があるつてのは理解しておく」

「まあ、それぐらいでいいでしょう」

「全部教えても理解されるかどうかわからないしね」

レヴィはそういいながらソファに倒れ込み、シユテルの膝の上に頭を乗せるとけらけらと笑う。まあ、俺もいきなりこんな話をされた所で色々困る。ただ解るのは、この少女たちは本来の生活を取り戻したいという主張を持っているという事だった。そしてその助けに俺がなれるかもしれない、という事実でもある。

その事に対しては正直、なんだかなあ……としか言葉が出てこない。

都合が良いというか、流れが綺麗すぎるというか。なんというか、都合のいい部分にしか目を向けていないというか。まあ、それはそれでいいのだ。問題は俺が付き合うかどうかという話になるだけだし。

そこらへん、義理も義務も自分には欠片も存在していないのだから。

「……まあ、いつか」

ここでしばらく足止めされるのは目に見えている。存在しない一家を追いかけた所で意味はない。だとすれば多少なりともファンタジーではあるが、知っている所と一緒に行動している方がまだましだろう。となるとしばらくは海鳴で暮らす必要が出て来る。その事を考える再び憂鬱になりそうだった。

ソファに深く腰掛けながら片手で顔を覆い、息を吐く。

「なんか疲れた中年オーラがする」

「言いたいことは解りますけど失礼ですよレヴィ」

「お前ら……」

ぼろくそ言ってくれる。やや少女たちのとつつきやすさに驚きながらも、

「金も寝床もないから今夜はどうするかを考えてたっただけだよ」

「そうなんですか？」

「こつちに来る旅費でお金は使い切ったんだよ。元々は高町家に泊めて貰って、働きながら帰りの旅費を稼ごうと思っていてな」

「一文無し」

「880円ならある」

「ジューズ」

残念、缶コーヒーである。

だがシユテルはああ、成程と声を零すと。

「なら部屋が結構余っていますし、ここにしばらく泊まれば良いでしょう。元々の主であるグランツ博士は意味消失によって消えてしまいましたけど、研究用の資金とかは割と残っているので、数年は何もせずに生きていけますよ」

「H m m……」

とても魅力的に聞こえる。タダで寝泊りできる場所があれば、後は昼間の間にバイトを探せば此方でもなんとか生活する環境は整えることが出来る。魅力的な話には聞こえる——聞こえるのだが、必然

的にこの少女たちと付き合っていくという選択肢でもあったのだ、それは。
縁を切るなら今だ。

そんな声が聞こえた気がする。まあ、確かにだろうと思う。義理も義務もなければ、妄言に近い言葉の連続。まともに話を聞いている方が問題あるのでは、と思えるかもしれない。

とはいえ、

——シユテルの瞳には、縋るようなものが見える。

笑顔で、平静を装いながらもその瞳の中には怯えが見えていた。俺に対してではない。彼女が見えている何かに対して、怯えている。それが彼女の瞳の奥に見えていた。だがそれはシユテルだけではなかった。レヴィも何も恐怖も不安もない事を演じているのが、瞳に揺れる色から見えている。その恐怖は果たして、知らない男が目の前にいるからだろうか？ それともそれに頼ろうとしている事に対する恐怖だろうか？

或いはもつと、別の物だろうか？

だがどちらにしろ、そんな感情を隠して振る舞う少女たちを見捨てるという選択肢は、男に対して残されていない。

「魔法を教えてくれるサービスはあるのか？」

「ええ、それぐらいでしたら何時でも、満足するまでどれだけでも」

「お、シユテルさんが結構グイグイ押ししてる。やっぱりラブ？ ラブなのシユテルん!？」

「違いますから、ちーがーいーまーすーかーらー!」

シユテルの食いつきをレヴィが茶化し、ソファの上で二人が絡み合う様に暴れる。先ほどまで聞いていた話を思い出せば、子供らしさなんてまるで見えなかったが、こうやったふざけだした途端に子供らしくなってくる。そのアンバランスさはどこか、不安定さを感じさせるものがある。見ていて心配になってくるものがある。

「……」

口を開かず、じやれ合うレヴィとシユテルの姿を反対側のソファに座りながらぼうつと眺めていると、心地よい紅茶の匂いが漂ってくる

る。個人としてはコーヒー派ではあるものの、漂ってくる香りには魅了されるものがあつた。視線を奥へと向ければ、トレイの上に紅茶と茶請けのスコーンを運んでくるディアーチェの姿が見えた。なんとなくだが、エプロンを装着している姿は似合っていた。

「巻き込むような形で済まないな。我らもはや半分諦めていた所だったからな……まさかこんな形で僅かな希望が見えるとは思ひもしなかったのだ」

そう言いながらディアーチェが目の前に紅茶とスコーンを置いてくれる。それを受け取り、持ち上げながら香りを楽しむ——うん、美味しそうだ。いや、実際に美味しい。口にしなくても匂いで解る。「まあ、俺も困っていた所だから助かったのは事実だしな。しばらくは世話になるな」

「うむ。我らだけだとしても幾つか問題があつたからな。保護者としていてくれると色々助かる」

綺麗に丸め込まれている気がするし、根本的な問題が解決しているわけでもないが——それでも、父が死んでから自分の人生に新しい流れが来ているような、そんな気がしていた。

生きている事に意味はない。親父は生前、そう言っていた。

自分の成す事、起きる出来事、そしてやり遂げた事。それを通し意味を見出すのだ、と。

だとすればこれもまた、自分の人生の一部だと思えばいい。魔法なんて面白そうなものが出てきているのだ、深刻に思う必要はない。軽く、遊ぶつもりで関わればいいのだ。

海鳴でのそれとなく騒がしい日常が始まる。

History Lost III

「ああ、おう。保護者代理のノア——だ。これで未納分は払ったよな？ 文句ないよな？ ああ？ 振り込みは確認してるから問題ないだろう？ じゃあな。——よし。支払いの方を確認したぞ」

電話を切りながらディアーチェへと視線を向ければ、ディアーチェが息を吐いた。何をやってるかと言えば、未成年だからとディアーチェ達じゃ出来なかった支払い関係の手続きなどを保護者代理という扱いにして一気に終わらせただけである。とはいえ数か月分溜まっていたのも事実だし、払えないなら研究所と土地———というかそれを持っていく事を目的としていたらしく、ディアーチェ達に支払わせなかった部分がある。まあ、ここら辺の土地は金になるつてのが見えているのでしようがない。半分無理やり金を振り込んで電話で脅しを入れて了承させて、手続きは完了。

三人娘の住まう研究所に泊まった翌日、最初の仕事を終わらせた。「助かった。何を言っても子供では無理だと押し通されてしまったな」

「もっと早く他の人に頼めよ」

「頼めればそうしている。だが問題として我らに親身にしてくれるような人々は全員消えてしまつてな。残されたのは買い物先の店主ぐらいよ。まあ、そういう訳で我としても非常に助かった。感謝を受けといてくれ」

「おう」

感謝されたのならそれを素直に受け入れる事は大事だ。じゃなければ働いた意味がない。という訳で、ディアーチェからの感謝を尊大な態度で受け取り、一仕事を終えた。これでここにまだいられるのだろう、この少女たちも。まあ、この年齢で野宿というのも辛いだろう。問題が解決されたのであればそれはいい、

……のだが、

「さあさあ、さつそく魔法の適性を調べましょう、そうしようそうしましょう」

それを見守っていたシユテルが鼻息を荒くしながら待っていました、と言わんばかりに寄ってくる。そのやる気の満ちっぷりには少女気圧される部分もあるが、少女が迫っている姿を前に、腰を引かせるのは男のやる事ではないと思う。意気揚々と迫ってくるシユテルの額を片手で抑え込みながら軽く苦笑を漏らしつつ、落ち着いた所で両手を広げる。

「Well, let's get started then?」

言葉に応える様にシユテルもサムズアップを向けて来る。それを見てディアーチエが呆れの溜息を吐いてくる。

「シユテル……貴様少々浮かれすぎではないか？」

「何を言うのですか王。今まで何も出来なかった状況に漸く変化が訪れたのですよ。これは変化の兆し、漸く状況が動くというものです。レヴィの見ているニチアサ系列なら彼が主人公としてなんか、こう、凄い感じの才能を秘めている筈です」

「アニメ脳か貴様……!」

だがディアーチエも腕を組み、首を傾げ、ちょっと解るとか呟いている。この少女たちの先行きは本当に大丈夫なのだろうか？ そんな不安を抱えながら、

先日同様、研究所裏の生活空間——つまりは研究所にある家になっっている部分、リビングに集まっていた。この場にレヴィがいないのは彼女だけ朝風呂を長々と楽しんでいるから、という理由が存在している。まあ、それはさておき、やる気満タンのシユテルは片手に青いビー玉を乗せていた。

そしてそれが一瞬輝くと、その上に半透明のウィンドウが出現した。

「うお!? デイスプレイ!? AR!?!」

「ああ、そう言えば地球ではメジャーではない技術ですよ、ホロウィンドウ」

「ここら辺は普通に文化の違いを感じるものよな」

そう言いながらシユテルは宝石を握り込み、次の瞬間には一瞬の光で掌の中に魔法の杖が———実にメカニカルなものではあるが、握ら

れていた。質量的にまずありえない変形を目撃して、それに驚かない理由なんてなかった。阿呆の様にトリックだなんだと口にする事はないが、それでも何かのドツキリを疑いたくなる様な変化だった。それに気を取られていると、ホロウインドウに絵や文字が描かれてゆく。

「ルシフェリオンの起動も久しぶりですね」

「我らの魔力はエグザミア頼りだからな、現在。ユーリの為にも無駄遣いはできん。それよりも我も手伝おう」

「あ、お願いします」

ホロウインドウの下にホロボードを生み出して、二人がそれに入力しながら情報を操作していくのが解る。その具体的な内容に関しては全く分からず、少なくとも見た目は少女である二人が自分よりも遥かに頭が良いという事は理解できた。何せ、明らかに意味の解らない数式とか言語を音速で処理しているのだ。これで頭が悪いなんて死んでも言えない。

そう思いながら光景を眺めていると、目の前に新しいホロウインドウが出現した。

適性とリンカーコア、と書かれている。

「待っている間に読んでいてください。今適性チェッカーを再構築しているのです」

「使う機会がなかったから消去してたからなあ」

「おー……了解」

目の前に浮かんでいるホロウインドウにゆっくりと、手を伸ばしてみる。指先で触れるとホロウインドウはそれに合わせて僅かに動き、そして更に掴んでみれば、何か、半分存在しないような物質を掴んでいるような、そんな不思議な感触が指に感じられた。夢でもなんでもないな……なんて、今更頭の片隅でこの状況を否定する材料を探しながらも、ホロウインドウに書かれている文字を読む。

リンカーコア。全ての魔導士、つまりは魔法を使える存在が保有する魔法器官。物理的に肉体に存在しているのではなく、魔法的な物質で体内に備わっている。このリンカーコアの性能によつて個人の使

える魔力の量が決まり、それが魔導士としての才能に直結するものでもある。ある程度は成長する。大体成人を迎えると成長しなくなる。

魔法適性、どんな魔法を使えるかの適性。魔法はそれぞれが多くのカテゴリーを保有し、系統や型等で別れる。最も大きな分類はミッドチルダ式とベルカ式。更にそこから空戦と陸戦に分かれ、フオワード等の分野に分かれる。

「結構本格的な設定だな」

「だから設定って言わない。設定じゃなくて現実ですから」

「冗談だと思ってるが、その適性が魔導士としての戦術や戦略を構築する為の指針になるから何一つ笑えぬぞ」

「H m m……」

つまりここに書いてある適性をベースに自分が出来ることが解り、そしてそこから更にスタイルなどを決めて行くらしい。空戦で強いのはミッドチルダ・スタイル。射撃や砲撃、妨害などを使って徹底したミドルレンジとアウトレンジからの戦闘を使いこなすスタイルとなるらしい。相手を一切近づけず、接近した所を拘束魔法等で捕まえ、トドメの砲撃魔法でフィニッシュを決めるのがミッドチルダ式の花形でもあるらしい。

「我やシュテルが得意とするタイプであるな。どちらかと言えばこちら側に近いな」

「まあ、私達はベルカとミックスしていますから純粹とは言えませんね。ちなみにレヴィはベルカ寄りのミッドですよ」

「アテにならねえなこれ」

「基本的な部分ですから……」

そしてミッドチルダ式と大きくスタイルを二分するもう片割れが、ベルカ式、ベルカ・スタイル。ベルカは自己強化、瞬間強化などを重ねて一瞬で接近しながら相手を倒すスタイルが非常に優秀であり、一対一における戦闘ではミッドチルダ・スタイルの相手を空戦で一瞬で落とす事さえも出来る。

「ミッドチルダ式存在する意味あるのこれ？」

「ベルカが頭おかしいだけですから」

「それに合わせて要求量も高いからな。アレだ。ミッドは量産型、ベルカはエース型だ」

「はぁーん」

本当に、良くできた設定だった。まあ、ホロウインドウを弄っている時点で設定もクソもないが。魔法は間違いなく存在するだろう。それは今、嫌って言うほど実感している。

ともあれ、様々な魔法体系が存在するのをシュテルのリストに見せて貰っていると、新しいゲームの説明書を読んでいるような感覚を味わえるので、少々楽しくなってくるのは事実だった。結果がどうあれ、魔法が使えるのであればそれだけで十分に楽しめるものだろうとは思っている。なにせよ、魔法を使うことが大前提の話だ。

とりあえずは、自分がどんな魔法を使えるのかどうかを調べなくてはならない。

「さて、こんなものですか?」

「うむ、穴はない様に思える。後はエルトリア式か? だがあれはぶつちやけ異質すぎるし」

「考慮するだけ無駄ですね。まあ、こんなもので良いでしょう。ノア、これから適性検査を施すのでじっとしててください」

「Ok……C'mon!」

中腰になりながら両手を叩いてかかってこい、とジエスチャーを取るとシュテルが此方を数秒ほど眺めてから手を振るう。それに合わせてデジタルな膜が此方を囲んだ。

「おおう?」

「検査は数秒ほどで終わりますから」

そう言っている間に囲み終わってシリンダーの形に変わったデジタルスクリーンは頭のとっぺんから足元までをスキヤニングする様に光を走らせ、次の瞬間には姿を喪失させて、一つのホロウインドウを表示させる。そこには様々な魔法の名前が書かれている。その横で数値が変動している。恐らく、結果が出たら数値が固定されるのだろう。

「0で才能なしどころか使用するのは無理、100であれば空前絶後

の才能とも表現できませんね」

「100あるなら聖王クラスだな」

「ホーリー・キング。ディアーチエの親戚？」

「いや、我も王だけど違うから」

「キングスとキング……くくく……」

「あー！ 言っではいけない事を！ 言っではいけない事を貴様!!」

仲が良いなあ、とじゃれ合う少女たちを横目に、検査終了と表示されるホロウインドウを見た。同じように確認したシユテルがディアーチエの頬を掴まれたまま、笑う。

「まあ、大体の適性は偏っているものですから、希望通りの魔法が得意じゃなくてもがっかりしないでくださいね。0じゃなければ努力さえすれば何とかかなります——」

適正が、表示される。

放出：0

強化：0

拘束：0

移動：0

転移：0

「か……ら……」

形成：0

回復：0

飛行：0

「え、ええ……」

召喚：100

収束：0

探知：0

支援：0

解析：0

魔力量：B+

「……」

「……」

「……」

ホロウインドウに浮かび上がった内容に全員が一瞬で黙った。内容をもう一度確認し、手に取って、浮かべてみて、掲げてみて、クロージアアップして確認し、そしてそれを前に浮かべて首を捻る。そしてシュテルとデИАーチエを無言で眺める。

「いや、ほら……Bも魔力があるなんてやるじゃないですか!」

「え、魔力量B+しかなかったの? 僕とかシュテルんとかAAあるし、王様に至ってはSSSあるけど」

新たに参入した声にリビングの入り口へと視線を向ければ、首にタオルをかけた風呂上がりレヴィがほかほかした様子で入ってきた。そして三人分の視線を同時に受けて、一歩後ろへと下がる。

「え、なにこのお葬式みたいな雰囲気」

お前少し黙っているというオーラを少女たちから受けてレヴィが一瞬で黙る。何かを察したレヴィがゆつくりと近づき、そして適性検査が書かれたホロウインドウを確認する。そして確認したレヴィがゆつくりと両手で顔を覆う。

「ほんとごめん」

「ステイツに帰るわ」

振り返ろうとした所でシュテルが後ろからしがみつく。

「まあ! まあ、まあ、まあ、ほら! 適性100ですよ! 凄い数字出ましたよ! 私でも100とか持つてませんよ! ほら、凄い数字ですよ!」

その言葉に足を止め、振り返りながらレヴィを見る。

「あ、いや。召喚魔法って魔法生物を呼び出す魔法だからそもそも契約出来る魔法生物が文明や世界諸共全滅している今だとぶっちゃけ置物……あと強化魔法で支援出来ない召喚士とか存在している価値が薄い」

レヴィの言葉を聞いた瞬間、頷きながら笑顔でチョップをホロウインドウに叩き込んで粉碎し、そのままシュテルを腰にしがみつかせたまま、出口を目指して歩き出す。

「ステイツに帰るわ」

「待つてくださいい！ほんと待つてくださいい！私が悪かったですから！ね！適性に関係ない魔力の使い方とがありますから、待つてくださいい！」

「アレ、完全にDV夫に捨てられそうな妻の凶だな……」

「何を言ってるんですか王！早く止めるのに協力してください！」

「録画録画……」

「レヴィ、何をやってるんですか。や、やめ、あ、ちよ！行かないでください！お願いしますから！」

——世の中、期待するときは程ほどに抑えておかないと失敗した時に、予想以上にダメージを受けるものだ。

それをこの日、心で良く理解する事が出来た。

何時だって都合の良い話には裏があるのだから。なんとなくこんなオチになる予感もはしていても、実際に遭遇してみると落胆は酷かった。

そんな、海鳴での一日だった。

Seaside City

暁町、研究所近くの公園で直ぐ近くにミニテーブルなどを広げながら、軽くポーズを取った。

「Summon」

指をぱっちん、とスナップさせて弾く。それに合わせて10メートル先に待機させてあったナイフが手元に出現する。それを指先に引つ掛け、回転させるように指の上を這わせ、親指の所まで来たところで弾いて上へと押し出す。回転しながら上へと飛んできたナイフが落ちてきた所で、それを掴む。

「おぉー」

その芸にレヴィとシユテルが両手で拍手を送ってくる。ナイフを弾いて回転させながらキャッチするのを繰り返し、落ちてきたものを掴んで両手で挟む。

「Unsummon」

言葉に合わせてナイフを送還させ、見た目なら手の間に挟んでナイフが消えたように見せる。だが実際の所はナイフが初期位置に戻っているだけであり、手を広げればまるでマジックを使ったかのように手の中からナイフが消えている。

それから指をスナップし、指の間から出現する様にトランプのカードが召喚される。それをばらばら、と下へと向かって落としながら送還する事でトランプが虚空に消えていき、召喚魔法で上から落ちて来る。それを片手で掴んで纏めながら手の中に挟んで姿を消し、手を合わせてスライドさせれば隙間からナイフが生えてくる。それを指の間に挟んでからナイフを隠す様に動かしてナイフが消える。

「こんなもんか」

用意しておいた帽子の中からひよこを引つ張り出しながら、出てきたひよこを頭の上に乗せて、魔法を使ったマジックショーを軽く完結させる。レヴィが此方の見せたマジックショーの内容に満足する様に両手で拍手を繰り返し返している。それに合わせて軽くお辞儀すれば、頭の上のひよこがぴよぴよと鳴いている。シユテルがほー、と声を零

す。

「それにしても魔法を使ったマジックとはよく考えましたね。これは確かに種も仕掛けありませんし。見破る方法が存在しませんよ」

「寧ろなんでお前らは魔法の話をするたびにそれで戦う事ばかりを話し出すのが俺には解らねえよ」

魔法という技術を学び始めてから1週間が経過した。つまり三人娘たちと海鳴での生活1週間目になる。その間に魔法に関する基本的な知識や技術を学んでいる。召喚魔法はそこまで難しくはなかった。最初に契約し、次に同意を得て、そして召喚するという3ステップで行える召喚魔法は無機物が相手であれば、前者の2ステップを無視して行うことが出来る。とはいえ、召喚できる物には距離などの制限が存在し、

半径20メートル以内の物体を召喚するのが自分の限度だった。

「おかしいですね……適性が100もあれば次元を超えて召喚できる程度の事は可能な筈なのですが……」

なんて発言がシュテルから出ているほか、魔法の補助具であるデバイスを保有していない事も原因で、魔法を思ったほど自由に扱う事は出来なかった。シュテルはこれではまともに戦えないと嘆いていたが、何故そこで迷う事無く戦う事を選ぶか、というのが良く解らなかった。魔法であり、自由に不思議な事を起こせるのだ。だったら戦う事ばかりではなく、他の事に目を向けられないのではいか？ という話であり、

それでいきついたのでマジックだった。

元々ステイツに居た頃、色々と小銭を稼げそうなものには手を出していた。父子家庭だった影響で、贅沢なんて出来なかった。となると何とか自分でお小遣いを稼ぐ必要がある。手品、奇術、或いはマジックと呼べるそれはちよつとしたお小遣い稼ぎには便利な技術だった。

「僕達にとって魔法は戦闘技術にイコールするからねー」

「最も魔法文明が栄えていたアルハザードは消滅、ベルカは育ち過ぎた魔法兵器によって消滅、ミッドチルダも広がり過ぎた次元世界に治

安の手が回らず常にどこかと戦っているような状態ですからね」

「魔法文明滅んだままでもいいじゃねえかこれ」

「否定できない……」

聞けば聞くほど、魔法文明とかいうのは危険でしかない様に思える。

「というかその【時空管理局】って真つ黒なんだろう？」

「ええ。トップは数百年を生きている脳味噌ですよ。次元犯罪者の動きをコントロールして、犯罪を発生させて、それを管理局で制圧。ほかに自分たちを延命する為の新技術を求めて非人道的な実験に数えきれないほど手を出していますね」

「僕達もその筋では一度狙われてるんだよね」

「魔法文明超いらねえなこれ」

「そうですね」

「うん」

ですが、でも、とシユテルとレヴィは笑った。

「取り戻しませんと」

「うん、だよな」

その言葉は自分に言い聞かせるような、どことなく必死な、そんな感じがした。そこまで本気になった事がないので——いや、そもそも自分が人生で本気になったことがあっただろうか？ 自分が記憶する限り、なかった。だから目の前の少女たちの、どれだけ説得した所で、話が通じなさそうな姿は新鮮だった。頑固だから話が通じないのではなく、覚悟が決まっているから話が通じない。

少しだけ、羨ましく思える。

「まあ、別にいいけどな。俺はどうにもできそうにないからなあ！ 期待外れで悪いな」

「まあ、確かに落胆しなかったと言えば嘘ですけど。それでも私達以外に魔法が使える人が出てきてくれただけでも十分ですよ。正直、こうやって貴方が登場するまでは夢でも見ているのか、狂ってしまったのか。それさえも解らなくなりそうでしたからね」

「だからノアは軽く構えていればいいよ。僕達は魔法と一緒に使えれ

ばそれだけで十分過ぎるぐらい楽しいから」

「H m m……」

帽子を被り、ひよこを隠しながら少しずつ慣れてきた召喚魔法を使い、服の中にひよこを召喚する。それに反応してひよこが服の内側を上って来て、首元からその姿を出してくる。

「ぴよっ」

小さな翼で敬礼する様に出てきた所でポーズを決めるひよこを見て、よくやったとその頭を軽く撫でる。

「そのひよこ、ほんと芸達者だよね……」

「研究所の庭で昼寝してたのを見つけたんだけど一瞬で気が合ったからなあ」

「ぴよぴよ」

名前はまだない。だが恐ろしく賢い奴だ。一度教えた事は一度で学習し、細かい芸にもちゃんとしたリアクションをくれる。だから売り上げの一部で美味しい餌を与える事を約束に契約を結んでいる。つまりそう——最初の召喚獣である。

そこらへんで拾ったひよこが。

まあ、何もなしよりは遥かにマシであるのは事実だった。まあ、気分だけはサマナーという奴だった。特に何か出来るという訳ではないが、マジックのパートナーには丁度良い奴だった。何よりも愛嬌があるのがいい。

「よ、そ、と、と——」

足元のジャグリング用のピンを蹴り上げて、キャッチしながらまず最初にジャグリングを始める。召喚魔法を堂々と使つてそこにノーアクションでピンを増やし、ジャグリングの内容を増やす。

流石に昼間からそうやって派手なパフォーマンスを始めれば、公園で遊んでいる人達の目にも入る様になる。とりわけ、親連れの子供とかには良く見える。ジャグリングでピンを高く飛ばしながら魔法でピンを召喚して追加する。投げ込まれていないのいつの間にか増えて行くピン。その様子に首を傾げながらも、ジャグリングにひよこが飛び込む。

そうやってひよこがジャグリングのサイクルに混じる。

「あ、凄い」

「本場のマジックショーに比べればあんなの子供だましよ」

「でもほら、ひよこさんが楽しそう」

「もう……」

「Hey、そのボーイズ&ガールズ。このお兄さんの夕飯に一品追加する手伝いをしてくれないかな？ よっと」

頭を軽く振って、被っていた帽子を落とす様に足を延ばし、キヤツチする。そうやって帽子を足の上に乗せれば、その中にひよこがジャグリングの輪から飛び出して入り込む様に着地する。そしてそのまま、おひねりを要求し始める。その姿に小さく笑い声上がり、おひねりが投げ込まれてくる。

ジャグリングからカラードトリック、ナイフ芸を召喚魔法を混ぜて披露してゆく。

「元の世界だと魔法は隠すものでしたからね、こうやって堂々と金儲けに使う方法は思いつきませんよ普通」

「管理局いないからね、今」

堂々と魔法を使った所でそれを咎める存在はいない。だとしたら、種も仕掛けもないトリックとして使ってしまった方がかえって人々は納得してくれる。まあ、しなくても別にいい。こういう大道芸はそこそこいいお小遣いになる。見た目が派手であればそうであるほど、受けはいい。魔法はそういう意味では優秀だ。

おひねりが帽子の中に投げ込まれ、硬貨がひよこにヒットする。その衝撃にひよこがよろめき、帽子から落ちた——とところで頭の上に落ちてくる。あまりにも不可思議な現象を前に見物している観客たちが首をかしげながらパフォーマンスを眺める。

その中で、少しずつ魔法を使つて投げるピンを減らして行き、最終的にいつの間にか無手になる。ジャグリングに使っていた道具は降りたわけでもないのに目の前に整列されており、帽子を片手に軽く礼を取る。パフォーマンス終了の合図に拍手が向けられる。それに對して何度か頭を下げながら追加のおひねりを受け取り、帽子の中を

確認する。

その中には細かい硬貨が入っている。100円、500円玉などが入っているものの、求めていた千円札は入っていない。

「Fuck, Jap共しけてやがる。全部で2800円か……」

「今はインターネットが発達していてそれなりのパフォーマンスはネットを見ればどうにかなるものですし、あまりこういうストリートパフォーマンスでお金は稼げないと思いますよ」

「ノアならお金持ってそうな女の子コマす方が早いんじゃない」

「あー……」

やったやった。そしてバレて父親に3階の窓から投げ捨てられた時があった。それ以来、そういう事はやっていない。だからレヴィの言葉には苦々しい表情を浮かべ、芸を終わらせた所で荷物を纏める事しかできない。

「え、なに、そんな事やってたんですか」

「おーっと、ここでシュテルん噛みついた——！」

荷物を纏めているとぐいぐいとシュテルが近づいてきて此方を覗き込んで来ようとする。その視線から逃げる様に顔を反らせば、素早くシュテルが割り込んでくる。此方の表情を伺おうと回り込んでくるその速度は、まず間違いなく魔法を使って強化されているものだった。

絶妙なウザさ……！

滅茶苦茶話を聞き出そうとするシュテルを回避する様に視線を逸らす、やはり魔法による強化が入っている分、シュテルの方が動きが無駄に早い。対抗する様に体に魔力を巡らせるが、その程度では魔法による強化には及ばない。精々、体が良く動く様になる程度だ。

なので、シュテルの頭の上にひよこを置いた。

「いいじゃねえか、俺の過去なんて。俺、イケメンだし」

「貢がせてたの？」

「さあ？」

「待ってください！ 彼女とか！ 恋人とか！ そういう話を！」

「ほんと必死だなお前！」

「いいじゃないですか……ちよつとぐらい……!」

そう言ってくるシュテルの頭を両手で掴んで抑え込みながら、助けの視線をレヴィの方へと向けるが、レヴィはキャンディを口の中に放り込むと、サムズアップだけ向けてそのまま研究所の方へと向けて歩き出す。

「帰ってアニメ見なきや」

「おい……おい!」

純粹な筋力でシュテルに負けそうな事実泣けてくる。魔法が原因だとは解っているのだが。それでも簡単に負けるのは癪なので、シュテルの突進の矛先を僅かにずらして回避しながら、そのままひよことパフォーマンスに使用した道具を回収しながら急いで逃げ出す。が、すぐにシュテルが追いついてくる。

「やっぱり恋人がいるんですね?」

「お前には関係ないだろ!」

「家賃として情報を要求します!」

「こいつ……!」

研究所へと帰る途中のレヴィに追いつき、しがみついて揺らしてくるシュテルを引きずる様に研究所へと帰って行く。

堂々と魔法を使っても咎めるような存在のいない海鳴で、また、なんでもない、何の進展もない日々が過ぎて行く。

Seaside City II

「うーむ、今日は牛肉の切り下ろしが特売だな……うむ、なら今夜は肉にするか。レヴィがよく食うから少し多めに5パックにするか」

「あいよ」

ケースから牛肉を5パック掴んでディーアーチェが押しているカートのバスケットに入れていく。そこには牛肉の他にも色々とお菓子や飲み物が積み込まれている。何をしているかと言えればわかりやすく暁町のスーパーで買い物だった。成人男性1人に年ごろの少女3人という組み合わせはそれなりに食べる量が多い。その中でも特にレヴィがよく食べる。成人男性二人分は普通に食べる。三人の中では一番女らしい体つきを始めているレヴィの事を見て、シユテルは胸に栄養がいつてると襲い掛かりながら言っていたのが記憶に新しい。

「うーむ、焼き肉でもいいのだが、余り変わり映えせんな……」

「そこまで深く考えるものか?」

「厨房担当だしな、我は。任されている以上はどうか飽きない様に回したいところだ」

「普通の家なんざ大体4日ぐらいのローテーションで同じもんが回ってくるだろ。その事を考えるとかなり頑張ってるだろ」

「そうか? そうであればいいな」

「びよびよ」

頭の上に完全に居ついているひよこがびよびよと鳴きながら同意の声を零す。こういう人間の言葉を理解したり、反応したり、対応できる動物はどうやら、この海鳴には偶に出没するらしく、珍しくはあるが驚くほどの生物ではないらしい——つくづく、ここに来てから自分の常識が打ち砕かれている気がする。まあ、そこらへんは深く考えない方がまだ心には優しい。

俺も、なんだかんだでこのぬるま湯の環境が心地よくて、海鳴から離れられていないのもあるし。

「しかし厨房は完全にお前の聖域だよな」

「まあ、我が面倒を見るのが好きというのものもあるが、シュテルとレヴィはそこらへん、面倒がるからな。むしろ我は貴様が普通に料理ができる事実を驚いたぞ。どう見てもピザとコーラを片手にカウチに座っているアメリカンだと思ってたのだが」

「俺、学校ではどちらかというところとジョック側だったから」

苦労話を自慢した所で余り意味がないから口には出さないが——それでも、まあ、それなりの苦労はあった。母親は物心がつく頃には既に死んでいた。だから残されたのは自分と親父の二人だけ。収入もあまり良くなく、何時も仕事で忙しく走りまわっている親父に変わって家の面倒は自分が良く見ていた。だから料理や掃除の様な家事に関する事はそれなりに出来る様になっている。

格好悪いから、絶対にそれを口に出したくないけど。

「レパートリーは多くないけどな」

「栄養の事を考えて料理出来るだけマシだ。レヴィに任せれば食卓には肉しかならばんし、シュテルに任せると栄養第一で他の事には頭が回らんからな、全く」

そう言うディアーチェは牛乳のパックを取る様に頼んだ。それに従い、牛乳を2パック取ってカートに乗せる。それを押しながらうーむ、とディアーチェが唸る。

「味噌汁にするか、それともポタージュにするか……我自身はどちらかという味噌汁の方が好みなのだが、レヴィとシュテルでここら辺は意見が分かれるのよな。ノア、貴様はどうだ？」

「俺か？ そうだな、ポタージュが飲みたいな。ミソ・スープも嫌いじゃないけど、やっぱり慣れた味の方が落ち着くし」

「ふむ、そうなるか。では今日はポタージュにするか」

「俺の意見を通しちやってもいいのか？」

その言葉にディアーチェはカートを止めながらにやり、と笑った。

「我の料理で文句を言えるような奴など居らんわ」

「大したもんだよ、お前は」

自信満々のディアーチェの様子に小さく笑いながら引き続き、買い物に付き合う。

◆
買い物が終わった所で、それなりの量の買い物袋が残された。一応、デИАーチエも魔法を使えば身体能力は軽々と人間を超えるだけのものがある。魔力を体に通すだけでも成人並の身体能力を発揮することが出来る。魔法技術とはそれだけ、とんでもないモノであった。だが、デИАーチエはそうやって魔法で生活を楽にするのを嫌がっていた。その為、デИАーチエはめつたなことでは魔法を使わず、誰か荷物持ちを頼んでいる。つまり、自分を荷物持ちに毎回頼んでいる。

両手いっぱいビニール袋を握りながら、夕日が赤く暁町を染めていく。スーパ―から研究所へと続く道を歩いて行く。時間的に学校から帰ってくる子供たちの時間と被り、親子の姿で道を歩き帰宅する姿や、サッカーボールを片手に公園へと急ぐ姿が見える。極々、普通の家族の姿が歩きながら見える。その姿をデИАーチエが視線で追いかけているのが見えた。

「すまん」

「気にするな」

「違う、事情に巻き込んだ事に関してだ」

「それを含めて気にするな、って事だ。だから気にするな。面倒な人生には慣れてる」

そう言葉を返せば、デИАーチエは少しだけ驚いたような表情を浮かべ、しかし同時に溜息を吐く。

「貴様は普段からもう少しそういう姿を見せていればいいものを」

「おいおい、俺が普段から真面目にやっているとモテすぎて困るんだよ。ほら、俺の体つてば一つしかないからね、取り合いになるのは避けたいんだ」

「その戯けた言動さえなければなあ」

にやり、と笑って返す。笑える事は恐らく、人生でもかなり大事な事に入る。だからなるべく、余裕を維持する様に、軽く茶化す様に笑

みとジョークを口に浮かべる事を忘れない。それを笑顔の魔法だと自分は思っている。

とはいえ、その魔法でも出来る事と出来ない事はある。

「ノアよ」

「ん？」

「我はな……別に、魔法とか本当はどうでもいいのだ」

溜息を吐きながらディアーチェが語り出す。

「シユテルと、レヴィと、ユーリが……我らが4人揃って平和に暮らせているならそれだけでよいのだ。元の世界とかどうか、正直そういうのに執着は薄い。魔法なんでもものは存在しなければいい、ぐらいには思っている。余計な力は余計な破壊しか生まぬ。しかしそれから我らは生まれてきたのだ。なんとも皮肉な事か……」

「……」

片手を持ち上げ、小指を耳の中に差し込みながら掻き、小指を軽く弾く。そのまま、無言でディアーチェの話聞く。

「ああ、すまぬ。別に貴様が邪魔だと言っているわけではない。どちらかというと感謝している。特に何かをしたとは思っていないだろうが、魔法を使える人間が増えたというだけで救われる部分もあったのだ」

「……だからシユテルにもうちよつと付き合ってくれ、と」

その言葉にディアーチェが視線をそらし、頬を軽く掻いた。

まあ——シユテルの態度が、どことなく不審と呼べる事実は存在する。

必要以上にべたべたしている、縋っているような言動、態度。どことなく過剰とでも表現できるその態度は、普通と呼ぶには少々難しい態度だった。実際、シユテルの態度はなんというか、恋する少女を演じている。そういう部分がある様に思えた。少なくともそれが本当ではないのは、恋愛経験というものがあるのであれば解る。ただシユテルの態度は彼女自身がそれを信じようとするものがある。

そこがまた可愛らしいものだと思うのだが。

「まあ、付き合うだけは付き合うさ」

「すまんな」

「寧ろ世話になっているのは俺の方だろう。場所と飯用意して貰って」

「我らの都合と事情に突き合わせているから、これぐらいはやるのが筋というものだ」

「Japanese Ninkyō……!」

「我、それは違うと思うぞ?」

そうやって夕日に照らされている中で、視線を合わせてくすり、と笑う。奇妙な共同生活がここでは繰り広げられているものだと思っていた。何よりも妙なのは、まるで三人娘だけで研究所に住んでいたり、そこに新しく男が住み着いた事に対して暁町の人間が誰も疑問に思っていない事だった。そんな異常性、普通なら警察でも調べに来ることだが、

まるでそれが当然の様に、常識の様に処理されていた。

そういう意味では、研究所に当然の様に居ついてしまった自分もある意味ではおかしいのかもしれない。とはいえ、まだ出て行けるわけでもない。少なくとも自分の中にあるルールはシンプルだ。

自分で決めた約束は絶対に破らない。

これだ。このルールがある。そして親父の遺言は果たすと誰にでもない、自分に約束したのだ。その件もこれで最後——調べても調べても魔法、時空管理局等の単語は全くヒットしない。疑う訳ではないが、それでも本当に存在するのか。或いはどこかの小説の設定なのか。そういう事を調べていたりもした。

だが皆無だ。

それらしい単語は存在しなかった。類似する設定はあっても、それでも違うものだ。と納得できるのは、シユテルやディアーチエが説明した内容があまりにも詳細で、それでいてリアルだったからだ。いや、リアリティなんてまるで欠片もない事情だ。だけど、それを言葉にする彼女たちは心の底から信じていた。その姿を自分は信じる事にしたのだ。そしてそれ以外のヒントもない。

半分、惰性で付き合っているとも言える。その感覚が少しだけ嫌

だった。

「解つておるかもしれないが……世界を修復云々の話は、ぶつちやけた話、無理な話だ」

「そうなのか？」

「うむ。いや、道具は揃っているのだ。研究所にある巨大なVR機械があるであろう？ アレを使えば疑似的に歴史に介入できるのだ」

「おお、凄い」

これを使えばヒトラーが勝利した世界に、なんて事も出来てしまいうさだ。ある意味、存在しているだけ恐ろしい道具でもある。だが、何かあるんだろう？」

「まあ、当然な」

ディアーチエは苦笑しながら歩き続ける。

「我らが実は人間ではない、と言ったら驚くか？」

「割と」

「そして？」

「ディナーにデザートを要求する」

「なんとも貴様らしいな……」

寝食を共にしておいて今更、という話だ。人間だとか人間じゃないとか馬鹿々々しいにもほどがある。

「それにお前は人間じゃないかもしれないが、こいつはひよこだ」
「ぴよ」

頭の上に居座っているひよこがサムズアップらしきポーズをとっているが、親指がないので微妙に不細工なポーズを決めている。それを見たディアーチエが小さく笑い声を零し、そして溜息を再び吐いた。

「我らはエグザミアから供給される魔力によって何とか存在を繋いでいる状態だが——装置を稼働させるには大量の魔力が必要だ」
「成程な」

「うむ、そういう事だ。だから我は無理だと思っているし、興味もない。我は我でこの生活が続けばそれで十分だと思っているからな……我は」

自分は、と言葉をディアーチエが付け加える。少なくとも現状でディアーチエは満足しているし、それ以上を望んではない。だがその方針はシュテルと食い違っているのは事実だ。

「だからな、我はぶっ!?!」

「ぴよっ!」

話を続けようとしたディアーチエの顔面にひよこがひよこキックを叩き込んだ。それにディアーチエが言葉を中断し、蹴りを入れたひよこがサマーソルトをキメながら此方の腕の上に着地する。そこから袖を上って頭の上へと戻っていく。

「ぴよっふ」

「ん……ん!? 今我、ひよこに妨害された……!?!」

「ぶ、くくく……」

頭の上に戻ったひよこは胸を張る様に自慢げな姿を披露している。その姿に笑い声を零しつつ、ディアーチエの頭を軽く撫で、前へと向かって進んで行く。

「それ以上は言う必要ないってほら、ひよこも言ってるだろ」

「ひよこが。我を」

ひよこに負けた女ディアーチエという言葉が一瞬脳内を駆け巡る。ディアーチエは一瞬だけショックを受けたような表情を浮かべたが、次の瞬間には小さく笑い声を零しながら、小走りで追いつき、横に並んでくる。

「まあ、我も少しらしくはない事を口にしたと思う」

「ほう、つまり?」

「良かろう、我がとっておきのデザートを追加しよう」

「よし!」

「ひよこにな!」

「Fuck」

頭の上で勝利のポーズを取るひよこの姿を感じ取りつつ、小さく笑い声を零しながら研究所に到着する。そのまますすぐ家にまで帰り、扉を開けるとレヴィが飛び込んでくるので、デコイ用に飛び込んでくるレヴィの背後へと向けてお菓子の箱を一つ投げる。

空中でUターンしてレヴィがお菓子を回収してリビングの方へと一瞬で消える。

「あ、お帰りー」

そんな声がリビングの方から漸く聞こえて来る。そして明らかにお菓子を待たずに食べ始める気配を。それを追いかける様に頭から飛び降りたひよこがリビングの方へと消えていき、そこからレヴィと争う様な騒音が響き始める。

「……」

その様子を自室から首だけを出したシュテルが確認する。

片手に分厚い辞書を抱えたシュテルがそれを半分引きずる様にリビングへと向かい——二度、衝突する様な音が響いた。静かになつたりリビングからシュテルが出現し、そのまま自室に戻っていく。

「読書中だったかー」

読書中のシュテルはそれを邪魔されると鬼の様にキレる。その結末がアレである。

「……こんな日常がずっと続けば良いのだがな」

「ま、何もしなければ続くんじやないか」

デイアーチェの呟く言葉に応えながら帰宅する。

ここでの生活にも、だいぶ——馴染んできた。

Seaside City III

「だーかーらー」

レヴィが臨海公園でバルニフィカスを片手にしながら手を大きく振るっている。ひよこを頭に乗せたまま、レヴィの放つ言葉に耳を傾けているが、呆れ半分でどうしたもんか、という形で困っているのが事実だった。バルニフィカスを片手に、レヴィは手を振るう。そうする事によつて空間に幾何学模様の線が走る。見た感じ、その線が何を意味するのかを理解するのは難しいだろう。だが拡大される幾何学模様の中には、それぞれ小さな図式や文字、数字が刻まれている。それが一つ一つ意味を作り、巨大な模様が一つの形を生み出すというのが、自分の今の知識から理解できる。

だがその精密さ、密度が異様だ。

この浮かび上がっている模様は術式だ。魔法を使う為の術式である。

「魔法は儀式でも信仰でもなく技術なんだよ。どちらかと言えば数学に近い感じで」

「知ってるぜ」

レヴィの真似をするように手を出し、ダイヤルを掴む様に空間を回してゆく。それに合わせ、フレームワークの様に空間に黒色の魔力が走る。それが空間に形を刻み、レヴィがやったように術式を空間に刻む様に幾何学模様が広がって行くが——それはレヴィの半分も届かない。つまり、自分が記憶していられる限界だ。しかもレヴィの力強く滞空する術式とは違い、こちらは切れかけのネオンの様に偶にちかちかと光りながらその輝きを失って行き、

やがて、電源を落とすかのように完全に光を失った。

「Ah, not what I expected to be
……」

電気の切れた看板状態の術式を眺め、消え去った虚空をしばらく眺めているとレヴィがだーかーらー、ともう一度言葉を口にする。

「術は全部覚えな」と意味がないんだってば。その上で湿度、温度、風

向き、次元の影響力、それらの要素を加味してリアルタイムで魔法の細かい部分を調整していくんだよ。魔法は技術。つまり法則によってコントロールする事の出来る現象なんだから、覚えて適応しないと意味がないんだってば」

「覚えていられるお前らがおかしいんだよ」

少なくとも当たり前前の様に30桁の数字を複数覚える必要があるうえで、それらを計算に使うのだから更に複雑化する。それをレヴィは暗記しているのだというから、普段は馬鹿っぽく見えていても、その脳のスペックは常人では測り切れないレベルで高いのが良く解る。少なくとも自分はその三分の一も無理だった。今自分が広げようとして失敗した術式は、召喚魔法のそれだ。

つまり曲芸に使っている召喚と送還の術式だ。これ一つを暗記するのに1週間ほどの時間がかかった——遅い、とレヴィには煽られているが、とてもじゃないが人間が覚えるような構造をしていない。それを覚えられただけ、褒めても良い事だと思っているのにレヴィは更にこの先を学べと教えてくる。今日、こうやって臨海公園で魔法の練習をレヴィに教わりながらやっているのはまたレヴィが遊びに連れ出す様に魔法を教えてくれるからだった。

ぶつちやけ、召喚と送還があればもうそれだけで便利だから魔法に關しては満足しているのだ。だが、レヴィは本来の適性のスペックをフルで発揮できるならそんなものじゃないと魔法を教え込んでいた。ちよつとめんどくさい。

もつとできる、とか魔法の話をされてもぶつちやけ、使うところが無いのだ。破壊力を追求できるとか言われてもそれ、何に使うの？と言いたくなるような平和な街だし。だから魔法を覚える事に対しては消極的だった。とはいえ、レヴィは教えている間、楽しそうにしていた。

だったらそれを断って嫌な気分にするのも良くないだろう。

まあ——適度な暇潰しだった。

「つってもな、覚えるだけでも大変なんだよ……！」

「えー、そうかなあ。頭の中で数式を構築するだけだよ？」

「出来るか。これが限界だわ」

もう一度空間をひねる様に術式を空間に刻みだす様に出現させる。それによつて浮かび上がった姿を見て、何とか片手をもう片手で握つて支え、しばらく浮かべ続けながらその様子を見ようとす。だが一秒、一秒過ぎていくたびに少しずつちかちかと光を失い、最終的に消えてしまった。

「はあー……集中が持たねえ。頭の中に抑え込んでおくだけなら何とか出来るんだけどな」

「普通、魔法を使うときはいったん、魔法陣を展開してから発動させるから、一切外に出さないノアのやり方はけっこう異端んだけどね」
「そうなのか？」

「そーだよ。そもそも魔法つて技術による現象発生のコントロールなんだから、それが内側じゃなくて外側へと向かつて発生するのは当然じゃん。だから術式を抱えるというのは空間に対する干渉ではなくて自己に対する干渉なんだよね……なんで発動できてるんだろ？」

「さあ……？」

「ぴよおー？」

頭の上のひよこも羽を組んで首をかしげている。本当に芸達者な奴だった。とはいえ、本当に魔法技術に関しては俺は素人だ。レヴィイが当然の様にやっていることさえ出来る訳でもない。一つ一つやるのに滅茶苦茶苦勞しているし、頑張った所で到達できる訳でもない。まあ、やる気があるという訳でもないのだが。

或いは本気を出すことが出来れば、やる気で満ち溢れば結果の一つや二つ、鼻歌交じりに乗り越える事も出来るのかもしれない。

だがそこまで取り組む様な事でもなかった。

ともあれ、半径20メートルという距離の制限はあるものの、その範囲内であればそれなりに高い精度で召喚行動が自由に行っていた。無機物相手であれば即座に手元に引き寄せたり、好きな場所へと飛ばしたり。変な使い方ばかり上手くなっている自覚があった。とはいえ、それを支える筈の基礎や下地という部分は皆無であり、

「うーん、やっぱり初歩的な訓練とか教育から始めた方が良いのか

なあ」

「最初からそうしろよ」

「でもさあ、魔法が使えているってことはある程度の下地自体はあるってことなんだよね。本当に何の準備も出来てなかったらそもそもリンカーコアから魔力を取り出す事さえも一苦労な筈だし。魔法が使えるって事はちゃんと才能がある証なんだよね。だから今更初步的な事をやらせても意味が薄いしな」

息を吐きながら手を下ろし、軽く振るって指先と手首をほぐす。レイヴィが課してくる魔法訓練は意外とハードだった。魔力を使い込むと、体の中の何かが締め付けられるような苦しみを覚えるし、ひたすら試行し続けなければいけないので、頭の中はヒートアップしている。それを維持しながら体を動かしたりしないといけないので、これが滅茶苦茶大変なのだ。

まあ、マルチタスクを学んでからは多少なりとも楽となったのだが。

ミッドチルダという魔法文明ではどうやら、このマルチタスクによる思考分割がデフォルトの技能らしい。

魔境か。

しかも魔法技術で大体常に殺し合っている。

怖いわ。

改めて、魔法文明が根絶されたという事実には安心感を覚えながらも、自分が身に着けて行く魔法技術は便利なものが多いと思う。特にマルチタスクは一つの事に集中しておきながらその集中力を落とさずに別の事を同時に考えることが出来る技能だ。便利なものにも程がある。

「やっぱレイヴィが使っているバルニフィカスみたいなデバイスを持つのが一番楽そうだな」

「まあ、そうなんだけどね」

レイヴィがバルニフィカス——片手で握る機械式の杖の様なもの振るう。シユテルが保有するルシフェリオン同様、これは魔導士の戦闘行為を補助するための道具であり、デバイスと呼ばれるものらし

い。ユーザーの代わりに魔法陣を生み出したり術式を記録し、詳細な計算などを代替してくれる。その為、デバイスにそういう演算を任せ、ユーザーは魔法を使う事だけに集中できるのだ。これがあれば今、自分が経験しているような苦しみを回避できる優れたものでもある。

「まあ、バルニフィカスは僕専用で、ルシフェリオンとエルシニアクロイツも専用にチューンされているから貸して使わせる事も出来ないんだよねー。デバイスを新しく作るだけの材料も技術もないし。残念だけどなして頑張つて貰わなきゃダメかな」

「俺もかっこいいアイテムが欲しかったなあ」

「あ、解る解る。皆、専用のデバイスの一つは憧れるんだよね。格好いいし」

そう言うバルニフィカスを変形させてレヴィがポーズを決める。刀モードへと変形したレヴィのバルニフィカスが振るわれ、それをバク転で回避しながら軽く距離を取る。くるくると回転させるデバイスをレヴィは更に変形させ、大剣モードへと切り替えてもう一度ポーズを決める。その間も一切浮かべている術式に揺らぎはなく、完璧に維持している。つまりデバイスの操作と、魔法の維持をマルチタスクでしっかりと分割して試行しつつ、集中力を揺らがせていないという証でもある。

子供の姿をしていながら、怪物的な頭脳だった。

普段はどことなく抜けているような発言が目立つレヴィではあるが、魔法という分野においてはプロフェッショナルである事は明白だった。

「危ないだろお前!!」

「いや、ノア避けるじゃん。というか魔法を使ってもいないのに良く避けられるよね。もしかしてナントカツルギ流とかいう流派の生徒だったりする?」

「何を言ってるんだお前は」

「え? 知らないの?」

レヴィが素晴らしいながら魔法を使った素早い動きを見せながら刀モードのバルニフィカスを振るう。その斬撃が時折此方へと飛んで

くるのを紙一重で何とか回避しつつ、その動きについて来れないひよこを片手で掴んで避難させる。

「こう……こんな、こんな感じで残像とか出して戦える人達だよ。魔法なしで」

「フラッシュまでいたのか日本には。やべーな」

「多分海鳴だけだと思う」

話を聞けば聞くほど魔境と化していく海鳴。一体この土地はどんな大罪を犯したのだろうか、気になってくる。ひよこを再び頭の上へと戻しながらバルニフィカスを杖に戻したレヴィの姿に軽くため息を吐き、頭の上のひよこを軽く撫でた。なんだかんだでひよこを頭に乗せる生活にも慣れてしまった。

「というか危ないからそれぶんぶん振り回すのやめろ」

「え、大丈夫だよ。死にはしないから！ ただちよつと吐いて漏らすほど痛いだけの非殺傷設定だからー！」

「それ、社会的に死ぬって言うんだぜ」

はあ、とため息を吐いた。まあ、魔法で生活が便利になるのは別に良いのだが、ここまでハードとなるとやる気をなくす。それとも外付けで何か、術式を覚えていてくれる媒体でも用意すればいいのだろうか？

「んー、スマートフォンにそういう感じのアプリを作って入力すればいいか……？」

「代演するのはスマホでも出来ると思うけど、魔力を通す様にできてないからスマホ壊れるよ」

「駄目かあ」

今のは結構いけるかと思ったのだが、まあ、そもそも魔力とか魔法とかを想定している文明ではないので、魔法を使おうとしたら失敗するのは当然なのかもしれない。レヴィ達と比べれば間違いなくポンコツと呼べるレベルの魔法使いではあるものの、

まあ、手品レベルの魔法が使えるなら楽しいしこれでいいんじゃないだろうか？

「ぴーよおー！」

と、思っていると頭の上からひよこが飛び降りて華麗に大地の上に着地した。それから地面の上でポーズを決める。

「Hey, trying to learn magic?」

「びよっ」

不格好なサムズアップで応えて来るひよこの姿に和む。だがその姿を見てレヴィは首をかしげる。

「うーん、でもリンカーコアを持たないから魔法は使えないと思うー

」

「ぴっ」

そう言っている間にひよこが放電した。

ひよこが、放電した。

片手で目を拭ってからもう一度ひよこへと視線を向け、ひよこサンダーが放たれているのを見た。しかもその副作用で物凄い羽が膨らんでいる。その姿を見て、腕を組み、首を傾げ、もふボール化したひよこへと視線を向け、レヴィがその姿を見て眩く。

「あ、ノアよりも上手」

「……俺が負けた？ ひよこ以下……？ 俺はひよこ以下なのか……？」

両手両膝を大地につけて項垂れるとひよこが煽る様に目の前で小さく放電しながら踊っている。それで気づいた。自分の魔力が減っている。そしてその代わりにその魔力がひよこに流れ込んでいくことを。

「お前俺の魔力じゃねえかそれ……！」

「ぴっぴっ!!」

「ぷぷぷ、くくく……ダメだ、我慢できないや！」

そう言うのとレヴィが腹を抱えて笑い出す。びりびりしているひよこを見て軽くため息を吐きながら立ち上がり、ひよこには負けていけないと少しだけやる気を出す事にする。ひよこ以下という称号はなるべく早く返上しなくてはならない。

今度は両手を前に突き出し、空間を掴む様にしながら手をゆっくりと回す様に流そうとしたところで、レヴィが少しずつ、小さく笑う声

のポリユームを下げている、

「ノアにーさん」

「おう？」

「魔法は奇跡じゃないからね。技術で出来る出来ないには全て意味がある。それを忘れちゃダメだよ」

「……？　おう。まあ、俺は天才な上に格好いいからな。ちよつと頑張ればあつさりと覚えられるさ」

サムズアップを作ってレヴィに伝えた瞬間、術式を構築する為に編んだ魔力が一瞬で暴発し、バックファイアによつて体が後ろへと数メートル吹っ飛ぶ。そのまま近くの植え込みに背中からダイブし、腹を抱えながら笑っているレヴィを見た。

「H m m……ちよつとミスった」

この少女たちに魔法というジャンルで追いつけるには後何年必要になるのだろうか。

そんなことを考えながら隠れる事もなく、臨海公園で魔法の練習を続けた。

Reflection

「ふあー……あ」

欠伸を漏らしながら片手で顔を抑えて体を持ち上げる。肌寒さを感じ始めるこの季節、少しずつだがベッドの中から起き上がってくるのが億劫になってくる。ひよこもベッドサイドテーブルの上にある、専用のベッドの中で暖かそうにして眠っている。あのひよこもこの二カ月でだいぶここでの生活に馴染んでいる。

そう、もう海鳴にやって来てから二カ月が経過している。

ここでの生活に慣れるのも当然と言えば当然だろう。家に自分の部屋を置いて、ストリートパフォーマンスや新聞配達のアルバイトで金を溜め、部屋には私物が少しずつ増えている。親父の遺言を果たす為に、その為に海鳴にやって来たのだが、

いつの間にかこの街に居ついていた。目的があるのは事実だが、それ以上にこの街には心地よさがあるのも事実だった。住んでみると不思議とここに足を止めたくなるような、そんな不思議な魅力があった。それが理由で自分も足を止めている。

まあ、元々アメリカにあった物は全部売り払うか捨てている。あつちに残っている物は何も無い。問題があるとすればビザの問題だけだろう。それも、まあ、裏技で取得したものだ。数年はこちらで生活していてもまるで問題ないだろう。そこまでこの国に残っているかどうかは、また別の話になってくるだろうが。ともあれ、

ここで生活するだけの糧を得る……程にはなっていないが、それでもなんとか生きていくだけの場所は出来た。

「Wonder when I can finish all this……」

眩きながらベッドから体を持ち上げて、起き上がり、降りて立ち上がる。背筋を伸ばして少し冷えてきた空気を吸い込みながら着替えを取り出す為に近くのチェストの中を適当に探っていく。そこから服を取り出している間にひよこの方も目を覚ましたらしい。ぴよぴよと眠そうな声で鳴くのが聞こえて来る。視線を向ければベッドか

らもぞもぞと動き出すひよこの姿が見える。

二カ月も経過すれば十分に鶏に近づいている筈なのに、不思議とこのひよこは一切成長する兆しを見せなかった。今も出会ったときのひよこ姿、そのままであった。魔法を勝手に使ったり、賢かったり、不思議な生物なのでシユテルやディアーチエに検分を頼んだのだが、魔法生物でもなんでもなく、普通のひよこだという結論に至った。

海鳴の謎の一つである。

「日本語で生活するのにもだいぶ慣れてきたしなあ」

ずっと英語で生活してきたものの、日本で暮らす分には日本語でしゃべっている方が便利だ。そういう事で日常的に日本語を使っていれば、だいぶ日本語で生活する事にも慣れた。とはいえ、咄嗟に出て来る言葉はやはり、英語になるのだが。これでも20年以上英語で生活していたのだから当然なのだろうが。

ササッと着替えを取ったらひよこが嘴でひよこ用ゴーグルを口に咥えるので、それを手に取ってひよこの頭に装着してやる。暇なときに作ってやったひよこ用ゴーグルを頭に装着したひよこは満足そうにぴより、肩の上へと飛び乗ってきた。別段、使い魔とかにしているわけではないが、自然とマスコットと飼い主という関係は続いていた。

まあ、どうでもいい話である。

この海鳴にはちよつとした不思議が溢れているのだから。

「さて、朝のシャワーでも浴びるか。髭も伸びてきたし剃っておく必要もあるな」

「ぴよぴよち」

ひよこを連れてそのまま風呂場へと向かう。

また新しい日がやってきた。



「おはよー」

「おう、おはよう」

テレビを前にコーヒーの入ったマグを片手に、テレビを適当に流して眺めている。一番最初にリビングにやって来たのはレヴィだった。起きてから完全に眠気は抜けているようで、駆け足でキッチンへと向かうとシリアルを漁り始める。これでまだディナーチエの作る朝食を待ち望むというのだから本当に良く食う奴だった。

その間に適当にニュースをかけて、その内容を確認する。

流しているテレビからは日常的などうでもいいニュースの類が流れる。魔法とかに関して何か、ニュースにならないかどうかを考えてニュースをかける習慣をつけたが、それでもニュースに希望する様な内容がかかってくる事はなかった。やはり魔法はこの研究所の外の世界には存在していないのかもしれない。そんなことを考えながらコーヒーをちびちび飲んで、少しずつ眠気を晴らしてゆく。膝の上ではビスケットをかじかじと食べているひよこの姿もある。

適度にひよこの頭を撫でていると、リビングにまた入ってくる足音が聞こえた。

「おはようございます」

「おはよシユテるん」

「モーニン」

リビングにやってくるシユテルが此方を見つけると迷う事無く滑り込む様に横に座り込んでくる。そしてぴたり、と横にすり寄って座る姿はどこからどう見ても猫みたいだと表現できる姿だった。まあ、美少女ジャンルには一応はいるのだから、仲良くして置いて気持ちの悪い事は何一つとしてないのだが。

「ノア、今日は休みでしたよね？」

「そうだなあ」

流石に無職のままここに居るのも問題なので、アルバイトとして地理を覚える為に新聞配達を始めている。無駄に高い自分の身体能力に、魔力を体に通す事で上がる僅かながらの身体能力、その合わせ技で走り回ると給金の割には結構楽に稼げるというのが自分の認識だった。学歴が死んでいる外国人を働かせてくれる場所は結構、探するのが難しい。

そういうこともあつてまともな社員待遇で働けそうな場所はなく、アルバイトで金を稼ぐ事ぐらいしか今は出来なかった。悲しいが、これが日本での就職状況だった。ただ、アルバイトである為、それなりに休みの日が多いというのが救いだろうか。それはともあれ、シユテルがそれを聞いてくるという事は、

「デートの予約か？」

「はい、デートの予約です。今日は外でランチなんてどうでしょうか」「よし、乗った」

「えー、いいーないーな。僕も行きたいなー！」

「駄目ですよ、私が先約を取り付けたんですから」

「むう……じゃあ今度は僕と食べに行こう！」

「ははーん、こいつ食事の事しか認識してないな？」

ソファに寄り掛かりながら振り返る様にテーブルでシリアルを食べるレヴィの姿に軽く苦笑を零しながら視線を正面、テレビの方へと戻す。するとレヴィを言い負かしたシユテルが視線を前へと戻しながら距離を詰める様に更に密着してくる。少女の体の熱をすぐ横に感じる。

「ふふ……」

楽しみにするように小さくシユテルが微笑む。

◆
「——まさにデート日和という奴ですね」

暁町を出て、シユテルと二人で海鳴へとやってきた。普段は暁町で買い物などを済ませる事が多いが、それでも一番栄えているのはやはり、海鳴だ。歩いたり、大きな買い物をしたり、食べに出るのならやはり海鳴まで足を延ばした方がいい。そういう事からシユテルと二人で海鳴まで足を延ばしていた。歩いても疲れるような体力をしていないとはいえ、少し遠出するのであればバスに乗った方が時間は短縮できる。

暁町からバスに揺られて数十分、海鳴の繁華街に到着する。バスか

ら出て眺める宙は青く澄み渡っている。海から少し離れた位置にあるものの、新鮮な空気が流れてきているのも感じる。そこまで栄えているイメージがないのは、海鳴には目玉となる様な施設や観光資源が存在しないからだろうか？ 何か、人を引き付けるようなものがあれば或いは……もう少し、後押しする様な人がいるかどうか。

まあ、存在しないから住宅街メインの街になっているのだろうか。「楽しそうだな？」

「ええ、なんだかんだでデートという行いには憧れを抱いていましたから」

そう言うシュテルは楽しそうに歩き出す。その横を一緒に歩きながら、繁華街を巡る。ランチ前という事実もあり、人通りは多い。海鳴の商店街よりも人が多いのが悲しい事実だろうか。

「あ」

近くのアンティークショップの窓を覗き込むように足を止める。ウィンドウに近づいて中を覗き込むシュテルの横に移動して、同じものへと視線を向けた。その先にあるのは、猫が三匹集まっている置物であった。それぞれ、首輪の代わりにリボンを首に装着した三匹の猫の置物をシュテルはじつと見つめている。

「欲しいものでも見つかったのか？」

「そこはこっそり買ってくれる所じゃないんですか？」

「それは自意識過剰な男のやる事だよ。いきなり形にずっと残るプレゼントを貰っても重過ぎるだろう？ 最初のプレゼントは形に残らない物の方がいいのさ」

「成程、確かにそうですね」

形にずっと残る様な物をプレゼントする奴はいわゆる愛が重い、と言われて忌避される。だからお菓子とか花とか、消えるものの方が最初のプレゼントとしては適切になっている。少なくとも元カノから貰ったマグカップっていつまでも部屋に置いておけないよね？ とは思う。

そこらへん、俺は心配いらない。

ちやんと全部処分してきた。

いいお金になってくれた。

それはともあれ、シュテルはじつとガラスの向こう側を眺めている。それからチラリ、と此方へと視線を向けて、もう一度視線を戻した。

「私、形に残る物は良いと思いますよ」

「……」

何か、欲しそうにしているシュテルの姿を見てから軽くため息を吐き、扉を開けて店内に入る。レジにいる店員は此方の姿を見ると、見ていましたよ、とアピールする様に苦笑した。軽い溜息を吐きながら親指を飾られている猫の置物へと向け、

「1万8千円になります」

「Ok, それじゃ値下げ交渉をしようか」

「残念ですけど日本じゃ値下げ交渉してないんですよ」

「Fuck! やっぱ——」

視線を背後へと向けると、ウィンドウの向こう側からキラキラした瞳を向けてくるシュテルの姿が見えた。いかにも期待しています、といった視線を向けられて、

財布をポケットから引き抜いて2万円をカウンターに叩きつけた。

「お釣り諸共持つてけ!」

「毎度ありー」

ウィンドウにある置物を召喚魔法で手元に召喚する。完全に魔法で消え去って出現した置物の存在に店員が驚き、ちよつとだけ気分が良くなった。片手で持ち上げられる程度の大きさしかない置物を軽く上に投げて掴みながらちりんちりん、と店の扉のベルを鳴らして出る。

「ほらよ」

「ありがとうございます」

投げ渡したそれを同じように片手でシュテルは掴むと、嬉しそうに表情をほころばせた。両手で握り、持ち上げながら正面から覗き込むようににやーにやー、と猫の置物を眺めながら呟く。その頭に猫の耳が生えたように、一瞬だけ見えた。ついでに尻尾が動いている姿も幻

視出来た。

「にゃー、にゃーにゃー……ふふふ」

微笑みながら置物を手に眺める姿は、演技もなにもない、少女の姿に見えて——初めて、自分の前で一切の演技を止めた笑みを見せたようにも思え、小さく息を吐いた。

まあ、高い出費だったが、この笑顔が見れたのなら別にいいか、と思えるぐらいには可愛らしい笑みだった。それをしばらく微笑みながら眺めているシュテルに、声をかける。

「好きなのか、猫？」

「そう、ですね……好きですよ。一番好きな動物で、一番身近な動物でしようか……」

置物をしばらく眺めていると、呟く様にシュテルが言葉を発した。先ほど見せた笑みは失せて、思案する様な、懐かしむ様な表情を浮かべる。猫という生き物をシュテルが日常的に溺愛しているのは偶に公園に出て猫と戯れている姿を見れば解るのだが、そこには動物として好き以上の何かを感じられた。

とはいえ、それをほじくり返すのが野暮な男という物であり、

スマートフォンを取り出して、ブラウザにキーワードを軽く叩き込んで検索し、目的の店を見つける。

「近くに猫カフェあるらしいけど」

「行きますッ!!」

「お、おう……」

食い気味に反応するシュテルの姿に驚きつつ笑い声を零し、その頭を軽く撫でてから歩き出す。そんな自分の姿に即座にシュテルが追いついてくる。

「ちよつと待ってください、今私の事を子供扱いしていませんか？」

シチュエーションは恋人同士のデートなのですから、今の頭の撫で方はおかしくありませんでしたか？」

「俺は動物の頭を結構良く撫でる」

「女性扱いされてないじゃないですかそれ！ シチュエーションを守ってくださいよ！ 今はホラ、デートですから！」

「はいはい」

「そう言いながら対応が適当じゃないですか！」

笑いながらも一度シュテルの頭を撫でれば、拳で軽く腰を殴ってくる。その姿を受け入れつつ、

二人でちよつとしたデートを楽しむ。

真似事とはいえ、こうやって誰かとデートをするのは久しぶりだった。

Reflection II

「あー、あー、あー！ ダメです、だめですだめです、あー……あー……」

物凄い幸せそうな表情で蕩けているシュテルの姿があつた。猫カフェのふれあいコーナーでシュテルが猫たちに群がられていた。客が少ない事もあつてほぼ店内を独占状態にしている為、暇を持て余した猫たちがそれなりに居るのだが——それでもこれもか、という数の猫たちがシュテルに群がっている姿を見るのは面白かつた。群がられているシュテルも実に幸せそうな表情で転がったまま、もふもふの猫たちに埋もれていた。幸せそうにダメですダメですと繰り返しているシュテルの言葉は次第に弱くなって行き、猫に埋もれながら昇天している。

その様子を近くの席からラズベリーソーダを飲みながら眺めていた。

猫カフェらしく、メニューもそれなりに猫っぽいもので、このソーダもグラスには肉球の絵が描かれていたり、可愛らしいデザインになっていて。まあ、自分はまだ見た目が良いから許されるが、男には少々居づらい空間であるのは事実だつた。全体的に可愛い可愛い、という感じに空間が彩られ、どこからどう見ても女子向けというのが雰囲気解る店だつた。

まあ、それでもシュテルが幸せそうに転がっている姿が見れたのならしい。というかあの三人娘に対しては自分、かなり駄々甘になつてしまうことを少しは自覚したほうが良いのかもしれない。アンティークの時もそうだが、ちよつと優しく過ぎていないだろうか？

「Well, I shall say that's fine」
幸せそうならそれでいっつか、と結論してしまう。子供相手には甘くなつてしまうのはどうしようもない悪癖だが、子供には罪はない。むしろ幸せな時代を過ごすべきだ。なら、まあ、自分が少し苦勞する程度で笑えるならそれはそれでいいと思う。

少なくとも、どことなく闇を背負っている様に見える三人娘が心の

底から楽しそうに、嬉しそうにしている姿を見るのは悪くない気分だった。

「にゃー、にゃー。みゃー？ みゃあー」

ただ猫語で話し続けるのを見るのはちよつと精神的に辛いものがある。あれが知り合いだと思われるのは少しだけ辛いものがある。椅子に座ったまま、猫たちと戯れているシュテルをドリンクをちびちびと飲みながら頼む。シュテルの意識が半分異世界に吹っ飛んでいく様子を眺め、店員を軽く呼ぶ。

「モンブラン一つ」

「はい。……妹さんですか？」

店員が去る前に猫に埋もれているシュテルを見て、そんな質問をしてくる。シュテルの姿を眺めながら苦笑し、そうだなあ、と呟く。

「そうだったら良かったな……」

あの三人が妹だったら……もう少し、マシな人生をステイツの方で送れたかもしれない。もうちよつと、頑張ろうと思えたかもしれない。或いは家族の為に頑張ろうと思えたかもしれない。だが違う。現実が違うのだ。親父は死んだ。そしてそれは、俺がもう少し馬鹿じゃなければどうにかなった事なのだ。

大切なものは後悔してから気づく。終わった後ではないと、それが大切であると気づけない。

「妹か弟、欲しかったなー」

呟きながら猫に好かれまくっているシュテルを眺めると、足元にやあ、というか弱い鳴き声が聞こえた。店員が去って行くのと入れ替わる様にやって来たのは、まだまだ小さい子猫であり、此方の足に顔を擦り付けながら鳴いていた。

「なんだ、お前あつちには混ざらないのか？ 可愛い奴め」

片手を下げて差し出せば、それに飛び乗って膝まで子猫が上がってくる。そしてそのまま膝の上で体を丸め、占領する様に落ち着いて眠り出す。天使の寝顔とでも表現できそうなその安らく様子に、当分は立ち上がれそうにない事実を自分は受け入れるしかなかった。

「あー、あー……あー……」

「まあ、シユテルも脳味噌の再起動には時間がかかりそうだし別に
いつか……」

小さく笑い声を零しながら子猫の頭を軽く撫でてからソーダを飲
み終わる。ついでにもう一杯、今度はモンブランに合いそうなコー
ヒーでも頼むとする。

◆

「今日はありがとうございました」

猫カフェを出てしばらくすれば日が暮れ始める頃合いだった。結
局、夕陽が沈み始めるこのころまで遊び続けてしまった。自分も自分
で、それとなく楽しんでいたのかもしれない。そんなことを考えなが
らシユテルと暁町へと帰るためにバス停へと向かって歩いていた。
夕陽を浴びて軽く赤く染まりつつある姿のシユテルは、そんな事を呟
いた。繁華街からほどなく離れたバス停には人の気配もなく、静か
だった。

「気にするな、俺も良い息抜きになったしな。偶にはひよこなしで過
ごすのも悪くない」

シユテルに答えつつバス停に到着する。誰もいないバス停のスケ
ジュールをチェックし、後十分近くバスが来ない事を確認する。しば
らくはバスを待っているだけになるだろうと確認している間にシユ
テルがバス停のベンチに座り、軽く足を揺らしていた。

「その……すみません」

「おいおい、どうしたんだよいきなり」

「いえ、迷惑をかけていると思ひまして」

「俺は寝床を貸して貰えて助かってるけど」

「そういう事じゃなくて、ですな……その」

シユテルが言葉に詰まる。だがその先を促す様な事はしない。バ
ス停の標識に軽く背中を預けながら腕を組む様に、静かにシユテルが
続きを喋るのを待つ。焦らせた所で良い成果が出ないのは良く解つ
ている。だからシユテルが話し出すのを待ち、話たくなければそれで

打ち切ればいいというだけの話だった。

だがシユテルは続けるようで、

「……私、少し変ですよね?」

「少し? H m m……少し?」

「そこは! 少しでも肯定してくれてもいいじゃないですか!」

「Sorry、嘘はつけないんだ」

「今思いつきり嘘ついているじゃないですかー!」

そう言うと、シユテルが小さく笑いだすのにつられ、こちらも笑い声を零す。夕陽の中、他の誰の心配をする必要もなく、くだらない事を口にして笑っている。ああ、本当に妹がいればこんな風だったのかもしれない。本当にあと一人、護らなきゃと自分に思わせられるような家族が——あと一人だけ、居てくれれば自分も変わっていたかもしれないのに。小さな後悔を胸にしつつ、シユテルがそうですね、と言葉を置いた。

「私、普通の少女に憧れているんです」

「普通の少女?」

「はい……私たちが普通の存在ではない事は知っていますよね?」

シユテル達は自分らを「マテリアルズ」というチームと呼んでいる。それはもう一人、自分が未だに会っていない少女、ユーリという少女を含めたチームらしい。このトップがユーリであり、シユテル達三人はその護衛という立場に入る……という話も聞いている。そしてその為に存在している三人娘は、正確には人ではないらしい。

「あんまり興味なかったから気にしてないけど、そういう設定だったな」

「だから設定じゃないですってば。私達、元々は別の生物だったんですよ? まあ、色々あって人間ですけど今は」

「その色々、が気になるんだけど……まあ、いいわ」

「聞かないんですか?」

「無理やり聞き出した所で欠片も楽しくないからな。で、普通の少女か」

「はい」

答えると視線をそらしながらシユテルが遠くを見る——その視線の方には道路と住宅の姿が見えるが、その更に向こう側、もつと先に広がっているのは海だ。恐らくは其方へと視線を向けて何かを思い出しているのだろう、その目が閉じるのが見えた。

「ええ……普通の女の子になりたかったんです。魔法も、力も、戦いもないそんな平和な日常を生きるだけの少女に」

いらなかった、とシユテルは言う。

「力なんて。平和で、楽しく暮らせるならそれだけで私達の誰もが十分でした。私も、レヴィも、デイアーチエもユーリを守るために人の姿を、力を必要としました。ですが本当に求めていたのはそれが必要のない世界と日常でした」

閉じていた瞳を開き、視線を此方へと戻す。

「この世界は良いですね。魔法文明が全滅していますから、魔法を使った戦争がありません。エグザミアを狙う存在も、存在していたという証拠さえも歴史に残されていません。おかげで初めて何も襲われる心配もなく生きていられます——存在し続ける限りは」

「意味消失、だっけか」

「はい。今はユーリが休眠状態で抵抗してくれているおかげでこうやって、私達だけが日常を生きる事ができます」

ですが、とシユテルは目を伏せる。

「今、この日常にユーリがいません。ユーリも一緒にこの日常を過ごすべきなんです。誰よりも彼女こそが一番、平和と平穩の中で安らぎを得るべきなんです。だから私は何時か、また争いの中に戻るとしても再び魔法を、文明を蘇らせたかったんです」

「期待外れで悪かったな」

「いえ……そんな事はなかったです。私を、私達を特別扱いしないで、普通に接してくれる人……それだけで十分です」

「……」

「普通に生きて、勉強して、遊んで、魔法も忘れて、恋をして、そして育っていく……そんな人生に憧れていたんです」

夕陽の熱に充てられて口を滑らせたのか、それを口から零すとシユ

テルは黙り込んだ。その沈黙を破る様に小さく息を吐き、

「だから俺を彼氏役に、か」

「……すみません。ちよつと運命的な出会いでしたし。その、運命的な出会いから恋愛に発展したらちよつと漫画みたいでいいなあ、つて」

そう言うシユテルは少しだけ恥ずかしそうにつぶやきながら視線を此方へと向けようとしなない。どれだけ賢く、そして強くあろうとも、彼女たちの本質が少女である事実には変わりはなかった。それは普段から生活していれば解る事だし、今のシユテルの話聞いてみれば解る。

事情を抱えているのは事実だ。

指先で人を殺すだけの未知の力を備えているのも事実だ。

だがそれと同じように、その心は強いだけで、普通の少女であるのもまた事実だった。

彼女たちの元がなんであれ、人として振る舞って生きている以上——彼女達は立派な人間だった。その事実には間違いはなかった。だから普通の少女、という部分には少しだけ悩むのが馬鹿々々しいと感じられた。とはいえ、それをストレートに口に出すのは実に紳士的ではない。イケメンはこう、もっとストレートに口説く。

そう、口説けばいいのだ。

納得した。

「で、頑張ってみた結果どう?」

「物凄いい申し訳なく思ってます。普通に良い人ですし。付き合わせたり、巻き込んだりやって本当に申し訳なく思っちゃってます。まあ、そろそろ潮時なのでしょう……」

「Hm」

小さくシユテルがそう言うのを見て、笑みをこぼしてから口を開いた。

「じゃあ、今からお前を本当に普通の小娘にしてやる」

「……ノア?」

「なに、俺も魔法使いだ。本当の魔法つてもんを今からお前にかけて

やる」

「……大した魔法使えないじゃないですか」

「なあに——見ていろ」

シユテルに近づき、その正面に顔を合わせてから、両手を前に出し、シユテルの両頬を掴んだ。その動きにちよつとシユテルが驚きながら、

「な、なんですか」

ちよつとだけうろたえているシユテルの顔を正面から見て、優しく、慈しむ様に笑みを向ける。

「You, may want to become a normal girl, but that is impossible. As you have always been special to me, my sweet heart」

そこから、そのままシユテルの額にキスをする。

「——」

そこで頬を解放し、ゆつくりと後ろへと下がってから立ち上がり、笑いながらシユテルの姿をポケットに両手を突っ込んだ状態で見下ろす。

「どうだ、俺に惚れただろう」

シユテルは呆然と見上げ、自分の頬と額を触れてから、此方へともう一度視線を向け、

「あ——っ……!!」

一気に顔を赤く染め上げた。頭の上から湯気でも出るのではないかと思うほどに紅潮させると一瞬で言葉を失い、あ、う、い、等言葉にならない言葉を口に出し、自分が全く理解できない言語でラツシユする様に言葉を放ってから勢いよく立ち上がって飛び掛かる様に寄って来た。

「な、にや、にやにや、にやにをするんですか！ にやに！ にやにやににやにい！」

「は、は、は、は」

「何を笑っているんですか！ 笑っているんですかあ！ もお！」

「ほら、恋をしたいなら俺が口説いて惚れさせればいいから」

「何を！ 言っているんですか!! もお！ もお!!」

顔を真っ赤にしながらシユテルが胸板を叩いてくる。それを笑いながら受け入れているが、ほとんど力が入っておらず、本気を出していないのが解る。視線を下げて眼を見ようとすれば、すぐに視線を外して焦り始める。もしかしてやらかしたかもなあ、とは思っても、それはそれで楽しかった。なら、まあ、良いのじゃないだろうか。

「もう、本当に……本当に……」

言葉もない、と言わんばかりにシユテルは言葉を失いながら後ろへと下がり、軽くふらつきながら自分の両手で頬を抑え、ベンチに座り込んだ。

「もう、本当に……どうしてくれるんですか……」

「H A H A H A H A」

「アメリカン笑いで誤魔化さないください」

サムズアップを向けて許す様に頼むが、シユテルが睨みにならない睨み顔を作ろうとして、にへら、と表情を崩して失敗している。それを抑え込む様に両手で顔を抑えようとしている。

「ああ、もう——」

でも、とシユテルが言葉を置く。顔を赤くしつつ、しかしはじけるような笑みで、

「ノア、貴方は……」

言葉を口に浮かべ、

——その体の端が分解され始めた。

「——えっ?」

その変化は突然だった。シユテルの体、その服装の端が色を失い、灰色になるとまるで崩れる様に空間に崩れて消えて行く。そうやって消えた姿は元に戻る事もなく、後に何かを残す事もなく、その変化が現れた瞬間、シユテルの表情に恐怖が浮かび始めた。明らかに想定され事ではない様子に、シユテルの名前を口に叫ぶ。

「シユテル!!」

「そ、そんな、意味消失、何故……何故、こんな時に……」

シユテルの声が完全に絶望で震えている。その姿に素早く近づいて、抱き寄せる。

「シユテル？ シユテル！ おい、シユテル!!」

「いや、嫌だ……こんな時に何故急に……あつ、あつ、ああ……」

シユテルの服から始まった浸食が一瞬で体を蝕み、足の先から体を分解し、消滅させていく。それを止めようと手で掴もうとする、それが指先を擦り抜けてシユテルの体を蝕んでゆく。その様子がシユテルの瞳に映り、涙がその端から流れる。

「き、消える、私達が消えるんですか？ あ、嫌、嫌だ、まだ消えたくない！ 消えたくないんです、お願いします、神様、私、漸く恋を――」

「シユテル！ おい、シユテル！」

シユテルが言葉を終わらせるよりも早く、

消滅はシユテルの全てを塵へと変え、

――まるで最初から何も存在しなかったのが当然の様に、その存在の全てをこの世界から消し去った。

Reflection III

「――」
言葉を失いながら腕の中から消えたシュテルの残滓を追おうとして――そこに何も残らないのを感じ取った。腕の中にあつたはずの熱が完全に喪失し、何も残されていない。そこにシュテルが存在していたはずなのにもうそこには何の姿もなかった。魔法の様に。いや、実際に魔法なのかもしれない。だがシュテルは消えてしまった。なんの脈絡もなく。

本当に、突然と。兆候も予告も予定もなく。

ただ突然、タイムリミットが来たように、何も残さず消えてしまった。余りにも突然な終わりに、体の動きが完全に停止してしまった。何をすればいいのか、何を考えればいいのか、そのすべてが頭の中から消える。

「シュテル……？」

先ほどまでそこにいたはずの少女の名前を呼んで、返事がないのに軽い恐怖を覚え――それよりも焦燥感が胸を襲った。シュテルが消えた時に零した言葉が耳に今でも残っていた。

そう、彼女は確かに言った。私達、と言葉を口にした。その答えは一つになる。

「ディアーチェー！ レヴィー!!」

暁町の方へと視線を向け、走り出そうとして足を止める。シュテルが消えたバス停へと視線を向け、一步目を踏み出すかどうかを一瞬だけ悩み――体に魔力を漲らせた。全身を魔力で強化し、そのまま跳躍する。強化魔法を使った時ほどではないが、

それでも魔力の通った肉体は超人的と表現できる程度のスペックは出せる。

跳躍で塀の上に乗る。バスを待っている時間が惜しかった。全力で跳躍して屋根の上に飛び乗ったらそのまま、

まっすぐ、道路を無視して暁町へと向かって走って戻って行く。

嫌な予感と不安が、暗い気持ちと共に胸の中に一気にこみあげて来

る。親父が死んだ時を知った時の様な闇が心の中に差し込んでくる。それを精神力で食い千切りながら見られる事を一切気にせずに屋根から屋根の上を走って移動し、

そのまま道路に飛び出す。

「危ねえぞクソが!!」

「信号を見ろ!!」

道路に前転しながら着地し、急ブレーキをかける車がギリギリのところまで衝突しない様に止まる。それを無視して通り過ぎようとするバイクを発見し、一瞬でバイクと契約、指をスナップさせてバイクの主と自分の姿を召喚と送還で一瞬で入れ替える。搭乗者が変更したバイクのハンドルを握り、代わりにアクセルを踏んで一気に加速させる。置き去りにされた元の持ち主が首をかしげているのも気にせず

に、道路をルールなんてものを無視して一気に突き進んでゆく。車の合間を抜けて行きながらカーブをドリフトで曲がって行き、そのまま暁町まで最速、最短のルートで進んで行く。地理は新聞配達のアルバイトで叩き込んでいる。多分この盗難でクビになるだろうが、

まあ、許して欲しい。

限界までバイクを飛ばす。全速力で加速しながらそのまま暁町に飛び込み、研究所を見る。減速する事無くバイクを飛び降り捨てながら道路に転がり、何とか立ち上がりながらそのまま、

走って、中へと飛び込む。

息を切らすほど必死に走って裏へ——家へと戻り、扉を蹴り開けて中に入る。

「レヴィー！ デイアーチェ!! どこだ！ おい!! Where are you!!」

英語と日本語を焦りながら入り混じらせて叫ぶ。悲鳴に近い声が漏れているのが解る。だがそれぐらい、訳の分からない、そしてどうしようもない事態だった。

「っ……あ」

「そっちかー!」

靴を履いたまま玄関に上がり、走りながらリビングへと上がれば、体が半分ほど消えている最中のディアーチエとレヴィの姿がリビングに転がっていた。ソファに倒れているレヴィと、食器を運んでいる途中で倒れたのか、食器や料理が床に広がった状態で倒れているディアーチエの姿が見えた。倒れているディアーチエを直ぐに拾い上げ、ソファのレヴィへと向かって、その姿を抱き寄せた。片手を頬に当てながら、その顔を覗き込む。

「あ……ノアだ……」

「すまん、夕飯は作れそうに……ない」

「馬鹿、喋るな。それよりもどうすればいい。どうすれば、どうすれば止まるんだこれは……!」

答えを求めてディアーチエとレヴィを見るが、微笑みながら頭を横に、ディアーチエが振った。

「始まってしまえば……もう……ない……」

「Fuck……」

小さく、そう言葉を呟きながら消えそうな二人の姿を抱きしめる事しか出来なかった。レヴィはああ、と小さく声を零しながら目を細めた。

「温かいなあ、ノアは……。僕の事、忘れないでね……?」

「忘れない、忘れないさ……」

抱きしめ、呟いている間にレヴィの姿が消えていく。そしてディアーチエも、体が塵になって消えていく。その中で諦めたように、嬉しそうに微笑んだ。

「ああ、本当に我らの事情に巻き込んでしまったてすまない……すまなかった。我は何時か、こうなるとは思っていた」

「ディアーチエ、Shoo、静かに。もう喋らなくてもいいから」

「いや、いいのだ。ここに居る日々は楽しかった。貴様も……お前といっしょに居られたこの二カ月も実に楽しかった。うむ、最初は……少し不安だったが。良い男だったぞ、お前は……ではな……」

「ディアーチエ……ディアーチエ!!」

言葉と共にディアーチエの最後の欠片が消え去った。

それと同時に軽いザツピングが世界に走る。振り返れば一瞬で床にぶちまけられた料理が消え去った。テーブルの上に並べられていた食器が消えた。リビングに置いてあったお菓子が消え去る。綺麗なさっぱり、生活の痕跡が消え去った。まるで最初からそこに存在していなかったように。

「……レヴィ？ デイアーチエ？ ……シユテル？」

まだ出会ってから二カ月ばかりの少女たちの名前を呼ぶ。少女たちと出会ってから時間は短いものの、不思議と長く感じられた。楽しい日常だった。不思議な日々だった。自分でもここまで気に入るとは思いもしなかった。そしてそれが今、完全に消え去った。その瞬間から胸に穴が開いたように、

ただ、ひたすら、
辛かった。

「あ、あ、あああ——Fuck！」

ソファを蹴り飛ばす。

「Fuck！」

テーブルを蹴り飛ばす。

「Fuck！ Fuck！ Fuck!!」

椅子を蹴り飛ばす。投げ飛ばす。踏みつける。壊す。凄まじいまでの自己嫌悪と悲しみと、何よりも怒りが自分の内側から湧き出てくる。何が設定だ。何がファンタジーだ。もつとちやんと話を聞いておけばよかった。もつと、解決する為に何かをしてあげれば良かった。

その怒りが全身を満たし、涙が両目から溢れ出す。何もかもぶち壊して暴れたい衝動を咆哮しながら部屋にある物を片っ端から破壊していく事で発散させようとする。だが壊しても壊しても怒りが消えない。悲しみが消えない。解っている、全て自分が何も出来ないのが悪い。何もしなかったのが悪い。

昔の様に。

自分が愚かだから、また間に合わなかった。きつと、自分の力ではどうしようもなかった事だったのかもしれない。それでも、何か、心

の支えになることぐらいはできたはずだ——いや、或いは話すだけでも出来たのかもしれない。だがそれが作り話であると疑った。

その結果がこれだ。

しようがないことかもしれない。

だが終わった後で見返せば、出来たかもしれないという後悔ばかり残る。失った直後はそれを突き付けられ、

死にたくなる。

「……っあー」

暴力的な欲求が脳を支配し、何もかも壊したくなる。だがそれが無意味だと、2回目ともなると理解してしまう。どれだけ暴れても意味はないという事実。だからリビングにある物を片っ端から蹴り倒して踏み碎いて破壊して、それでも収まらない衝動を歯を食いしばりながら堪え、怒りで自分を殺しそうなのを止める。

「びよっー」

「っ、ひよんっ？」

憎悪が剥き出しになる中で、唐突にひよこの間の抜けた鳴き声が聞こえた。その声に振り向けば、破壊されたリビングのフローリングにひよこが立っていた。不思議な生物だからシユテル達と共に消えたと思っていたが、そんなことはなく、フローリングの上でひよこは存在感をアピールする様に飛び跳ねて、その小さな翼を羽ばたかせていた。そして此方の注目を得ると、

そのまま、入り口の方へと走って行き、

「——この子は私がこの地の生物を強化した物ですからまだ平気ですよ」

そして、びよん、目の前に存在が差し伸べた手の上に乗った。

リビングの入り口には、膝を曲げた少女の姿があった。シユテル達と比べるとまた一回り小さな少女だった。膝を曲げ、手を伸ばしてひよこを両手に乗せると、その頭を軽く撫でながら立ち上がった。

そうして余りにも長い金髪の少女の姿がリビングに現れた。初めて見る少女の姿に一瞬だけ反応が遅れるが、

その少女の名前を自分は知っていた。

「ユーリ……エーベルヴァイン」

「はい、初めましてノアさん」

ペこり、と穏やかな雰囲気を纏う少女は微笑みながらもどこことなく、悲しげな表情を浮かべていた。いや、隠しているだけで悲しんでいるのだろう。ほかの三人娘たちの消失を。そして唯一残されてしまった自分の存在を。だが同時に、自分がまき起こした破壊を見られてしまい、

少し、気まずい気持ちを抱いてしまった。胸の中に込みあがっていた暴力的な衝動が霧散するのを感じつつも、誤魔化す様に片手で首の裏を搔く。

「Ah, what should I say……」

「いえ、いいんです。この子の目と耳を通して日常を覗かせて貰って良かったですから……ありがとうございます。貴方の様な優しい人が彼女たちと一緒に居てくれて。私にできたのは結局、見守る事だけでしたから」

「いや……違う。俺が結局出来たのは何でもない事だ。誰か、別の奴でも出来る事だった」

「ですが、他の誰かはやらなかった。貴方がやったんです」

「だけど消えた。それも無意味だった……悪い……本当に、悪かった」
そうとしか言葉が出せなかった。本当に、悪かった。なんとかなかったかもしれない。どうにもならなかったかもしれない。だが罪なのは、自分が動かなかった事だ。どうにかしよう。ヒントは存在していて、起きるかもしれないという事に対して動かなかった事。

それが罪なのだ。

俺は出来る筈のことをしなかったのだ。

だがそれを否定する様に少女、ユーリは頭を横に振った。
「いえ、貴方の事は責められません。元々関係のない世界から来た、事情も知らない人ですから」

「……」

それはつまり、お前には元々関係がなかった、と言われているよう

で言葉が胸に突き刺さった。確かに、そうだ。元々俺は関係のない人間だったかもしれない。だが二カ月の間、奇妙な共同生活を送ってきた。それが嘘だったなんて、絶対に言えないし、言いたくもない。

忘れて生きていけなんて薄情な人間にはなれない。

そう思っていると、

ユーリの指先が僅かに色を失い、その直後に指先を赤い結晶が覆った。赤い結晶が割れて出現するユーリの指は塵になり始める前の、健康的な肉体の物に見える。だがそれだけで、ユーリもまた、あの三人娘たちと同様、儂い命である事を自覚させられた。

「お前——」

「ノアさん」

続けようとする言葉をユーリが言葉を挟んで止めた。その気配は少女らしいものから変わり始める。ここで漸く、彼女が内包する魔力を察知することが出来た。

その総量は、化け物的としか表現することが出来なかった。自分とあの三人娘全員を合わせてもユーリの保有する魔力には届かない。それだけ強く、そして異質な少女だった。だがそれでも今、自分が消えるという事実に対して全力で抗っている。それだけで彼女の行動の全ては終わっていた。それ以上、彼女が何かをする事は出来なかった。彼女の体内を駆け巡る魔力が常に忙しく動き、体内で集結しては霧散を繰り返している。それはまるで先ほどの、指を覆った赤い結晶の動きのようだった。

——この子も、限界を迎えていた。

「ノアさん」

「……」

「私は、別に平和じゃなくても良かったんです。皆と一緒に楽しい日々を送れたら。私だけは眠っていましたけど、それでも三人の姿を何時も見っていました。貴方が来てからも楽しそうにしている日々をずっと、ずっと見ていました——」

だから、とユーリは言葉を続ける。

「たとえば、その他の全てを捻じ曲げてでも取り返せるなら。私は取り

返したいと思います」

「それは」

「三人を取り戻すという事はつまり、そういう事になります。そしてその手段はあります。ですがその手段は——私には取れません。実行すれば恐らく私も飲まれて消えます」

この、自分がどうあがいても届かないような魔力を保有し、想像もつかない力を持つ少女でさえ消えるという話だった。だがそれを恐れる事無く、ユーリは言葉を続ける。

視線を合わせ、言葉を紡ぐ。

「ノアさん——貴方に、覚悟はありますか？ 世界を壊してでも取り戻すという覚悟が」

ユーリのその言葉に対する、答えは決まっていた。

母は生まれた時に死んだ。親父はもう居ない。自分と繋がる様な相手はこの地球には存在していない。

ならば、答えは決まっている。

やり遂げる。

「それが、俺の答えだ」

その返答にユーリは目を閉じて、そして小さく呟いた。

「ありがとうございます……そしてごめんなさい。ほんとうに、ごめんなさい。私の、私達のエゴに巻き込んでごめんなさい」

「……」

「解っているんです。勝手な事だって。巻き込んだけど助けてください、って恥知らずな事を口に出しているんだって。それでも縋りたいんです。だからお願いします、縋らせてください」

目の端に涙をためるユーリの姿を見れば、精神的にも彼女が限界に達しつつあるのは解る。故に安心させるように任せろ、と言葉を贈る。

「お前らの様に私は不幸です、って顔をしている子供が俺はこの世で一番嫌いなんだ。だから俺が問題を蹴り飛ばして前みたいになんて能天気な日々を取り戻してやるよ」

「……ありがとうございます」

もう一度、謝るようにユーリは言葉を口にし、目を開いた。視線を合わせると覚悟の色がその眼には見えた。視線を合わせたユーリは頷きながら、

「では研究所へと行きましょう。グランツの遺産が残っています。使い道がなく、封印していましたが、恐らく貴方には必要となるでしょうから封を解いて解放する事にします——」

一拍、時を置いてユーリがその名を口にする。

「ヴァリアントユニットを——フォーミュラを」

Reflection IV

「——フォーミュラは」

グランツ研究所。

この研究所本来の名前。

その中央部分、本来の研究施設が存在する棟へとやってきていた。施設を把握しているようで、ユーリの歩みに淀みはなく、迷いのない先導で研究所の中を進めている。ユーリの後を追いつながら、その話に耳を傾ける。

「ここではない別次元の世界、エルトリアで生まれた技術です。もとは環境調整、テラフォーミング用の技術でしたが……それを武装に転用する事で生まれた、資質や適性に左右されない魔法ではない科学技術として生み出されました」

「魔法じゃない技術」

「はい」

研究所内部は掃除だけはされているのか、綺麗に保たれていた。まるで昨日まで利用されていたかのように。扉のロックをIDカードで突破しながら扉を抜けて、どんどん研究所の一般エリアから裏側のスタッフ用のエリアへと進んでゆき、セキュリティに引つかかる事もなく、研究室へと入る。誰かの研究室らしき部屋に入ると、部屋の横に置かれているロック付きのチェストをユーリが見つけ、近づく。

「グランツ、エレノア……すみません、使わせて貰います」

そう言うくとユーリが近づき、IDカードを使ってチェストを開いた。カシユ、と小さな音を立ててからロックが解除され、機械式のチェストの中身が露わになる。そこに安置されているのは赤と黒の二色のメダルの様な機械、そして一本のデバイスの様な道具だった。その二つが保護されるようにチェストの中、スペースを大きく取って安置されていた。

「良かった……ありました」

「So,それが……?」

「はい、ヴァリアントユニット、そしてフォーミュラです」

チェストから二つを回収したユーリが、それを両手の上に浮かばせる。二つのアイテムがユーリの前で浮かび上がりながら、ゆつくりと此方へと向かって漂ってくる。それに手を伸ばし、取ってみる。ヴァリアントユニットと呼ばれたそれは、どこことなくシユテルやレヴィ達が握っていたデバイスと呼ばれる演算補助具に似た意図を感じる。ただし根本的なデザインはまるで違い、此方は実に機械的なものであった。そしてもう一つ、このフォーミュラと呼ばれたものは、キャップが付けられており、

それを指で弾いてみれば、無針の注射器を思わせるトップを見せていた。握って初めて解るが、何かでこの道具の内部は満たされている。

「ヴァリアントユニットはミッド式やベルカ式で言うデバイスに当たりますが——これはそのコアユニットに当たります。これ自体ではほとんど力はありません。本体とも呼べる部分はフォーミュラの方に存在します。フォーミュラと合わせ、漸くコアユニットはその力を発揮できるんです」

「こいつがか」

目の前まで持ち上げ、それを軽く眺める。いまいち、正体が掴めない。

「結局、こいつはなんなんだ?」

「ナノマシンです」

「……ん??」

「いえ、だからナノマシンです。必要な情報などは今遠隔操作で大体入力を含めました。あとは、こう、ぶしゅつと体に差し込めば準備完了の筈です」

ユーリを見て、手の中にある恐らくはナノマシンが詰まっているアンプルを見て、ユーリをもう一度見てから手元を見る。

「Serious?」

「はい。管理局側ではまだ手を出せていない技術ですが、グランツ博士達の世界では実用範囲に入っている技術だったんですよ、ナノマシンは」

「I thought I became Dr. Strange,
but the truth seemed like I
was going to become Ironman……」
「ストレンジ？ アイアンマン……？」

「ああ、うん。今のは俺が悪い」

流石に女の子は知らないよなあ、と反省する。反省しつつ、フォーミュラの入ったアンプルを首に充てる。軽く指を滑らせれば、ボタンを発見する。恐らくはここを押せばフォーミュラを体内に注入できるのだろう。準備を完了した所で、ユーリの言葉が続く。

「フォーミュラは体内に普段は格納されるナノマシンという形になります。活動する事で物質を変換したり、エネルギーを変換、変質させる事で自由に振るうことを可能とします。ですが、それを扱う為にはかなりの精神力と体力、それに肉体を要求——あつ」

ユーリが言葉を終える前にボタンを押し込み、アンプルの中身が首筋から体内へと侵入した。首にチクつとした感触が走り、即座に体の中に熱が溶け込んだ。直後、体内を熱が駆け巡る。

「するから慎重にって言いたかったんですけど!!」

「なあに——俺は天才だ。そして凄い。だから余裕だ」

軽く親指で赤黒のヴァリアントユニットを弾いてから落ちてくるそれを片手で掴んだ。笑みとサムズアップをユーリに見せるが、体内を一瞬で駆け巡るナノマシンの気持ち悪さを感じていた。そしてそれが体内をめぐるのと同時に、自分の体に適応し、最適化しようと少しずつ稼働し始めるのも感じていた。リンカーコアにも触れているのか、リンカーコアをぐちゃぐちゃにかき乱されているような吐き気を覚えた。心臓が破裂しそうだ。脳が焼け落ちそうだ。目玉が今にも飛び出そうだ。

だがそのすべてを精神力で捻じ伏せた。

あの子達はずっと、怖い目にあつた。もつと、辛い目にあつた——
—なら、大人である俺が文句を言うのはおかしい。

目の前の少女に対して、絶対的な安心感を与える為に、自分のコンデイションを殺して、平常運転である事を装う。それをユーリは驚愕

の視線で見ってくる。

「本当に、何ともないんですか？ フォーミュラは地球人やミッド人よりも遥かに頑丈で優れているエルトリアの人間の為に作られたシステムです。地球人が使ってもまるで平気だなんて……」

「ま、俺は凄いいからな」

「……」

ユーリがじつと此方へと視線を向けて来る。悟られない様にヴァリアントユニットで遊んでいる。しばらく此方を無言で見つめていたユーリはでは話を続けます、と信じたのか、言葉が続けてくる。

「フォーミュラとコアユニットの使い方に関しては、フォーミュラが稼働状態に入れば自然と使い方が解る筈です。……私が使ったことないから説明できないというのが正しいんですけど」

「そこは俺がどうにかする。それよりも……」

はい、とユーリが応える。

「————ディアーチエ達を取り戻す方法ですね」

本題はここからだ。こんな物騒なものをユーリは渡して来たのだ。つまりはそれだけ危険度の高い事をしなくてはならないという事なのだろう。ヴァリアントユニット、そのコアユニットを握りながら体内をめぐるフォーミュラの気持ち悪さを抑え込んでユーリに続きを促す。

「ですがこの手段は一方通行です。一度、休むために戻るなんて事は出来ません。準備があるのなら先に済ませた方がいいですけど……？」

「問題ない。さつきバイク盗んで爆走してきたから寧ろ早く助けに行きたい」

「何やってるんですか……？」

バイクもあの後で壁に衝突させるように飛び降りたので、今頃廃車確定の状態になっているだろうなあ、というのは容易に想像できた。まあ、そのおかげでレヴィとディアーチエの姿と声は聞こえたのだからよし、としよう。

助けて。

そう求められた。

なら、それに応えない理由はない。

「さっさと終わらせよう。そして終わらせたら映画観賞会だ。話して
いてネタが通じないのは寂しいからな」

「いえ、それはいいんですが……本当に、大丈夫なんですか」

ユーリの言葉に無言のまま、サムズアップを向けて応える。今も全身が悲鳴を上げている状態だが、それを押し殺して平気であるのを平静な姿でアピールする。少なくとも、表情や動きに見せない限りは一切問題はない。そういう我慢であれば、慣れていく。

何より子供を不安がらせるような事は絶対に出来ない。

そういう、男の矜持というものがある。

だからサムズアップと笑顔で押し切る。それを受けてユーリは若干、怪しむ様に首をかしげてから研究室の外を目指す。

「こっちです」

「おう」

「話を続けますが……ディアーチエ達を助ける方法です」

その言葉に領きながら後を追う。研究室を出た所でスタッフ用通路に出て、そこから更に表側の一般通路に出る。そうやって向かう先は、今は主のいないグランツ研究所の中央部分に思えた。

「正確に言えば、詳しい事は解っていないんです」

「H m m?」

「時間軸が乱れて、その影響によって魔法文明が消え去ったという事しか。恐らくはその乱れた時間になにかがあったんでしょう。ですがそれを観測する手段がないので何が起きているのかは解りません。ただ結論から言えば何かがあったのでしよう。本来の歴史とは違う何か。それを正す事が恐らく、ディアーチエ達を救う事につながります。ですからノアさん、貴方がやる事はその時間に飛び込む事です」

「それは……可能なのか?」

「理論だけなら」

「Oh……」

研究所の中央にやってきた。そこには広いスペースが存在し、大きな機械と席が大量に、他にも近未来的な道具が多く設置されている。そのうちの一つにユーリが接近し、片手を伸ばす。そのままコンタクトを取ると一瞬、ユーリの瞳に大量の文字や数式が浮かび上がったように思えた。次の瞬間、機械は稼働する様になり、その中に入れるようになっていた。

ユーリが振り返って、此方を見る。

「時間は連続していますが連結していません」

「……ん？」

「つまり時間はAからBへと流れる様にできています。ですがAとBが繋がっているわけではありません。AからBが生まれるのです。だから時間はAからBへと流れる様にできています。これが時間の連続性です。流れによって時間が連続する様に構築されているのです。ですが、時間という概念そのものには紐づけがありません。だから次元世界を跳躍した時、時間のブレ等が発生して跳躍から時間の前後が発生します。魔法技術等によってこのブレを抑える事は出来ません。すけど——」

「……??？」

「……あ、はい。この中に入って頂けると目的地へと私が送れます」

「成程。それなら解った」

「あ、あはは……」

コアユニットを手の中で軽く握ってからそれをポケットの中に押し込む。ユーリが横に退くのでまっすぐ、正面、カプセルの様な機械の中へと向かって、その縁を掴んで中を覗き込みながら確認してみる。

「元々は……VR用の機械なんだっけ？」

「グランツが子供用に作ったVRシミュレーターですね。グランツが消えた後は、私が見えるようにするために大きく改造を施しましたけど……」

へえ、と呟く。カプセルの中を確認すると座る為の椅子や、何やらカードをセットできるような部分を見つける。とはいえ、ユーリが今

回はそれを使わないというのを教えてくれる。

「ではそこに座ってください。送り出す準備をしますので」

「……ああ」

ユーリの言葉に従い、カプセル内部の椅子に座る。カプセルの扉が閉まり、狭い空間に取り残される。その向こう側で、ユーリがホロウインドウを片手を振るう様に複数出現させ、

「くう……っ」

手を伸ばす。それに合わせ、大地から赤い結晶が生え始める。それがユーリの足元からカプセルへと繋がり、どくん、と命が脈打つ感触を一瞬だけ感じる。だが次の瞬間には魔力の光がカプセルを侵食し、そしてそれが連鎖する様に研究所全体に魔力の光が満ち始める。同時に赤い結晶がユーリから伸びる。

研究所を侵食する様に這う赤い結晶がそのまま研究所全体と連動する様に魔力の供給を開始し、電力以上のエネルギーとして限界を超えた稼働を行い始める。そう、限界を超えた稼働。異音を響かせながら稼働する機械群を見れば、当然ながら理解できてしまう。

「おい、待て——開かなく」

「すみません……託すようで、任せるようで本当にごめんなさい……」

気づけばカプセルの扉を赤い結晶が覆っていた。拳を叩き込むが、割れる気配もなく、揺るぎもせず、空間に魔力が満たされてゆく。そして徐々に視界が光によって塗り潰されていく。

「貴方の優しさに付け込む様なやり方を許してください。何もできない私を、出会ってしまったばかりに背負わせてしまった事を……ごめんなさい……ごめんなさい……それでも、それでも——」

「Fuck……!」

扉の向こう側で少女が泣きながら謝っている。扉を蹴り破ろうと力を籠めるも、まるでびくともしない。そして体から感覚が消え失せていく。視界の全てが白く染まり、

意識が——溶けていく。



——一番最初に自覚したのは熱の感触だった。

「……………」

意識が溶けた。その感覚を受けた直後に目を覚ます——というのは、主観からの感覚であった。自分が本当はどれだけ眠っていたか、倒れていたか、或いは落とされたのか、跳んだのか。それは解らなかつた。だが一番最初に感じたのは熱だった。熱い。そうとさえ表現できる熱だった。そして同時にフォーミユラが体内を駆け巡る気持ち悪さ。その痛み、それによつて一瞬で意識が覚醒させられた。

「ああ、クソ……頭がガンガンする……」

ゆつくりと目を開きながら両手で大地につけば、自分の周りの大地が陥没している事実——自分を中心にクレーターが出来上がっている事実を確認できた。道理で全身が痛いわけだ。

「けほっ、けほっ」

痛みを無視して起き上がれば、すぐ近くで炎が燃えているのが見えた。近くにある木々は枯れて折れており、破壊の痕跡が見られる。そのほかにも破壊されたベンチや踏み潰された花壇、明らかに戦闘を行った——しかも普通に戦つたのではなく、まるで戦争をしたような様子に、言葉を失う。

だが体を起き上がらせて、周囲へと視線を向ければ、ここが地形的に海鳴の丘の上である事に気づかされ、

そこから海鳴の全景を一望する事が出来た。

「What in the fucking hell is happening……?」

そこから一望する景色を前に、自分の正気を疑うしかなかった。

海鳴は壊滅していた。

ビルは崩れ、道路は崩壊し、あちらこちらが炎上していた。まるで戦争に巻き込まれ、今も続いているような様子を海鳴の街は見せていた。だがそれだけではなく、まるで巨大な船の様な建造物が都心の方に叩きつけられており、質の悪いSF映画にでも迷い込んでしまったのかと思わんばかりの景色がここから見えた。

「……」

とはいえ、シユテル、レヴィ、ディアーチェ……そして、恐らくはユーリも。あの四人の娘を助ける為には、ここで何らかの問題を解決しなくてはならない。そしてあの四人が生きることが不思議ではない未来へと繋げる必要があるのだ。

ポケットからコアユニットを取り出し、それを見てからポケットの中に突っ込もうとすると、

「びよっ！」

「うおっ、いつの間にお前紛れ込んでいたんだ……」

「びいよびいよ」

「まあ、心強いけどな……」

羽織っているパーカーのフードから突然飛び出してきたひよこの存在を受けとめて頭の上に乗せつつ、歩き出した。

——消えてしまう少女たちの未来を変える為に。

Innocent Melting

丘から歩き出して十分。

たったそれだけでここが自分の知っている海鳴でありながら、違う場所である事を理解させられた。海鳴という都市でありながら、自分の知らない大量の破壊の痕跡があちらこちらに見える。だが、同時に見覚えのある建造物が多く、少なくとも送り込まれた場所は比較的近年である事がそれで窺えた。これだけの破壊が平然と巻き起こる、そんな戦いが過去に発生していたのだ。

日本という国は凄い。いや、そうじゃない。この海鳴がおかしい。「なんつーか……どうしたもんだ」

丘を下りて海鳴の住宅街に差し掛かった所で、横転した車や半壊した家屋を大量に目撃する。ただ、それだけではなく人の気配が全く存在しない事に違和感を感じる。どこかに避難しているのだろうか？ 或いは皆殺しにされた……とは、考えたくはなかった。少なくとも血の跡はあんまり目撃していないので、殺されたわけではないと思う。色々と判断するには情報が、そして何よりも知識が不足している。

「困ったなひょん」
「びよ」

何をどう判断すればいいのかが解らない。そう、それが問題だ。「正せって言われても、何を正せばいいのか全く聞いてなかったな……」

そう、そこが一番の問題だ。焦るあまり自分がここで何をすればいいのか、というのを全く聞かなかつたのだ。もうちよつと落ち着いて、冷静であれば何をすればいいのかが聞いたりしたのでだろう。だがそれとは別に、焦っていたのも気が動転していたのも事実だ。そのせいで全く、何をすればいいのかが解らない。

とりあえず、今の海鳴のおかしいと思える姿を見つけて、正せばいい

いのだろうか？

「タイムスリップか……武器にタイムマシン、まるでケーブルだな」となるとこの海鳴でデッドプールにでも出会えるのだろうか？それはちよつと嫌だなあ、とは思わなくもない。

そんな事を考えながらとりあえず意味もなく歩き回るのをやめて、近くの瓦礫に腰掛ける。意味もなく歩き回った所で解決策が出てくるわけではないだろうし。先ほどからずっと頭がずきずきし続けている。その痛みを堪える様に片手で頭を抑えつつ、もう片手でポケットからコアユニットを取り出す。ユーリの説明によれば、これを体内のフォーミュラと合わせる事によってヴァリアントユニットという武装として運用できるようになるらしい。

だが今の所、フォーミュラやコアユニットが反応する様な様子は見えない。まだフォーミュラを適用した直後だから、だろうか？ どちらにせよ、武器が使えないのであればこの体とポンコツ魔法でどうかしなくてはならないだろう。そう考えるとやや気が重くなる。情報がない、武器もない、その状況でどうやってあの娘たちを救えばいいのだろうか？ いや、そこは飛び出してきた俺が悪いのだが。

……だが、ユーリの様子を見てみると、準備した所でユーリが耐えきれたかどうかという問題もあった。彼女も彼女でどこことなく、無理をしている様に思えた。

結局の所、何が最善だったかなんて言葉は全てが終わった後じゃないと判断もつかない。そう考えると自分に出来ることは今、出来る事を判断しながら進む事だけだろう。ならばさっくりと考える。

目標はシユテル達三人娘とユーリの生きていられる未来。

自分が知っている未来との差異はこの崩壊している海鳴の様子。間違いなくこんな事件、ニュースにもなっていないかった。つまり、これがこの街、場所、歴史における間違いであり異物。これを何とかすればいいのだろうと判断する。その結果、どうすればシユテル達の生存に繋がる？

シユテル達がこの事件に巻き込まれている？ それとも、シユテル達の存続に関して重要な人物が事件に巻き込まれて消えている？

生まれた、という事実が消えれば確かに姿も消えるだろうと思う。ならこの海鳴で一番、違う場所へと調査に向かうのがこの場合、ベストになるのではないだろうか？

「……戦艦か」

丘の上から見た、都心に墜落していた戦艦。船の様な建造物。思い返せば主砲や副砲等の武装がくつついていたようにも思える。あんなもの、明らかに今の人類にとってはオーバーテクノロジーだ。何かがあるに違いない。場合によっては原因かもしれない。

「なら行くのが一番早いかな」

「ぴよー・ぴよっー」

頭の上でひよこがぴよぴよと跳ねている。その鳴き声を聞きながらなんだ、お前も随分やる気じゃないか、と笑おうとしたところで、凄まじい轟音と質量が熱風を伴いながら落ちてきた。

「――」

立ち上がった直後にやってきた衝撃に吹き飛ばされそうになるのを両手でガードする様に両足で大地を踏みしめ、堪える。突風が消えるまで数秒かかるも、それが終わってからゆっくりと手を退けて視線を持ち上げれば、

たった20メートル先の距離に、見た事のない鋼の存在がいた。

それは全身が黄金に彩られた鋼の化身だった。片手に鉄色の盾を装着し、もう片手に剣を装着している。問題なのはそれが明らかに人間的な造形をしておりながら、一切の呼吸などを行っていない、無人の鋼――即ち、ロボットの一種であるのが見れば解るといふ点にあった。

なにせ、そのサイズはまずありえない。

二足歩行で数メートル級の高さのロボットが自立運動しているのだから。少し前、どつかで地球の技術的に自立運動の出来るロボットは不可能だ、なんて話が出てきたような気がしていたが、目の前の現実にはそれは否定されていた。自分の数倍という大きさを誇る金色のロボットは盾を片手に、もう片手に剣を握って、

此方へと向かって踏み出してきていた。

一步、それで1メートルという距離を踏破しながら剣を振り上げて接近してくる。その意図は明確だった。

これは攻撃だ。攻撃しに来ている。間違いない。殺意は欠片も感じない。悪意もない。ただただ、機械的に対処しに来ている。それが一瞬で理解できた。或いはそうプログラミングされているから、かもしれない。だが当然の様に鋼の騎士は踏み込んできて、

「Hey! Stop! I said stop!」

此方から近づいてやって、中指を突き立てながら止まれと宣告した。その挙動に鋼の騎士が踏み込みながら目の前で大地を踏み潰し、ギリギリのところまで剣を持ち上げたまま、動きを停止させた。見下ろしながら、此方の言葉を待つように立っている姿に、

「Hey, what are you thinking? お前さあ、俺を見て解らない? ああ?」

両手を広げて騎士の前で一回転する。それを鋼の騎士が眺め、そして軽く首を傾げた。

「そっだよ!! 丸腰だよ!」

「……」

「お前、……だよ!」

自分の頭を指さしながらつんつん、と軽くタップする。地味に頭痛が響いて痛いのだが、煽ることに集中する為、痛みを忘れておく。鋼の騎士から困惑したような気配を感じる。AIだろうか? それとも向こう側に人が居るのだろうか? どちらにしろ、この掴みで足止めできたのなら問題ない。つまり、最低限話は通じるという事実がここに確認できた。

「お前、丸腰の人間を相手に武器を抜くなんて恥ずかしくないのか!

Shame on you! Shame on you!」

指さしながら罵倒する。それを受けてロボットが僅かにたじろぐのを感じる。これはそのまま言葉だけで押し通せるのでは? と、一瞬だけ考えた。

だが直後、ピピピ、と音が鳴った。その単眼のカメラアイが此方へと向けられ、ポケットの中にある筈のコアユニット、そして此方へと

視線を向けた。振り上げられた剣に力が入るのが見える。無力な一般人カウントは無理だったらしい。

「……Shit」

振り下ろされる剣を横へと転がって回避する。直ぐ横に振り降ろされた剣が大地を割りながら、道路に突き刺さった。こんなものが体に当たれば、一撃死んでしまう。その事に軽い恐怖を覚えながら、そのまま盾で殴りつけて来る姿に向かって飛び込み、

スライディングで足の間を縫って後ろ側へと抜ける。

「Moron」

近くに切れた電線のケーブルが見える。瞬間契約による召喚と送還で一瞬でそれをロボットの首筋へと瞬間的に出現させる。

電流の流れている電線がコンタクトし、一瞬で鋼がスパークし始める。

「How do you like that! Haha!」

指をスナップさせながら拳を作り、スパークする騎士から離れる様に後ろ向きに歩く。数歩離れた所で勝利のダンスでも踊ってやろうかと考えたが、機械的な見た目に反して、どうやら電気には強いらしく、

スパークした状態のまま、ゆっくりと振り返って来た。

「Holy shit」

魔力を即座に体に漲らせる。微々たる力ではあるものの、あるとなしではまるで違う。そして即座に走り出す。振り返る事無くスタートダッシュを決めれば、背後で轟音と共に剣が振り抜かれる音がした。背中切られてないよな？ と半分不安に思いながら瓦礫を足場に跳躍して、

一気に崩壊している住宅街を駆け抜け始める。

その背後を家屋を粉砕しながらロボットの騎士が追いかけて来る。振り返る事もなく、粉碎する音が響き続けているのだから、そんなものは当然解る。そして振り返る余裕なんてない。

「ぴよー・ぴよぴよ!!・ぴよ!!・ぴよー!」

「髪の毛を引っ張るなこいつ!! 解ってる!! 解ってるよクソが!!」

電気通じないならお前も無能だつてことを忘れるなよ！」

「ぴよお……」

パルクルを昔習つていて良かった、と思いつながら足場となる瓦礫や壁を連続で蹴りながら、速度を殺すことなく移動し続ける。心臓が破裂しそうな程にバクバクと胸打って鼓動が痛いほどに耳に響いてくる。足を一瞬で止めたらその瞬間に後ろのロボットに切り刻まれる。

「何時から俺はソニックになったんだ……！」

走りながら住宅街の配置を素早く確認する。そのまま、周辺にある大きな瓦礫やスクラップとなっている車に対して右手の人差し指と中指を合わせて作った契約を行う為の魔法的な《マーキング》をそれぞれの物体へと向ける。少し前方の障害物をマーキングする様に意識し、

それが射程距離、20メートル以内に入った時点で向けた指先をくさり、と回して後ろへと指した。

同時に、前方の障害物が消えて後ろに出現する。無機物に対する即効契約に召喚と送還を合わせた物質の自由配置。念力やら操作みたいな魔法は一切使えない為、指差しても自由に動かす事は出来ないが、進路上に捨てる事ぐらいなら出来る。

空気を揺らす衝撃と共に、数台の車が廃車確定となる未来を辿る。一瞬の爆発、それを切り裂いてダメージを全く見せない鋼の姿が炎上した車の向こう側から出現して来る。

「だが時間は稼げた」

マーキングした障害物の内、全てを放出した訳ではなく、一部は上空から落とし、速度と慣性を乗せた。そしてそれを再召喚する。

そうすれば、ある程度、慣性が乗っている為、落下する様に前進してくる。

一瞬だけ足を止めたロボット、それに対して車が頭部へと軽い速度を乗せて衝突する。金属と金属が衝突する不快な音が響き、頭の痛みが更に増す。だがその衝撃を受けきれず、ロボットが後ろへと向かって弾き飛ばされた。

「ぴよっ！　ぴよーっ！」

「解ってる！　この隙に逃げ——」

この二カ月の間に学んだ魔法の使い方における必殺のコンボだった。あのアホみたいな頑丈さを見る限り倒すことはできないが、それでも追加で土砂でも乗せてやればしばらくは動く事は出来ないだろう。

そう考えた。

だが、その考えも一瞬で粉碎される。

轟音、複数。

空に影が出現した。そう思った瞬間には衝撃を感じ、吹き飛ばされそうなのを堪えていた。差し込む絶望の予感に素早く辺りを見渡す。吹き飛ばしたばかりの鋼の騎士と、同じ姿をしたロボットが更に3体、同時に出現していた。当然の様に無傷、盾と剣を手に、こちらに對してそれを振るう準備を着地から素早く整えていた。

「——」

眼を見開きながら動き出す騎士に対応する様に動く。逃げ出そうと走り出すのを騎士が飛び込んで進路を塞ぐ。別方向へと走り出そうとすれば騎士が回り込み、後方の逃げ道を別のが塞ぐ。囲み、盾で進路を塞ぎ、

確実に殺しに来ていた。

「……Fuck」

呟いながら突破の方法を求めて周囲を見渡す。だが逃げ道が見えない。

包囲を完了した鋼の騎士がゆっくり、と近づいてくる。その姿を牽制する様に指先を向ける。契約を結んで放り捨てようとするが、鋼の騎士に対して契約を結ぶことが出来ない。無機物ではあるが——
なにかに弾かれている。そういう感覚が強い。

「チッ」

また一歩、詰められる。牽制——ダメだ、攻撃手段がまるでない。対抗する手段がない。逃げ出したいのに相手は確実に殺しに来る動きで詰め寄ってくる。自分が或いは、もう少し魔導士として優秀であ

ればまだ別の結果を生みだせたかもしれないが、

「だからと言って諦められるか……！」

今も頭は痛い。神経がちりちりと苦痛を訴えている。眠い。今にも意識を落としたい。吐き気がする、内臓諸共全部吐き出したい。心臓が今にも破裂しそうだ。

だが、まだだ。

ただ、まだ諦めてはいない。諦められない。まだ生きている。まだ動ける。

まだ何も成し遂げていない。

「諦められるか……！」

拳を握り、頭の上でひよこが跳ねる。まだまだ魔力には余裕がある。だったらそれを限界まで捻りだして纏って、それで殴り抜くしかない。或いはもつと、別の何かの手段をここで編み出せばいい。

それで絶対に勝利する。覚悟を決めた瞬間、

一筋の希望が文字となって網膜に刻み込まれた。

Formula System Setup Complete

「——っ」

ニヤリ、と笑みを浮かべた。

Looks like my luck hasn't died out yet……！」

ポケットの中からコアユニットを引き抜く。それに合わせて網膜に投射される文字が切り替わる。強制的にコアユニット、フォーミュラ、そしてヴァリアントユニット、ヴァリアントアームズの使い方が書き込まれるように理解させられる。まるで寝ないで数日間辞書を読ませられるような気持ち悪さが脳をシェイクする。

だがそれさえ堪えれば、

勝ち筋が生まれる。

体内のフォーミュラが活性化する。周辺の瓦礫をフォーミュラが

干渉し、分解する。そしてそれによって得たりソースをコアユニットと結合させる。物質を変換、変形、再構築を行う。

それによって手の平サイズに納まるメダルの様なコアユニットは、一瞬で、片手で握れるハンドガンへとその姿を変化させた。黒をメインカラーに、所々赤い線が走るハンドガン。それを片手に握り、まっすぐと正面、盾を構える鋼の騎士へと向けた。

「Well then, It's payback time baby！」

M e l t i n g Ⅱ

ヴァリアントアームズ、銃形態。最も基本的な姿であり、同時に一切の拡張や変更を行われていない状態。これが基本の状態であり、何のカスタマイズも出来ていない現状、これが唯一の武装になる。だがフォーミュラは稼働すると同時にエネルギー運動やそのベクトルを操作することが出来るようになる。それによってフォーミュラは魔法、魔力に頼らない専用の術式を稼働することが出来る。

それが一瞬で脳内に刻み込まれた。使い方が、どうすればいいのか。フォーミュラに刻み込まれた使用方法が一瞬で自分の中で出来る。無理やり覚えさせられる気持ち悪さはあるものの、それは我慢できる。左手はフリーに、召喚魔法を使えるように中指と人差し指を合わせた状態にし、右手でヴァリアントアームを握る。

また一步、一步と近づいてくる鋼の騎士を前に、銃口を持ち上げた。

それをまつすぐ正面の騎士へと向けて、迷う事無く引き金を引いた。反動はほぼないと表現できるレベルだった。やろうと思えば連射さえ出来る程に。発射されるのは魔力弾ではなく、実弾だ。エネルギーは周辺から勝手に吸い上げたものを変換して運用されている。その上で発射された弾丸は一瞬で加速してから更に加速を繰り返し、一直線に突き進んでから正面、盾を構える騎士の盾を貫通した。

「W o w ! · F u c k i n g c o o l !」

笑いながらヴァリアントアームを目前まで浮かべ、そしてそれを見る。小口径のハンドガン、好みよりも小さく、そしてかなり軽く感じるが、それでも鋼程度であれば容易く貫通出来るだけの破壊力を保有していた。だがああいうロボット相手には少々、小さすぎる。一撃で破壊できるだけの破壊力がこの銃にはない。そうなるともつと出力を上げるか、別のヴァリアントユニットへと変形させる必要がある。

だが流石に、別の姿を登録するだけの余裕がここにはない。

「となるとフォーミュラのもう一つの特徴をどうにか使いこなすしかないな」

フォーミュラ・ナノマシンが活性化する。リンカーコアから供給される魔力をフォーミュラで増幅、強化する事で使用される魔力を再利用する。その魔力をフォーミュラで処理し、それを肉体の強化へと充てる。今までは術式を使用出来なかった強化魔法を、フォーミュラによる再利用で肉体の強化へと充てる事で、肉体そのものを強化する事に成功する。今までを超える遥かに高い力が体に漲って行くのを感じながら、自分の体の中身がぐちゃぐちゃにされる感触を覚える。フォーミュラがそれだけではなく、体そのものを弄っているのが解る。

魔力とフォーミュラの同時使用作用に、髪が淡く光を纏う。

そして、射撃された鋼騎士が飛び込んで剣を振り下ろした。その振り下ろしが見えた後から飛び出す様に大地を蹴った。結果、回避の速度が攻撃速度を上回った。それも予想外の力の発露で。大地を軽く砕く様に蹴り飛ばしながら発進し、感じた事のない、経験したことのない速度と力強さに、一瞬で体のバランスが崩れた。剣の下をロケットの様に射出されながら前転する様に大地にバウンドし、

そのまま軽く転がって騎士の股下を抜けて反対側の瓦礫に逆さまに衝突した。

「びよっ！　びよっ！」

「O o p s ……悪いってば。初めてだから加減が解らなかつたんだってば。だから頭を突くのはやめてくれよ……」

予想を超えたパワーにまるで感覚が動きに追いつけなかった。瓦礫から体を引き抜きながら、今の衝突で出血した所に指をやる。軽く傷口から血を指に乗せ、それを頭へと持っていき、血をワックス代わりに髪を後ろへと流す。

「次は失敗しない」

立ち上がりながら直ぐ近くの途切れたパイプを掴む。フォーミュラの干渉により、パイプが変形しながら鞭のようになる。それを引っ張りながら振るう事で振り向いてくる鋼騎士の足にパイプが衝突し、

そのままワイヤーの様に足に絡みついて動きを止める。

「One down」

倒れて来る姿へとめがけて銃口を向けて射撃する。頭に一撃。胸に三発撃ちこむ。合計四発、その最後の射撃が騎士の何かを破壊したのか、その中から命の気配が途切れる。成程、動力コアの様な物の中に存在するから、それを破壊すればいいのだろう。

「Come on, or I'll come for you」

挑発する様に嘲りの言葉を吐き捨てながら一気に前へと飛び出す。力を失って倒れ込む騎士の肩を足場に跳躍する。残された鋼の騎士が盾前に殺到する。跳躍している間にその姿を全て、目視する。空中で逆さまになる様に回転してから空中を蹴る。フォーミュラの慣性コントロールで空中を蹴って急降下し、追いかけるように僅かに飛び上がった騎士たちの下を取る様に素早く落下して着地する。そのまま前へと飛び込みながら射撃する。必殺を狙わず連射する。軽い反動の銃に少しだけ違和感を覚える。

だがフォーミュラによる超高速演算は体内にコンピューターを搭載しているような行いに近い。

それによつて正確に補正された射撃が鋼騎士の関節を射撃し、貫いて破壊する。

飛び上がった姿が突進する様に接近して来る。向き合う様に此方からも飛び込み、飛び込んでくる盾の上へと跳躍し、そのまま盾の頂上を足場にする。下へと視線を向けずに銃口を頭の上からコアのある場所へと向けて射撃し、

貫通する。

光が消える。

「Two down」

そのまま盾の上から次の鋼騎士へと向けて射撃しようとするが、

斬撃が二つ同時に叩き込まれてくる。それをバク転し後ろへと向かって回避すれば、十字に切り裂く様に破壊した騎士と、盾が粉碎されて行くのが見えた。まあ、確かに命のない機械だと考えれば容赦なく破壊する事も出来るだろうが、少し乱暴すぎやしないだろうか？
そうでもない？

「Well, it's your fault that you came near by」

左手でくるり、と契約してから召喚射出する。フォーミュラにはエネルギーを操作、変換する力がある。それをまだフォーミュラ・エルトリア式にされていないミッド式の召喚魔法に加える。そうする事によって保有者の無くなった鋼騎士の巨大剣を即座に契約奪取、射出して串刺しにする。

「Three down」

地面へと向かって騎士を正面に捉えながら落下して行く。引き金を引けば騎士が射撃に対して盾で弾こうと防御する。弾丸は盾を貫通するも、接触する事により僅かにブレが出て、必殺には至らない。それを理解し、

着地と同時に左手に魔力を集める。魔法ではなく、フォーミュラによって自分の魔力を体外に集め直したものだ。それを球体の様に固め、全速力で前へと飛び出す。

そしてそれを正面の騎士に叩きつける。光が貫通する様に放たれ、炸裂する。盾が弾け壊れながらその向こう側の胴体を貫通して穴を開ける。攻撃の反動でやや後ろへと押し戻されるのをバク転で距離を取りながら軽く勢いを殺して大地に着地する。

「——Easy operation」

「ぴよっ」

肩の上に降りてきたひよこが翼を持ち上げてくるので、肩の上のひよこと軽いハイタッチを決めてから頭の上へと戻した。銃を一回転させてからコアユニットへと戻し、それをポケットの中へと押し戻した。轟音を響かせながら全ての鋼騎士が倒れた所で汗をかいているのを自覚し、額の汗を拭う。フォーミュラの稼働を解除すると、フォーミュラが体内で巡行モードにまで落ちる。だが完全な稼働停止は行わず、体内での活動を継続する。

「予想以上に疲れるな」

「ぴよ?」

「大丈夫、まだ余裕だ」

片手で軽く目元を抑えてからフォーミュラによる消費エネルギーを確認する。魔力によつて大半のエネルギーを賄っているが、それでもそれだけでは足りない。フォーミュラに刻まれたデータによれば、もつと身体的に優秀で、体力精神力で地球人を遥かに超越する、過酷な環境で生きていけるエルトリア人を相手に使用する為のデバイスらしい。地球人でこれを十全に運用できるのはそれこそ、凄まじい魔力リソースでフォーミュラの消費を賄える存在だろう。

それが足りていない。なので魔力の他に生命力をエネルギーへと変換しているようだった。

「使いすぎると死ぬな、これ」

使い方を絞つて、それでいて外部からエネルギーを供給する方法をなんとか用意すれば話は別だろうが、そうじゃなければ使い過ぎで死ぬ可能性すらある。だがそれを抜きにすれば、強力な力だ。今はまだフォーミュラと魔法を別々にしか使えないが、合わせれば更に力を発揮する事も出来るだろう。

ともあれ、最初はヴァリアントユニットの追加とカスタマイズだろう。なんであれ、こんな物騒な力が必要な事態なのだから。

「ふう、とりあえずあの墜落現場へと向かうか……」

「びよお？」

「ん？ 大丈夫大丈夫、心配するなつて」

肩に降りてきたひよこの頭を軽く撫でながら歩き出す。今の所鋼騎士の気配はないが、それでも何時追加がやって来てもまるでおかしくはない状況なのだから。そもそもなんで、こうなっているのかさえないからなのだ。そこが問題なのだ。どうにかしなければならぬ。そう考えて瓦礫の住宅街を都心へと向かって歩き出す。



元々は綺麗に整えられていた道や住宅街が今では完全に崩壊している。それによつて電柱や車がなぎ倒され、炎上し、炎が残留する様に燃え続けている。知っている筈の街の姿がここまで変貌している

と、まるで異世界に迷い込んだような気分だった。歩きながらフォーミュラ内部のデータを再確認して、何が出来るのを確かめる。

まだまだ慣れていない上に体がフォーミュラを運用する為に適していない為、出来る事が少ないが、その気になれば環境修復したりする事も可能らしい。一応、戦闘でボロボロになった衣服はフォーミュラのナノマシンで修復できる為、そういう便利な事にも活用できる。

とはいえ、何の準備もなし、物資もなし。そんな状況で此方に飛び込んできたため、絶賛ピンチの状態で街中を歩いていた。だいぶ都心に近づいてきたものの、そろそろ空腹で意識がかすんでいたのも事実だった。ずっと稼働し続けているフォーミュラが常に生命力とカロリーを消費し続けているのが問題であるのは解っていたが、フォーミュラの方もフォーミュラの方で、元はエルトリア人用のデバイスであり、適応しない地球人に対して適応しようと稼働しているのだからしょうがない事でもあった。

「……仕方がねえ、適当に盗むか」

「ぴよ？」

「仕方がないだろ、人の気配なんざねえしな」

都心近くに来ればコンビニエンスストアの姿も目撃出来る。比較的破壊の多い都心部は瓦礫や鉄骨がまるで壁の様にそびえており、ほとんどの建造物が粉碎されていたりするが、それでも中には無事な建物もある。今しがた目撃しながら略奪を決定したコンビニは、半壊程度で済んでいるものだった。

流石に、探している間に倒れるのはシャレにならないので、軽く食べるだけ食う必要がある。

そういう事を考え、コンビニへと向かって足を進め、破壊された自動ドアを抜けて中に入る。

そこら中、瓦礫や鉄骨で溢れかえっているほか、電力供給が停止しているようで、一部の商品が暖かくなってきているのが解る。だが同時に、腐った匂いはしてこない。

「ぴよー！」

「そうだな、電気が止まってからそう時間がたつてないのか？」

となると今の状況に突入してから、それほど時間が経過していないという事になるのかもしれない。これならまだ無事なものも回収できそうだ。そう考えてコンビニ内の食料を漁ろうと思った所で、

「……」

呼吸音が聞こえた。コンビニの奥の方から。それはつまり、息をすする生物が存在しているという証でもある。一瞬、この地獄に人が居ることを喜んだのは別に、あの鋼の騎士の存在を思い出す。アレが徘徊し、襲撃して来るこの海鳴でまともな人間が残されているとは思えない。あの戦艦もなんだかんだで破損している部分が大きかった。となると、敵がいるのかもしれない。

音もなくフォーミュラを再起動させる。コアユニットをハンドガンに変形させて握りながらコンビニの奥、まだ天井があり、棚によって入り口からは見えなくなっている部分へと進む。

警戒する様にゆっくり奥へと進んだ所で、一つの姿を目撃した。その姿を一言で表すなら黒い。

黒いツインテールをしており、その上で少々、露出が多めの格好をしている。腹を丸出しにしているという恰好は少々蠱惑的とも表現できるかもしれない。そんな姿が床に枕を置いて、横に倒れて気持ちよさそうに眠っていた。

「……すう……すう……」

「……」

「ぴよお……」

また、鋼の騎士とは違う意味でこの世とは思えない光景に少々、困惑し、どうしたものか、とヴァリアントアームを握ったまま動きを停止する。見た目は美少女がコンビニの床で眠っているのだから当然だとも言える。反応に困っている所。

「んが……人の気配」

「うおっ？」

「んぐっ？」

いきなり上半身を凄い勢いで持ち上げて眼を覚ました。そのいきなりのリアクションに驚いていると、黒髪の少女が半分寝ぼけたよう

な状態で此方へと視線を向けて来る。

「……」

「……」

見つめ合い、無言を保つ。十数秒そのまま無言を保ってから、左手を持ち上げて掌を軽く折り曲げる様に小さな挨拶をする。

「Hello? Good morning!」

「……」

その言葉に少女が停止し、その目が大きく見開かれる。

「Danke dass es dich gibt und danke……」

全くと言っていないほど聞き覚えのない言語を少女は呟く様に口に浮かべてから、

——此方へと向かって飛び込んできた。

M e l t i n g Ⅲ

「お、おとおお——!?!」

押し倒されるようにマウントを取られ、そのまま抱き着かれる。その余りにも予想外の行動に反応すら出来ずにコンビニの床に倒れ込んでしまった。まさか見ず知らずの女の子にいきなり押し倒されるなんて、誰も思いもしないだろう。つまり押し倒された俺は一切悪くない。腕を広げるような姿勢で倒れた状態で、黒髪ツインテールの少女にのしかかられたまま、完全に動きを停止する。

だがその間に少女は覆いかぶさるように体を倒していた。少女はそのまま顔を胸板に埋める様に此方を抱きしめてから、動かなくなる。接触する体から感じる少女特有の体の柔らかさは少々、今の精神には効くものがある。引きはがそうかどうかを腕を広げた状態で考えていると、少女が顔を持ち上げた。

「あ、思わず抱き着いてしもうた!?!」

「お、おおう?」

かなり珍妙な日本語が少女の口から出てきた。欧州、ドイツ系かと思っただがどうやら違うらしい。いや、髪色を見ればそもそもそっちの人間ではないのは解るのだが。少なくとも言語はドイツ語っぽさがあったが、自分の知っているドイツ語とは響きが違っていた。完全に未知の言語だった。

とはいえ、困惑していると少女が倒れていた状態から体を持ち上げた。

「すまんすまん……いやあ、はしたない事してしもうたな」

「お、おう。そうだな」

答えると少女が立ち上がる。それに合わせて解放された此方も立ち上がる。直ぐ横に視線を向ければ、まだ無事な食料が集められているのが見えた。どうやら先にこのコンビニにやってきた少女が集めたらしい。此方の視線を理解したのか、少女が手を振る。

「あ、それ別に食べてもええで。ウチはもう食べているし。まあ、こんな状況やから文句を言う奴も居ないと思うけど」

「じゃ、遠慮なく」

棚に置いてあるカロリーが高そうな「DXX唐揚げハンバーゴ
ロツケパン」を取って封を開け、それに噛みつく。なんとというか――
―物凄いカロリーの気配を感じる味をしていた。うん、カロリーの塊
である事は間違いがない。ただ、その味に関しては開発者の正気を疑
うという言葉しか出てこない。お前らの味覚は絶対におかしい。

まあ、普通に食えるけど。

カロリー&カロリー&カロリーの味を飲み込みながら冷たくない
スポーツドリンクを手にとって、それを一気に飲み干す。

だが足りない。全くと言っていいほどに足りない。この程度では
全然空腹もエネルギーも足りない。

「拾ってきたのはウチやけど、そこまで食わんから別にええで、好きな
だけ食べても」

「んじゃ、遠慮なく」

――餓え。

今、自分の体に沸き上がっている食欲はそうとしか表現することが
出来ない。カロリーの塊を食べたらしばらくはお腹いっぱいになる
筈なのに、それでもまだまだカロリーが足りない。次から次にカ
ロリーの塊である総菜パンを手にとって食べる。それでも足りないの
で温めなくても暖かい弁当を取って、そして喉の中にドリンクを流し
込んでゆく。

自分でもあり得ないと思えるほどの食べ物を次から次へと口の中
に流し込んで食べていく。それで少しずつ自分の体に活力が満ちて
いくのを感じる。凄まじいまでの量を食べないとそれが端から
フォーミュラによってエネルギーに変換され、そしてその稼働へと回
されてゆくのを感じる。食べて、昇華して、変換して、それで体を動
かす。だがそれでも少しずつ活力が体に満ちていき、

なんとか、腹を満たす事に成功する。

その頃には棚に乗せてあった大量の食糧が全部消え去っていた。
それを眺め、少しだけ気まずさに視線を少女へと向けることが出来な
かった。ひよこは床の上に立ってから此方をじつと非難する様に見

つめていた。それをしばらく眺めてから少女がけらけらと笑い声を零す。

「おお、よう食うんやな。見てて気持ちのええ食いつぶりやったな」

「……その、悪い」

「ええよええよ、ウチは必要な分は食べてあるし。それだけ食べるのを見てればウチもお腹いっぱいよ」

なんか結構緩い子だった。そう言われると安心できるが、心苦しさが微妙に残るのも事実だった。ただ、ひよこはじーつと、此方を睨んでいる。相変わらずひよこの癖に妙に賢いというか人間的だ。ユーリ、余計なものまでこのひよこに注いでいないだろうか？ いや、絶対をやってるわこいつ。まあ、それはともかく、誤魔化す様に咳ばらいをする。

「Ah……本当に悪かった。俺はノアだ。宜しく」

「ジークリンデ・エレミアや。にーちゃんならジークでもジークにやんでもなんでもええで」

「じゃあジーク。その恰好を見ると……お前も魔導士？ なんだよな」

「せやで。まあ、ウチはベルカ系列のミッド出身やけどな。気が付いたら戦場で目覚めるもんやから驚いたわ。たまーに次元の亀裂に飲まれて別次元にたどり着くって話は聞いてたんやけど、まさかウチ自身が経験する事になるとは思いもせーへんかったわ」

「おう、成程……？」

「わかつとらん顔やな……」

まるで解らない。のは事実だ。知らない情報が多すぎるのがそもその問題なのだから、しょうがないのだから。だからジークリンデの言葉にどう反応すればいいかを迷えば、成程なあ、とジークリンデが言葉にする。

「にーちゃん、地球人やな？」

「解るか」

「ウチの口に行っている事、管理世界の人間なら解る事やで。知らないってことは管理外世界出身って事になるし、こんな状況ならこの世

界出身が一番濃厚な線やろ？ 服装も文明レベルに合致しとるし」

「おお」

「なんやそのアホの子が頑張ったのを見るような目は。ウチ、けつこー頭はええんやで」

「いやあ、悪い悪い」

雰囲気はどことなくレヴィ系だったので。それはともあれ、これでシユテル達以外で初めて魔法のある次元出身の人物と出会えてしまった。今の所全員少女というか女なのだが、魔法を使える条件に実は女である事が優遇されていたりするのだろうか？ そんなくならない事を一瞬だけ考えて脳内から追い出した。くだらない事を考えている場合ではなかった。

「コンビニの床に座り込んだまま、あー、と声を零す。

「とりあえず」

「ん？」

「……俺は他の生存者というか、人が集まっている場所を探して進んでいるんだけど。心当たり、ないか？ 戦艦っぽいのを目指してたんだけど」

「時空管理局の巡航艦やな。あれが大破するなんて相当なもん喰らった証拠やな。少なくとも外の雑魚じゃ絶対に落とせるレベルの代物やないで」

「雑魚」

腕を組み、あの騎士を雑魚と言われてしまうのは、少々納得がいかなかった。ただ、まあ、少女からは間違いなく自分よりも高い魔力を感じる。だとすればジークリンデにとっては雑魚なのだろう。また、年下の少女に負けていると思うと少々不満に思う所もあるが、この世界に入ってまだまだ日の浅い初心者だ。そこは受け入れるしかないだろう。

それはともあれ、

「まあ……ウチも特に行く当てがないのは事実や。となると見て不安になるにーちゃん残して一人で行くわけにもいかへんからな」

「余計な心配だぞ」

「せやろか？」

そう言つてにんまりとジークリンデが笑うと、手を伸ばして此方を掴んできた。いきなりの事に驚きながらそのままジークリンデの方に倒れ込み、顔面がジークリンデの胸に押し付けられる。いきなり何事か、という感想と悪くない、寧ろ良いという感想が一瞬で頭の中で芽生え、

直後、衝撃がコンビニを粉碎した。

衝撃が体の芯を抜けて行くのを感じながら急いで顔をジークリンデの胸から持ち上げて振り返れば、

先ほどまで座っていた場所——ジークリンデによって引っ張られなければ座っていたであろう場所が、完全に鈍い色の金属によって粉碎され、深い亀裂が生み出されていた。そこに突き刺さっているのは斧だ。巨大すぎる斧だ。自分よりも大きく、そしてあの黄金の機械騎士に匹敵する大きさを誇る斧。

そんな斧を、黄金よりも巨大な銀色の騎士が握っていた。黄金とは違つて盾は持つていない。だがその代わりに装備されている大斧は今日撃したように、建造物でさえ軽々と粉々にするだけの破壊力を保有している。コンビニを両断する様に放たれたそれをギリギリのところまで回避した所を見て、ジークリンデが引き寄せなかつた場合の未来を想像し、息を呑んだ。

「うーん、にーちゃんと話し続けたかつたんやけど、望んでないお客さんやね」

立ち上がったジークリンデはそう言うのと小さく手に装着しているグローブを噛む様に呟きながら、引き抜かれた斧がコンビニ外の持ち主の手元へと戻る姿を見た。完全に入り口から吹き飛んでいるコンビニはもう、コンビニとしての役割を果たせなくなつておりその前に陣取る銀騎士の姿、そしてそれが連れてきた金の槍を装備した、翼を生やした機械騎士と共に出口、そして空を固めていた。とりわけ目立つのは斧を握る銀騎士だ。その姿は圧倒的に大きく、立ち上がってひよこを頭の上に乗せながらヴァリアントアームを構えるも、それどうにかかなりそうな気配は全くしない。

「さて、にーちゃん、見てるだけなら見てるだけでええんやで、ウチは」
「冗談を言うな」

脳内で新しい弾丸の構成を完了させる。前の戦闘で魔力をフォーミュラで収束させ、それを叩きつける事で炸裂として敵を破壊することが出来た。同じように弾丸にエネルギーを収束し、それを接触と同時に爆発させればバーストショットを生み出すことが出来る。フォーミュラを稼働させながらその計算を完了させ、全弾を貫通力の高い通常弾から爆裂弾へと変更させる。

エネルギー補給を終わらせた直後なので、体が軽く感じられる。「女の後ろに隠れて待っているだけの男とか、生きている意味もないだろ?」

「ふふふ……せやな、せやろなあ……」

小さく笑い声を零しながらジークリンデは笑い、拳を握つてをそれを下に振るつた。直後、その拳を鋼鉄が纏う。鉄腕。そうとしか表現できない漆黒を纏って拳を作り、ジークリンデが拳を構えた。

「うっし、やる気出てきたわ。戦艦の方まで一気に押し通るわ。遅れんといてな?」

「誰に物を言つてやがる」

左手を首に当て、軽く首を回してから指の骨を鳴らし、それからヴァリアントアームで軽く肩を叩く。本音を言えば全く自信はない。いや、そもそもこの少女——いや、女に肩を並べて戦えるだけの實力はないし、本気で動き出せば置いて行かれそうな気配もある。

だがそれがどうしたというだけの話だ。

男は格好つけるからこそ男なのだ。

女の後ろに隠れて頼っているようでは、そうじゃない。

ましてや、どこからどう見ても自分より若く、背の低い女の子に全部任せろ? 強いから? その方が効率的だから?

そういう言葉で飾って隠れる様な奴はロククじゃない。

俺個人の意見で言うなら——それで引き下がるならチンコを切り落とせに尽きる。

「Well then, I'll show what I've

got」

フォーミュラ稼働。全身に力をみなぎらせながら、身体能力を大きく向上させる。ジークリンデに並び、正面、武器を構え直した銀騎士の姿を見る。やっぱりアレ、喰らったら痛そうだよなあ、何て感想を抱いてしまう。だが戦うという意味を抱けば余計なものが頭の中から消えていき、

どうやって目の前のジャンクを破壊し尽くすか、それだけに思考が集約される。

それを横からジークリンデが覗き込み、薄く笑っている。

——ゆつくりと、二発目を振り下ろす為に銀騎士が斧を持ち上げる。

「支援せーへんよ?」

「好きに暴れる。勝手に追い抜くから」

「ウチ、強いで?」

「男の強さは格好良さで決まるんだ。なら俺のが強い」

「ふふ、くく……ほんと面白いにーちゃんやなあ」

振り上げられた斧がその頂点に達し——次の瞬間には加速する。

その速度が、燃料補給を完了したフォーミュラによる強化を得た身体能力、動体視力——思考速度の中では、まるでコマ送りの様に見える。一瞬で到達するはずの斧がゆつくりと、数秒欠けて振り下ろされてくるように見える。その間に一瞬で飛び出す姿勢を整え、

「んじゃ、久しぶりに盛大に暴れさせてもらうわ……!」

飛び出した。ジークリンデと同時に飛び出し、ジークリンデが一瞬でその速度を上回った。素早く接近すると跳躍しながらすれ違いざまに手首を粉碎し、斧と手を銀騎士から切断し、そのまま跳び膝蹴りで胴体を陥没、回し蹴りへと繋げて首から上を薙ぎ払って蹴り飛ばした。ただの格闘連撃を繰り返しただけでもあり得ないと表現出来るその破壊力、手際の良さ、まるで戦う為に生まれてきたと表現したくなるような美しい動きの連続だった。

だが負けては居られない。

主を失って落ちて来る斧の上に乗る。それをフォーミュラで接続

し、コントロールして——このまま空の敵に向かって射出する。

斧の上に乗ったまま飛んでくる姿にAIが対応しきれっていないのか、空を飛ぶ騎士たちの姿が一瞬停止し、そのまま斧が柄から胸に衝突し、貫通する。空中で大斧の柄に貫通されて落下し始める騎士を蹴って、常識では考えられない動きに硬直した機械へと向けて銃口を定め、空中に飛び出しながら引き金を引く。

「Bang」

発射された弾丸は最も近くにいた騎士の姿に衝突すると同時に爆裂する。ぽつかりと半球状に炸裂した事で胸部が露わになるが、破壊力を拡散させすぎたのか、それで倒す事は出来ていない。

「Hm m...: needs more experiment」

素早く二発目を引き金を引いて打ち込み、今度こそ内部から爆裂させて破壊する。破壊された騎士が落下し、此方の落下が進むのを空中を蹴って一段跳ねる様に戦艦へと向けて跳躍しながら落下を阻止する。

進もうとする意志に対して対応する様に飛行する騎士が一気に殺到する。それに合わせて逆さになって落下しながら引き金を連続で引く。魔力とエネルギーを消費されながら放たれる弾丸が回避しようとする騎士の位置を先取り、その姿に衝突して爆裂する。そうやって数体沈めれば地上から轟音が聞こえる。

上半身と下半身が拳によって分断された騎士は殴り、蹴り飛ばされて近くのビルや建造物に埋められる様に吹き飛ばされていた。真下をその残骸が突き抜けた事を確認しつつ道路の上に着地し、悠々という表情で地上の殲滅を完了したジークリンデが歩いて横にやってきた。

「にーちゃん、遅いで？」

「悪いな。スロースターターなんだ。後はコーラ飲み足りてないのが原因だ」

「運動前に……?」

振り返ることのない肩越し射撃で空に浮かんでいる騎士を射撃し、フォーミュラによる拡大された知覚で命中と撃墜を悟る。それが大

地に衝突する音を背後から体で感じ取りつつ、

正面、道を塞ぐように展開する無数の騎士の姿を見た。ハンドガンで軽く肩を叩きながら、左手で拳を握り魔力を集めて纏う。

騎士の群れの向こう側には戦艦の姿が見える——また同時に、戦艦がバリアの様な物を張っているのもここからなら見える。アレが目標だ。

「んー、全部相手するのは面倒やな」

「少し昼寝しても良いんだぜ？ その間に俺が終わらせるからな」

「よう言うてくれるわ——さくつと突破するで」

「Ok」

ゆっくりと歩き出すとジークリンデが拳を持ち上げてくる。その意図を察し、軽く拳を叩き合わせる。

「Let's rock」

歩みを駆け足へ、

そこから全速力で前へと向かって——飛び出す。

M e l t i n g Ⅳ

道路を走る。前へと向かって、全力で、跳び込む様に。全身を前へと押し出す様に速度を乗せ、踏み込む一步一步に力を乗せる。目の前には進路をふさぐように騎士が見える。振り上げてくる剣が振り下ろされるよりも早く接近する。跳躍する。その頭上を宙返りする様に、逆さまに超えて行く。それを超えて行く中で右手で握った銃の引き金を二度引く。一発目の銃弾が頭部を粉碎し、二発目がその下の胴体を吹き飛ばす。まだ威力が高過ぎる。もつと貫通力を上げなくてはならない。破壊しながら貫通する。爆裂する弾丸では駄目だ。レーザーバレットみたいな弾丸が理想的だ。

後もう一つ、手数を増やす為に銃が欲しい。ヴァリアントアームと全く同じものだ。

そう考えながら騎士の背後に着地した所で、フォーミュラが応える。破壊したばかりの騎士をフォーミュラが材料として取り込み、分解し、再構築する。そしてそれをそのまま、左右対称にしてあるヴァリアントアームへと一瞬で変換を完了させ、左手に右手に握るヴァリアントアームとほぼ同じ姿をしたハンドガンが生み出された。

「Why didn't you tell me that you could've done that……？」

「びよ」

どうせ燃料不足で出来なかったのだろうが。自分の中で答えを出しながら更に走り出す、弾丸を再調整しながら一回転させるように手の中で遊んでから握りなおし、正面に布陣する無数の騎士を見る。

「Now, that's what I'm looking for」

両手を前に突き出す様に構えた銃口を、一切足を止めることなく連続で引き金を引いていく。無数に発射される弾丸はフォーミュラの知覚補正により、正確に急所を狙って射撃されていく。盾を持つ騎士は防御しようと動くが、弾丸が容易く盾を食い破って穴を開けながら貫通し、破壊する。先ほどのバーストショットに比べれば破壊は小さ

いが、スマートであり、拳大のサイズは開いている為、満足のいく結果となっている。

故に連射する。

正面に向けて一発一発を当てるように射撃しながら走り込み、倒れる騎士を足場に連続で跳躍しながら飛び込んでゆく。空に上がりながら逆さまになり、軽く横に回転しながら銃を射撃しながら落下し、転がりながら着地して前へと向かって走り出す。

その姿を横から騎士を蹴り飛ばしながらジークリンデが一瞬で追いつき、笑いながら次の騎士を殴り飛ばして粉碎する。

「はは！ にーちゃん動きは滅茶苦茶やのに楽しそうやな」

「楽しくなきや世の中、生きていく意味もないだろ？」

「そらそうや」

笑いながらジークリンデはスピードを上げるように前に出た。跳び蹴りで正面の騎士を粉碎し、その残骸を蹴り飛ばしてショットガンの様に弾丸として放った。その合間に出来る隙間に弾丸を撃ち込みながら前へ、前へと向かって走って行く。足元の大地の感触、心臓の鼓動を全身で感じながら風を切って、これまでにない速度を乗せて進んでゆく。全ての騎士が反応出来る訳ではなく、いくつか撃ち漏らしがあるも、それを通り過ぎてからあちらが反応して手を伸ばそうとしてくる。

だが振り切る。

風に髪が後ろへと流されて行く。発生する風圧に負けないように腕を交差させた状態で、前方に見えるトラックに向かって跳躍する。

その上に乗れば、この先は崩れた道路、衝突したトラックや車、それによって道がまとも存在していないのが解る。まともに移動しようとするれば時間がかかるのを、

「お先に行かせて貰うでー」

「おおっと」

軽く横転したトラックの上を踏むと、そのまま重力を感じさせない足取りで一気にジークリンデが前へと飛んだ。トラックの上から次の車両の上へと跳躍し、移動しながら迫ってくる騎士を蹴りと拳で一

撃で粉碎している。その破壊力はオーバーキルの一言に相応しい。それに負けていられない。そう笑い、再び前へと向かって駆け出す。

邪魔する様に正面から車両を吹き飛ばしながら騎士が突撃し、空からも襲い掛かってくる。迷いのない交差撃ちでコアを射撃し、貫通しながら散つて来る残骸を足場に蹴って跳躍する。

跳んで、次の足場を求めて落下し、落下先に待ち構える騎士を頭から足元まで打ち抜いて頭に着地する。その衝撃で騎士の姿が傾き、ゆっくりと奥に向かって倒れ始める。その間に周囲を見渡ししながら近づいてくる騎士を連続で射撃して行く。右、左、肩越し、腰の裏に回して、腕を広げ、両側へと射撃する。素早く連射を終わらせれば倒れた騎士が橋となつて横転した車両間が歩いて渡れるようになる。

「Thank you! I love you!」

歩きながら渡り、振り返りながら銃を持ち上げて手を振り、銃口で投げキッスしてから正面へと振り返って再び走り出す。笑い声をげらげらと零しながら置き去りにし、破壊した騎士共を飛び越えて走る。連続で跳躍を繰り返して崩壊した道路を駆け抜けながら横転した車両の道を抜け去り、崩壊した道路の上へと転がる様に着地する。

大通りをそうやって抜け切った所で、ジークリンデが既に立って待っていた。正面にやってきた姿に銃を上へと放り投げながら手を出し、勢いよくハイタッチを決める。落ちてきたところには二つの銃がコアユニットへと姿を戻しており、それをキャッチする。

「楽しそうにやるなあ、にーちゃんは」

「実際、今までの人生で一番スカつとする気持ちだったよ。トリガーハッピーになる気持ちも解るわ」

振り返りながら残骸だらけの集団に向けて中指を突き立てる。それなりに距離を稼いだが、完全に離脱しきつたという距離ではない。現に残された僅かな騎士が接近して来る上に、その後方から増援らしき姿も目撃出来る。敵の兵力は無尽蔵に増えるらしい。少なくともこれだけあっさりと破壊されながらも直ぐに送り込んでくること出来る程度には。

だが勝負は決した。

今、立っている場所は都心に墜落した巨大戦艦の直ぐ傍だった。半透明の膜——バリアの様な物が張られている為、それ以上に進む事は出来ない。後はこのバリアが開いて、向こう側へと抜ければ安全を確保できる。

安全を、

確保できる。

「……開かないなジーク?」

「せやな。なんか開かんわ」

腕を組みながら二人そろって、戦艦が張っているバリアの方へと視線を向け、それからゆっくりと背後へと猛スピードで迫ってくるロボット集団へと視線を向ける。見た目は非常に格好良いのだが、物凄い大きさの質量が速度を上げて突撃して来るといふ姿は恐怖の対象でしかなかった。

「Hmm……interesting」

「いや、興味深いじゃないでーちゃん。どうするんやこの後」

「……Nock nock, anyone there?」

バリアを拳で軽くこんこん、とノックする。バチン、と弾かれる感触に少し驚きつつも、ノックして留守を確認する。反応がない。視線をジークリンデへと戻せば、近くの車を持ち上げてそれを砲弾代わりに投げている姿が見えた。投げつけた車が衝突を起こして爆破炎上する結果にガッツポーズをとっている。

「で、どやった?」

「留守みたい」

「留守なら仕方があらへんな……」

コアユニットを口で掴んで、近くの瓦礫をフォーミュラで干渉する。ナノマシンが瓦礫や道路を覆って行く。更に追加で魔力をエネルギーのリソースとして消費して、手を広げ、虚空を掴む様に手を瓦礫の方へと伸ばしながら——それを正面へと引き寄せる様に、手を真ん中へと持っていく。それが衝突する様に小山になり、同時に物質が変換されて鋼鉄となる。

即席の鉄塊砲弾完成。それを指のスナップで手元へと召喚魔法で

引き寄せる。それをジークリンデの前に設置し、その上にひよこが飛び乗る。元気にスパークしながらやる気十分なのをアピールし、

優雅に一礼を彼女の横で取る。

「Present for you, lady」

「え、ええの？ それじゃあ——」

鉄塊の前に立ったジークリンデが拳を限界まで振り上げ、

「えいやっ」

限界まで引いた拳を全身で捻り込む様に鉄塊へと叩き込む。拳の形に鉄塊が一瞬だけへこみ、ひよこを乗せたまま異常な速度で鉄塊が射出された。電撃を纏った鉄塊が進路上の障害物を全て粉碎しながら一番近くにまで接近していた騎士の姿へと衝突し、その姿を爆散させながら貫通する。その背後にいた騎士に衝突してから進路を逸れて弾かれ、バウンドする様に別の騎士へと衝突し、

そこから更に2体巻き込んで壊れた。

「Strike!」

「気持ちええ具合に飛んだなあ」

衝突の衝撃と、それに続く爆破によって吹き飛ばされてきたひよこが必死に翼をばたばたと動かしながら滞空し、落ちて来るように頭の上に戻ってきた。お前、上に乗ってただけけどな、と思いながらも頭の上に倒れたひよこをねぎらう様に指で突いてやりながら、クリアされた正面を見てから、振り返る。

依然、バリアがそこに残っていた。

「Nock nock?」

拳で再びこんこん、とノックをして確かめる。だがやはり、反応はない。或いはその奥で何かをしているのかもしれないが、此方からはそれが伺えない。実に困った話である。腕を組みながら唸る。

「開かんなあ」

「そうだな」

「困るなあ」

「そうだな……今度はお前がノックしてみるか?」

「え、ウチ?」

えー、とジークリンデが声を零しながら指先をつんつん、と合わせ
て突く。それに合わせやや内股になりながら腰をくねくね、と動か
す。

「でも、ほら、ウチ貞淑やし？ そんな粗暴な事なんてできへんわ
……」

「貞淑」

振り返り、上半身と下半身が泣き別れている騎士たちの姿を見て、
腕を組みながら指を顎に当て、首を傾げる。

「You're joking」

「ウチ程乙女な子も珍しいよ？」

「Hm……？ 実は違う言語を喋っている可能性が出てきたな」

「えー、それは酷くないん？」

無言で親指を戦場の方へと向けながら近くの瓦礫を目の前に召喚
する。反射的に回し蹴りを飛び上がりながら放ったジークリンデが
それを砲弾として蹴り飛ばした。射出された瓦礫が新手に衝突し、そ
の速度と質量で粉碎した。

「Once more please？」

「ウチ、貞淑な乙女やから」

「Ok, そのままで言い張るってなら認めよう。乙女らしいノックって
やつを見せてくれ」

「えー、ウチがあー？ 仕方がないなあー」

ジークリンデが恥じらうふりをしながらバリアに近づき、両手の拳
を慣らし始める。もうその時点で貞淑という概念が疑われ始めるが、
それを一切気にする事無く、軽いジャンプを繰り返して体全体をほぐ
す様に運動を始める。

「ふう——」

息を吐き、握った拳を後ろへと引つ張り、上半身を大きく持ち上げ
ながら拳を振りかぶる。もう完全にノックという規模では許されな
い一撃をバリアに向かって放とうとした瞬間、

「——待て！ 待ててくれ！ 今通すからその動きを止めるんだ！
その魔力を引つ込めるんだ！」

「お」

ジークリンデが拳を放とうとした瞬間にバリアの向こう側から声がする。奥へと視線を向ければ、黒いコートの様な服装を纏った少年が杖を片手に、浮かんだ状態で両手を突き出し、焦りながらやってくるのが見えてきた。もう、それだけで彼がこの世界出身の存在ではないことが理解できてしまう。やっぱり、ジークリンデが言っていたように時空管理局とかいう組織の人間なのかもしれない。

——それにしては異様に若く感じるが。見た目、年齢はまだ十代前半の子供の様に思える。

「これを遮断するときには全体を一度遮断する必要があるから、一か所だけって風にはいかないんだよ……」

黒い少年はそう言うのとホロウインドウを浮かべてから確認し、手を振った。

戦艦を囲っていたバリアが消えた。それと入れ替わるように複数の魔力光による魔法陣が出現し、それが戦艦の周辺を覆う。それがどうやらバリアの代わりを果たしているようだが、

「さあ、こつちへ！ 長くは持たない！」

「んじゃ、お邪魔しまーす」

「あー、漸くベッドで眠れそうだ」

「なんで君たちはそんな余裕そうに歩いているんだ!？」

ジークリンデと並んで、振り返りながら適度に煽るようにならんと戦艦の方へと向かって歩いて行く。その様子に少年が半分切れているのが見えるので、近づきながら腕を広げる。

「……えーと」

「おいおい、歓迎のハグは?」

「そんな！ ものはい！ ない！」

半分というか完全に切れた様子で返答して来る少年の姿に、同じようにジークリンデが腕を広げる。

「ウチに対する歓迎のハグは?」

「……ない!!」

一瞬だけ空いた間を見て、ホロウインドウが出現した。そこには緑

髪の女性の姿が映っていたが、ややジト目で睨むように視線を少年へと送っていた。

『クロノ?』

「かあさ——艦長はそんな目で僕を見ないでください! 調子が狂うなあ、ほんと……」

疲れた様子で片手で顔を覆いつつ呟くと、盛大に溜息を吐きながら地上に降りて来る。それに合わせたのかどうかは知らないが、再び戦艦を覆うバリアが出現し、魔法陣が消え去った。バリアのオンオフではなく、魔法の方に準備がかかった、とみていいのだろうか?

「ふう……とりあえず、君達の素性や事情を聴かせて貰わなきゃいけませんから、ついてきてもらいますよ」

「あ、敬語が付いた」

「今更取り繕わなくていいのになあ」

「解ったよ、これが天敵って概念だ」

頭を抱える少年の先導に従って戦艦の方へと向かいつつ、

漸く、この世界の事情や出来事、それを把握できる場所へとやって来たという予感があった。

M e l t i n g V

「S i c k」

中に入った戦艦は所々破損しているのが内部からも見えた。通路の壁は亀裂が入ったり、パネルが剥がれて配線がむき出しになつていたり、それを修理している最中の制服姿が見られた。それを見れば今もこの戦艦は修復作業が進んでいるのが良く解る。だが外から見た感じ、派手に大破しているから、これを動ける状態まで復元するには相当時間が必要になりそうだった。第一、街もかなり荒れていた。

「いったい、どうすればこんな事になるのだろうか？」

とはいえ、戦艦とこのSF染みたメカニクスはロマンで溢れている。歩きながら周囲を見渡し目を輝かせてしまうのはしようがない話だと思う。こんなオーバーテクノロジー、地球では絶対に目撃する事の出来ないものなのだから。思わずスマートフォンを取り出して撮影したくなる衝動を抑える。流星にそこまで恥ずかしい姿を見せる事は出来ない。

「別に、今時そこまで珍しい型でもないだろう？」

「いや、こんなイカしたシップに乗るのなんて初めてだよ。やっぱり戦艦は最高だな」

「巡行艦んだけどね……」

「これで戦えるんだから同じようなもんだろ？」

「いや、まあ……うん……」

クロノ、と呼ばれた少年はあんまり強く言い返せないのか、不承不承という様子で言葉を受け入れた。納得していない表情を飲み込みながらも浮かべてしまうのは、どうも子供らしい仕草であり、笑い声が零れそうになる。それを頭の上のひよこが額をぺしぺしと叩いて責めてくる。それをジークリンデが横から見て笑うのを堪えている。そんな風に経験したことのない、戦艦の内部を歩きながら進んでいけば、一つの扉の前でクロノが足を止める。

「リンディ艦長がこの先に居る。僕も一応監視を含めて同席するから……なるべく変な事はしないでくれよ」

「H u g o ー」

「ハグしちやあかんの？」

「そういう所だよ！ ……と、待たせるといけないから早く入ってくれ」

「まあ、お母さんを怒らせると怖いもんな」

「飯抜きは辛い」

「君たち、もしかして僕を試しているの？ 挑発しているの？ 僕にだって限界は一応あるんだぞ？ うん？」

ジークリンデと一緒に首を傾げ、ひよこに額を叩かれながら扉の方へと視線を向け、踏み出す。鋼鉄製の扉は自動的にスライドする様に開き、その向こう側に広がっていたのは、日本の和室、と呼べるものだった。艦内の他の場所とは違って、ここは既に掃除してあるのか修復してあるのか、綺麗に保たれている部屋であり、畳の上では正座しながら座っている緑髪の女性の姿が見えた。

緑髪の。

髪色を見て、振り返りながらクロノの髪色を見る。

「その…：…そうだよな、拾ってくれた母親には優しくしたいよな…：…」

「地毛だしちゃんと言った親子だよ！ ほんと失礼だな君！」

ダブルサムズアップを向けると今にもキレそうな少年の姿が見え、大分おふぎけ成分も補給出来て満足できた。既に部屋に入って先に居る女性を真似してジークリンデは正座していたので、それに倣って自分も靴を脱いで上がり、正座する。静かに正座した所で背後からマジかよこいつ、みたいな視線を向けられている。

女の前では良い恰好するに決まってるだろ。

ただ、何故いきなり和室なのか理解できなかった。

「ようこそ、アースラへ。私が艦長のリンディです」

和室で正座をしながら待っていた女性がどうやら、艦長だったらしい。それにしてもあり得ないぐらいファンタジーな髪色をしている。緑髪——というよりはエメラルドグリーンと呼べるだろう。普通ならそんな髪色は不自然で目に痛い色になるだろうが、この女性、リンディの髪色は不思議と、そんな違和感が全く存在しなかった。レ

ヴィ同様、珍しい髪色なのに違和感が全くないのだ。相変わらず魔法関連の人も物事もファンタジックだ。

リンデイの自己紹介に対して答えようとする前に、ジークリンデが口を開いた。

「ウチはジークリンデ・エレミア。んでにーちゃんかノアな」

「エレミア兄妹ね……エレミア？」

リンデイの言葉に対して誤解する様な言い方を態と口にしたジークリンデへと視線を向ければ、ジークリンデが片手でピースサインを浮かべてくる。何か言っただろうかと一瞬だけ考えた。だが考えてみれば自分の素性が一番面倒な所だった。

そもそも未来を変える為に未来からやってきた、なんてどうやって説明すればいいんだ？ 正直、そのまま口にしても疑われるだけだ。だとしたらジークリンデから出てきた言葉に乗つかるのが一番いいのかもしれない。実際、髪色はお互いに同じ、黒色だ。兄妹で通せんくもないだろうとは思う。ただ、気になるのはジークリンデがそう言いだした事と、リンデイの反応だった。

「……あのエレミアですか？」

「せやで、艦長さん」

リンデイの言葉をジークリンデが肯定し、リンデイが複雑そうな表情を浮かべる。表面上、解ったふりをしているが、全く理解できていなかった。

エレミアってなんか、意味のある名前なのだろうか？

それを疑問に思ったのは自分だけではなく、

「艦長？ エレミアは……」

「古代ベルカ時代から存在する傭兵集団よ。数年前に大事件に巻き込まれて壊滅したって話は聞いてただけ……」

「生き残りやで。キャンプして寝て起きたらこんな場所に放り出されるもんやからびっくりしたわ」

その言葉にリンデイがややひきつったような笑みを浮かべ、クロノが傭兵という言葉を呟く。自分も、傭兵という概念が次元世界に存在している事に軽く驚いた。というか、相変わらず次元世界の頭には戦

う事がデフォルトで備わっている辺り、本当に存在しない方が世界の為ではないのか、と改めて思う。思うだけであって、何もしないが。実際、魔法を暴力的に振り回して勢いよく破壊するのは滅茶苦茶楽しかった。

こうやって経験してしまうと、頭の中ではどう考えていても、麻薬に近い感覚で抜け出せなくなる。

破壊も、戦う事も楽しい。

「……ジュエルシードの起こした次元震に巻き込まれて漂流した？
ありえなくもないわね。すみません、ちよつと整理してもいいでしょうか？」

「びよっ」

頭の上に居座るひよこが許可を不格好なサムズアップと共に出す。それをリンデイは見てから視線を此方へと向けるが、頷きを返しておく。下手な事を口にするのとぼろが出る様な気がする。交渉とかは物理的にやるのならそこそこ経験あるのだが、口で交渉するのは苦手なんだよなあ、と正座を軽く崩す様に座り直す。

リンデイはホロウィンドウを浮かべて何かを調べている。だがそれも数分程度終わる。

「えーと、では……代表はノアさんでよろしいでしょうか？」

「面倒な事はジークにパスで」

「えー、ウチも交渉とか苦手なんやけど」

「Hey、俺が交渉出来る人間に見える？」

「ウチも交渉出来るタイプには見えへんやろ？」

「……」

「……」

「Rock paper scissors！」

「ぽんっ！ あいこっ！ あいこっ！ しよ！ しよ！ あいこっ！ しよー！」

じゃんけん勝負をジークリンデと行う。フォーミュラによる知覚と反射神経の加速拡大を行いつつ、並行して召喚魔法を発動させる。ジークリンデと何か同じものを出しながら、素早く頭の上のひよこ

をジークリンデへと向かって射出する。

「ぴよ!？」

「しもうた……!？」

「ふっ……!？」

片手でひよこをキャッチする手はパー、それに対して此方が出すのはチョコキ。勝ち誇る様に勝利のブイをジークリンデへと見せつける様に持ち上げる。その指先を道具にされたひよこが抗議する様で噛みついてくる。地味に痛い。

「……なにやってるんだ君達は」

「責任の押し付け合い」

「じゃないな。ウチがやるわ」

本当にそれでいいのか、という感じの視線が向けられるが、それをガン無視する。ええ、という感じの視線が背後から向けられている気がするが気のせいだ、気のせい。

リンディはこほん、と咳ばらいをする。

「現在のここ、海鳴を取り巻く状況を説明しますね」



ロストログアという言葉が時空管理局、というより次元世界には存在するらしい。技術的に再現不可能な遺物や、凄まじいまでの力を秘めたアイテムの事を時空管理局はロストログア認定する事によりこれらの危険物を管理してきた——らしい。

この海鳴に発生した事件とはそのロストログアの 하나가暴走した事にあるらしい。

ジュエルシードと呼ばれる宝石型ロストログアが存在し、それが現在の状況を生み出した。本来であれば時空管理局の本局へと封印の為に輸送されていたロストログアではあったのだが、襲撃者の手によってこの海鳴に落ちた。始めはこれも回収作業が進んでおり、問題はあっても順調に進んでいたと言える。

問題はジュエルシードがほとんど回収された時点で黒幕が襲撃、

ジュエルシードを全て強奪、その上でそれを海鳴全体に配置した事にある。それによってジュエルシードはリンクする様に稼働し、そのまま海鳴を外界と遮断した。

それを取り返す為の戦力はアースラそのものを含め、黒幕が襲撃した時にかなり酷くやられた影響で、現在出撃が出来ない状態にある。その為、リンディを始めとする時空管理局の人間は残された戦力でどうにか状況を打開する為、この次元を渡る船、アースラ内部で耐えながら手段を模索していた。

「——で、戦力が足りんからウチを頼りたいって話につながるんやな？」

「ええ、恥ずかしながら現状この海鳴は相手によって他の次元世界から遮断されている為、援軍や連絡も行えません。外では相手の放った傀儡兵も徘徊していて、正直今のままだと【封絶結界】で元の住人を隔離する程度の事しかできませんでした……悔しいですけど、こうやって頼む以外の手段が」

「えーよえーよ。ウチもお仕事するのは。ポンコツのーちゃんが足引っ張るかもしれへんけどそこは堪忍な」

「誰がポンコツだ、腹を出して眠ってる癖に。泣かせるぞ」
「腹を出してるのは趣味やから」

趣味……？ 言葉に首をかしげるも、リンディは此方の意思を再度確認してくる。本当に手伝ってくれるのかどうかを。それに対してジークリンデは頷きを返答とし、そこに言葉を加える。

「ぶっちゃけ、この状況で手を出さへん方がおかしいと思うんやけど。遮断されてるゆーならそのドアホどつかないとあかんのやろ？」

「邪魔なら殴る。道理だよなあ」

「いえ、突発的な状況に巻き込まれてそこまでのバイタリティを發揮できる方が珍しいです。ですが特機戦力」

まあ——解っていた話ではあるが、どうやらジークリンデは一般的な女子ではないらしい。シュテルを始めとした戦闘力の高い女子ばかりエンカウントしていたが、これが次元世界の魔法少女たちのスタンダードではないという事を知って安心する。町一つ吹っ飛ばせ

そんな勢いの少女たちだらけだったらちよつと、世界に絶望していたかもしれない。

そうじゃなくて良かった。

「では細かい話は……また後で詰めるとしましょうか。こちらでも戦力の増加に伴い色々考慮する必要があるのです。話している間に部屋の方を用意させましたので、其方で戦闘の疲れを癒しつつ少し待っていてください」

リンデイの言葉に、休みを入れる事となった。

若干嫌そうな顔をするクロノに案内され、アースラ内に一室貰う事となった。

◆
「A h …… P l e a s u r e o f t h e s o f t n e s s ……」

アースラに貰った部屋、そこに唯一置いてあるベッドに顔面から倒れ込む。白く、清潔に保たれたベッドは倒れ込むのと同時に包み込む様な柔らかさを感じさせ、それが自分が今、疲れていたのだという事を嫌でも自覚させる。ベッドの柔らかさが一瞬で疲れた肉体を眠りへと誘ってくる。だがそれを必死にこらえながら体を横に転がして、仰向けになる。そこから体を持ち上げて、コアユニットを取り出す。

こいつのカスタマイズをしなくてはならない。

自分の魔法をミッドチルダ式からフォーミュラ・エルトリア式へと変える作業、コアユニットに別形態を登録し、能力などをカスタマイズして行く作業が待っているのだ。今のままでも戦えるが、間違いなく足手まといになるのは見えているし、力があればあるほど良いというのがどうやら、この次元世界のルールらしい。だとしたら、眠っている暇なんてものはない。

頭はガンガンするし、心臓は苦しいし、喉も掻き筆りたい程辛い。

けどそれを抑え込んで、コアユニットを前に出す。ベッドの上で軽い胡坐を組みながら目の前にコアユニットを浮かべる。そう、こい

つ浮かぶのだ。フォーミュラの力を利用すればそれぐらいは容易い。そしてそれにアクセスする様にホロウインドウを複数開く。少し前までであれば、何をしているか全く意味が解らない所だろう。だが強制的にフォーミュラを通して知識をインストールされた今、半分直感的な操作ではあるが、コアユニットをカスタマイズする事が可能となっていた。

そこに自分が使いやすい、と思うであろう武器の形状や特性をここで登録するしかない。少なくとも数時間はかかる作業だ。コツコツ進めないとまともに戦う事さえ出来ない。ただでさえ火力も何もかも足りないのだから。

ふと、自分が物凄い真面目に戦う事に取り組んでいる事に気づき、違和感と恐怖を覚える。だがそれを押し殺すのが今は正しいと判断して、

コアユニットのカスタマイズを開始する。

必要なのは手数、火力、そして必殺性。それを全部一つで纏める必要はない。レヴィやシユテルのルシフェリオン、バルニフィカスを見ればデバイスとは変形するのが基本設計らしい。だったら同じようなフォーミュラも、変形する事で役割を分担する事を前提に組めばいい。

「うーん、監視はされてないみたいやな。信じてるのか、お人よしなのかちよい判断がつかんなあ、こちら辺は」

「え、なにやってるのお前」

「え、カメラとか魔法で監視されてないか確認してるだけよ?」

まるで当たり前の様にジークリンデはそれを言う。監視なんて考えもしなかったが、そういえば確かに自分もジークリンデも、怪しさをパーセンテージで表すとすれば、純度100%の怪しさを誇っている。それを前に監視しないのは確かに信頼されているのかお人よしなのか、どちらかになるのだろうか?

まあ、そういうのを考えるのは面倒なのでやめる。

されてようがされてまいが、自分のやるべき事を見つけて完遂するだけだ。

それよりも、

「お前同室でいいのか？」

むしろ同室である事を普通に受け入れるジークリンデの姿に驚いた。ジークリンデの年ごろであれば十分思春期真っ盛りだ。自分の様に半分擦れているならともかく、年ごろの少女がそう簡単に男と同室である事を受け入れるとは思わなかった。しかも、

「お前さ……」

「別にええやろ、ウチら兄妹やもんなあー？」

そう、これだ。当然の様に家族である事を偽り、しかも乗っかってきている。

「……」

「ああ、もう、そう睨まんといてや」

部屋の中をうろうろとしていたジークリンデがベッドの上へと乗っかってくると、コアユニットを弄っている此方の背後へと回って、後ろから抱き着いてくるように首に腕を回してくる。必然的に密着する背中にジークリンデの柔らかい感触を感じる。

その感触が嬉しいのは事実なのだが——妙な好感度の高さが気になる。

いや、嬉しいけど。嬉しくない奴はホモだつて断言できるし。だがそれはそれとして、この迫ってくるような好感度の高さは割と気になる部分だった。

そう言えば——最初、出会った時もいきなり飛びついてきたことを思い出す。そこから妙に優しいし、妙に馬が合う。違和感だらけだが、彼女の存在が心地よいのも事実だった。言葉としては表現し辛い部分で困るが。

「本当に善意と好意しかあらへんから、ウチ」

「……まあ、それは信じてるけど」

そう答えると、ジークリンデは嬉しそうに更に引っ付く。若干作業し辛いのが、感触が心地よいのも事実。額をひよこがペしペしと叩いてさっさと離れろと指示を出してくるが、素直に誘惑に負けておく事にする。心地良いのが罪だと自分に言い訳する。

誘ったら押し倒せないだろうか？ 日本に来てからは割と欲求不満の日々が続いている。あの三人娘がいる家で性欲を処理するというのは中々にハードルが高いのだ。だけどジークリンデは見た目が良いし、肉付きも良い。その体を押し倒して味わってみたいという欲望もある。少なくとも、年齢はギリギリ行ける範囲だと思っている。

「……まあ、無理か」

「どうしたん？」

「Nothing」

変に関係がぎくしゃくしても困るし、溜息を吐いて大人しくコアユニツトをカスタマイズする事に戻る。

そろそろ、新しい彼女が欲しい。

M e l t i n g VI

「巨大機構を相手にする場合は遠距離からまとめて消し飛ばす火力か、至近距離から吹っ飛ばすのが楽やで。中途半端に寄せるとそれが逆に足を引っ張る事になるんよ。せやから構築するなら特化させた方が効率はええよ」

「にーちゃん、動きはセンス感じるけど武器系統あんましセンス感じんから、変に拘るよりも使いやすさか趣味で選んだ方が馴染むと思うで」

「貫通弾、装甲破碎弾、爆縮弾のデータ共有するな」

背中に張り付きながら肩越しにホロウインドウを覗き込みながらアドバイスをくれるジークリンデの言葉は、腹が立つがどことなく経験を感じさせるものであり、素直にそれに従って自分のコアユニットのカスタマイズを行う事にした。おかげでだいぶ、時間を短縮する事に成功し、コアユニットの形態を何個か追加する事に成功した。とはいえ、素人のカスタマイズも同然であり、このコアユニット自体がほぼ未完成品だった事も含めて、本来のスペックには遠く満たないレベルだった。

それでも一旦、コアユニットのカスタマイズを完了させたら今度は魔法のカスタマイズに移行する。といってもやる事はミッドチルダ式からフォーミュラ・エルトリア式へとコンバートする事だが。

ミッドチルダ式を始める魔法。

これとエルトリア式のフォーミュラは全く違うシステムである。どちらも科学を利用していているという事実は一緒だが、魔法はリンカーコアの魔力をリソースに、フォーミュラはそれがエネルギーであればなんでもいいという違いがある。なので魔法の根幹である魔力をそのままに、それをフォーミュラで運用しようという話である。フォーミュラ運用した場合のがもつと出来る事が増えそうな気がする——いいなあ、なんて感想を抱きながら、術式をエルトリア式に変えて行き、

それらの作業が終わる頃には既に数時間が経過していた。

カスタマイズを終えたコアユニットの外見に変化はないものの、カスタマイズ中に何度も変形させてその姿は確認している。問題はそれを本当に運用できるかどうかという話になるが、外に言って傀儡兵ジェノサイドを始める訳にもいかない。そうすると次、戦う時まで試す事は出来ない。それを残念に思いながら、

ベッドの上で座ったまま、動きを止めて休む。

「寝ないんか？」

「なんか、寝たらそのまま二度と起きられない気がするからな」

実際、そんなことはないのだろう。だけど眠ったら最後、そのまま全部が溶けて消えそうな感じはあった。それが少しだけ恐ろしく、眠るといふ選択肢を自分の中から消し去っていた。だからコアユニットを握ったまま、軽く息を吐いてベッドの上、胡坐を組む様に座って体を休める事になっていた。

頭が痛い。

目の奥がちかちかする。

喉を掻き篸りたい。

爪を剥がしたい。

骨が軋む。

肉が千切れそう。

だがまだ頑張れる。一番恐ろしいのは痛い事じゃない。それを受け入れて本当に失ってしまう事実だ。まだ、シユテル達がどうにかなる。だとしたらそれを引き戻すまで戦い続ける事こそが俺に唯一許された事なのだろうと思っている。正直、全部理解している訳じゃないが、それでもまだ間に合うのであれば、それは全力を向けるに相応しい事だろう。だから休めない。休みたくはない。目を閉じてはならない。

閉じた瞬間、泡になって消えてしまいそうで――。

「……やっぱなんか食うか」

休むのはやめる。ジークリンデを背負ったままベッドから立ち上がる。

「えー、そこはウチとこう、仲良くするところやろー。今なら添い寝す

るよー」

「なんでいかにも事情あります、つて感じで怪しさ満点のハニトラに引つかからなきやいけないんだ。いや、半分ぐらい引つかかかっていいと思ってるけど。だが食欲が勝った」

「おのれ食欲。ぐわー」

ジークリンデが剥がれる様子を見せないで、そのまま歩き出そうとした所を、ジークリンデがちよつと待ってな、と言葉を出す。

「にーちゃん、ちよい体調悪そうなの顔に見えるから、目元隠せるもん用意したほうがええで」

「Is it that bad……?」

頭の上の生物へと向けて言葉を掛ければ、ひよこが足で器用に前髪を引つ掛けながら逆さ吊りになった状態に、目の前まで降りて来ると、こくこくと頭を傾かせてから翼をぱたと羽ばたかせて上へと戻って行った。ひよこがそう言うのならそうなのだろう、と納得する。

「……ん？ いま、ウチひよこ以下の扱いされへんかった？」

「Let me see what I can use here」

「ひよこ以下なのウチ？」

うるせえひよこ以下。室内を見渡し、何か使えそうな材料がないかを確認する。とりあえず室内に設置されている鉄材、ベッドシート、グラス、プラスチックつぽいごみ箱あたりが材料として丁度良いだろうか？

「こう……だな」

フォーミュラで物質に干渉、分解、変換、再構築を行う。これを使って今着ている格好——ダメージが出来てしまったジーンズ、白いシャツ、黒いジャケツトという格好の材質をもうちよつと強度の高いものにする。同時に白いマフラーを首に巻き付けて、赤いフレームに黄色いレンズのファッショングラスを作成して装着する。

「Not bad?」

「悪くないで。特に全体的に黒い所が」

「追加されたオプションに関する意見を求めてただけだ」

追加で鏡を作成し、自分の顔を軽くチェックする——少々顔色が悪く見えるが、それでもファツショングラスを装着していれば騙せる程度だ。マフラーとグラスで顔を隠せば解らないだろうと判断する。

まあ、悪くない。雑誌で見たファツションアイテムを即座に実用化出来るこのフォーミュラというシステム、完全な経済クラツシャーだから現実的に考えると存在してはいけない類になる。絶対、この特異性がばれないようにしなければならぬ。

ともあれ、

「飯だ。飯。体動かすと腹が減ってしょうがない」

「えー、ごごろ添い寝しよーやー」

未だに文句を言うゾークリンデを引きずるように、アースラ艦内へと出る。

◆

「Fuck」

道が解らない。

当然だがマップ何て便利なものはない。これはゲームではない。そして攻略本なんて存在しない。だから初めてきた場所、そこを歩き回ったとしても中がどうなっているか、何てまるで解りもしない。当たり前の話だが案内が必要だった。

「Where did that map button go
……」

「びよびよびよ」

頭の上からマフラーの中へと巣を移動したひよこが頬をぺしぺしと叩いてくる。ゲームじゃねえんだぞ？　と言われているようだった。困った。地味に歩き回ったせいで今、自分がどこにいるのかさえ解らない。

「完全に迷子だ——食事の匂いで食堂だけでも見つけられない？」

「ウチをなんだと思ってるんよ。こつちや」

「解るのかよ……」

「ぴよお……」

先導し始めるジークリンデに従って艦内を歩き出す。今度のジークリンデの足運びは確かなもので、時折空気を確かめるように匂いを嗅ぎながら歩いて行く。

その姿を後ろからひよこと共に半分ドン引きしながら追いかける。

「こつちから美味しい飯の気配がする」

「マジか……」

完全にその気配を捉えたのか、ジークリンデがペースアップ。駆け足でその背後を追いかければ、ジークリンデが扉の前で足を止めた。

「ここから美味しいご飯の気配がするでー!」

「なんでたどり着けるんだお前」

「野生の勘……やな?」

「そっかー」

「びよっぴ」

こいつに付ける薬はねえな、とひよこがマフラーの内側から呟く。その言葉に頷きながらさつきと食堂でエネルギーを補給する為に、扉を開いて中に入る。

だがそこは食堂ではなかった。

扉が開いた向こう側に見えるのは幾つか並んだベッドの姿だった。確かにご飯の匂いがするのは事実だが、それは今、そこに飯を持ち込んでいる人物がいるからであり、元々そこで食べるような場所ではない。いや、それでも食べ物の匂いを辿れたという事実がある意味脅威的過ぎるのだが。

振り返りながらジークリンデへと視線を向ければ、自分の頭を拳で叩いて舌を軽く出してへぺろ、なんて表情を浮かべている。その額に一発デコピンでも叩き込んでやろうかと一瞬考え、振り返り、

「――」

言葉を失って動きを止めた。

「駄目だよなのは、食べなきや」

「フェイトも。ほら、食堂で貰って来たよ? あ、駄目だって!」

「でも休んでいられないから」

「私が止めないと……」

その部屋には複数の姿が見えた。ベッドのわきには人の言葉を喋るフェレット、そして犬の耳を生やした女の姿があった。それぞれ隣り合わせのベッドの横に回っており、ベッドサイドに設置された湯気の出ている料理にスプーンを乗せ、それを食べさせようと運んでいる。

だがベッドに座る姿は起き上がりとうとしていた。それをフェレットと犬女が止めていた。

だが、そのベッドに座っている姿は、

「シユテル、レヴィ——ッ!!」

声を荒げながらそれを放った瞬間、喉元にびりつと来る感触を感じた。神経を一瞬だけ刺激され、シユテルとレヴィに見えた姿が、それに良く似た少女へと変わっていた。髪色が違う。顔の形が違う。生き写しかと思うほど似ているが、それでも別人だ。

「えーと……?」

「あ、悪い悪い。人違いだ」

誤魔化す様に笑い声を零す。だが視線はベッドの上に座る少女たちに釘付けだった。

二人とも、相当酷くやられている。レヴィに似た少女は包帯の下に火傷の跡を残しており、首に絞められたような傷跡が残っている。もう一人、シユテルに似た少女の方は片目を不自由にしているのか、眼帯で片目を覆っていた。両手も包帯がまかれており、明らかに動いて良いという様子は見られない。

それほどの怪我を負っているのが、今見ただけでも解った。

ただそれでも視線はこちらに集まっており、

「えーと、貴方は?」

と、フェレットが喋る。動物なら喋るなよ、と一瞬だけ考えてしまいが、此方が反応するよりも早く、後ろからジークリンドェが飛びつき、肩越しに口を開けて来る。

「あ、どもども。艦長に聞いた前戦ってた人らやな? ウチらが来た

分にはもう心配する必要ないで。ウチらで終わらせるから」

「ジーク」

「ええやん、本当の事やし」

態々敵愾心を煽る様な言い方をジークリンデは口にしていった。挑発的にも表現出来る。目の前の少女たちが怪我をしている状態でも立ち上がるうとしている姿を見れば、この事件に対して何か特別な事情があるのだろうか、というのが解る。だがそれを飲み込んだ上で、ジークリンデは煽っていた。

趣味が悪いとしか言えない。なのでジークリンデの額にデコピンを放つ。あだつ、と両手で額を抑えながらうずくまるジークリンデをどうしてやろうか、と考えていると、

「つまり、管理局の隊員？」

「いや、そうじゃないよ。単純に雇われたただだよ。一時的に。俺もこの事件を終わらせないとどうにもならないからな」

「せやからゆっくり養生しててええんよ。直ぐに終わらせるから」

「だからそうやって挑発するなつて」

「ああん」

ワザと少女たちに煽るような言葉を続けるジークリンデの姿を両手で掴む、シユテルとレヴィによく似た少女たちの姿を忘れないように覚えて、そのままジークリンデを抱えて病室を出る。

外に出て、扉が背後で閉まるのを確認してから、ジークリンデを落として視線をジークリンデへと向ける。

「そんな熱い視線向けないでほしーわー」

「Stop playing that game with me
girl」

降りたジークリンデを腕を組みながら見る。落とされたジークリンデは軽く両手で地面に着地してから逆立ちし、それから体を持ち上げて、立ち上がった。

「なーんーのーことかなー？」

とぼけた様子で立ち上がるジークリンデを前に、変わる事無く言葉を放つ。

「You——」

今のは流石に解る。

こいつ、食堂に案内なんてする気はなかった。

最初からここにきてあの二人に会わせるつもりだった。ここまで来れば相当な馬鹿でもなければある程度、解ってくる。

こいつは狙って俺に接触してきたという事実を。

予め集められていた食料。簡単に動きを合わせて来る事実。まるで此方の癖を見抜いているかのような言動。迷いのない行動。あからさまに見せる好意。冷静に見つめればすべてが怪しく、そして何らかの目的をもって行動しているのが見えて来る。その目的は理解できないが、

それでも何かをしようとしているのは解る。

今の所、それはプラスとなっているから良いものの、この先それがプラスに繋がるとは限らない。

「——You, what do you want from me」

だが一貫しているのはそれが俺にかかわってくるという事。俺に何かを求めているという事、俺に関わりつづけようとする事実。それだけは間違いなく確かであり、

ジークリンデはおどけながら小さく笑う。

「怖い顔しないでくれへんかなあ」

傷つくわあ、と言いなながらジークリンデは顔を近づけて来る。唇と唇が触れそうな距離まで近づき、笑みを浮かべたままゆつくりと息を感じられる距離で、言葉を紡いだ。

「だから……仲良うしよう……ね？」

Bleeding

「――敵はプレシア・テスタロツサ。保護された彼女の使い魔からの情報によると、彼女の目的は次元断層に飲まれたとされる次元世界【アルハザード】へと到達する事です。当初は次元震を起こす事で目的を達成しようとしていたようですが、プレシアはその計画を全てのジュエルシードを取得した事で変更。この海鳴市その物をアルハザードとして上書きする計画に変更されました」

「……」

腕を組みながら話を聞く。

『ちなみにアルハザードってのは次元世界の伝説の都市みたいなもんやで。一番栄えて、一夜にして滅んだって都市やな』

ジークリンデが念話で補足してくる。便利なこの魔法技術は頭の中で相手と会話する方法らしく、魔力さえ使えるのであれば誰でも使用することが出来るらしい。ただ、少なくとも俺は使い方が解らないので、一方的に受け取る事しかできないのだが。

――争っている場合でもないのに、ジークリンデとは休戦中。

休戦と言っても此方が一方的にジークリンデを怪しがっているだけであり、ジークリンデ自体は態度が一切変わる事はなかった。その態度のまま、こちらに引っ付いては誘惑してくる。流石にジークリンデの目的が解らなくなった今、というよりはジークリンデのわけわからなさが増した今、ジークリンデのボディタッチは前同様有難がるようなことはできなく、真面目に腕を組んでリンデイの話を聞いていた。

時は数時間進み、作戦会議の時だった。

「プレシアはジュエルシードを海鳴に設置して……」

リンデイが片手で作戦室のホログラムを動かし、ジュエルシードの反応がある場所を示す。海鳴の地図にジュエルシードの存在を示す6個の光点が出現する。それにそれぞれ、ナンバーリングが施された赤い宝石が表示される。

「この六つ、これが海鳴を外界と遮断している原因にもなります。調

査によるとこれの排除を行えばほぼ海鳴の隔離が終わり、此方から時空管理局への支援要請、また同時に残りの15を保有するプレシアの居城である【時の庭園】へと乗り込むことが出来ます」

「つまりこの6か所を制圧して、その上でボスへと挑めばいいってことだな」

「解りやすい話やな。全部ぶっ飛ばせばええねん」

「せやな」

「びよっ」

ジークリンデの口調が映ってるぞ、とひよこが頬を叩いてアピールしてくる。特徴的だからついつい移ってしまうのだから許せ。そう思いながらリンデイが映像を変えていく。海鳴に設置された6か所のシードポイント、それぞれに砂嵐の発生によって映像が急に悪くなる為、シルエット程度でしか捉えられない何らかの生物が存在している。こんな連中が海鳴にいたのか。

無力だった時に出会わなかったのは純粹に運が良かっただけだったのだろう。

或いは——近くにいたからこそ傀儡兵が現れ続けていた？

まあ、どちらにしる今度はこいつらが相手か、という話だった。

「ジュエルシードはそれぞれ傀儡兵、もしくは魔法生物に取り込ませる事によってそれ自体を触媒とガーディアンとして運用しているようです。なのでこれをまず撃破します。クロノが2体、そして貴方達にはそれぞれ2体ずつ、対応して貰います」

「食いでがあるとなえんやけどなあ」

「流石頼りになる言葉ですね」

戦闘という行為に対するジークリンデの戦意は異様だった。戦える、という事に対して物凄い楽しみを見出している。これがいわゆる、バトルジャンキーと呼べる存在なのかもしれない。ただその性質に関しては、力がある程度握る様になった今であれば、気持ち解らなくもない。人を超えた力を振るうのは——どうしようもなく楽しい。

「んじや、サクツと終わらせるか」

「お、やる気で溢れとるな、にーちゃん」

なんとなくだが自分がやるべき事は見えている。だから自分が必要なやならない事はやり遂げる。考えるのはそのあとだ。何もかもが唐突で、そして考えるだけの時間を許してくれない。冷静になつて考えるのは後回しにして、

今は終わらせるべき事を終わらせにいく。

「ま、にーちゃんがやる気ならウチもさっさと終わらせてゆっくりー

——」
「待つて、くださいー！」

ジークリンデの言葉を遮るように、言葉が差し込まれた。作戦室の扉を開いて出現するのは二人の少女と、それに付き従う動物たちだった。フェレットと大型犬が病室にいたはずの少女たち二人の後ろに、申し訳なさそうな表情と共に並んでおり、まだ所々包帯を巻いた状態の少女たちが両足で立った状態でそこにいた。

明らかに、動くことが出来ないレベルのダメージを受けていた筈だった。

なのに、それを押し殺して少女たちは立ち上がった。両足で立ち、片手に宝石を握り、その瞳は闘志に満ちていた。ありえない話だが、この二人の少女はまだまだ、戦うつもりだった。シユテル似の少女なんて未だに眼帯を装着したままだった。或いは一生そのままなのかもしれない。だがそれでも、戦うという選択肢を選んでここに来たのは、見れば解る。

「私達も作戦に参加します」

「お願いしますリンディさん」

「貴方達は……」

リンディも少女たちが立ち上がったっている事実には驚きを隠せないのか、絶句している。その中で唯一、ジークリンデが解っていたかのように状況を眺めている。いや、或いは本当に知っていたのかもしれない。

『それは許可できない』

ホロウインドウが出現し、そこにクロノの顔が映された。

『君たちは既に大きなダメージを受けている。再び同じような攻撃を受けた場合、そのまま再起不能になる可能性だって存在する。特になのは、僕達は君を無事に家族へと返す義務があるんだ。既に君に傷つけさせてしまっている以上、猶更僕らの責任は重い。それにフェイト・テスタロッサ、君もだ。プレシア・テスタロッサから離反したとはいえ、君の身分は潔白じゃない』

「ド正論やな」

クロノの言葉にジークリンデが両手を頭の裏に組みながら、状況を見守る様に呟いた。実際、クロノの言葉は真つ当だ。こんな少女たちを戦わせるという発想が出てくる方が頭がおかしい。プロフェツシヨナルが居るのであれば、そいつらに任せるのが一番だろう。

「だけど、私が……私がお母さんを止めなきゃいけないんです！ 誰でもない、一番近くに居た筈の私が止めなきゃいけないんです。だからここでそれを諦められません」

「お願いします。私もフェイトちゃんももう魔力を回復して、戦えます。だからお願いします！ 私達も作戦に入れてください！」

そう言つてフェイトという少女と、シュテル似の少女が頭を下げた。それに対してクロノとリンディが非常に困ったような表情を浮かべる——まあ、考えている事は解らなくもない。

この作戦で動かせるのが元々、自分とクロノとジークリンデだけだったのだ。

つまりそのレベルまでアースラと時空管理局の面々は戦力不足なのだろう。その中、自分でも解るレベルの魔力を保有している少女たちが戦いたいと申し込んでくるのだ。状況的に考えると嬉しい話だが、人間としては正直、どうかと思う部分が大きい。いや、そこで迷う事無く最初に断つたクロノが凄いのだろう。仕事、そして立場としてのプライドを持っている。

将来、絶対に良い男に育つと思う。

「お願いしますー！」

「お願いします……！」

頭を下げて来る少女たちに対して、リンディは言葉に困っていた。

その様子をジークリンデは眺めながら、意味ありげな視線を送ってくる。そこで、念話を使って言葉を送ってこない辺りが実に悪辣だと思う。あの黒い娘の考える事はとことん解らない。だけど同時に、自分がやる事を助けてくれるという事だけは解る。そこだけは信頼出来た。あの女は、一切の悪意を抱いていない。それだけは自分でも解る。

だから腕を組み、軽く息を零し、

「いいんじゃないか、別に」

「お」

『何を言っているんだ君は』

ジークリンデが楽しそうに声を零し、クロノが呆れる様な驚くような声を零す。リンデイは此方へと真意を測る様な視線を向けてきている。だから一切表情を変える事無く言葉が続ける。

「外にいる雑魚共ならぶっちゃけ一撃でどうにか出来るんだらう？」

『戦闘力の話をしているんじゃない！ 彼女たちに万が一があった場合の話をしているんだ！』

タバコが欲しい。久しぶりに吸いたい気分だった。後で街に出たら調達するか、何て事を考えつつ、

「なんだ——」

声を続ける。クロノを見下す様に、馬鹿にするように息を吐きながら、

「お前、年下の女の子一人守れないのか？ ダツせえな」

『そういう！ 話じゃ！ ないだろ！』

「いいや、そういう話だろう。俺はあるぜ？ 俺と一緒に居るうちは無敵タイムだ。傷一つ付ける事無く最後まで踊り抜けるぞ。お前はどうかだよ、真っ黒いの。レデイのエスコート一つも出来ないのか？」

『お前よりはずつと出来るさ！ 艦長！ ……艦長？』

ホロウインドウがリンデイの方へと向けられ、クロノの視界に、小さく笑っているリンデイの姿が映った。その姿を見てクロノが軽く困惑するが、

「いえ、不謹慎だけどこんな所でクロノの友達ができるなんて」

『艦長、訂正してください。あそこでハグを求めてる狂人は通りすがりの狂人で、友人でも何でもありませんから』

「ふふ、そうね」

クロノの若々しい反応を嬉しそうにリンデイは確認すると、軽く咳ばらいをしてから視線を少女たちに合わせた。

「高町なのはさん」

「はい」

「Nanoha, Takamachi……」

聞き覚えのある名前、自分が海鳴という土地へとやってくる理由となった家名を持った少女へと視線を向けた。成程、やはり縁があるらしい。そしてここに来たことにも意味があるのだと思える。

「フェイト・テスタロッサさん」

「はい」

リンデイの呼びかけに二人の少女が応える。

「真面目な話をすると……貴方達の様な若い子を前線に出したくはありません。時空管理局では全体的に力さえあればどれだけ若くても通すという風潮があります。ですが私はこれに関しては反対しています。子供は、もっと子供らしくするべきだと思っています」

『母さん……』

「ですが綺麗な言葉だけで済ませられる程世の中は甘くはありません。こうなる筈じゃなかった。そう言った所で起きた事、変わってしまった事、過ぎ去った事実は変えられません。場合によってはどれだけ頑張った所でそれが報われずに失敗する場合もあります」

リンデイが脅す様に言葉を続ける。それをなのはとフェイトが正面から受け止めるも、一切引くような様子を見せない。あの年齢で既に覚悟が決まっているとさえ思えるその表情や力強さは、

大人からすれば、悲壮としか表現のしようがなかった。

子供がそういう表情するのは間違いなく大人の力不足が原因なのだから。

「それでも——戦えるかしら?」

「戦えます」

「戦います」

いつそ、悲劇的とも表現できるほど早く、そして強く言葉が返ってきた。心強くも最悪と表現できる力強さだった。頭ではどんなに頼るべきではないと解っているけど、戦力になるとリンディは理解しているのだろう。その具体的な強さを自分が知っている訳ではないが、それでも悩むほどの強さがあるのだろう。

ならば、受け入れるしかないのだろう。

「そう……なら、もう何も言いません。クロノ、ノアさん。彼女たちを宜しく願います」

片手を持ち上げてひらひらと振る。クロノもホロウインドウを通して了承する。

「ま、俺が戦う以上勝利以外の概念がないから安心すると良いよ」

『君の自信はどこから来てるんだ……』

「俺は格好良い」

『……?』

「Do I need any other reason?」

腕を持ち上げて肩を揺らす様におどけて言葉を口にする、クロノが数秒ほど此方を見つめ、

『……? えっ?』

クロノが本気で困惑したような表情を浮かべる。それを眺めているジークリンデは小さな声で笑っている。なのはとフェイトも二人とも首を傾げ、此方へと視線を向けるが、ペットたちの方はどこことなく疑う様な視線を向けている。全く信用がないと言われてしまえばそらそうだ、としか言えない。

『ほ、本当に大丈夫かな……』

「なあに、信じる。俺は強く、格好良く、そして天才だからな。やれる事であるなら確実にやらかすぞ」

『やらかしてどうするんだよ……!』

半ギレで即座にリアクションを見せてくれるクロノの姿を軽く弄りながら笑い声を零し、

—— 軋む心と体を引きずりながら、再び戦場へ。

Bleeding II

「Ah, such lovely day. Look at the birds crying」

「ぴよっ！　ぴよっ！　ぴよっぴよっ！」

「それ鳥じゃなくてひよこじゃないですか!？」

「どうか鳴かせてる……?」

ハンドルを握る。フォーミュラで修復、干渉を行っているがちゃんと動くことを確認する。キーを入れる必要はない。既にフォーミュラ経由の干渉で動く様に改造されている。そういうありえないハッキングや改造が出来る事がこのフォーミュラというシステム、ナノマシンの実に良い所だと思う。そう感じながら何度かエンジンの調子確かめながら、問題がないことを確認した。ひよこもハンドルの上から腕へと昇り、マフラーの中へと戻っていく。

「The sun is shining, kids are holding guns and shooting at robot s……」

「な、なのは？　このお兄さん本当に大丈夫なの？　言ってることが急に不穏になってきたんだけど」

「わ、わたしだって初対面だよユーノ君」

タンデムに乗せた少女・なのはが困惑する様な、反応に困る様な、そんな声を上げながら後ろから此方を確認して来るので、振り返りながらサムズアップを向ける。それを受けてなのはがホッと息を吐いた所で、

ひよこが発電を開始する。放電する電撃が外に漏れることなく、ひよこが潜り込んだマフラーに帯電し、蓄積していく。スパークしながら電撃を纏うマフラーが電撃を帯びるのと同時に、

そこからへんでパクって改造騎乗したバイクを走らせる準備を完了した。もう一度振り返りながらなのはを見た。

「……」

「あ、ちゃ、ちゃんと乗ってますよ……?」

疑問形で応えるのはにサムズアップを返し、正面を向いた。良い感じにロボットたちが接近してきているのが見えた。もう既にアースラのバリア範囲外に出てから少し時間が経過しているのだから、当然と言えば当然なのだが。とはいえ、遊ぶ準備も完了した。遠慮なく発進する事にする。

「At day like this, you just got to get crazy」

「なのは、やっぱりこれ降りたほおあ——!!」

「舌を噛むぜ小動物」

間違いない地球上の法律では違法改造のジャンルに入るであろう改造バイクで一気に飛び出した。一瞬だけ前輪を浮かせながら前へと飛び出し、そのまま正面に居た傀儡兵に突撃し、前輪で叩き、後輪を乗せて、駆け上がりながら左手にヴァリアントアームズを抜いた。素早く変形するのは片手用ツインバレルショットガン。

傀儡兵の上を駆け上がりながら片手で傀儡兵の胸部に向かってショットガンの引き金を引く。

轟音と共に散弾が胸を粉碎する様に吹っ飛ばし、その衝撃でバイクが浮いた。

「あああ——!?!」

「H A H A H A——!」

悲鳴を上げる小動物の声を笑い声で吹き飛ばしながら浮かしたバイクで傀儡兵を超えて——海鳴高速道路に飛び移った。

そのまま全速力でバイクを前へと飛ばしてゆく。雷に乗せたマフラーが微妙にスパークしながら雷の尾を後方へと流してゆく。不思議と、それがなのはや自分を痺れさせる様な事はなく、電気エネルギーだけが蓄積され続ける。そのまま、傀儡兵が飛行による接近を行いはめるのを、バイクの速度を更に上げながら振り切っていく。

「Haha! This is what I'm talking about!」

ジュエルシールドへと向かって爆速とでも表現できる速度、荒廃している高速道路の上を占領し、正面に設置されている障害物の様な廃車

を回避し、滑りながら進んでゆく。空、地上から追いかけて来るように走っていた傀儡兵の速度を振り切っている為追いつかれることはないが、

正面方面に展開されていた傀儡兵が進路を閉ざす様に出現をし始める。両手でバイクのハンドルを握り、コアユニットへと戻したヴァリアントアームズをマフラーの中に突っ込みつつ、

「任せませ」

「あ、……はいっ！」

未だに片目を眼帯で覆う少女の姿をミラーで確認しつつ、少女が杖を抜いたのを見た。既に姿は白いローブの様な服装——バリアジャケットへと変更されており、戦闘準備を完了していた。

「行きますー！」

「Go, go, go！」

「セット、シューター——！」

正面、飛び込んでくる傀儡兵に対応する様に9つの魔力の球を浮かべたのはがそれを一気に放った。片手を此方の体に回して掴む様に体を固定しながらもう片手で杖を握り、振るうことで放つ。一直線に放たれたシューターはなのはに誘導されながら剛速球としてそのまま傀儡兵に衝突し、その姿を貫通しながら破壊する。

それによって正面の敵が破壊されて行く為、何の遠慮する事無く高速道路を爆走していく。だがなのはの攻撃を外れた一体が正面に剣と両手に握って飛び込んでくる。

「すみま——」

「No worries girl」

コアユニットをマフラーからひよこが弾き、飛び込んでくる傀儡兵に合わせて一気に車体を倒す様に横滑りしていく。そのままコアユニットを2メートルを超える巨大な斧へと変形させながら剣と股の下をくぐりつつ斧を振るう。

剛斧が無理やり両足を破壊して傀儡兵の姿を倒す。それにトドメを刺す事もなく、通り抜けた所を更に前へと進んでいく。それをフェレットが驚きの声を零す。

「言葉だけじゃなかったんだ……」

「聞け、小動物。男が語る時はそれを真実にする時だけだ」

「恰好良いけど無茶苦茶だよ！」

「無茶苦茶でもやる！　それが男って生き物だ……！」

「シールド、張ります！」

正面から連続で魔力弾が放たれてくる。それに真正面からなのがシールドを張った状態で突っ込んでゆく。両手でハンドルを握りつつ、マフラーに溜め込んだ電気をエネルギーへと変換しながら瞬間的にそれをバイクへと注ぎ込んでゆき、二トロを爆発させるように一気に加速させる。凄まじい風圧を感じながらそれを正面からバイクで食い破りながら、

一瞬で、正面に展開する傀儡兵の前に到達する。

「Fuck off」

「ぎゃっ!？」

「わわわっ!？」

そのまま、なのはが張ったシールドで弾き飛ばす。傀儡兵の姿が道路脇のビルに衝突してそれを粉碎するのを見届けながらも一切車輪の回転を止めさせる事もなく、全速力で道路を抜けていく。

「滅茶苦茶だ！」

「楽しいだろう？」

「これなら空から行けば良かったよ！」

「そんな寂しいことを言うな……よっー！」

ハンドガンを抜いて射撃しながら正面、邪魔な障害物を弾き飛ばしながらバイクを障害物の少ないルートを通って進んで行く。マフラーから姿を出したひよこがホロウインドウを作成し、それを横のほうに投げて浮かんでくる。なのはがそれを杖でタップして拡大する。

バイクが凄まじい速度で、マーキングされた地点へと向かって進んでいるのが表示されたホロウインドウのマップに見える。目的地である最初のジュエルシードの場所へと向かって着実に近づいていた。いや、寧ろかなりいいペースで進んでいるだろう。まあ、ジークリンドなら既に始末をつけていそうだが。

「見えてきました、目標——!?!」

僅かに反らしていた思考からなのはの声で現実に引き戻されながら正面、高速道路の終わりに出現するジュエルシールド守護体の姿を見た。道路の終わりにある空間を塞ぎ、周りを瓦礫だらけにして、そこに静かに君臨する姿は、

「戦車……!?!」

戦車だった。

それもかなり大きく、そして凶悪とも呼べる雰囲気纏った。まだまだ距離はあるのに、その砲塔は此方へと向けて回頭を終えていた。光が、砲塔に収束する。

「アレは無理です」

「見れば解るッ！ フォーミュラア!!」

近くの廃車を台代わりにしてバイクを一気に乗せて、そのまま跳ぶ。直後、地上を薙ぎ払う様に戦車の主砲から砲弾——ではなく、砲撃が放たれた。空気を焦がしながら道路を蒸発させ、直線状に発射される砲撃はそのまま横へと動かされていき、上へ、此方へと向けられてゆく。ビームを放ったまま、そのまま此方を飲み込んで薙ぎ払おうとする動きだったが、

「リリカル、マジカル——っ!」

なのはが片手を突き出し、それを戦車へと向けた。それがバインドを生み出し、戦車の砲塔を固定した。追従する筈だった動きは一瞬だけ停止し、

その隙にコアユニットを投げた。

空中で剛斧へと変形したヴァリアントアームズがそのまま回転しながら戦車に突き刺さり、

「バスターー!」

追撃する様に斧に砲撃が叩き込まれた。

一瞬だけ耐える様に戦車が堪えたが、斧を砲撃によって押し込まれた戦車の姿がへこみ、砕け、そして貫通した。全身で風を感じながら落下しつつ、戦車が爆発するのを目視する。その爆炎を上から押しつぶすように着地し、爆破エネルギーをフォーミュラで奪いながらバイ

クの推進剤へと変換し、炎に巻き込まれて舞い上がった剛斧とジュエルシードをキャッチして回収し、ジュエルシードの方を指で弾いてなのはへとパスする。

そのままノンストップで次のポイントへと向けてバイクを走らせる。着地の衝撃で少しケツが痛いが、

「Foooo Hooo! Yeah!! Yes! That's what I'm talking about! 見たか今の! 跳んで! 投げて! ビームだ! はっはっはっは!」

「滅茶苦茶だよ……!」

「ちよ、ちよつとドキドキしちゃった……リリカルマジカル、ジュエルシード封印……よし!」

「んじゃ、次に向けてかつ飛ばすか」

「えっ、ノンストップ!?」

「Woooo Foooo!!」

「あ、危ない! ぶつかる! ぶつかるって!!」

後ろから聞こえて来る悲鳴を無視し、僅かな隙間に車体をスライドさせるように滑り込ませながら走らせ、次のポイントへと向けて更に駆けていく。

◆

「Thank you for your cooperation!
Adios!」

バイクから飛び降りながらそれを蹴り飛ばし、正面の傀儡兵に叩きつけて爆発させる。追撃にリボルバーハンドガン——ハンドガンでありながらリボルバー銃、という前、ネットで見たゲテモノなヴァリアントアームズへと変形し、ツーハンドスタイルでそのまま弾丸を叩き込む。12発を叩き込み終わった所で傀儡兵が爆破炎上し、ハチの巣となった姿から視線を外し、近くにある煙草の自販機を発見する。

その中に拳を叩き込んで、煙草の箱を引き抜く。

「H m m……好みじゃないけどいいか」

「え、ええ……」

「そういう事、しちやいけないと思うんですけど……」

「この煙草が俺の心を癒す。俺の心が癒されると俺が更に強くなる。つまり勝率が上がる。よってこれは許される」

「うん……？ うん??」

「騙されちゃダメだよなのは、この人適当なこと言ってるから絶対に」
「良く分かったな」

フェレット、ユーノという小動物の言葉にニヤリ、と笑みを返しながらトントン、と箱を叩いて煙草を出す。それを口に咥え、マフラーの端にくっ付ける。電流を熱に変えて、それで煙草に火をつける。

ああ——クソ不味い。相変わらず吐き気がする味だった。口に軽く咥えた状態のまま、炎上する傀儡兵を蹴り飛ばして先へと進む。ツインリボルバーをコアユニットへと戻してマフラーにしまう。

目的地である海鳴臨海公園へとやってきた。度々訪れるこの公園はこつちにもしつかりと存在していたが、その姿は完全に崩壊していると表現できた。草は踏み潰され、木々は折れ倒れ、そして公園の道路はぐちゃぐちゃに砕かれている。自分が知っている臨海公園とはまるで違う、破壊された荒地が目の前には広がっている。

「……」

その光景になのはが寂しそうな表情を浮かべ、足を止める。だがそれに気にする事無く、入り口を抜けて前へと進んでいく。アースラでチェックしたポイントはここだ。マーキングされた地点へと向かって進むと後ろからなのはが走って追いかけてくる。

だがなのはが追いついた所で海の見える公園のポイント、
ジュエルシードの守護者が居るべき場所に敵の姿はなかった。

周辺を見渡しても、地形や構造物が破壊されている。物理的に隠れられるような場所はなく、去ったのか、或いは魔法を使って隠れているのか。どちらかの可能性が残されている。だが確実なのは目の前にいないという事実であり、

「いません……ね?」

「ああ、きつとシャイなんだろうな」

「シャイな敵って……」

「あー……お」

壊れたベンチを見つけた。それに近づき、フォーミュラで干渉する。自分の記憶にある無事だった頃のベンチの姿をロードし、それを上書きする様にフォーミュラで干渉する。そうやって壊れたベンチを残っていた材料で再生し、そのまま腰を下ろす。ベンチの背もたれに寄り掛かる様に、海と公園の広場を眺める。それをなのはとユーノが元の位置から眺めている。

「え、つと……何をしているんですか？」

「見て解らないのか」

啞えている煙草を軽く持ち上げてから啞え直す。マフラーから出てきたひよこが煙いと軽く頬を叩いてくるのを無視する。

「一服だよ」

「あの、ガーディアン探さないんですか？」

「どうやってよ」

「えーと……こう……やって？」

そう言いながらなのはが周りを見渡して歩くようなジェスチャーをするのだが、

「ジュエルシードをこつちも持ってんだ。だったらそれに釣られて来るのを待った方が楽だろう」

「あ、成程」

隠れていようが、此方がジュエルシードを確保しているんだ。相手がこれが必要とするなら出て来る筈。そうじゃなければこの周辺を軽く消し飛ばして確かめればいい。ダメならアースラと連絡して別的手段を取ればいい。無駄な労力を割く必要はない。

だからぼんぼん、と横を叩く。

「So, you might as well sit down
and wait while for our friend
to arrive……あー、今更だけど日本語の方がいいか？」

「あ、いえ。英語も日本語も解りますから大丈夫です」

「マジか……」

その年齢で日本語も英語もイけるとはかなり凄い事だ。少なくともかなり良い家庭で育っているのは事実だろう。お嬢様と表現できるかもしれないレベルで。

当たり前の話だが、教育には金がかかる。

日本で暮らす以上、日本語は必須だろう。だが英語はそうではない。それを覚えるのは余分と言える部類に入るし、それを覚えさせる事の出来る環境というのは、つまり余裕があるという事でもある。自分分は金になるから、という理由で必死に日本語を覚えたが、

それでもこの娘の年の頃は英語しか喋られなかった。

「はあ、羨ましいなあ」

「そんな事ないですよ。私とかアリサちゃんとかと比べると全然ですし……いや、それよりも英語とか日本語って地球の言葉ですけど」

「いや、俺地球人だし」

「えっ」

「アレと兄妹とか嘘に決まってんじゃない」

「なんで!？」

「いや、背景設定話すの面倒だし……」

「設定ってなんですか!？」

ユーノとなのはの流れる様な驚愕の声とツツコミに、笑いが堪え切れずに声を漏らしてしまう。それをユーノとなのはのコンビがええ、と声を零しながら見ている。

「え、じゃあ、本当に地球人なんですか？ ジークリンデさんとの関係は？」

「アメリカ人だよ、日本とのハーフの。アレとはそこらへんで出会って意気投合しただけ」

『終わった後、詳しく話を聞かせてもらえないかしら……?』

『ウチは本当に家族になってもええんやで？ どや？ 今なら可愛い黒髪ツインテと家族になれるよ?』

リンデイが若干ひきつった表情でホロウインドウに出現し、その横にジークリンデが片手で傀儡兵を持ち上げ、それをハンマーの様に振

り回しながらボスっぽい傀儡兵に叩きつけている場面が見える。その両方をひよこが翼で叩いて消し去る。邪魔、と言わんばかりのひよこの態度だった。男らしい。

「え、じゃあ、何で海鳴に……？」

「I came here to meet Shirou Takamachi」

「……お父さんに？」

やっぱりこの子の父親だったのか、と確認できた。これで何とか、この事件が終わったなら親父の遺言の方を、漸く果たせそうだな、と口に出す事無く安堵しながら、まあ、と声を零す。

「親父の遺言を果たす為にな。海を渡ってこっちに来たんだ。で、海鳴にやってきたらこんなことになってな」

「あ……その、なんだか申し訳ありません……」

「なのは他に現地の魔導士が居たなんて……」

まあ、自分は特殊なケース——いや、特殊すぎるケースだから、話をして意味がない。だから細かい事情までは話すつもりはない。だけど色々と確認が取れただけ、今は良しとする。良しとしておく。なんか、もう、色々と考えたり取り繕ったりするのが面倒に感じているからそういう事しておく。

頭が痛い。

「えっと、お父さんにはどんな用事だったんですか？」

「ん？ 金を返しに来たんだよ」

「え？」

「借金の返済。どうしても金がなかったところに助けてくれたのが士郎さんだったらしくてな。最後の遺言に、どれだけ時間がかかっても良いから、絶対に貰った金を返してお礼をして欲しいって頼まれたからな」

なので家財を全部売って金に換えてきた。家も土地も家具も貴重品も大体全部売り払って、それを一つの通帳に叩き込んで全額、ギリギリで揃えた。まあ、想い出の品とか色々あったのだが、それでも受けた恩の事を考えるとこれぐらいはやって当然だろうと思う。

生きているのだから、後は何とかなる。

「お父さん、そんな事してたんだ……」

「お前の父親はクツソ立派な人だよ。俺は面識ないけど」

「……はいー」

そう告げられたのはは誇らしいのか、嬉しそうな笑みを浮かべている。とはいえ、彼女は自分が傷つけば、無理をして今の様な状態になった彼女の姿を見たその父親や母親が、彼女自身の事をどう思うのか、解っているのだろうか？

解ってやっているのであれば相当酷い。解らずにやっているのなら地獄でしかない。どちらにしろ、なのはが戦闘に出ている状況はあまり、良いものじゃなかった。

とはいえ、彼女の気持ちは痛いほど解る。それを止められるような事は自分には出来ない。なにせそれは言われて解る事ではなく、自分で自覚しなければならぬ事だからだ。

故に何も言わない。当たり障りのない会話だけして、終わらせる。そして空気を震わせる魔力の胎動に、漸くガーディアンが昼寝から目覚めた事を知覚する。近づくと同時になのは共々、座っていたベンチの上から起き上がる。軽く背筋を伸ばしながら体をひねり、体を軽くほぐす。それに合わせてひよこがマフラーからコアユニットを弾き出す。

それを剛斧へと変形させて、地面を砕く様に叩きつける。拳を合わせ、指を慣らしながらひよこが放電によるマフラーへの充電を開始する。

空気が震える。上空に影が差し、ゆつくりと鋼鉄の翼を広げながら降りて来る巨大な鋼の姿が見えて来る。今までの傀儡兵よりも大きく、そして力強さの感じられる姿は完全に人型を逸脱しており、なのはを超えるエネルギーが込められているのが解る。サクツと破壊した戦車の後でパワーアップでもされたのだろうか？

どちらにせよ、

空から降りてきた機竜が僅かに魔力の光を纏いながら咆哮を轟かせる。力強く振るわれる翼は暴風を生み出して土埃を舞い上げて来

る。

「っ、ジュエルシードを動力に組み込んだんだ！ あんな不安定なもの……！」

「Well, that does sound fun」

「欠片も楽しそうじゃないですよ！」

わっはっは、となのはの言葉に笑いながら地面から剛斧を引き抜いて担ぐ。

——遊びの時間、再開。

Bleeding III

頭が痛い。頭の中がガンガンする。耳鳴りがする。眩暈が終わらない。痛い、苦しい、辛い。だけど死ぬほど苦しいわけじゃない。なら余裕だな。

一度死んだ後では何もかもが軽く感じられる。そう、何を比べても死ぬよりは良い。ならやろうとすれば出来る筈だ。我慢も、実行も。

だから俺は勝利する。
そして踏み込む。

ヴアリアントアームズ、剛斧へと変形したそれは直径2メートルほどはあり、自分の背丈を超える程の大きさに設定して作成したものだ。シリーズに合わせて名前を付けるならヴアリアントパニツシャーとでも名付けられる。技巧もクソもない、暴力をもって振り下ろす為の巨大な武器になる。黒と赤の剛斧は片手で持ち上げられるような重量をしていない。だが魔力、そしてフォーミュラで無理やり自分の体を強化した上で、肉体そのものを改造する。

データ上存在するエルトリア人に。武器を扱えるスペックまで。苦痛と引き換えに肉体を成長改造させる。フォーミュラなら、体内に潜む形で存在するナノマシンであれば、それが可能だ。だから腕は片手で剛斧を握る。前へと踏み出す。風を感じる。同時に肌を焼くような魔力の胎動を感じる。

だがそれに構う事無く、全速力で正面から剛斧を叩き込む。人体的にあり得ないと表現したくなるパワーでたたき込む様に踏み込めば、後方へと向かって機竜がバックステップを取りながら口を大きく開く。その口に一瞬で熱量が溜まったのが見えた。

「バインドッ！」

なのはが片手を突き出す様にバインドを出現させた機竜の頭が瞬間的に下へと向けられ、プレスとでも表現すべき一撃が大地へと向かって放たれる。

一瞬で溶解する地面から亀裂が走り、公園内を走る。そして噴火する火山の様に溶解した熱量が地面から噴き出す。

「Wow」

横にロールする様に亀裂を回避しながら直ぐ横を、溶ける程の熱量が吹き上がるのを捉え、それを撒き散らす様に機竜が空へと飛びあがるのが見えた。僅かな熱が飛び散り体にかかる。それが肌を焦がすのを無視しながら武器を剛斧のまま、

それを全力で投擲した。飛び上がった機竜の翼を打撃する様に投擲した剛斧は回転しながら翼に衝突し、飛び上がった機竜の体勢を崩す。

「シューター……発射！」

追撃する様に複数のシューターを浮かべたなのはがバランスの崩れた姿に殺到し、打撃する。だがその破壊力は機竜を貫通するには至らず、表面を傷つける程度に留まる。

「硬い……いや、ジュエルシードの余剰出力を防御に回してるんだ！」
「解説どうも」

足の裏、靴底にエネルギーを集める。一つの方向へと押し出す様なエネルギーの爆発。まっすぐ、ブースターの様に押し上げる推進力をイメージする。そしてそれに合わせて一気に跳躍を行う。射出されるように空へと打ち上げられ、バランスの崩れた機竜へと向かって一気に飛び上がる。弾かれる剛斧を手元へと再召喚する事で持ち直しながらそのまま、飛行する機竜へと向けて剛斧を振るう。

翼撃と剛斧が衝突し、弾かれる。後転する様に空中で後へと向かって流れ、空中で足を止める様に力を込めて——空に足場なんてないのを出す。

「あ——れ——」

当然の様に後ろへと吹っ飛んでいく。回転しながら。

吐きそう。

「の、ノアさ——ん!!」

「ごめん、実は飛ぶの初めてなんだ」

回転しながら後方へと飛んで行く姿になのはがひきつった笑みを浮かべながら困惑し、その肩の上に乗るユーノが腹の底から声を吐き出して叫ぶ様に言葉を出した。

「実は出来るかもしれないと思ったのに！ 思ったのに！ あっさり裏切った！ この人出来るのか出来ないのかよく解らない！」

「ごめーん、と緩い声で謝りながらなのはが地上を蹴って飛ぶのを見た。そのまま自分よりも遥かに綺麗に、無駄なく空へと上がった。その姿を目撃すると同時に体内に格納されるフォーミュラが稼働する。

瞳に直接投影されるように複雑な文字の羅列が出現する———エルトリアで使用されている基本言語だ。無論、英語でも日本語でも、ラテン語でもない。自分の知らない未知の言語だが、フォーミュラの自動インストールによってその内容は把握できる。目撃した魔法を解析しているのだ。エネルギーを吸収。集積の出来るフォーミュラは魔法でさえ解析が完了すれば吸収が行えるらしい。

だが同時に解析を行うという事はその魔法の使い方が解るという事でもある。

なのはの使用する飛翔魔法が見える。

———目を閉ざして集中する。

なのはが使用する飛翔魔法は大きく分けて二つ存在する。一つ目は足元の小さな羽の魔法。これはなのはが飛行する上で姿勢制御等を補助する役割を持っている。つまりこの魔法自体に前へと進む力はない。進力がブレない様にコントロールする為の魔法だ。本体はもう一つ、なのはを包む魔法の方だ。不可視であり、透明になっているが、なのはの魔力がなのはを包む様に存在し、それがなのはを引っ張っている。そのコントロールをもう一つの魔法で行っている。

つまりは玩具の飛行機を手で握って、動かすのと一緒だ。自分の魔力を使って自分の体を持ち上げ、動かす魔法が飛翔魔法の正体。

———同じ事をフォーミュラでする事は難しい。

魔力で肉体を包み、維持し、そしてそれを自分の意思に合わせて動かし続ける。つまり魔力その物を霧散させないようにコントロールさせなくてはならない。一回魔法を発動させたら終わりという訳ではなく、マルチタスクで維持しなければいけない。そして衝突等が繰り返されるたびに魔力が霧散するので、リンカーコアから魔力を抽出して飛行を維持しなければならない。魔力とかいう不思議すぎる物

質だからこそ出来る事だが、また同時にコントロールに対する才能や適正が関わってくる。

それが欠けている為、自分には無理だ。
ならアプローチを変えよう。

同じように空を飛ぶ事は出来ない。フォーミュラに出来るのはエネルギーの変換や吸収、そして物質の再構築等だ。エネルギーの操作や収集、その方向性を変える事が得意なのだ。

科学だ。

これはオカルトではなく科学技術である。

それはレヴィが教えてくれた事でもある。

つまり飛行し続けられる様に自分の状態を維持すればいいのだ。

跳躍し、空に上がり、滞空する事は可能だ。

なら何故落下する？ 重力があるからだ。そしてそれから逃れる慣性が喪失されるからだ。

なら答えは簡単だ——慣性を維持する。これが答えだ。

物理的には不可能だが、

物理現象を書き換える事が出来るフォーミュラがあるのであれば、話は別だ。散ったエネルギーを再び集めて即座に再利用するだけではなく、その方向性に干渉出来るこのシステムであれば、魔法とは別の理論で空を飛ぶことが出来る筈だ。

自分の脳味噌では覚えきれない事を、フォーミュラに代理演算を委託する。

そうして飛行するのに必要な計算をさせて——イメージした事を実現させる。

故に一番最初にする事は足の下に足場を作る事だった。

回転しながら飛んで行く体の動きを足場で停止させる。無論、普通に足場を作ったのではなく、動きと共に発生する空気抵抗、摩擦、そのエネルギーを固める事で疑似的にエネルギー力場による地面を形成する。

即ち空に足場を作る。

両足で立ち、後ろへと流されるモーションを足で立って、空を引き

ずるように火花を散らしながら停止し——そこから再び体を前へと射出する。足の下で発生させたブースト、それで一気に飛び上がりながら空気抵抗などで発生するエネルギーを再利用する事で一切減速を発生させずに前へと飛び続ける事が出来る。そしてそのベクトルをフォーミュラで変更する。

そうすれば、自分に発生する慣性の方向を自由自在に変更できる。とはいえ、肉体に対して何の保護も行っていない飛行制御。

内臓が潰れる様なGが負担として肉体にのしかかってくる。元々遥かに頑強なエルトリア人が運用する事が想定されているのであれば、当然なのかもしれない。だがその苦しみさえ無視すれば、

——空を舞う事が出来る。

「Wooooo! Fooooo!」

「あつ、帰ってきた」

機竜へと向かって高速で飛翔する。内臓の潰れる感触に吐きそうになるが、それを無理やり整えて対応し、正面から機竜へと向かっていく。それに素早く反応する機竜が口を開き、砲撃を放ってくる。

かいくぐる様に一度下がれば、空中で機竜の動きを止める様にバインドが首と翼を掴んだ。動きを止めた機竜の顎の下に潜り込む様に一瞬高度を落とし、

「Dragon Kick!」

そのまま、虚空を蹴って顎の下から首を蹴り上げる様に飛び蹴りを放つ。渾身の蹴りで首が折れ曲がる様に機竜の姿がバインドを纏ったまま蹴り上げられ、それを押し出す様にサマーソルトへと連撃する。蹴りながらやや後ろへと下がって武器を両手で——二丁リボルバーへと変形させる。そのまま距離の空く機竜の顔面へとめがけて一切容赦のない連射を入れる。

2、4、6、8、10、12。腕を交差させるように構えながら連続で射撃し、衝突するたびに挟異音が響く、機竜の顔面を削っていく。否、ほとんど吹っ飛ばすという言葉に近い。一発一発が機竜の顔面を粉碎する様な破壊力で破壊し、完全に破壊力でその体を食い散らかしていく。

「なんとなく解ってたけどやっぱり質量兵器だアレ！」

フレットの驚愕する様な声が響く。だがそれを無視する様に、弾丸が叩き込まれて食い千切った穴を穿つようになのはがノータイムで砲撃を叩き込んでいく。ヴァリアントアームズの弾丸が叩き込まれた箇所はフォーミュラがエネルギーを喰らい破った事もあり、ジュエルシードの余剰出力で発生するコーティングの様なバリアが、食い散らされていた。故にその穴になのはのバスターが叩き込まれた。

桃色の光が大空を駆け抜けて貫く。

機竜の翼がそれによつて根元から消し飛ばされて、片翼の機竜がバインドを引き千切つて出力を引き上げる様に光が体内から溢れ出す。

その顔面目掛けて剛斧を投げつけた。

それを回避しながら更に光量を高める機竜に対して避ける動きが見えた瞬間には加速して接近する。

それでも回避しようとする姿に片手を伸ばしてボロボロの顔面を掴み、逃げられない様に手元に再召喚した武器を鎖に変形させる。

両手へと絡みつく鎖がそのまま穴だらけの機竜へと突き刺さり、アーカーされる。その鎖にマフラーが巻き付き、

マフラーに蓄積された電流がひよこに刺激され、フォーミュラと合わせ増幅されて一気に機竜の体内へと流し込まれる。

「びよびよ、びよー！」

鋼の悲鳴が轟きながらその内部を電流が蹂躪しながら破壊していく。集められたエネルギーがフォーミュラによって吸収、再利用されて電撃が継続するごとに勢いを増して内部から食らいつつしていく。その回路を破壊していき、機竜を完全破壊へと一気に導く。内部から爆発し始める機竜のエネルギーが霧散し、恐らくは自爆へと入ろうとしていた姿を止める。

そしてその中央部に、赤い宝石の姿が見えた。

ジュエルシードだ。さっさと終わらせるためにそれに手を伸ばそうとし、

「そう来ると思っていました！」

言葉と共になのはが頭上を取った。それと同時に多重に展開され

たシールドが天蓋の様に出現し、空からのあらゆる干渉をシャットアウトする。その直後、

空が紫色に染まった。

一瞬にして暗雲が空を覆い、それとシールドを解るように紫電が一瞬で鋼を融解する領域まで電圧を高め、集う。

轟く雷鳴がそのまま、光の柱となって空気を焦がしながら落ちてくる。なのはが多重展開したシールドで、頭上から落下して来る絶望の塊に対応する。一瞬の閃光からの守護、それをなのはが受け止め――その体が一気に落下し始める。即座に下に回り込み、此方も全力で落下を止める様に下から支えながらも、それでも収まることのない電撃の放流が上から押し潰しにくる。

高度がどんどん下がって行く。

「プレシアさんは私とフェイトちゃんが戦い終わった瞬間を狙って攻撃してきたんです。ですからやるなら終わった瞬間を狙うって思っていました……けど……！」

降り注ぐ紫電は衰えない。むしろ何か、異様な力が注ぎ込まれているのか事前に準備されていたなのはのシールドに罅を刻み込み、そのまま破壊する様に侵略して来る。なのはが生み出した盾が今にも壊れそうなのは見えていた。

「二つ使うだけでも次元震を起こせるのにこんな使い方――」

ユーノの言葉が途中で遮られる。

ガラスの割れる様な音と共になのはのシールドが貫通された。

その未来が一瞬だけ、割れるよりも早く見えた。

故に後ろから支えていたなのはを掴み、抱き寄せ、紫電に背中を向ける様に体で包み、

――背中から落ちて来る雷を全身で受け止めた。

Bleeding IV

「男は格好つけないきゃ生きていく意味がない。覚えておけよ、ノア」
親父の言葉だった。

俺の人生を形作る上では、親父の存在が最も重要だった。彼の背中を見て育ったからだ。昔、親父は海兵隊に所属していた。帰って来ては銃を見せてくれたり、触らせてくれたり、使い方を教えたり、軍人の戦い方を教えてくれたり。そうやって格好つけていた。息子が可愛くて可愛くてしようがなくて、構おうとして自分の得意なものを見せつける子供の様な親父だった。だけどそんな親父が大好きだった。仕事に誇りを持ち、海兵隊の隊員である事を自慢し、そして同僚に慕われる良い親父だった。

俺も、そんな父親の存在が非常に誇らしかった。
「いいか、男が格好つけるのには意味がある」

親父は格好良い男だった。格好つけていた。だがそれだけじゃなく、生き様そのものが格好良かった。だから親父が仕事で長期間会えない状態でも、寂しさと共に誇らしさがあった。親父は今もどこかで、国の為に戦っているのだと。誰かの平和と安全を守ってくれているのだ、と。そういう誇らしさが胸の中にあつた。

「酒と銃だけは覚えないとこのアメリカでは生きていけないぜノア。お父さんが遊び方を教えてやろう」

「あまり、変な遊び方は教えないでね……？」

そんな親父を母さんも愛していた。笑って、幸せな家庭だったというのをちゃんと覚えている。少なくともそこに不穏な何かも、不和もあつた訳じゃない。親父はちよつと馬鹿だけど、それでも格好良い男だった。母さんは賢く、そして綺麗な人だった。二人そろって、自慢の両親であり、そんな家庭で生まれ育つた自分も幸せな子供だった。少なくとも、

——目の前でぶつ放されたショットガンが母さんの頭をザクロの様に弾けさせるまでは。

痛い。

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い——痛い。

懐かしい夢を妨げたのは激痛だった。その事実に関自分がしばし、気を失っていたという事実を理解した。そして理解という意識の覚醒と共に激痛が体を貫く。体が熱い。神経が痺れるような痛みを訴える。水分が蒸発して目が乾く。体という体に無事な場所が感じられない。全身の血肉が渴いている。それでも死んでいないし、死ぬよりははるかにましだった。そう思えるのは一度死んだことがあるからなのだろう。

そう、あの苦しみと比べればなんだって遙かにマシに思える。

だからアレと比べれば、まだ——まだ、我慢できる。

「ノア、さん……！」

耳元に大きな声で、悲鳴に近い言葉が届いた。ゆつくりと開いた眼が、静かに音源へと向けられた。それは自分の腕の中に抱かれている存在であり、悲鳴に近い言葉を涙を浮かべる様に、恐れる様に口にしていた。高町なのはという少女は腕の中で、無事に見えた。だからその姿を片目で捉え、腕の中の姿へと軽いウイंकを送った。

「すこ、し、眠っちゃったみたいだ……な？」

喉がカラカラに乾いている。喋るごとに喉の奥が張り付くような不快感を感じる。だがそれを無視して起き上がろうとする。なのはを抱いていた両腕を解放しながら、ゆつくりと体を持ち上げる。解放されるのはは多少服装が焦げているものの、傷は僅かに見える。相変わらず、眼帯が滅茶苦茶目立つのだが。まあ、それは俺が来る前にやらかしたものだし許そう。

「っ！ 立っっちゃ駄目だ！ その体をそれ以上酷使したらいけない！」

立ち上がった体を止めるように、なのはと一緒に守られていたユーノが声を張り上げる。フェレットの姿をしている癖に、妙

に迫力のある奴だった。ひよこは——ああ、マフラーの内側で無事だった。というより、さっきの雷撃をマフラー経由で吸収してつやつやしているのが見える。マフラーにもかなりのエネルギーが蓄電できた。フォーミュラ用の外付けバッテリー構想にマフラーに電力を溜めておくことを考えたが、悪くないアイデアだったらしい。これならマフラーから蓄電した電気を吸い取れば、フォーミュラ稼働用のエネルギーを食わずに緊急補給できるだろう。

「貴方のそれは明らかに動いて良い状態じゃない。今すぐアースラに戻るべきだ……」

「ん？」

そう言われて自分の手を見る。

高圧の電流で体を焼かれたか、皮膚が焼けて爛れていた。凄まじく醜い裂傷が走り、服の下で出血しながら焼けた肉の匂いが僅かにする。指先が少しだけ、炭化している。間違いなく重症と表現できる。少なくとも即座に入院が推奨されるレベルの重症だろうと思える。体中が痛い。クソ程に痛い。というか煙草が衝撃で消し飛んでいる。ポケットの中に手をつっ込んで、煙草を箱で取り出し、

口に煙草を咥えて火を付ける。

ふう、と吸い込んだ煙を吐き出しつつ、フェレットを見下ろす。

「ん？」

「心配する必要があるかどうかちよつと疑問に思えてきた……つてそうじゃない！ 火傷が！」

「ああ、大丈夫大丈夫。ほら」

手をぐっばぐっば、開いて閉じて軽く跳躍する。それで体が全く問題なく動くことを証明する。無論、無理やり体を動かしているだけだ。呼吸するたびに激痛が走るし、今にも倒れそうだ。だがまだ耐えられる範囲だ。男のやせ我慢のやり方はずっと昔、親父に習った事の一つだった。だから見た目がどれだけボロボロでも、それを表情に出す事はない。

「なっ？」

「見た目はどうあがいてもぼろぼろな筈なのに……」

フレットが驚愕しながらも魔法で此方を回復して来る。ゆつくりとだが、焼けて爛れていた皮膚が回復するのが見える。回復魔法、便利で実に羨ましい。俺も使えたらいいのになあ、と思いつながら機竜の残骸へと視線を向け、召喚魔法で手元にジュエルシードを呼び寄せた。それを掲げる様に眺めてから親指で弾いて、まだ地面にぺたん、と座り込んでいるのはへと渡した。

「ほれ、それを封印してくれ。俺、そういう魔法というか適正大抵死滅してるから」

「え、あ、はい……」

どこことなく心ここにあらず、という様子なのはがジュエルシードを受け取り、それを握りしめて封印し、彼女が持つ杖の中へと封印される。ユーノが回復魔法を維持したまま、なのはの方へと視線を向ける。

「なのは、大丈夫？ 鉄人と違ってなのはは痛かったら痛いつて言うて良いんだよ？」

「俺に対する遠慮捨てたなこの畜生」

「考えるだけ無駄だつて解つただけだよ。……なのは？」

漸く俺の扱いを理解してきたフレットの言葉に軽口を返しながら、ジュエルシードを封印した直後のなのはの姿を見た。やはり、その少女の様子は何かを恐れているように見える。それを表情に出さない様に頑張っている物の、流星に何かショックを受けた後のように、取り繕えていない。

「Hey pretty girl、どうしたんだよ浮かない顔を浮かべちゃつて」

「え……」

半分呆けていたようなりアクションを返し、なのはが反応する。

「あ、いえ、あ……」

「なのは？」

ユーノが首を傾げ、心配する様になのはの名前を呼ぶ。なのはの様子がおかしいのは確かだった。怯える様な目の動きは——そう、悪いことをしてしまった子供の様に見えた。そして怒られることを恐

れている、そういう表情だ。自分も経験があるし、見覚えがある。だがそれをこの少女は異様に恐れている様に見えた。家庭環境があまり良くないのだろうか？

そう思っている間に、

「ご、ごめんなさい……」

震える様な声で、なのはが口を開いた。そこに続けるように言葉を吐き出そうとして、

頭に手を置いて、頭を撫でて止めさせる。

「No worries little girl」

「でも……」

「気にするな」

「でもー」

「気に、するな」

頭を撫でつつ、もう片手でサムズアップを向ける。

「子供がそんな顔をするな」

「……でも、私は、その」

「いいんだよ」

難しい言葉を口にした所で伝わるとは限らない。行動を示した所で納得される事の方が珍しい世の中だ。だったら解るように繰り返しすしかない。頭を優しく撫でてそれで親愛を示すしかない。大丈夫だ、と。怒っても怖がってもない、と。そりやあもちろん、痛いし泣きたい。

だけど、もう大人だ。自分のやった事の責任は自分で取る大人なのだ。

子供の間は失敗してもいい。その責任は大人が取るためにある。そしてそこから学んでくれればいいのだ。子供の間はそれが許されるのだ。だからちよつとした失敗や、その被害が俺に来た所で、それで怒るほど小さい男になったつもりはない。だから、

「ちよつと俺の顔がハンサムからダークヒーロー系へと転職したただけだから、気にするな」

「ぴよっ」

そう言うのと反応したひよこがマフラーに噛みつき、電気を吸い上げて何かの魔法を使った。即座に見覚えのある赤い結晶が肌を一瞬だけ覆ってから砕けた。そのあとに残されたのは、爛れた跡のない綺麗な肌だった。マフラーに蓄積されたエネルギーが全て消費され、ひよこもマフラーの中に潜る様に眠りについたが、

「Hmm... seems like nothing's left for you to worry?」

スマイルと共にサムズアップをなのはへと向ければ、反応に困る様な表情を浮かべ、

「いや、どうやったんだよ。僕の回復の手間と魔力返して」

「残念、俺にも解らなーい」

「うーん、どうやってキレようかな」

「ゆ、ユーノ君が見た事のない反応見せてる……」

その方がはるかにとっつきやすいからその方が楽だ。そう覆いながらサングラスに触れようとして、壊れているのに気づいて、服装とまとめてフォーミュラによる修復を行う。まだ、体内の痛みは一切変わらない。どうやらひよこヒーリングは見える部分だけを取り繕う程度の回復力しかなかったらしい。まあ、それでも見た目が整えられるのならそれで安心だ。

内臓が焼き千切れたような痛みがあるが、今は体内をフォーミュラが巡っている。そう簡単には死なないだろう。なにせ、死ぬときももっと違う。アレは痛いとか苦しいではなく、

表現するなら虚無感という言葉が一番近い。

まあ、それはどうでもいいのだ。問題なのはなのは落ち着いてくれたかどうか、なのだ。見た感じ、まだちよつと怯えている部分があるが、少しずつ落ち着きを取り戻そうとしているのが見える。

「Fine?」

なのはを見下ろしながら聞いてみれば、恥ずかしそうに頷きながら口を開いた。

「お、お手数かけました……」

「No problem」

第一、この子には生きていてもらわなければならない。そうしなければシユテルが消えてしまう……と思っっている。少なくとも俺なしでこの状況が進んでいけば、無理に出撃してそのまま雷に飲まれて消えていたのでは、と思えてしまう。そのためにもこの少女を守らなきゃいけないのだが、

「ジーク？ クロノ？ お前らの方はどうよ」

「なんや、連絡入れんから死んだかと思って葬式の事を考え始めてたわ。あ、フエイトも無事やで」

『僕もジュエルシードの確保は終えているよ。其方は無事か？』

「無事無事。超無事。お前ら人妻サンダー平気だった？」

『そのネーミングはやめろ』

『正確には未亡人サンダーやしな』

『そういう事じゃない』

「子供をクローニングで作ろうとしているんだから寧ろこれは子作りサンダーなんじゃないか？」

『そこはクローニングサンダーじゃないのか？ なんでそつちの方向？』

『子づくりサンダー。実質的にこれ、セックスやな？』

「なんだ、黒幕は欲求不満なのか」

『でもウチ、本気で飛ばす時は気持ちいいから、解るで』

『よし！ 君たち黙ろうか！ ほんとに！』

クロノは一々良いリアクションを返してくれるから、思わず馬鹿な事を連続で口にしてしまうが、まだ無垢なユーノとなのはは会話の後半部分が理解できずに首を傾げている。かなり賢いから忘れていたが、この少女たちはそういえばまだ、10にもならないという事を今さらながら思い出す。

うん、そんな年齢でセックスだとか解ってたら逆に気持ち悪いな。と、新しい通信用のホロウインドウが割り込んでくる。そこに映っているのはリンディの姿だった。

『良い感じに休めたかしら？ 此方はプレシア・テスタロッサの居る【時の庭園】への座標軸のアクセス、および時空管理局への援軍要請を

終わらせました。準備の方は宜しいでしょうか？』

「お」

自分とジークリンデの方へと向けてウィンドウが向けられている。

……雷が落ちた後の事や状況は見られなかったのか？

考えようとして、頭痛が酷くなる。考えるのを後に回す事にする。何時になったらこの頭痛や痛みから解放されるのだろうか？ もういい加減終わってくれてもいいんじゃないだろうか。そうじゃなければ戦いの方が先に終わるのだが。

そんな事を考えながらもリンデイの問いに答え、準備する。

テスタロツサ親子、再会の時は近づいていた。

Death

「Woo——Oh……痛い……ちよつとこれ痛い……」

凄まじい勢いで大地に衝突するも、望んでいたスーパーヒーロー着地を決めた瞬間、着地した片足から凄まじい衝撃と痛みを感じた。良く見れば自分の居る場所に軽いクレーターが生み出されていた。つまり、それだけの速度と衝撃で落下したという事実でもある。肉体を多少魔力を通して補助しているとはいえ、スペック的にはまだまだ人間の範囲だ。これだけの速度で落下着地を決めれば、痛いのも当然だろう。

「……大丈夫ですか……？」

上からゆつくりと降りてきたフェイトが確認する様に声をかけて来る。どうでもいいがバリアジャケットのセンスだけは絶対にどうにかした方が良く。この戦いが終わったら誰か、ファッシュン雑誌を片手に相談してあげて欲しい。切実に。内心でそんな事を考えつつ片手でちよつと待つて、と突き出す様に待たせる。それを見て合流してきたクロノが腕を組みながら頷く。

「アレは痛い」

「あの着地の仕方はね、膝にクるんだよ……」

なのはの肩の上のユーノも同意する様に言葉を吐づけた。ジークリンデとなのはも上から降りてきた。ジークリンデは近づきながら覗き込んで大丈夫か確認してくる。ああ、うん。今度からはちゃんと減速するよ。絶対にする。格好良いからと無駄にダメージを受ける登場はよしておく。

「手貸すで」

「Ok, ok……1, 2……3！」

「よいしょ」

「ん……い！」

ジークリンデに手を貸してもらいながら立ち上がりつつ、背筋を伸ばして両手で拳を握って、体に力を籠める。うん、膝が痛い。割れない？ 大丈夫？ たぶん大丈夫。割れていけば物理的に足が動か

せない筈だし。そういう状況でなければ余裕だ。だから問題ない。

「ふふ……F o o、F o o……よし、落ち着いたぞ」

「始まる前から一人自滅しそうだったけど、これで何とか全員揃ったね」

そう言いながらクロノが此方へと視線を向けてから、背後へと振り返る。その先に広がっているのが【時の庭園】と呼ばれる、プレシア・テスタロツサとフェイトが使っていた拠点であり——今ではジュエルシードを使って海鳴の上書きを果たそうとするプレシアが待ち構える居城だ。

だが【時の庭園】というネーミングの割には、

「ちよつと禍々しすぎない？ もっと、こう、鬼眼城とかそういうネーミングがしっくりくる感じの姿しているんだけど」

「まあ、庭園要素は欠片も見えないよね」

「今ではこんな姿ですが昔は……緑で溢れる場所だったんです。少なくとも昔はそうだったんです……」

フェイトがデバイスを強く握りしめながら噛み締める様に言葉を口にし、少しだけ俯いた。だがそうやって浸っている余裕さえもない。正面、庭園の奥の方から此方へと向かって接近して来る反応をフォーミュラが感知する。こちら辺の技能や魔法が完全に使えない自分の代わりに一瞬で仕事をしてくれるフォーミュラに感謝しつつ両手に6発装填されているリボルバーを握った。コアユニットからヴァリアントアームズへの変形がだいぶスムーズになってきた。自分の中で姿を変形させるプロセス、その処理に慣れてきた感じがあ

る。

それを肩に乗せてこんこん、と叩く。
「よし、そのババアの面に一発拳叩き込んで家族会議させる為に頑張るか」

「大体間違っていないけど言い方つてものを覚えた方がいいんじゃないかな?」

「せやで。今から絶縁届を渡しに行くんやから」

「絶縁しませんよ!」

「フェイトちゃん、その二人は真面目に話を聞かない方が良いよ……と」

ユーノがなのはの肩から降りて、魔法陣を出現させる。それによって庭園とアースラを繋ぐ、アンカーポイントの形成が完了された。とはいえ、ユーノは引き続きここに残る必要があり、アンカーポイントを通して犬耳の女———どうやらフェイトの使い魔らしい、アルフト呼ばれる奴がやってきた。こちらもアンカーポイントの護衛の為にここに残る。

その為、突入するのは若い少女二人、ギリギリ女と呼べるジークリンド、そしてプロフェツショナルな気配を漂わせた青年と、イケメン一人。

「凸凹にも程があるチームだな？」

「君がそれを言う？」

「年長者として俺が言わなきゃダメだろこれは」

「いや、だから君が言えた事じゃないよね？」

クロノへと向き合いながら良いか、と声を置く。その間にも入り口から走ってくるように傀儡兵が迎撃に出て来るのが見える。庭園の奥の方からは纏まった力の気配が———恐らくは一か所に集められているジュエルシードの気配がしている。それを全て一か所に集めて、プレシアは海鳴を上書きする準備を整えているのだろう。それをいったん無視し、

「いいか、クロノ。俺を見ろ」

「うん、見たよ」

「俺は格好良い」

「自分で言う事じゃないね？」

「つまり俺は正しい」

「この事件が終わったら一緒にミッドチルダへ来ない？ 一緒に腕の良い頭の医者を探すからさ」

「魅力的な提案だが———」

言葉を放ちながら横へと向かって引き金を引いて射撃し、同じタイミングでクロノが光弾を無数に浮かべて射出した。それが迫ってい

た傀儡兵に衝突し、上半身を破壊する。横に銃を向けたまま、言葉を続ける。

「これが終わったらカウチでピザ食ってコーラ飲んで腹だしながら寝る予定だ」

「クツッお、魅力的に聞こえるなあ……!」

「なんか楽しそう」

「でもお行儀悪くないかな……?」

「アンタ達若い子に教育の悪そうな発言するのやめてくれない?」

アルフの言葉に考えておく、と答えながら横から飛び込んでくる傀儡兵に対してクロノと同時にケリを叩き込んで吹き飛ばす。そしてそれが落下した先にジークリンデが飛び込んで踏みつけ、そのまま貫通して粉碎した。そしてそのまま、踏み砕いた傀儡兵の残骸を片手に、

鈍器としてそれをそのまま正面の集団にたたきつけて、上から殴り飛ばした。

残骸を射出しながら拳の衝撃でスクラップにし、破片をショットガンのように散らばせて後続の傀儡兵を一気に殲滅して行く。廃材から魔力をほとんど使用せずに殲滅する手腕は本当の意味で戦いなれている、という言葉を実感させる動きだった。

負けていられない。

「Let's rock then?」

一歩目、二歩目、三歩目を踏み出し、背後へと向かって引き金を引いた。その反動を加速に利用し、慣性を一気に乗せて前へと姿を射出し、ジークリンデの上を飛び越えて前へと飛んで行く。

そのまま、新しく出てきた傀儡兵の顔面に両足でドロップキックを叩き込みながら、その姿を入り口の中へと押し込んだ。

反動に足がしびれながらも後ろへと体を蹴り飛ばし、跳躍しながら下がって行く中でジークリンデが手を伸ばしてくる。伸ばしてくる手をヴァリアントアームズを切り替えながら伸ばし、

掴んだ。

「行つてらっしゃい!」

そしてそのまま、飛び上がりながら、掴んだ此方の手を引っ張り、上から下へと半円を描きながら方向転換し、逆さになりながら再び敵の方へと投げ込まれる。

それに合わせてヴァリアントアームズは次の姿へと変形を完了していた。

直径、2メートルほどの鋼の塊で、バレルを三つ備えたシリンダーの怪物。

そう——ガトリングガンである。

投げ飛ばされた状態で床に向かって落下しつつ、ガトリングガンを作動させる。回転しながら砲身から無数の弾丸が凄まじい勢いで吐き出され続け、それが周りの物質を喰らいながら弾丸へと変換して傀儡兵を一瞬で鉄くずへと変化させて行く。その間に鋼鉄の床を滑るように着地しながら、正面を弾丸の嵐で薙ぎ払った。

正面の第一波を薙ぎ払い終わった所で、ガトリングガンを片手で掴み、空いた片手で煙草を摘まむ。そのまま煙を軽く吐き出してから啞え直し、武器をリボルバーへと切り替える。

「早く来ないと、二人で食べつくしちゃうぞー？」

「つまりは実質的にデートやなー！」

ジークリンデが飛び越える様に前に出て来る。飛び抜けた姿の背後へとめがけて射撃を叩き込み、ジークリンデの攻撃が入る前に前方の集団に弾丸を叩き込み、炸裂するところにジークリンデが連続で拳を叩き込んでゆく。容赦のない破壊が拳から繰り出され、当然の様に傀儡兵が粉碎されて吹っ飛ぶ。まるで戦いと表現の出来ないジークリンデの蹂躪に、一瞬で10を超える傀儡兵がスクラップとなって庭園内部を舞う。

そしてそれを前へと吹き飛ばす様に爆発する光弾が連続で射出された。

勢いを乗せる様に加速したスクラップが隕石の様に降り注ぎ、バウンドしてからチェーン型のバインドがそれを掴み、爆発による推進力を得てフレイルの様に振り回される。寄ってくる傀儡兵がトラップの様にそれに引っかかって吹き飛ばされ、解放と同時に連鎖的に爆発

する。

その結果を生み出しながら後ろからクロノが飛んできた。

「僕も給料泥棒とか言われたくないから頑張らせて貰おうか」

クロノの言葉に続く様に桜色と黄色の閃光が太い砲撃となって横を駆け抜けた。そのまま薙ぎ払う様に放たれた閃光が正面の傀儡兵群をその根元から消し飛ばしながら正面の空間をクリアリングする。「あ、余りにも滅茶苦茶な戦い方だったから出遅れたけど……私も、行きます」

「うん。ほかの皆には負けてられないよ」

「こりゃレースになりそうだ」

言葉を放ちながら前へと向かって飛び出す。一気に加速する様に床を蹴り出しながらフォーミュラが捉えたジュエルシードの気配へと向かって走り出す。飛行しても良いのだが、飛ぶ事よりもやはり、走って地面を足元に残した方が感覚的には、動きやすい。なので飛ぶ事をいったん捨てて、

跳躍した。

先頭へと飛び出しながらリボルバーの引き金を引いて足場にする傀儡兵を破壊しながら今度は一回転を加え、壁に着地する。そのまま武器を剛斧へと切り替えながら壁を走って行き、斧を振り上げる傀儡兵へと向かって壁から跳躍する。

振り抜かれる大斧へと向かって同じように剛斧を振る、中空で衝突させ、一瞬で鏝迫り合いへと持ち込む。肉体と機械の差を考えれば誰が勝負に勝利するかなんて一瞬で理解できるものだが、

あいにくと、フォーミュラというイカサマをかませば一切の問題はない。

「H a i」

エネルギーを操作、方向性のベクトルを変換。押し出す力を押し返す力に切り替える。相手の力を利用して自分の勢いに乗せ、鏝迫り合いに勝利する。ごっそりとエネルギーを消費する感覚を得ながらも、大斧をはじき返し、そのまま剛斧を上半身に叩き込んで半分にする。そして手放される大斧を奪って、片手で握る。空中で落下しながら

体を一回転半程捻りながら投擲し、

回転しながら大斧がジークリンデへと向かって飛んだ。

跳んできたそれを蹴り上げながらジークリンデが掴み直し、片手のまま大斧を振るう。

空間をぶおん、と風を切り裂く音が後からやってくる風と共に吹いた。空間を薙ぎ払う様に放たれた大斧は空間を刈り取りながら、勢いを止める事無くそのまま投擲される。

轟音と共に庭園の壁が吹き飛び、傀儡兵を縫い付ける様に壁を貫通した。

「破壊活動は控えてくれないかな！」

「ちよつと撫でただけやからそうカツカセーへんでよー」

「ちよつと……う？」

「最終的にぶつ壊すんだからちよつとぐらい壊れても良くね？」

「証拠品として終わった後で調査するからダメに決まってるだろ!!」

クロノに怒られてしまったと、ジークリンデと顔を見合わせて肩を振る。それを見てジークリンデがにやり、と笑った。その指先はジュエルシードへのルートをまつすぐ——それこそ壁とかを無視して示していた。

腕を組みながら軽く唸り、悩む様なフリをしてから武器を槍へと変形させる。軽く槍を回転させてから握りなおし、腕の感覚を確かめてから魔法を発動させる。

ミッドチルダ式の召喚術をフォーミュラ・エルトリア式にリファイし、演算をフォーミュラに代演させる、ミッドチルダ・フォーミュラの召喚術。その性能はミッドチルダ単体だった頃よりも上昇しており、運用可能な状態へと成長している。

魔力の消費を開始する。

魔力の消費に伴い、フォーミュラが本格稼働する。放出される魔力を再集積する事で半永久的な無限運用を目指すとするシステムが稼働するが——無論、ロスのが大きく、魔力のみで完全運用するには相性が悪い。まだフォーミュラは未完成であり、未調整。その為、魔力だけでは全てを賄えないし、集められない。その為、そこに生命力

というエネルギーと、この次元に漂う次元の力を吸収して変換する事でリソースに変える。

それでエルトリア式の魔法陣、フォーミュラプレートを生産させて一瞬で取り込む。体を入れ墨の様に魔法陣が這い、刻まれる。オーラの様に僅かに淡く発光しながら、

マフラーから再び蓄電された雷撃を槍に纏わせる。

「らあっー」

そしてそれを全力で前方へと投擲すると同時にジークリンデと指を絡める様に手を繋ぎ、魔法が発動する。

ヴァリアント^{変形}ペネトレイター^{貫通}が正面の傀儡兵に突き刺さり、貫通する。それが向こう側へと抜けるのと同時に、

50メートルの距離を超えて貫通槍の背後に出現する。

何をやったかと言えば簡単だ。

自分とジークリンデを対象に召喚行使したのだ。

フォーミュラシステムでリンクしているコアユニット、ヴァリアントアームズであれば目をつむっていても存在を追える。その為、座標アンカーとしては一番優秀であり、下手に他の物を召喚するよりも、自分を召喚する方が楽という事実があった。その為、ジークリンデと接触し、自分という存在にジークリンデが呼吸を合わせて同調、

そして自分を召喚しただけだった。

なんとなく出来るかと思ったが、やはりできた。

やっぱり俺は天才だ。

そう思いながら握った手のジークリンデを全力で振るう。

その姿が床を蹴り抜きながら持ち上がり、そして正面にある、貫通して僅かに勢いの衰えた貫通槍の柄に近づき——蹴りが叩き込まれる。

更に破壊力と威力を増し、更にジークリンデの魔力を纏って食い散らかす範囲が増える。食い破る範囲と速度を増しながら貫通槍が更に凶悪になって突き進むのを、召喚術で自分を槍の背後へと召喚し直し、今度はジークリンデに振り回されるのを自分が槍の柄に蹴りを入れて加速させ、

更に、敵の壁を突き破り、

——その背後の庭園の壁も一気に粉碎する。

クレーターの様な破界痕を刻まれた壁は構造的にしばらくの分厚さの壁を挟んだら、別の通路へと繋がる様になっているのだろう。だが通れるわけではない。槍が分厚い鋼鉄の壁に食い込み、

「Come on!」

「行くよ!」

出現と同時に食い込んでいる槍の柄に二人で蹴りを叩き込み、壁を粉碎し、プレシアへのショートカットをルートが無視して開通する。

「人の! 話を!! 聞けよ!! 問題児!!」

貫通した壁の向こう側、流石に壁を破壊して突き抜けて来るとは予想されていなかったのか、その向こう側には傀儡兵の姿は見えず、背後の方から急いで追って来ようとするのを、フェイトの斬撃となのはの砲撃が片っ端から消し飛ばし、クロノが悪態を吐きながらその合間を縫うように光弾で的確にサポートする。

追いかけて来る傀儡兵を蹴散らしながら更に前へ、

——プレシアとの邂逅は目前だった。

Death II

「ほら、魔力は俺が一瞬で集めるから」

「せやせや、セオリーの的にここにかますのは悪くないで」

「でも……いいんですか？」

「その、この先は……」

「罠の可能性もあるし、突破するときは一気に制圧しながら突破するのは残念ながら正しいんだよ。本当に残念ながら……」

「だからほら、遠慮なく」

「えーと、では……」

「じゃあ……行きます！」

「Count 3……, 2, ……1……」

「カラミティバースト!!」

フォーミュラによって素早く集められた魔力がフェイトとなのはよって一瞬で作成された。バルディッシュと呼ばれるフェイトのデバイスの杖モード、そしてなのはのレイジングハートと呼ばれるデバイスの杖モード。その二つを交差する様に合わせ、正面、集められて圧縮された魔力球へと向けられる。一瞬の静寂が空間を貫き——
—混合収束砲が雷を纏いながら放たれた。

フォーミュラで集めた魔力をなのはの収束技能で掌握し、フェイトで纏めながら電撃を編み込んだ即席の合体魔法が放たれた。回転しながらうねる魔法の渦が砲撃としてはなたれ、直線状の物質を全て消し飛ばしながらその奥——プレシアが待ち受ける部屋、その入り口を一瞬で蒸発させた。

その破壊が生み出した結果を見たクロノが少しだけ判断を間違えたかな、と呟くのを無視し、破壊によって舞い上がった埃と煙によって正面が見づらくなっているものの、何らかの結果を生み出したのは解っている。

それまで啞えていた煙草を捨てて、踏みつぶす。そして前へと進む。軽く首を回しながら腕を回し、体の調子が最悪であることを確認しながら二挺のリボルバーを両手に、煙の向こう側へと向かって進んで

行く。既に、強力な魔力反応が感じられる。フォーミュラが感知する範囲では相手の気配の存続を確認している。つまり、今の戦略級とも表現できそうな合体魔法をあつさりと防いだという事実だった。

肺に残された僅かな煙を吐き出しながらその向こう側へと抜け、合体砲撃によつて完全に跡形もなく消えた先に進んだ。

その向こう側に広がっているのは、開いている空間だった。

庭園内の他の空間よりも綺麗に整えられていたであろう場所は、様々な機器が設置されており、それが舞い上がった埃煙によつて今は汚されていた。だがその奥、そこには片手の上に複数の宝石を浮かべた女の姿があった。

明らかにどことなく生気が足りていない。肌は艶の色を失い、体がやせ細っている。だが眼の中には覇気が見える。自分の意思を、覚悟を貫きとおすだけの覚悟を持っているのが見えてしまった。言葉では絶対に止まらないというのがそれだけで理解してしまう。こういうタイプの奴は物理的に達成不可能にするか、

或いは完全に心をへし折つて再起不能にする以外の手段がない。

だが部屋の様子を見る限り、大きな破壊が発生した様子はなかった。むしろエネルギーに関しては完全に手出し出来る領域を超越していた。直感的に倒す事が不可能だと悟り、部屋に入室した時点で足を止める。やせた女――、

「お母さん……」

「プレシア・テスタロッサ。お前を数々の次元法違反の罪で逮捕する」「フェイトちゃんのお母さん……」

同時に部屋に入り込んだ連中が思い思いに言葉を口にし、同じくプレシアから感じる力の差に足を止めていた。一人だけ、ジークリンデがあんまり深くは入り込まずに、すぐに出る事の出来る場所を確保していた。その姿をリボルバーに反射する姿に確認しながら、視線の先を追った。

その先に見えるのはシリンドーの中に浮かぶ、フェイトにうり二つの少女の姿だった。裸の姿のまま、水槽の中で浮かぶ姿はSF映画で良くあるような、改造人間とかが調整される為に入れられる水槽だ。

だがそれを見れば解る。凡その事情はフェイト、そしてその使い魔のアルフから通達されている。つまり、

アレが、アリシアという少女なのだろう。

「フェイト——忌々しい子」
「っ」

プレシアが憎しみを込めた視線をフェイトへと向ける。それをかばうようになのはが横に立ち、守るようにクロノが前に出た。だがほかの者たちを認識していながら、プレシアは視界には入れていなかった。此方がアクションを取ればそれに対応するが、聞く価値すらないという様子で無視している。ただ、その憎悪はフェイトへと向けられるだけだった。それが余りにも醜く、そして哀れだった。

この女に一瞬で言いたい言葉が積み重なって行く。だが言葉で通じる次元にはもう立っていないのが解る。

そもそもここまでやらかしている時点で言葉もクソもないだろう。

となるとこの女の計画を止めるのが一番早い。

軽く、銃で狙おうかと一瞬だけ考えるが、プレシアと此方を隔てるように、力場をフォーミュラが感知する。クロノも同じように打開策を探す様に、言葉が続けながらも突破口を探る気配を見せていた。

「そうじゃなかった。そうなる筈じゃなかった。何時だって世の中はそんな理不尽で溢れている。そんな事、誰だって経験している。誰だって同じことを思っている。お前が経験した不幸は別に何でもない、どこかで誰かが経験したどこにでもある悲劇だよ。同情はする。だけどそれが誰かを傷つける免罪符になる訳じゃない。お前はただの次元犯罪者だ、プレシア・テスタロッサ」

「そんな事はどうでもいいわ。アリシアが。あの子さえ戻ってくれば」

「私じゃ、駄目なんですか……?」

フェイトの言葉に憎悪の視線を向ける。その視線を受けたフェイトが一步下がりにそうになり——アリシア、というプレシアの言葉にヒントを得た。ああ、そうだ。別に近づく必要ねえじゃん、と即座に理解する。視線をアリシアの方へと向けて、それが可能かどうかを一

瞬で計算する。フォーミュラが追加されたおかげで演算領域が増えたのは嬉しい要素だった。

「お前は失敗作よ。忌々しい魔力の色。それにあの子はもつと明るかったわ。笑っていて、楽しそうにしている……アリシア……」

視線をシリンドーのアリシアへと向けて、指をスナップさせる。

「Summon」

シリンドーの中にあつたアリシアの体が消え、それが手元に召喚された。それを両手でキャッチして受け止める。

「あ、出来た」

「そう、アリシアじゃない。お前はアリシア——アリシア!？」

話の途中だったプレシアが一瞬で動きを停止させ、視線を此方へと向けて来る。だがその姿に一番早く反応したのはクロノだった。

「良くやった——《ストラグルバインド》ツツ！」

その一瞬、最愛の存在を奪われた瞬間プレシアに生まれた隙間をクロノが逃さなかった。その一瞬で拘束魔法をクロノが叩き込み、プレシアの動きを一瞬だけ拘束した。それに合わせ抱いていたアリシアを後方へと全力で放り投げ、フェイトとなのはからドン引きの視線を受ける。ついでにプレシアからも発狂しそうな声が響く。

だがそれをジークリンデが確保する。

「エレミアデリバリーサービスやでー。アースラにお届けものや！」
「待つ——」

アリシアを受け取ったジークリンデが全速力で戦場を離脱する様に走り出した。それを追おうとプレシアがバインドを一瞬で破壊し、求めるように伸ばす手にリボルバーの弾丸を打ち込む。素早く叩き込む五連射がプレシアの障壁に阻まれ、弾かれながら衝撃を生み出す。即座にその障壁魔法がフォーミュラによって登録され、解析が開始する。合わせるようにクロノが連続で光弾を炸裂させてプレシアの視界を制限する。

「アリシアを——」

「Bulls Eye」

言葉を遮るように連続で射撃する。弾丸はまっすぐと飛翔し、プレ

シアを守る障壁を——貫通した。一瞬、驚愕の表情を浮かべてプレシアの姿が揺らいだ。それと同時に三発、弾丸がプレシアが片手の上に乗かべていたジュエルシードに衝突し、その制御を離れた。

「Summon, and it's time for snack
chick」

「ぴよっ！」

弾かれた三つを召喚魔法で即座に奪い、それを指で弾いてマフラーの内側へ、ひよこへとパスする。それを受け取ったひよこが俺よりもうまくエネルギーを引き出してくれる。ジュエルシード三個分のエネルギーがひよこによって引き出され、フォーミュラの稼働へと回される。髪が淡く光を纏い、そして燃料を得たフォーミュラが全身に力を送り込む。

漸く、まともに魔導士と戦えるだけのスペックが体に備わって来たのを感じられる。不足していたエネルギーをこれで満たした。

「お、のれ……！」

「悪いな、昔から手癖は悪いんだ」

「終わったら管理しなきゃいけないから返せよ？」

リロードする様に破壊された扉を弾丸へと変換し、装填しながら12発の弾丸をプレシアへと向かって叩き込む。だがプレシアもアリシアを奪われたショックから既に戻っている。素早く回避する様に体を滑らせながら、腕を振るって紫電を放ってきた。雷速はとてもだが人体が回避できる速度を超越している攻撃である為、

放たれた時点で視線に乗っている状態では、回避する術はない。

故に腕と視線の動きを見て先に体をズラす。

細かい動きは出来ない為、魔力と身体能力任せに横にブーストする様に跳んで転がる様な動きに近く、直後紫電が空気を焼き焦がしながら薙ぎ払われて来る。それをクロノが妨害する様に《ステインガースナイプ》が発射され、プレシアに連続で衝突しながらその姿を妨害する。

だがジュエルシード13個というエネルギー源を得ている魔女の姿はその程度では揺るがず、放った紫電を半ばから散らす程度の効果

しか発揮できていない。だがそれでも紫電が吹き飛んだ。

即ち、攻撃が一瞬途切れる。転がる動きをそれで中断しながら飛び込む様に自分をプレシアの背後へと召喚する。

「Behind you」

恐らく正しい使い方じゃないし、他人が出来るとは欠片も思わないが、それでもミッドチルド式とエルトリア式が融合した結果、通常の運用とは思えない魔法の結果を生み出していた。

射程が次元を超えられず、100メートル程度である事実には変わらないが、

「Detonation」

淡く髪も、服装も、マフラーも発光する。体内のナノマシンが最大活性モードへと入る証であり、同時に本来想定された出力へと達した証でもある。それにより凄まじい勢いでエネルギーが吸い上げられ、消費されて行く。だがそれは素早く動く為の能力を体に与えてくれる。

言葉を放って銃を構えるまで余裕で割りこめた。庭園内での転移行動は不可能らしいが、召喚魔法はまた別ジャンルなのかもしれない。そんな事を考えながら迷う事無くプレシアへと背後を向けたまま、銃を肩越しに連続で射撃する。はじけるような音と共にプレシアの纏う障壁が破壊される。カウンターで放たれる放電を擦り抜けるように自分の再召喚で回避しながらカウンターに対するカウンターで蹴りを叩き込む。一瞬で纏われ直された障壁をそれで砕きながら、紫電を突破したフェイトがバルディッシュを振り上げて接近した。

「お母さん！　なんで、なんで……！」

「貴女が、アリシアじゃないからよ。なんで、アリシアにならなかったの……？」

「話すだけ無駄だ。彼女には現実が見えていない」

バルディッシュとプレシアの握るセプターが衝突し、二人の間に雷光が舞う。素早く巻き込まれないように距離を開けて、片腕で閃光から目を守るように掲げる。閃光が収まった瞬間にフェイトの悲鳴と共に、その姿が弾き飛ばされ、入れ替わるようにクロノが腕を振るう。

足元が凍り付きながら氷がプレシアを縫い留めるように襲い掛かってくる。

だがそれを粉碎する様に足元を紫電が這う。逆に侵食する様にフロアの床全体を紫電が侵食し、強制的に回避するために浮かせてくる。

それを薙ぎ払う桜色の砲撃が地面を引きはがす。そうやってできた、雷の剥がれた空間に武器をリボルバーから直接叩き込める武器へ、

「This is……」

鞘に収まった武器を腰に構え、隙間に潜り込む様に前傾姿勢になりながら倒れるように体を前へと飛ばし、プレシアの懐へと一瞬で潜り込む。そして鞘に納められた武器を、

刀を抜き放った。

「IAI……i!」

「邪魔よ」

居合を放つのと同時に空間を完全に雷が満たし、感電しながら自分の姿を飛ばし、回避に入る。だが受けたダメージと衝撃自体は消しきれず、位置を変えた直後に衝撃に体が転がり、刀を納刀しながら、

「Got you」

「くっ!」

自分が発生させた斬撃を再召喚した。僅かに数秒というラグを経て、放った居合の斬撃が再召喚再配置され、直接プレシアの体に叩き込まれる。フォーミュラの特性により、解析された魔法は触れた瞬間に分解できる。その為、ヴァリアントアームズから放たれた斬撃は障壁を貫通してプレシアの体に傷を付ける。それによって体が揺らいだ瞬間、

「リリカルマジカル! ジュエルシールド、封印!」

なのはが即座に封印魔法を放ってプレシアが支配していたジュエルシールドを剥がす。また三つ、プレシアの支配する手の中から弾かれたジュエルシールドがレイジングハートの中へと吸い込まれて封印された。揺らめくプレシアの姿にクロノとフェイトがバインドを放ち、

その姿を拘束する。

だが雷が再びプレシアを拘束するバインドを破壊し、その体が一瞬で解放される。

握る杖から放たれる雷が部屋を破壊しながら増大し、一切の躊躇がその目の中から消える。

「アリシアと過ごした庭園……壊すのには躊躇してたけど。こうなつてしまつては仕方がないわね——ここ諸共貴方達を滅ぼしたらアリシアをゆつくりと返して貰うわ」

そう言葉を吐き捨てながらプレシアは口の端から吐血していた。その言葉は強がりの様に聞こえるも、

更に高まるジュエルシードから解放される力、それによって開始する時の庭園の鳴動。それらを感じた後では、プレシアの言葉が強がりに聞こえる事はなかった。

「女をボコす事は趣味じゃねえんだけどなあ」

だが殴らなきや止まらない奴だつて世の中には居る。ならば物理的に止めたうえで心を折らなきやいけない。

その為にも武器を刀から変形させ——チェーンソーへと変える。それを担ぎながら痛む体を見捨てる、

再び、踏み込む。

今度は本気のプレシアを叩きのめす為。

Death III

『——理屈は解らないけど、君ならあの障壁を砕けるんだろう？
こっちで援護するから、君で切り込め』

『接近戦で攪乱します……母さんを、止めて見せます』

『砲撃援護とジュエルシードの即時封印は任せてください！』

素早い念話のやり取りが一瞬で行われた。それと同時にV^{ヴァリアントアームズ}A
を変形させながら飛び上がる。

「Cover!!」

「任せ——ろっ!!」

言葉と共にクロノが足を床に叩き込み、そこを氷が張った。広がるように一瞬で床一面に氷の地面が生まれた。そしてそれをプレシアが破壊する前にフェイトが粉碎する様に動いた。勢いよく振り上げたバルデイツシュを、斧の様に床へと叩きつける。同時に発生する放電が氷面を粉碎し、震動しながら粒子に変えて一気に巻き上げる。

即席の氷の煙幕の完成だった。

「Detonation!」

燃え上がるように力を発揮する。後ろへと向かってVAリボルバーを射撃しながら瞬間加速を最高加速へと変質する。超加速Gの負担も、《点火》したフォーミュラの状態であれば、もはや気にする必要のないレベルで能力が上昇している為、問題なく感覚も、肉体も追いついてくる。故に吹き上がった霧の中、

瞬間的にランダムに周辺に自分を再召喚する様に連続で居場所を切り替えながらVAを変形させて、プレシアの直ぐ横に姿勢を低くした状態で出現する。片手で透明の武器を振るい、

一切の躊躇なく殺すつもりでプレシアへと向かって叩き込んでゆく。

だがそれはスパークと共に弾かれる。

プレシアは一步も動いていない。

だが彼女を守るように雷の剣が浮かんでおり、それが自動迎撃する様に動いた。初見の魔法であるがゆえに、即座にフォーミュラが解析

を開始する。だが攻撃を弾くのと同時に、雷剣が閃いた。動き出す前に先に回避用に自分の姿を飛ばし、プレシアの反対側へと回り込み、再び透明の武器を振るう。

雷剣が阻む。

「成程——何故この環境で転移ができたかと驚いたけど」

消える。加速する。天井を足場にする。だが展開される雷剣は10を超えて、20を超えて、30に到達する。もはや斬撃の結界の様にプレシアの周辺を舞う。

それへと向かって頭上から逆さまに、回転しながら落下する。その足をバスターが薙ぎ払い、魔力を魔力で喰らい合って雷剣を消し飛ばす。そのまま加速する様に斬撃を振り下ろした。

「こういう事ね」

不可視の攻撃が腕の軌跡だけによつて視認できる攻撃として発生し、プレシアを掠める。その姿は歩いてても飛んでもいないのに僅かに回避できる程度にずれていた。着地すると同時に斬り込む様に踏み込み、武器を背に通す様に引つ掛けて薙ぎ払うも、相手の動きが一瞬だけ消えて僅かに離れ、回避される。そして迎撃に放電される。

「Fuck! 真似するのは酷くないか!？」

空間全体を満たす様に放たれた雷に、逃げ場なんて存在しない。

目の前の空間を満たす様に出現する雷は容赦のないプレシアの攻撃だった。消えるなら、逃げるなら、だったら空間そのものを攻撃で満たしてしまえば良いという単純な対処法。最もシンプルであり、しかし対処が困難な攻撃手段。

だがこういう系統の攻撃が来ると解っていれば即座に離脱する事ぐらいは出来る、

即座に自分を後方へと飛ばして、距離を空ける。そしてそれに割り込む様にフェイトとなのはが前に出る。同時に杖を差し出す二人の正面に多重のシールドが出現し、それが部屋全体を覆う雷をせき止める。だがジュエルシールドによる攻撃は容易くなのはとフェイトを合わせた魔力を超えるだけの破壊力を保有している。

「抑え、きれいな……いつ……!」

「ここを突破されたら終わるぞっ！」

クロノが片手を前に突き出し、フェイトとなのはのシールドを強化する様に自分のシールドを加える。それに合わせ此方もクロノの肩をタップし、周辺の魔力を直接シールドへと注ぎ込む事で合体シールドを一気に強化する。凄まじい圧力と熱量が正面から放射され続け、なのはたちが僅かに押し込まれる。エネルギーを外部供給して強化しても、一つ一つが兵器クラスのエネルギー体を十数個使っているプレシアの攻撃は、到底耐えられるものではない。

防御に回った時点で磨り潰される事が確定する。
なら、

対処法は——突っ込む以外にない。

喧嘩や殺し合いの経験だったら此方のが上である自信はある。だが魔導士、魔法を使う経験、知識に関しては相手が上だ。だからこそ俺の使っている物を見て、即座に判断し、コピーなんて真似ができたのだ。

ガラスが割れる様な音と共に表面を覆っていた不可視の膜が剥がれ、その下から黒をベースとした赤い文様に刻まれたデスサイズが出現する。実用性という言葉からは程遠い言葉だが、レヴィやフェイトが使っているのを見るとどこことなくこのウィザーディングワールドでは人気の武器なのかもしれない。フォーミュラの力を込めて刻まれている赤い文様を発光させ、同時に出力を上げる。

「うっし、突っ込むぞ」

「待て、この中をか？ 自殺行為だぞ」

「大丈夫大丈夫、我慢するのは得意だし、ここで大人が体を張らなきゃ何時張るんだ」

正面からプレシアへと向かって飛び込もうとした瞬間、マフラーの中からひよこが頭を出してきて頬を叩く。

「ぴよっ、ぴよっ！」

「ん？ What is it?」

「ぴよぴよ！ ぴよっ！」

「Hmmm……」

「びよびよっ！　びよっ！」

「Ok, let's try that」

指をスナップさせながらひよこに賛同すれば、クロノが手を前へと突き出したまま振り返ってくる。

「え、会話成立したの!？」

「二人は結構余裕ですね……?」

玉の様な汗を浮かべながらクロノとなのはのツツコミが入る。そこでツツコミを入れられるだけの余裕があるなら大丈夫だな、と軽く笑いながらVAを再変形させ、それをリボルバーへと戻す。ひよこの言っていたシステムを検索し、見つける。フォーミュラシステムの中にある、この状況を打開できる力。

エネルギー消費量に関しては目を反らし、この数秒で終わらせる事を決意する。

「System activation——」

言葉と共に体内のフォーミュラが超過駆動を開始する。ジュエルシードから供給されるエネルギーを蒸発させるように消費しながら、全身を完全にフォーミュラの反応が、オーラが包んだ。全身の筋肉が引き千切れるような感触と共に、口を開いてシステムを稼働させる。

「Accelerator——!」

叫び声を響かせるのと同時に世界の全てがスローモーションに突入するのが見えた。まるで深海の底に押し込まれたように体が重く感じる。感覚が何倍にも引き延ばされるような感じの中、体を動かそうとすれば空間から肉体を剥離させるような痛みが生じる。だがその痛みさえ堪えれば、

世界が停止したように見えた。

プレシアの雷でさえ——止まって見える。

全身を包む燃え上がる様なオーラを引き連れながらシールドを飛び越え、一瞬で電撃で満ちた空間へと飛び込む。だが止まったような加速世界の中では、その紫電の合間にはわずかながら、潜り込めるだけの隙間が存在するのが見える。普通であれば絶対に入り込む事出来ない、雷の間に生じる僅かな隙間。

アクセラレイターが稼働している間はその合間に入り込める。虚空を蹴って跳躍、滑り込む様に雷と雷の間を滑り込みながら接近し、超加速された世界の中で、プレシアに正面から接近し、

銃口をジュエルシードを浮かべる片手と、そして腹へと向ける。

ミッドチルドダ式の非殺傷魔法を込めながら、

引き金を引いた。アクセラレイターの効果を受けた弾丸がプレシアに射撃と同時にぶつかり、障壁を貫通しながらプレシアの手首と腹部を穿ち、それがアクセラレイターの圏外へと抜けた瞬間に衝撃がスローモーションの世界に沈む。プレシアの表情がゆっくりと、徐々に時間を取り戻しつつある世界と共に、驚愕に満ちる。電流が少しずつ此方へと向かってくるのが見えるものの、

一切気にせず、リボルバーで射撃しながら同時に殴る。

ゼロ距離、殴る威力と射撃する破壊力、その二つを推進力へと変えながら同時にプレシアの障壁を割り、体力を割り、そして魔力とジュエルシードへの干渉も喰らう。超過駆動を開始したフォーミュラは今まではとは完全に違う、本来予定されたスペックで圧倒的な力を発揮する。殴りながら行う射撃でプレシアの体が引き延ばされるように押し出され、連続で発生する射撃がその体を打ち付ける。これで本当に非殺傷なの？ 大丈夫？ 死なない？

そう思った直後にアクセラレイターが限界を迎えて速度が元の時間へと帰還する。

それと同時に雷電が殺到する。

「がっ——」

全方位から叩き込まれて来る雷に苦痛の声が一瞬漏れる。それ以上の言葉が口から出るのを食いしばって堪えるも、次の瞬間には痛みが感覚が消え去った。その感覚に、久しぶりに通り越してはならない痛みのラインに到達したのを自覚した。

まだ痛みは痛みとして認識できている間がセーフだ。

それを超えた場合、痛みは消える。

だが既に射撃と殴打によってプレシアが保有するジュエルシードはその片手から放たれて、部屋に撒かれた。魔法は粉碎され、そして

口からは喀血しているのが見える。それが彼女を蝕むものか、或いは自分の攻撃であるかは不明だが、十分に役割は果たせただろう。

俺が全部持つて行くのも悪いし、サムズアツプを向けながら素直にそのまま倒れることにする。

「今夜は一本4000円のワイン開けても許されると思う……」

全身を貫く雷の感触を味わってから倒れる。

破壊された床のゴリゴリとした感触が顔面に衝突し、地味に痛みを覚える。だが役割は果たした。十分に。もう心配する必要もない。

既に三人の子供たちが飛び出していた。

「後は、任せろっ……!」

「ワインも?」

「それは自分で買え!」

「終わったらウチのケーキ御馳走しますよ!」

「えーと、えーと……!」

「無理にしなくていいから!」

「子供が……!」

軽口になのはが乗り、フェイトが乗ろうと頑張つてクロノがツッコミを入れて——しかし動きは止まらず、即座に対応が連続で続く。バインドがなのはの手によって入り、最速で動くフェイトがジユエルシードを回収する。そして完全に力が剥がされたプレシアへと向かってクロノが潜り込みながら杖を持たない手をプレシアへと向かって伸ばす。

当然のようにバインドを破壊したプレシアが回避しようとする。障壁でクロノとの間に壁を作る事で一瞬の離脱の為の時間を作ろうとする。

だがクロノの伸びる右腕が——当然のように障壁を貫通した。

その手は、僅かに淡く、フォーミュラの光を纏っている。態勢を整えようとするプレシアの表情が驚愕に映り、憎悪の炎が目映る。だがそれよりも早くクロノの手が障壁を貫通し、その向こう側のプレシアへと届いた。

「『ブレイクインパルス』」

「がっ——」

「母さん！」

プレシアが吐血しながらクロノの必殺を受けて後ろへと倒れそうになり——踏みとどまる。吐血しながらも最後の一线を精神力だけでプレシアは堪えた。魔法を放つように魔法陣を出現させ、

「まだよ、私がや——」

「ディバイン！ バスター——！」

何かを喋ろうとしたプレシアの言葉が終わる前にその姿をなののは砲撃が飲み込んだ。なのは本人もプレシアが何かを言おうとしていたのを放った後で気づき、小さくあつ、と声を零すも、既になのは砲撃は放たれ、完全にプレシアの魔力がその体から吐き出され、

言葉さえも失い、完全に意識を失ってその姿が倒れる。

その姿を見てから、全員の視線がなのはへと集まる。

「ふ、不可抗力！ 不可抗力ですから！」

焦りながら両手を振りながら無実をなののはが主張するが、完全に見てから放ったという疑惑が存在する以上、

この事件はプレシアの敗北と共に迷宮入りする事なった。

若干、情けない終わり方だが、

それでも、この戦いはこうやって結末を迎えた。

Death IV

「内臓損傷。喉は重度の炎症。火傷は当然炭化まで行われる密度。目は視力の低下が確認されている。その上で複雑骨折。神経の一部が切断されている。当たり前のように肉離れと筋繊維の断裂、血管は千切れて内出血を起こしている。それらを全て考慮した上で体内で改造作業が進んでいる」

クロノがドン引きした様子でカルテを読み上げながら視線を此方へと向けて来る。

「なんで君は生きてるんだ」

「ピースピース」

包帯に包まれた両手を持ち上げてダブルピースを浮かべる。全身が痛い痛いはずと思っていたが、そこまで体の状態が酷いとはまるで思いもしなかった。とはいえ、死ぬ時よりはまるで大丈夫なので、問題ないと思っていたのだが、そりゃあ痛いに決まっているわ、と、漸く自分の状態を聞かされて重病人という状態に納得がいった。こんな怪我、普通は負う事も出来ないだろうが、それを可能にしてしまうあたりが実に魔法という存在のファンタジー染みている部分だった。

クロノの話聞きつつアースラの医務室、ベッドの上で足を組む様に座っている。その直ぐ横では何時、どこで入手したのかは不明だが、ナース服姿のジークリンデがポテトチップスの袋を開けてくれたので、それを口元へと運んでくれるのを食べている。一緒にコーラもある為、アメリカンスタイルで休めている。このジャンクに秘められたエネルギーこそがアメリカ人を癒す最大の力だと思う。

アメリカンスタイルでリラックスする。後はテレビとスーパーボウルさえ放送していれば最高だった。

「病人！ だって！ 自覚を！ しろよ！」

「大丈夫、ステイツの人間はポテチとコーラ食って飲んで寝てれば治るから」

「胃もダメマジ喰らってるから休めって話だよ!!」

「はい、あーん」

「あんむ」

「だから！ 手を止めろよ!!」

クロノがカルテの乗っていたホロウインドウを地面へと叩きつけるように割った。半分キレている様子が見て取れる。その横で一緒にお見舞いに来てくれていたなのはが苦笑いを零すのが見える。ミッドチルダ単体の技術、そしてアースラの設備ではなのはの失明を治療するのは難しいらしく、なのはの右目は未だに眼帯に覆われた状態だった。だがそれ以外の傷の治療に関しては、魔法とアースラの技術でどうにかなる範囲らしく、見た感じは治ってきている様に見える。

ただ、ここにフェイトはいない。

彼女は現在、拘束中のプレシア・テスタロッサと話し合っている最中だ。

ポテトチップスの袋が空になった所で、それを潰して、ごみ箱の中へと魔法で飛ばす。ミッドチルダ式とフォーミュラ・エルトリアとの魔法融合は今の所、上手くいつている。ただ、どこことなく違和感を感じているのも事実だ。まだまだ、魔法の成長が出来る。それを含めて自分にはまだまだ課題が残っている、という感じだろう。

「ふう—— 食い終わったらし散歩するか」

「するな。フリじゃないからな。本当に」

クロノの額に青筋が浮かぶのを笑いつつ、仕方がないなあ、と片膝を立てる様に姿勢を崩す。ジークリンデもコスプレに飽きたのか、ナーズ服を何時もの露出の多い戦闘用の服へと上書きするように切り替え、ベッドの端、自分の横に座ってくる。クロノは痛がるように片手で頭を抑えつつ、ため息を吐く。

「君も治療が終わったらプレシア同様、聞かなきゃいけない話がたくさんあるから、一緒に本局にまで同行してもらおうから。だから、頼むからそれまでおとなしくしていてくれよ」

疲れ切ったクロノの言葉に小さく笑い声を零した。

——プレシアとの戦いから1日が経過した。

◆
戦いの後の顛末になる。

なのはの容赦のないバスターを喰らったプレシア・テスタロツサは魔力欠乏症でノックアウト、そのまま魔力封印措置をかけた上でアースラに拘束された。これによりプレシア・テスタロツサが始めた一連の事件は終わりを迎えた——という訳にはならない。

当然、事件とはその後の事情聴取や原因、再発の防止を行ってから初めて終わるものである。首謀者が捕まったから事件が解決したという事にはならない。ジュエルシードは全て確保され、封印された。そしてプレシア・テスタロツサが捕まった。だが彼女が何故こんな凶行に走ったのかをまず、彼女自身の口から聞き出さないとならない。その上でフェイトの身の振り方、押収されたもの扱い、現地協力者の今後。そういうことを含めて全部どうにか処理してから事件は漸く終わる。

つまり事後処理が地獄の様にある。

プレシアの件とフェイトの件はもちろん、そこに自分の案件もある。

嘘をつくのが面倒になった結果、違法の魔導士扱いになった上、危険な技術を使っているから調査が必要。どこから、何故、どうやってという話をしなくてはならない事になった。時空管理局は正義を守るのに忙しいらしい。

だがそれだけではなく、管理局援軍の本隊が到着する話もある。

完全に破壊されてしまった海鳴市を再生する事、そしてそれだけではなく今回の事件、常に魔力を使って封絶結界という魔法を使っており、そこに隔離して眠らせていた海鳴の人間を呼び起こし、その上で記憶の処理を行う必要もあるらしい。今回の件、プレシアによる被害が大きすぎて、そう簡単にその後の処理が終わらせられそうではないという話だった。

事件が残した爪痕は大きい。

だが今回の件、時空管理局という存在も流石に放置する事は出来

ず、全力をもって事件の前の状態まで修復するつもりでいるようだった。まあ、巻き込まれた側なのだからある意味当然というか、当たり前というか、時空管理局が時空の平和と安全を守るつもりがあるんであればそれぐらいはやって貰わないと困る。

そうやって、事件から1日が経過した今、

簡単な治療が終わり、フェイトは関係者を連れて面会へ、クロノは事後処理の為に奔走し、

自分は病室に隔離されていた。

◆

「全く——いいから、怪我が治るまで絶対に動くなよ?」

そうやってクロノが病室から出て行く。半ギレの様子を見せているが、それでも間違はなく心配しているのは事実だった。根が善良で優しいという事は見て解る。だからこそ良いリアクションを見せて来るし、からかいたくなるのだが。そんなクロノの姿を見送るも、病室にはなのはが残った。ジークリンデもいる、こいつに関しては事件終了後、アリシアをアースラに預けてから常に一緒だから気にしていない。

悩むだけ馬鹿々々しい。

いや、面倒というべきか。

ジークリンデからは悪意の類を感じないので、深く考えるだけ無駄だという事を悟っただけなのだが。

それはそれとして、なのはが残っていた。少しだけ言い辛そうに両手を後ろに回し、その、と声を零す。その続きを促す事無く、なのはの言葉の続きを待っていると、なのはが口を開いた。

「その……ありがとうございます」

そうやって、なのはは勢いよく頭を下げた。

「何度も庇ってくれた事、本当にありがとうございます」

「Ah……」

なのはの真面目な行動に、どうしたものか、と頭を抱えてしまう。

それをジークリンデがニヤニヤと横から見、笑っている。趣味の悪い奴め。そう思いながらどう、言葉を返せば良いものか、それを悩んでしまう。真面目に対応すればいいのか。茶化せばいいのか。このなのはという少女は自分が思う以上にデリケートな少女の様に思える。

こういうタイプの奴は、真面目に不真面目に生きてきた自分とは、ちよつと縁の薄いタイプだった。

「ガーディアンの時も、プレシアさんと戦うときも、攻撃が来ない様に出で受けに行つた事、本当にありがとうございます。そしてそういう事をさせてしまつて、ごめんなさい」

そう言つてなのは頭を下げていた。その言葉からは責任感の様な物を感じられた。まるで、なのはが何かに失敗したような、なのはが悪いような、そんな自罰的な言葉だった。最初は茶化そうと考えたが、公園でのやり取りを思い出し、あの時のなのはの様子を思い出してから、

茶化すのは良くないな、と判断する。

視線をジークリンデへと送れば、頷きを返して病室から出て行つてくれた。人払いを済ませた所でベッドの上でもうちよつとまともに座り直し、視線をまっすぐとなのはへと向ける。

「なのは、感謝してるんだよな？」

「はい。その、私の力が足りなくて迷惑をかけちゃつたから……」

「そーかそーか」

真面目にそう言い切るなのはの姿を見て、軽く息を零す。膝に肘をつきながら、片手でちよいちよい、となのはに近寄るように示す。此方が呼んでいる気配を感じたのか、なのはが視線を上げてから、無言のまま近づき、

その額をデコピンで弾いた。

「あ痛っ」

いきなりのデコピンになのはが額を抑える姿を、軽く笑う。

「なーにがThank youだ。頭おかしいんじゃないのかお前」

「え、ええ……？」

なのはの困惑する姿を見て軽く笑い声を零す。だからいいか、と言葉を置く。この子に伝わりやすいように日本語を吟味し、選ぶ。まあ、英語の方が得意なのだが。それでも日本人が相手なら、日本語の方が伝わるだろう。

「いいか、俺は確かに良い事をしただろう。世間一般で言えばこれは美談かもしれない。自分の身を捨てて、誰かを助ける。とても良い事に思えるだろう?」

「はい」

その言葉になのはが頷く。なのはがその言葉に同意したのを聞いて、言葉を続ける。

「だからこそ気持ち悪いんだ」

「気持ち、悪い?」

「おう。自己犠牲は美しいかもしれない。正しいだろうし、良い事でもあるし、美しいかもしれない。だけど気持ち悪いんだ。それがなぜか解るか?」

なのはが困ったように、頭を横に振る。

「自己犠牲は究極のエゴイズムだからだ。究極的に誰かの為じゃない。自分のエゴイズムをそう主張するから自己犠牲になるんだ。だから気持ち悪い。いいか、俺がやった事は決して素晴らしい事だと思っちゃいけない。この馬鹿が、もつとうまくやれよ。馬鹿が、気持ち悪いんだよお前。それぐらい強く批判しなきゃダメだ」

「え、でも、そのおかげで私は助かりました……よ……?」

「それでもだ。それを絶対に肯定しちゃいけない。いいか、俺には親父も母さんも残っちゃいねえ。どっちも既に死んでいる。だから多少を無茶した所で心配する人はそんなにいないだろう?」

少し誘導する様に言葉を放てば、なのはが即座に返答してきた。

「そんな事ありませんよ。私も、クロノさんも、ジークリンデさんも心配しますし、私だって……」

なのはの言葉に頷く。そしてその言葉になのはがあっ、と声を零した。この子は賢い。だから全てを説明するよりは、自分で気づかせる方がきつと、意味があると思う。だからそうだ、と頷く。

「親父も母さんも死んだ。だけど生きているうちは誰かとまた出会って、仲良くなつて、そして付き合いつなが出来る。そうすれば自然と心配されるし、心配もする。自己犠牲つてのはそういう連中からの心配を全部蹴り捨てて、それでもやるんだ——つて最低のエゴイズムになる」

だからこそ、気持ち悪い。その言葉に尽きる。

「でも……ノアさんは解っていてやってるんですよね?」

「俺は俺の事が嫌いだからな」

「自分が、嫌い?」

そう、自分の事が嫌いだ。無力で、誰かに頼らないと生きていけないような俺の存在そのものが嫌いだ。消えてしまいたい程に自分の存在が嫌いなのだ。その点に関しては——やっぱり、なのはは似ていると思う。彼女の態度から何となく似ている部分があったと思うのだが、たぶんこれがビンゴだと思う。

「だけど俺達は生きているんだ。生きているし、生きていかなきゃいけない。自分がどんなに嫌いでもそれに折り合いを付けなきゃいけないし、そんな嫌いな自分自身の事を好きになつたり心配してくれる連中だっている。それは友人かもしれないし、家族かもしれないし、或いは恋人なのかもしれない」

だけど、嫌いな自分の事を好きでいてくれる人がいるのだとしたら、

消えたいとか、死にたいとか、そんな事は言っていられない。

「そういう連中の為に、俺達は無事である義務がある。解るか?」

「……」

その言葉になのはが小さく頷いた。なのでそのリアクションを見ただうえで、

「ま、俺はそれを理解した上で滅茶苦茶やるけどな」

「今までの話はいったいなんだったんですか!？」

なのはのツツコミに笑い声を返す。

「そらお前、気持ち悪く、身勝手なエゴイズムよ」

笑いながらなのはの頭を撫でる。髪の毛がくしゃくしゃになるの

をなのははどうしたらいいかが解らず、受け入れている。

「俺が好き勝手暴れて自分を犠牲にするのは俺の勝手だ。その結果、俺を心配する人が心を痛めるって結果も理解している。俺はそれを理解した上でこういう風に振る舞っている。心配させないような言葉遣いと我慢の仕方だつて覚えた。その上で俺はこうやって体を張っている。俺がそうしたいからだ」

で、と言葉を置く。

「俺みたいに突き抜けた考え方しているなら別にいいけど——少しでも家族の事を考えるなら、考えられるなら無理して通す、何て事を考えない方が良いで。少なくとも傍から見ていると気持ち悪い奴なだけだからな」

そう言つてから笑う。それを受けたなのははしばし、無言を貫いていた。呆然としているのか、驚いているのか、或いはいきなりこんな話をされて困惑しているのか。まあ、正直どれでもいい。眼帯をした少女の姿はどことなく絵になる物がある。だがそれと同時に、その痛々しい姿はあまり直視したいものではない。

なのは間違いない、この戦いを最後まで付き合う必要はなかった。それでも眼帯を装着したまま戦いに赴いた。

その精神性は間違いなく危険だ。

英雄的であり、独善的であり、そして破滅的だ。らしくもないが、自分を見ているようでどこことなく不安を感じたのも事実だった。少し、喋りすぎたかもしれない。そう思いながらも片手で自分の頭を軽く搔いて、なのはの頭から手を退ける。

「良し！ 小言終わり！ 帰っていいぞ」

「……」

そう告げられたなのは少しだけそこに立ち尽くし、足を止め、此方へと視線を向けて来る。

「……」

口が何か言いたそうに開き、そして閉じる。そしてそのまま頭を下げた。

「ありがとう、ございました」

「おう。ちゃんと休めよ」

何かを言い返す事もなく、溜め込む様な様子を見せてるのは病室を出て行った。最後の最後で何かを言うのかなあ、とは思ったのだが……結局の所、なのは口に出さずに抱えてしまった。その様子に少女が背負った影の大きさを少しだけ感じられた。とはいえ、ここら辺は全部自分がどう思うか、どう感じるか。そういう事に繋がるのであまりしつこく言った所で逆効果にしなければならない。

自分の人生に対してどう、折り合いを付ける。

若い頃ならふーん、そつか、で受け入れて柔軟に変わる。

だが無駄に賢いと、考える事が増えすぎて変われなくなってしまう。年齢の割になのはは達観しており、同時に賢さもある。それが原因なのだろうとは思う。

「……はあ。シュテル……」

眩きながら片手で顔を覆う。結局の所、自分の中に引つかかっている物はそれで、そして口出ししてしまうのもそれが原因なのだろう。「戻ってこれたのか？ どうなんだ……」

片手を枕の下に差し込み、そこに分解して隠していた煙草をフォアミュラで再構築する。口に咥え、ライターを探そうとした所で、ライターに火を付けて差し出してくるジークリンデの姿が目の前にあった。一瞬、煙草を落とすようになったが、口元にライターを寄せてもらい、煙草に火を付けて貰う。

ゆっくりと煙を吸い込んで——そのクソのようなまずさを堪能する。

吸い込んだものをゆっくりと吐き出し、煙が検知されないようにある程度離れた所で分解しつつ、視線をベッドの再び腰掛けたジークリンデへと向けた。

「結局、お前はなんだったんだ」

「酷いなあ、ウチやって心臓向けて狙撃されて来る雷を荷物抱えながら逃げ回ったのに」

「いや、そうじゃなくて……ああ、もういいや。どうせまともに答えないだろうし」

「にやりーん」

「口で言うかお前」

相変わらずとぼけた様子のジークリンデの姿に諦めつつ、煙草を口に啣えたまま、ベッドに浅く背を預ける。枕の部分が寄り掛かれるように立っている為、完全に寝転がる様な形にはならない。こういう形を変えるベッド、うちにも欲しいなあ、なんてことを考えながら天井を見上げる。

あの女、俺達と戦いながらそんな事をしてたのか……。

見えないところで殺意の高さを披露していたらしい。まあ、それが此方に向けられなかったのは運が良いというか……いや、ジークリンデがずっとアリシアを抱えていたからか、と納得しておく。

「で」

「でっ」

ジークリンデがベッドに腰掛けた状態から、此方にしな垂れかかってくる正面に体を預ける様にしながら、頭を肩に乗せてくる。

「どや、目的は果たせたん？」

「さーてね。俺よりもお前の方がそれに関しては知ってそうだけどなー。なー?」

「どうやるねえ?」

視線を合わせ、溜息を吐き、天井を見上げた。ああ、ちよつと自己嫌悪。あんまり、他人を疑ったり考えたりするのは好きじゃない。もっと、こう、頭を空っぽにして暴れる方が百倍楽なのだ。もっと世の中に簡単になつてくれないだろうか。あの少女たちが無事かどうか、早く知りたい。だけど帰りの手段が解らない。俺はどうやってあの場所に戻ればいいのかだろうか。

それとも帰り道はないのだろうか?

まあ、今は療養しないと話にならないが。

「ただ……」

「ただ?」

ジークリンデはただ、と言葉を置くと少しだけ言葉を選ぶ様に眼を閉じ、

「頑張つて、辛い目にあつて、そして勝ち取ったもので報われへんのは間違つてるとは思うよ」

「そう思うか?」

「ウチはそう思うよ。なのはちゃんやフエイトちゃんもそうやけど、にーちゃんが体張つて頑張つたんやから報われなかつたらそれはそれで間違つているとは思わへん?」

「だけどそこで報われないのが世の中じゃないのか?」

「ならそんな世の中がおかしいんやろ」

「そりゃ、まあ、そうだな」

苦笑する。まあ、確かにそれもそうだ。だけどそのままならなさが、世の中の醍醐味という奴でもある。努力した所で報われる訳じゃないし、成功する訳じゃない。それでも努力をしなければ、起きる筈の成功さえもやってこない。そんな理不尽な世の中に俺達は生きている。

ほんと、どこもクソだ。

人生に希望を見失いそうだ。

ただ、まあ、それだけじゃないし。世の中、捨てたもんじやないのも知つている。それにほら、美女や美少女が居る分にはもうちよい頑張れる。見ているだけで人生楽しくなってくるし。自分のものになつてくれれば言葉もないのだが。

「どころで」

「ん?」

ジークリンデが言葉を向けて来ると、手を伸ばし、啜えている煙草を軽くつまんで外してきた。

その直後には軽く唇を重ねて来た。下唇に軽く噛みつくように唇を合わせてから外し、ジークリンデが此方の口に煙草を戻してきた。体を寄せた状態のまま、もぞもぞと首元でジークリンデの頭が動き、耳元に息を感じる。

「なあ、そろそろ溜まつてるんやない?」

ジークリンデの指が脇腹を撫でて、腰へと降りて行く。そのアピールだけで何を求めているのかは明白だった。この女の得体の知れな

さに一瞬萎えた事もあったが、胸に押し付けられる柔らかい感触と、ジークリンデの女の匂いに、そそられる部分があるのも事実だった。

「いいのか？」

「ウチは何時でも準備はええよ。ずっと、な」

挑発する様な艶めかしい声の気配に、病室という誰かが入ってくるかもしれないというシチュエーション。そしてちよつとした、自分への頑張ったご褒美というのを言い訳に、空いていた手をジークリンデの背後へ——腰へと、抱き寄せる様に回した。

「体が痛いから激しくはダメだぞ？」

「調子に乗ったらごめんな？」

これ、絶対に激しくなる奴だ……。

その予感を確信しつつ、空いている手で煙草を取り、吸い始めたばかりのそれを握りつぶして分解しつつ、此方へと顔を向けてきた女と唇を重ねた。

Death V

たわわに実った魅力的な胸をジークは持ち上げると、勃起している逸物が戦闘装束の胸部下部、そこに空いている穴に差し込まれる様に降ろしてきた。やや熱が籠っている胸の間に挟み込まれた逸物が、肉厚な胸の感触に挟まれ、思わず声を漏らしそうになるぐらいの心地よさを感じる。ベッドに転がっているのにやや浮かしそうになる腰を堪えながら、完全にジークの胸の圧力に驚かされていた。

「ふふ、どうや？　ウチの胸もそう悪いもんやないやろ？　視線が偶に向いてたの知ってるで」

「ほんとごめん。余りにも素敵だったから」

「仕方がないなあ、にーさんは。それともこういう場やし、ノアって呼んだ方ええか？」

「まあ、そっちの方が格好付くしな」

ジークリンデが軽く笑いながら了承し、逸物を納めた胸を体諸共動かす様に圧迫し、圧力を軽く変えながら刺激して行く。乳圧の心地よさに一瞬で果てそうになるのを、何とか表情を維持して堪える。両側から挟み込んでくる柔らかさ、肌のすべすべとした感触、そして何よりも絶妙に刺激して来る圧力の強弱。明らかに解っているというやり方でジークリンデがパイズリをしてくる。

「お前、素人じゃねえなこの動きは……！」

「ウチはやった事ないからパイズリ処女はノアのもんやで？」

そう言いながらも完全に絞りに来ている動きでジークリンデが刺激して来る。胸に逸物を挟んだ状態で体を擦り付けるように上下に動かし、両手で胸を挟みながら圧力を変え、逸物を全方位から刺激して来る。これが初心者技だなんて誰が認めるものか。百戦錬磨の怪物の動きでしかない。

「やだ、まあ、エレミアって名前は色々あるんや」

ジークリンデがちよつとペースを落とし、此方に聞き入るだけの余裕を与えながら口にする。

「ノアはエレミアって名前の意味を知らんやろ？」

「ぐっ……聞いた感じ、相当危ない傭兵集団ってイメージだけどな？」
「まあ、間違ってるんで。今の次元世界は時空管理局ってシステムに支配されている状況や。だから武力や治安は時空管理局によって保たれている。傭兵なんて必要のない時代なんや、普通はな？ でもウチらの一族は普通やないんよ」

ねつとりと、絡みつくような動きでしごきながらジークリンデが言葉に向けて来る。偶に動きの仕方を変えて、与えて来る刺激の方向性を変えて来るのが心地よく、此方の油断を誘って搾り上げてこようにとする。だが負けない、負けられない。生死の境をさまよった事で割と下半身が限界を迎えているけど、このまま簡単に果てるなんて勿体無い。セックスするって言質取ってるのだ。やるならばち込んでからじゃないと気が済まない。

「で、普通じゃないって？」

「ウチの一族、技能、経験、特性を継承する様にご先祖様が改造されているんや」

ジークリンデが話を続ける。

エレミアという一族は強さだけに全てを捧げた一族だ、と。

「だから先代の経験と技能、そして特性を継承してもっと強い子供を産んで行くんや。そうやってエレミアの一族は最強の戦士を生み出すという使命を抱いているんや」

だがリンデイの言葉によれば、事故でエレミアの一族は死んだらしい。

ジークリンデを除いて。

「だからウチが現時点ではこの次元世界最強の女やで」

「なんとも夢のあるタイトルだな」

「好きやろ？ そう言うの。ベッドの中でウチを屈服させられたらノアのが上やで？」

挑戦的な事を口にしながらもジークリンデは射精させようと胸の間に挟んでいる逸物に向かって軽く舌を伸ばす。そのまま亀頭を舌先で軽く突く様に刺激しながらなぞり、少女らしさを一切見せない妖艶な姿で煽ってくる。ああ、クソ。こいつの言葉が本当なら、そうい

う経験もこの女の中に収束されているという事なのだろう。

「反則的な設定だな……！」

「設定は言わんといて」

呆れた表情と言葉にジークリンデは胸の動きを止めて此方を見ていた。その様子に小さく笑い声を零す。

「まあ、最強だなんだって言われても実感ないし。お前の胸が気持ち良さの塊だってことぐらいしか解らねえわ。お前のおっぱい次元世界最強でいいぞ」

「嬉しいような、嬉しくない様な……」

これで喜んでたらそれなりに精神状態がやばいと思うので、喜ばなくて正解だと思う。

そんな事を口に出す事もなく、ジークリンデがパイズリを続ける。それで逸物を乳の熱に挟まれながらも、ジークリンデ側も少しずつそれで興奮してきているのか、息が荒くなってきているのが解る。その瞳が少しずつ熱を帯び始め、吐息に艶めかしさが混じる。時折胸に挟んだ逸物の動きを止めては、その匂いを嗅ぐように鼻を近づける。

そのどうしようもない、雌の仕草に興奮する。ジークリンデの胸の中で自分のものが更に硬度を持つのを感じる。そろそろ耐えられる限界に近い。そろそろ射精る、という所でジークリンデが胸の動きを止めた。

「だあーめ」

そうやって今までは射精させようとしていた動きを止めて、此方が落ち着くのを待つように体を静止させていた。

「ああ？」

「一人だけ先に気持ちよくなるのはウチがやっぱ切ないわ」

そう言うとガチガチに勃起していた逸物を引き抜く様に胸を持ち上げ、体を這いあがってくる。その際にも体の柔らかさを見せつけるように体を押し付け、擦り付けるように体を這いあがった。そうやって顔の届く距離までやってくると、ジークリンデと密着している下半身部分から、ジークリンデの下半身を守っていた薄布が消える気配を感じた。そう言えばバリアジャケットと呼ばれる戦闘装束は、自由に

解除できるというのを聞いていた。

湿った感触を陰部に感じる。

ジークリンデの体が邪魔になって見えないものの、露出している彼女の女性器が此方の逸物に擦り付けられているのが感触で解る。

上半身を押し付けるように寄せてから、此方の肩に顎を乗せ、それから下半身だけを動かす。素股で愛液を塗りたくるように、勃起している逸物を下半身で抑え込んで腰を前後に揺らして擦り付けている。その行為はどことなく、雌の獣が自分の所有物にマーキングしている様にも見える。

「ああ、駄目。やっぱりコレ欲しい」

うっとりする様な声色で耳元にジークリンデが囁いてくる。実はこの子、前世はサクユバスか何かだったのではないだろうか？ そんな事を思う程度には興奮する様な声の色をジークリンデは口にしていた。昨日まで見せていた戦っている時やふざけている時とはまるで予想さえ出来ない女としての声に、興奮が高まる。

「ね、そろそろいいでしょう？」

勃起している物に擦り付けて来るジークリンデが腰を上げて来る。押し倒されていた逸物がそれで跳ね上がり、亀頭に膣口を定めて滑らせてくる。

そのじれったさに我慢が出来ない。

ジークリンデの腰を抑える。

「あつ」

期待する様な声をジークリンデが零し、手を後ろへと回す。それ自分の陰部へと持って行き、僅かにジークリンデの腰が降りた。

亀頭の、その先つぼが愛液に濡れた感触に僅かながら包まれ、膣肉の暖かさを先に感じた所で、先端でキスする様にジークリンデが腰を下ろしたのを理解する。

その瞬間、抑えた腰を一気に下に引きずり下ろした。

「あつ、ん、っ——！！」

勢いよく腰を下ろしたジークリンデの膣奥に逸物を叩き込んで、完全に抑え込んだ。その勢いでジークリンデの上半身が跳ね上がり、騎

乗位で仰け反るように体を持ち上げた。上半身が完全に持ち上がり、ツイントールを勢いよく揺らしながら持ち上がった姿で、漸く結合部が見えて来る。根本まで逸物を完全に啜え込んだジークリンデのそれからは、僅かに血が流れており、それが彼女が処女であった事を証明していた。

勢い良く叩き込まれた事で絶頂したジークリンデは潮を噴いて半ば、意識が朦朧としているのが解る。絶頂にわなないている膣が突っ込まれている逸物を絞り上げようと収縮を繰り返し、一気に射精感を煽る。それに堪えきれず、ジークリンデの腰を掴んだままそのままだに遠慮のない中出しを決める。堪えていた射精、それを逃がさないように掴んだジークリンデの奥へと遠慮なく注ぎ込みながらも、それで連続で絶頂して震えるジークリンデの姿を見て、

更に犯したくなる。

射精したばかりでも足りない。まだむくむくと獣欲が沸き上がってくる。突っ込んでいる膣を抉るように更に強く押し付け、ジークリンデの奥をほじるように抑え込む。その一つ一つでジークリンデが感じ取っている。完全にペースを失って膣に収められている物に感じ入っている。発情している証に目の焦点が合わず、胸を揺らしながら頭をガクリ、と降ろす。

腰を押し込みながら更に押し込む。

もつと、もつと犯したい。この女がぐちゃぐちゃになって蕩けきる姿を見たい。あのすました表情の強い女を屈服させたい。

沸き上がってくる獣欲に促されるように、ジークリンデを掴み、

「き、消える、私達が消えるんですか？ あ、嫌、嫌だ、まだ消えたくない！ 消えたくないんです、お願いします、神様、私、漸く恋を――」

「……」

始めようとした動きを止めて、抑え込みながらゆっくりとジークリンデを抱き寄せて、背中を軽く叩く。

「Hey, are you alright?」

軽く背中を撫でながら肩に頭を乗せるジークリンデに挿入したまま、語り掛ける。まだ逸物は勃起しているし、興奮が強く残っているのも事実だが、

なんとなく、このままジークリンデを思うままに犯すのは違う、様
に感じられた。

そもそもシュテルやレヴィ、ディアーチェ達が消えた状況で何を
やってるんだ、って話でもある。

シュテルの消えた瞬間の言葉を思い出したら、今まで自分の脳内を
支配していた熱の様な物が一瞬で消え去った。そんな気がした。

「ふうう、ふうう……はあ、はあ……ふう……」

倒れ込んだまま、必死に息を整えるようにジークリンデは呼吸を整
えようとしている。その間に無自覚に締め上げて来るジークリンデ
の膣穴に搾り上げられそうだが、一回射精した事もあって少しは自制
心が戻ってきた。それでもまだ、ジークリンデを犯したくなる熱病の
様な衝動が胸の中にある。それを抑え込みながら、ジークリンデの背
を撫でる。

「ジークリンデ?」

「ちよ、ちよい待って、なっ、んっ、ひっ……はあ、はあ……体が敏感
になってるんや」

小さく喘ぎ声を零しながらジークリンデがそう言う。少しずつ何
とか敏感になった体を抑えようとして、小さく快感にあえぎながらそ
れを堪える。首に抱き着く様にジークリンデが腕を回し、密着する体
に胸の感触を感じる。その柔らかさに更に硬度を増そうとする逸物
に自分の本能の正直さを感じつつ、

「ふう、やばいわ……本格的に動かれてたら頭が完全に吹っ飛ぶ所
やったわ。はあ……ありがとな、おかげでちよい落ち着いたわ」

熱に火照ったような頬の色を見せながらジークリンデは僅かに体を持ち上げて、此方に顔を向けてきた。

「あかん……ほんと屈する所やったわ……」

熱い吐息を未だに零しつつ、ジークリンデがそう口にした。だがそれには流石に呆れる。

「いや、それは」

「都合が良すぎる、やろ？」

ジークリンデが引き継いだ。ジークリンデの口から出た言葉は今しがた自分がちょうど思った事であり、そして同時に抱いた疑問でもあった。都合が良い。都合が良すぎるのだ。

そもそもが、だ。

こつちに来てから物事がトントン拍子に進みすぎていないか、と。

「んちゅっ……れる」

「おい」

「ああ、今は落ち着いとるから気にせんといて。適度に盛り上がってるだけやから。ちゃんと話す理性は残しているで」

そう言いながら再び倒れ込んできたジークリンデは首筋にキスして来ると、舌を伸ばしてそのまま味わうように舐めてきた。

「んっ……ほんとあかんわ。この匂いだけでイけそう」

恍惚である事を感じさせる色を言葉に感じさせながら、ジークリンデが言葉を漏らす。だが先ほどとは違ってちゃんと理性が残っているのも解り、先ほどパイズリしていた時と同じく、ちゃんと頭が回っているのが理解できる。だがそれとは別に、同時に何か、浮かれているようなものを彼女からは感じられた。

そう、

彼女と初めて会った時の様な、そんな熱だ。

此方もそれに負けずと軽く尻を掴んで、今度は布に守られていないそれを両手で鷲掴みにする様に抑えながら感触を楽しみつつ、

「都合が良い、か」

その言葉をジークリンデが首筋に顔を埋めつつ、匂いを嗅ぐように顔を擦り付けて肯定する。射精してすっきりした筈なのにまだまだ

余裕のある自分の感覚と、そしてがりがり削れて行く理性を何とか保ちつつ、言葉を口にする。

「ジークリンデ」

「ん？」

お前は、

「何を知っているんだ……？」

意味深な言動と行動。まるで解っている様に合わせて来る姿は、怪しきしかない。妙に最初から好感度が高く、擦り寄ってくる。その動きに不信感を覚ええないと言えば嘘になる。だがそれ以上にこの女は、献身的であろうとする。その謎めいた奉仕精神が、更に疑惑を深める。

こいつは何かを知っている。

しかも俺が知らない何かを、俺よりも。

故にこうやって繋がっている今、それをジークリンデに語り掛ける。半ば快楽で脳味噌が蕩けながらも、意識をはっきりとして言葉をジークリンデへと向ける。

その言葉を向けられ、ジークリンデが唇を笑みの形へと歪めるのが解った。

「知りたい？」

耳元に口を寄せ、囁きながら耳を軽く舐る。未知の感触に背筋が軽く震えるのを感じつつ、

「ええよ」

ただし、

「魔力と才能と引き換えでならええよ」

悪魔の様な言葉を放った。

Death VI

何を言ってるんだこいつ。

それはつまり、武器を捨てろと言う言葉でもある。当然、魔力は動力源だ。フォーミュラを動かすのには魔力が必要だ。こいつがなきやフォーミュラは別のエネルギーを使わなきゃいけないし、それは魔力よりも遥かに非効率だ。そして才能——唯一残されているのが召喚魔法の才能だ。プレシアは圧倒的な経験と知識から俺がやった事を一瞬でコピーした。だがそれでも、アレは戦況を切り開くために必要な能力だった。それがなくなったらもう、魔法なんて使えないだろう。そもそも魔力を捧げるのであれば、魔法もクソもないだろう。

それと引き換えにジークリンデは自身の知っている事を語ると言っている。

恐らくこの女は必要以上に知っているのだろう。それはジークリンデの言動と反応を見ていれば解る。そして此方を同時に試している。此方がそれを捧げるだけの覚悟があるのかどうかを。それを見抜いた上である、と答えるだろう。

ならその言葉の通り実行するだろう。

故に回答は致命傷に繋がる。ここでそうであると答えれば、ジークリンデは容赦なく奪ってくるだろう。そしてこれは力だ。俺の力だ。俺が成し遂げる為に必要な力だ。これがなければ何も出来ない。故にこの力を手放す事は出来ない。失えばこの先、自分がどうやって戦えばいいのかがまるで解らない。これは失えないのだ。自分が知る唯一の戦い方であり、これを失えば俺に武器が消える。

だが同時に、この女は核心に近い部分を理解しているという直観的に感じ取っていた。

この女からその事実を聞き出せば——それで多くが変わる。少なくとも流されるだけでなく、自分から知って、理解して動けるようになる気もする。だがそれを起こす為の力が消えるのであれば、意味はあるのだろうか？ その事実もあるのだ。その事を考えると話

に乗った時点で何もできなくなるのだから、

だが聞かなくて後悔するのは自分だと断言も出来る。

聞くべし。ただし、その時には意味はもうない。自分に達成するだけの力がない。

「都合良く新しい力に目覚めるってのはないで」

それを肯定する様にジークリンデが言葉を囁いてくる。此方が困惑するのを楽しみつつ、答えを待ち望んでいるような気配を感じる。答えて欲しいのならもうちよつと優しくしてくれ。そう思い、

——考えるのがめんどくさくなつた。

「ふんっ！」

「んっ、あつ」

ジークリンデの尻を押さえ、下から全力でジークリンデを突き上げた。挿れただけで達しそうな程極上の密壺に一瞬で意識を奪われるも、熱病を精神力で抑える。そしてそのまま、連続で下からジークリンデを突き上げ、感じる射精感のままにジークリンデの膣奥へと先端を押し込みながら一気に射精する。今回は込み上げて来るそれに逆らわない。妊娠させるとかそういう考えを頭の中から叩き出して全力でジークリンデの膣へと精液を流し込む。

「うっ、ふっ、ふうう、ぐっ、はあっ」

いきなり全力で逸物の蹂躪を喰らったジークリンデが必死にこらえるように両手で此方の両肩を掴みながら、食いしばりながら快楽に流されないように歯を食いしばっているのが見える。それがまた、非常にそそのる光景で悪い。また腰を動かしたくなってくるのを軽く息を吐いて流しつつ、

「ふう、一発抜いたら頭空っぽに出来た……」

「今する必要あったん？」

「ごめんって。丁度良い所に遠慮なく使える穴があったから。」

ふるふると快楽で震えるジークリンデの姿を見ながら決めた。

「よし、やろう」

その言葉にジークリンデが此方へと視線を向けて、全ての動作を停止させた。そのまま数秒此方を見定めるように眺めてから、確認する

ようにその口を開いた。

「ええんか？ 言っておくけどウチ、本当に消すで」

「おう」

「もう、都合の良い夢は見れないで」

「早くやれよ」

「……」

此方の返答を受けて、ジークリンデは本気である事を悟った。それを受け入れて数秒間ジークリンデは沈黙し続けると、急に背筋をぶるりと震わせ始めた。それとを感じる膣の収縮にジークリンデが達したことを理解し、一気に逸物を絞られる。

「ぐ、お………」

締りの良くなる膣に声を漏らしながら、ジークリンデが倒れ込み、上半身を押し付けた状態で腰を叩きつけるように上下に動かす。小気味の良い打ち合う音を響かせながら体と顔を押し付け、ジークリンデが腰を動かす。その締まりの良さと打ち合う強さに、一瞬で脳髓が蕩ける様な覚えを受ける。

「お、お前………」

「はあ、はあ……ええで、それを求めるならウチが叶えたる」

声に熱を込め、倒れ込んだ状態から顔を持ち上げるとジークリンデは此方へと視線を向けた。そのまま軽く首を伸ばし、此方の顔によって唇を向こうから重ねて来た。そのまま一気に舌を絡めて来る動きに、凄まじい求めをジークリンデから感じられる。半ば襲われるがままに口内をジークリンデに犯された所で、

ごっそりと、何かが欠けるのを感じた。

それは先ほどまで、自分を満たしていたはずの魔力だった。平均以上はあると言われたそれがジークリンデと唇を重ねた後には大きく削れていた。

「ぶっ——はあ、感じるやろ？ 自分の中から余計なもんが消されるのを」

余計なもの、とジークリンデが表現する。そう、余計なものだったかもしれない。自分の中から魔力が消え去ったというのに、そこには

大して喪失感はなかった。寧ろ重りが取れたような、そういう感覚があった。

そして同時に、ジークリンデと繋がる所から、自分が体の内側へと侵食されているような感覚があった。ジークリンデから自分へと流れ込み、何かを潰して殺して消しているという感触。だがその感覚は腰を動かすジークリンデによって紛れる、薄れ、そして快樂へと変わる。

やがて我慢が出来なくなる。ジークリンデの尻を掴み直すと、此方からも腰を下ろすジークリンデの動きに合わせて突き上げる。

此方はその動きに関わり始めることで、ジークリンデの声から嬌声が漏れる。明確に女としての声を零しながら感じ入るように上半身から力を失い、キスを求めるように顔だけを上げて舌を伸ばしていく。それに応えるように此方からも顔を降ろして唇を重ね、唾液を交換するように舌を絡め合わせる。恋人でもないのにキスに積極的な様子には驚きつつも、びっくりするほどに此方の体から快樂を絞り上げて来るジークリンデの中にまた、

精液を吐き出す。

それでジークリンデが絶頂して膣が蠢く。逸物の奥の奥にある精液のカスまで絞り上げようと別の生き物のように膣が動き、中から精液を吸い上げる。その感触にまた射精感を感じて吐き出しつつ、自分の体から力がごっそりと消えて行くのが解った。

幻想的な、非現実的な、ファンタジーな能力。

それが消え去って行く。

まるで夢が終わるように。

射精して、ジークリンデに犯されて、蹂躪して、侵略されて、中身から余分な入れ物が消し去れたような気がした。頭が妙にしつかりと、すつきりとしている。熱病の様な自分を突き動かすものが消え去って、心が落ち着きを取り戻す。それと同時に思い出したかのような痛みが全身を襲う。今の今まで黙っていた体中の傷、その痛みが目覚めたかのような感触だった。

「ぐお……おお……糞、痛え……！」

「どう、や？　ウチの中、気持ちええやる？　■■■■よりも全然ええと思うんやけど」

誰かの名前をジークリンデが呟いたそこだけ妙なノイズがかかり、まるで聞こえなかった。だが彼女がもはや遠慮なく、ネタバレの類を行うつもりであるのは確かだった。射精しきって、精液を吐き出し切った状態で軽く呻きながらジークリンデが軽く腰を動かして犯してくるなすがまま、言葉に耳を傾ける。

「知る、か。そんな名前も聞いた事のない奴」

「名前、だって、解るなら上出来や」

ええか。

そう言いながらジークリンデが腰を下ろした。深く、深く体内に逸物を導き、啞え込みながらジークリンデは合一した状態で語ってくる。

「これは夢や」

「……夢」

「そう、ウチも。ノアも、役者の一人でしかない夢や。壊すならまず誰が夢の主か、思い出さなきゃならんのだ」

セックスしている状況でそんな真面目な事を言われても……と、思ってしまうが、快楽で脳味噌が蕩けている筈なのに思考はクリアだった。そしてはつきりと、ジークリンデの言葉が聞こえて来る。

「そっちとこっちは違う。だがそれぞれ相互に影響しているのは事実や。故にこっちを動かすならそっちで、そっちを動かすならこっちからや——ええな？」

ジークリンデがその言葉を告げると、此方の首に腕を回し、抱き着いた。息を荒くしながら抱き着いた状態、それでもジークリンデに体内の中から、フォーミュラ以外の魔法技能が根こそぎ消されているのを感じ取れる。乱れに乱れても、それでもやるべき事を果たそうとしているのが解る。だがそこまでしてこの女を突き動かすものが解らない。だが、それでも彼女が献身的に尽くそうとするものを感じた。

「ノア」

恋人に囁くように、ジークリンデは名前を呼んだ。それに背筋が震

えるのを感じつつ、上半身を漸く持ち上げて、見下ろす様に腕を立てたジークリンデの姿を見た。

その瞳はどことなく濡れている様に見える。

「わけ、解らねえ……」

「今はそれでええんや。だけど、こつちを選んだんやで？ —— 後

悔したらあかんよ」

そう言うとジークリンデは動きを止めてから此方の胸に両手を当てるように添えて、戦闘装束の胸の部分を露わにした。今までは窮屈な服装の中に隠されていた胸が露わになり、それによつて解放された胸がジークリンデの動きに合わせて揺れる。そうやってわざと上半身の裸を晒すと、軽く息を零しながら視線を入り口へと向けて、腰を動かし始めた。

「そろ、そろやな……」

「えっ」

ジークリンデが再び動き始める事に抗えない気持ち良さを感じつつ、絶対にろくでもない事が起きるのを予見した。同じように視線を扉の方へと向ければ、

それが開いた。

「あの、ノアさん起きてますか？ お見舞いに来ました。あと……」

「その、さっきの話の続きなんですけど……」

扉を開けた向こう側から、フェイトとなのはがやってくるのが見えた。顔を上げていたフェイトが部屋に入る前に此方を目撃して動きを停止させ、顔を伏せながら歩いてきたのはが足を止める事無く部屋の中に入ってしまい、ジークリンデが打ち付ける腰の音を聞いて、視線を上げてしまった。

「……えっ、あのっ、な、なにをしているんですか……?」

フェイトが解らない様な、見てはいけないものを目撃したような事を本能的に察して困惑しながらも顔を赤くし、

「な、な、なな、な——」

一瞬で顔を真っ赤にしたなのはが、なにをしているのかを理解してしまった様な表情で爆発した。

「にやにをしているんですか——!?!」

「なのはちゃん早熟やな」

「そうだな。あの年齢でわかるものなんだな」

「そ、それはいいじゃないですか!」

物凄い焦ったような表情でなのはが叫び返す。ああ、何だろうコレ。余りのショックに萎えそうなのに、ジークリンデがエロすぎてまるで萎える気配がない。いや、解っていてジークリンデが此方を犯している。おかげで全く萎えないどころかも一発出そうだった。このぐらいの年齢の子ってセックスの意味、解る子もいるんだなあ、なんて考えを抱いて現実逃避する。

死にたくなってきた。

いや、クロノが殺しに来るだろこれ。

そう考えた所でジークリンデは腰の動きを止めるところか、一気に射精感を高めるように腰の動きを強め、グラインドを混ぜる。今までとは違う動きに軽くうめき声を零し、ジークリンデの腰を掴んだ。

やばい、見られながら出そう。新たな性癖が開拓されて死にたい。だが下半身は快楽に正直だった。ジークリンデのエロさに完全に負けてた。

そしてなのはとフェイトも、目の前で行われている衝撃的過ぎるセックスの様子に目を離すことが出来ず、顔を真っ赤にして視線を反らそうとしながらも食い入るように見て、ジークリンデと自分の交わりを視線を集めていた。

そして、限界を迎える瞬間にジークリンデが腰を勢い良く降ろし、口を開いた。

「これで——終わりやね」

そう言つてジークリンデは素早く胸に当てた手を上へと滑らせて首を握った。その状態から両手の親指を气道に差し込み、首に穴を開けて親指を押し込んだ。首に穴が開き、息が出来なくなるのと同時に絶頂を迎えて射精する。

「かはっ——ひゅっ——」

空いた喉の穴から血が流れだす。空気が通り切らず、押し込まれた

傷を広げるようにジークリンデが親指を根元まで差し込んだ。激痛が一瞬で脳を支配し、次の瞬間には痛みが感じられなくなった。だが意識は凄まじい速度で失われて行き、ジークリンデの瞳に射精している感触だけが生々しく感じられた。

「えっ、あつ……お、え……う！」

その様子をフェイトとなのはは呆然と眺め、ジークリンデが最後の力を込めて首を完全に折った。その感触を自分の首に感じた。首が完全に折れる音だった。それが体内に響く様に感じられた。

そして、視線が曲がった。

悲鳴が一瞬で医務室を満たした。その音さえも少しずつ遠くに響いて行く中、

ジークリンデが儂く笑った。

「——さようなら、ノア。僕の子孫に宜しくね」

その言葉と共に全てがブラックアウトした。

Far Earth Dreaming

「はーん、ここが海鳴か」

バスから降りた場所は海鳴という都市を一望できる丘の上だった。そこから海へと向かって広がる海鳴の姿を眺めながら、自分が住んでいた海の向こうの姿を思い出し、率直に思い浮かんだ言葉を口にす

る。
体が全く動かない

「田舎だな」

口が勝手に動く。

そんな言葉しか口に出なかった。メインに見えるのは住宅街だ。そんなものはもう既に見ている。繁華街や多少のビルの姿が見えて来るが——基本的には田舎だ。しばらく住んでいたんだからそんな事は既に知っている。大きな港がある訳でもなく、普通に生きていく為の都市。海が近いというだけで、それ以外にさしたる特徴は見えない。都会と呼ぶには少々物足りなさを感じるような場所だった。動け、動け、動けよ。とはいえ、静かに、穏やかに暮らしていく分にはそこまで悪い場所である様には思えなかった。少なくとも海の方から吹いてくる風は心地よさが混じっている。クソが、なんで自由に動くことが出来ないんだ。空気も悪くない。或いは住み着けば気に入るような場所なのかもしれない。そんなことを考えながらポケットの中の手を伸ばす。それじゃない。フォーミュラ、フォーミュラに手を伸ばせ。

その中に突っ込んであるスマートフォンを取り出す。魔力がないからフォーミュラが動かねえ。繋いでいるイヤホンのコードが揺れるのを視界の端で捉えながらスマートフォンメモアプリを開き、ほかにフォーミュラを動かせる燃料はなんだ？そこに入力してある住所を確認する。それをグーグル先生のマップアプリと連動して、住所を入力する。再びスマートフォンをポケットの中に押し込む。生命

力を燃焼させる。生命エネルギーを使用する。

「ぴよっ！」

マフラーの中に隠れていたひよこが飛び出す。燃焼した生命で稼働したフォーミュラが生み出した僅かなエネルギーを吸収して変換する。

イヤホンの向こう側からはお気に入りロックが聞こえる。少し古い曲だが、最新が常にベストであるとは限らない。80sのロックは今でもレジェンドと呼べるものがある。音楽をゆつくりと聞きたいところではあるものの、最新のよりは、そちらの方が好みであるという部分は確かにある。やっぱり、趣味が入っているかもしれない。そんなことを考えながら右手でイヤホンのコンソールにひよこがなぜか怒って、電撃ではなく七色のオーラを纏っていた触れて音量を調整しつつ歩き出す。

向かうべき場所はスマートフォ七色に輝くひよこのホームラン宣言が入るンがガイドしてくれる。電子音声によるナビゲーションは今の時代、そこまで珍その標的は真っ直ぐ顔面しいものではない。目的地までXメートル、右折、左折、直進、そういう一歩、二歩、と助走をつけ始める事を一つ一つ音声で指示してくれる。

「ぴよっ……っ！」

流星にそのたびに音楽の音量がその時だけ下嫌な予感しかしながるのがやや難点というか、どうにかすれば修正出来るのだろうか。いにくとそこまで機械関係に明るいわけじゃないし、設定のどこを弄ればいいのかわからない。その上で面だがスパーひよこは助走をつけている倒だという部分もある為、もうそのままでもいいやと放置している。不あ、なんかもう滅茶苦茶勢い乗せようとバックしてる快さも付き合っていればそのうち慣れてしまう。不快である事が日常的になって忘れてしまう。

「ぴよっ——よっ！」

人間とは結構シンプルに出来ている生き物である。慣れてしまえば大体、どうとでもなる。

そしてその瞬間、ひよこは光となった。

「いふっ——」

顔面にひよこが突っ込んできた。まともな魔法的な防護がない今、本気のひよこアタックは物凄い衝撃を伴って、痛みと共に体を吹き飛ばした。顔面から軽くきりもみしながら吹っ飛んで行くのを整えようとするが、生命エネルギーをフォーミュラの燃料に消費したばかりだ。

体にまるで力が入らない。ひよこに吹っ飛ばされた所で道路に転がり、そのまま動きを停止する。痛い。超痛い。滅茶苦茶痛い。

「超痛え……」

転がった状態のまま、呟く。だがその呟きに合わせて体の感覚を感じられる。肉体のコントロールを得ていた。自分の体がマリオネットの様に動かされていた不快感はもうない。

そう、いふなればこれで素面だ。まわりついていていた不快感も、無駄な強さも、全てが拭えて消えた。それをジークリンデが持つて行って消し去った。故に道路に転がった状態で、軽くせき込みながら体を持ち上げる。

「ぴいよっぷー！」

「少しは、加減しろ……」

近くまでやって来たひよこをデコピンで弾きながら、上半身を両手で支えてから何とか立ち上がる。弾かれたひよこが転がってから再び走って戻ってくる。近づいてくるとジャンプして体を這いあげ、何時も通りの位置まで戻ってくる。そうやってひよこを受け入れた状態で軽く背筋を伸ばし、視線を反対側へと向けた。

つまり、自分が来た——海鳴の外へと。

「……まだ、エネルギーは残っているな？」

「ひよ」

勿論、とひよこが応えて来る。ひよこからマフラーを通してフォーミュラへとエネルギーが送られて来る。これで生命力が回復する訳ではないので吐き気とだるさが一切消えないが、それでもフォーミュラは稼働する。

これは素質でも才能でもなんでもないのであるが——これも、夢の産

物ではないのだろうか？

だがフォーミュラナノマシンが肉体内に残留し、消えていない以上これはセーフ判定なのだろう。周りの物質をナノマシンで分解し、そして再構築する。使いやすいいりボルバーの形へと。銃口が向けられる先は、暁町でもない、別の街へと——外の街へと繋がる道路だ。この近辺を散策するのであれば向かわない方角でもある。

そっちへと向けて、引き金を引いた。

一瞬で吐き出された破壊力の塊は空間を貫きながら飛翔し、空間を食い破るように放たれた。車を一発でスクラップに変えることが出来る弾丸は街の出口へと向かって飛翔し、

何も存在しない、虚空に衝突して弾けて消えた。

その瞬間を見逃す事無く、視線を虚空へと向けてから、ゆつくりと腕を降ろす。ふう、と息を吐きながら弾丸が消えた場所へと移動し、軽くその場所に触れる。

その向こう側には道が続いている筈なのに。

手を伸ばせば、見えない壁の様な物にぶつかる。そこから先には両手を押し付け、体当たりしてみても割る事が出来ない。ポケットの中に手をつ込み、スマートフォンを取り出してみる。

そこには依然、親父の遺言がちゃんとメモとして残されていたようだった。これは真実だった……？

「……」

何が本当で、何が嘘なのか。それが夢から覚めた事で、曖昧になって解らなくなってきた。疑おうと思えば何でも疑うことが出来る。何が真実で、何が虚構なのか。それを探る必要がある。自分が知っている事で何が正しく、そうではないのかも。

あの、三人娘たちは本物なのか？

この世界はなんなのだ？

あの世界は過去の世界じゃなかったのか？

なぜ、外へ行けないのだ。

ここは——どこなんだ。

「……」

「ぴーよ？」

「あ、ああ……大丈夫だ、大丈夫」

マフラーから顔を出すひよこの事を軽く撫でる。とういかこいつ、真つ先に動けてたけど一体どういう生物なんだ……？ マフラーから顔を出して頬を突いてくるひよこの姿を軽く眺めてから、息を吐く。ゆつくりと虚空の壁から離れ、そのまま近くのバス停のベンチへとゆらゆらと歩き、座り込む。

「あー……痛え……」

焼けつくような感覚に腕を伸ばして見てみる。先ほどまではそこに、健全な肉体があつたはずだ。だがまるで高温で焼かれたような火傷が自分の腕に張り付いていた。いや、見覚えがある。これは雷撃を喰らったときに体に負った傷だ。高圧電流によつて肉体を焼かれた時の火傷だ。それが再び自分の体に現れ、そして蝕んでいる。何故、と言葉にしようとして、

都合の良い回復がなくなつた事実を思い出した。

「なる、ほど、なあ……」

腕だけではなく、体中の傷が再び開くのを感じながら、ふらふらと足を進ませながらなんとかバス停のベンチまで戻ってくる。そこでほぼ倒れるようにベンチに座り込み、感じる激痛に言葉を失う。

なんで俺、こんなもんを耐えられていたんだ……？

ご都合主義の排除とは、よく言ったものだ。ジークリンデめ、本当に根こそぎそういう物を消し去って行ったらしい。体中が痛くて痛くてしようがない。だがその中にはどこことなく、清々しさを感ぜられた。

或いは——解放感、かもしれない。

だがそれで傷が、痛みがどうにかなるものではない。

痛みに呻きながら徐々にやばい、と思いつつ意識がフェードアウトして行くなか、焦る様子のひよこが目の前で右往左往する背後から駆け寄ってくる姿が見えた——。

◆

「——ああ、成程成程。つまりは幸福な夢は見れない、と。そうおっしゃると」

それは椅子に足を組んだ状態で座り、身の丈程ある杖を抱えながらも笑みを絶やすことなくどこかを眺めていた。

「誰もが特別である事を願う。強い事。格好良い事。出会いがある事を。勝利を。逆境を。愛を。運命を求め、そして試練を乗り越える事を求める。他人には持たぬ自分だけの証を欲し、そしてそれを打ち立てる。成程、誰もが見る様な手垢にまみれた台本だ。しかしなれど、だからこそ多くを魅了する」

私はそれを、歓迎しよう。

「需要があるというのは悪い事ではない。誰もが潜在的には幸福を求めている。幸せになることを望みとして生きている。故に、退屈となる。幸福とはつまり満ち足れた状態でもあろう。成程、成程。満ち足りていれば、何も求めず、変化はなく、常に同じ状態が変わらなくなるだろう」

確かに、それは退屈であろう。

それはそう笑いながら言った。確かに、退屈だろう。だからこそ冒険とロマンを、物語を求める。

「故に私は幸福な夢を見せてあげたのだが——なにかな、これでは夢を見れない、と言うのかな？ 実に酷い話だ。幸福で、特別で、誰もが羨む様な夢。どこにでもある様な脚本。それでは満足できない、と？」

然り、

「貴方はそういう人なのであろう」

だが幸福な夢を、特別である夢を否定された事をそれは肯定した。実に楽しそうに。

「きつとそう、貴方の人生は幸福ではなかったのだろう。貴方は現実の厳しさを知っている。故に受け入れる事が出来た。ああ、確かにエレミアの献身は可愛らしかった。だがそれまでだ。もう、彼女は夢から覚めてしまった。もう都合の良い手札はないぞ？ ああ、何。無

論、私も私で果たすべき事は果たすさ——」

そう、と言いながらとんとん、と杖の底で床を二度叩いた。

「人は痛みには堪えられるが、幸福には勝てないという」

とんとん、と叩いた。

「なら幸福に抗える者は果たして、痛みには屈せずにはいられるのだろうか？」

虚空を見据える目は潰れている。その両眼から光は閉ざされ、二度と正しく物を見る事はない。だがその法師は虚空へと常に視線を向け、人の目では見られないものを見続けていた。

「ならば次の夢は当然、苦痛に満ちた夢になるであろう」

人とは、幸福になりたがる生き物である。故に一番最初に見る夢は常に甘い夢だ。成功、飛翔、挑戦からの獲得。これが最も浅い夢だとも言える。なぜなら誰もが最初に夢を見るが、それをやがて忘れてしまう。誰も、最初に見た夢を覚えていない。甘い、甘い希望に満ちて幼稚な夢を。

そしてそれを忘れた頃にやってくるのが、

苦痛の記憶。

苦痛の夢。

「失敗。挫折。絶望。痛み——そう、痛みだ。誰もが一度は痛い目を見て、甘い夢を捨てる。故に甘い夢を剥げば当然のように悪夢が顔を見せる。ああ、もしかしてそれを知って夢を終わらせたのかエレミア？　だとしたら思っていた以上に貴様は残酷な性質のようだ」

笑い声を零し、虚空を見つめ、

「ああ、それでは次の悪夢で逢いましょう。更に、深く……」

D r e a m i n g Ⅱ

——何か、何かをしなくてはならない。
焦燥感を感じる。

自分は、何かをしなくてはならない筈だ、と。その強い感覚が自分の中にある。だが問題はそれが解らない事だった。水面下で必死にもがいている。その感覚だけが自分の中で鮮明だった。何かを——何かをしなくてはならない。だが思い出せない。まだ、何かを知らない。いや、何かを忘れている。

その強い感覚が脳に焼き付いていた——。

◆ 「凄まじいまでの重度の全身火傷だ……」

「博士、お願いします、なんとか……なんとか」

「解っているよ。私の技術を持ってすれば難しくはない——問題は体力が持つかどうかだ」

意識が朦朧とする中で、声が聞こえて来る。はっきりとしない意識を何とか集中させようとすると、耳元でぴよぴよという声が聞こえて来る。ああ、大丈夫だ、大丈夫。まだ生きている。ほら、ちゃんと意識はあるし。あそこにプレシアだって見える。綺麗なブレイクダンスを踊っている。

「博士！ 博士！ なんかブレイクダンスとか言い出してますよ!？」

「意識が落ちてきている……電気ショック！」

「ボクに任せて！」

「あ、待ちなさいレヴィ貴女の電力だと」

「必殺、神罰滅殺超究極破界魔王烈刃神サンダー！」

意識が再び落ちる。

「どうですか、彼は起きましたか？」

「ううん。偶に意識が薄く戻っているみたいだけどまだ起きないかな」

「そうですか……起きてくれるといいんですけど」

「大丈夫よ。変態所長が手を尽くしたって言うんだから」

「所長に関しては擁護出来ませんね……」

聞き覚えのない女の声がある。薄く戻ってきた意識の中で、ぼんやりと夢現を彷徨う。全身に感じる痛みはもう、余りなかった。だがそれと入れ替わるように焦燥感が胸を焦がし続ける。何かを、何かをしなくてはならない。夢と現を彷徨う間に強く感じられたのはそれだった。だがそれも、意識が少しずつ覚醒して行く中で、起きれば夢を忘れるように少しずつ過ぎ去って、消えて行く。そうなつてくると段々と自分の意識が、感覚が鮮明になってくる。

一番最初に取り戻すのは触感。

肌を感じる布の感触。心地よいぬくもりに包まれながら体が横たわれているという事実。背中にはベッドの柔らかい感触が存在し、丁寧に自分が扱われていたことを悟らされる。そして首元に感じる少しくすぐつたい感触は、恐らくひよこの羽なのだろうと思う。こいつは何時の間にか居たと思えばずっと引つ付いているよな、なんてことを考えながらゆつくりと、目を開いて行く。

開く瞼に光が差し込んでくる。その眩しさに再び目を瞑り、うめき声が漏れる。喉が渴いて張り付いたような声が漏れる。

「っ、キリエー！」

「解つてるお姉ちゃん。変態を呼んでくる」

「可哀想だから所長で許してあげてください」

走り去る音がする。ややぐらぐらと揺れる意識をなんとかかき集めながら上半身を持ち上げようとするが、それを押さええるように片手が差し出された。

「ああ、すいません。一応検診を行う必要があるのですがそのままになっていてください……大丈夫ですか？ 聞こえますか？」

その言葉に瞬きをしながらなんとか目を光に慣らしつつ、今口を開

いても酷い声しか出ないだろうから、ゆつくりと頷く。それを受けて相手は納得したのか宜しい、という声が帰ってきた。言葉に甘えてそのまま、ベッドの中で大人しくしている事にする。だが直ぐに瞼を開くのが億劫になってくる。

「ノアさん？」

名前、呼ばれる。だが少しずつ眠くなってくる。

再び、意識を閉ざす様に眠る。

◆

「あー、良く寝た」

上半身を持ち上げる。漸く、意識がはつきりする。かなり寝ていたようで、体にだるさが残る。だがすつと体を起き上がらせることが出来た辺り、体調はほぼ万全というのが感覚的に理解できた。体内に残されたフォーミュラは魔力がない事から完全に沈黙しており、動いていない。そのおかげで体内に痛みがなく、作り替えられている感じもない。常時供給できるエネルギーが消えた影響で稼働が停止しているのだ。生命エネルギーに手を出そうとすれば出来るのかもしれないが、それにフォーミュラが勝手に手を伸ばす様な事はなかった。

或いはそれすらも——と、疑ったところではないのかもしれない。頭は割とすつきりしていた。

「やあ、おはよう」

上半身を持ち上げてベッドの上で軽く欠伸をかみ殺している所、男の声が此方へと向けられた。声の方へと向ければ、壁の横の椅子に男が一人、座っているのが見えた。海藻の様な髪型に整った顔を持った男だった。その白衣姿を見れば、何らかの研究者であるのが理解できる。その為、その顔を見て最初に出した言葉は、

「Scheisse」

まず最初に毒づいた。それを聞いた男が苦笑した。

「いきなりそれは酷いんじゃないかな？」

「起きて最初に見たのが顔の良い男だった場合の気持ちを考えてみろよ。吐き気がするわ」

「ははは……確かにそれもそうだね」

納得する様に男は笑うと立ち上がり、さてと声を零した。入口へと向かって歩き出しながら、

「そこで少し待っていなさい。今娘たちに頼んで消化に優しいものを持ってこさせるから」

「ああ、悪い」

結局誰だったんだらうか。そう思いながら扉を開けようとする背中姿を見て、

「おっふ——」

その姿が扉が勢いよく開け放たれて吹っ飛ばされるのを見た。扉に正面から叩きつけられた上で横に転び、床に倒れた姿を入り込んだ姿は一瞬見てから、無視して此方へと向かって走り、飛び込もうとしてくる。見覚えのある姿がそうやって走って来るのに、驚き、反応に困り、

「ぴよ——！」

「ぶっ」

ひよこが飛び蹴りを放った。見事すぎるひよこの対空迎撃に、思わず感嘆の音が漏れそうになる。そうやって飛びつこうとした少女はひよこに迎撃されて地に落ち、その後ろからやって来て、ひよここと最初の少女を横の平手でたたき落して抱き着いてくる。水色の髪の娘は抱き着いてくると顔を胸元に埋めて来る。

「……馬鹿だよ、ほんと。頼んでもないのに。そんなになるまで頑張っちゃって」

「レヴィ……直前の動作がなければもう少しよかったんだけど」

「ごめん」

胸元に飛びついたレヴィを引きはがしながらそう告げればへり、と舌を出しながら謝って来た。こいつは本当にもう、変わらねえなあ、と呆れの溜息を吐きながら笑った。レヴィは引きはがされると両手でピースサインを作りながら笑みを浮かべていた。

その背後にゆらり、と立ち上がった茶髪の少女——シユテルがレヴィの後頭部を叩いた。

「痛あ!?! シユテルん酷くない!?!」

「なあーにが酷くなあーい? ですか。猫のように甘えた声を出しやがって。貴女、私を今押しつけて前に出たでしょ」

「シユテルんの気のせいじゃないかな。ほら、シユテルんって時々致命的でもない所でミスするし」

「貴女は今、全山猫を敵に回した」

「やってみろ、ボクも元は山猫だったかもしれないんだぞ……!」
「何やってんだお前ら……」

取っ組み合いを始めそうなレヴィとシユテルへと半眼の視線を送れば、奥の方から更に人がやってくるのが見えて来る。こっちはシユテル達よりも年上の女の子たちで、姉妹を思わせる様な近しい髪色の二人に、二人とは違う気配の女が一人という組み合わせだった。

最後に入った奴は転がっている白衣の男を見て、蹴りを一発叩き込んでいた。

「あ、起きましたか。とりあえずすりおろしたリングを持ってきました。内臓の方もそれなりに弱っていると思うので、大丈夫そうなら食べてください」

「これだけ女の子を侍らせて本当に——あ、イリス、イリス? そろそろ変態蹴り続けるの止めない?」

「この汚物はこれぐらいの扱いでちょうどいいのよ。寧ろ仕事は終わったんだから人生から退場して貰ってもいいでしょ」

「ふ、ふふ、流石イリス、私の娘……」

「やっぱり気持ち悪いから蹴ってていいよ」

女二人に蹴り転がされている顔が良かった男を眺め、ずいぶんと人の密度が上がっている状態に改めて驚く。自分がここを出る直前、ここに残されていたのは自分とユーリだけだった。だがこの集団にはユーリの姿も、

「ディアーチエは……」

その言葉に、シユテルが頭を横に振った。

ディアーチエは来ていないらしい。或いは戻って来れていないのだろうか。どちらにしろ、これがどうやら今、この研究所？　なのだろうか。たぶん、ここに居る面子の全てなのだろう。前と比べれば大人が増えているのは歓迎すべきことだろうが見た事のない顔もたくさん増えており、ちよつとした密度に元々これだけ賑やかな場所だと理解させられる。

とりあえず、髪を後ろで編んでいる子からすりおろしたリンゴの皿を貰って、スプーンで掬って口に運ぶ。

問題なく食べる事が出来た。喉が渴いて張り付いている感覚があるが、何とか喉を食べ物が通る。ここまで苦しい時は——一度だけ、あつた。それを思い出せばまだマシ、という感じだろうか。それにしたってここまで苦しく感じるのは中々辛いものがあるが。ともあれ、すりおろしたリンゴを喉の中へと流し込んで、さっさと食べ終わる。

「とりあえず……ここはグランツ研究所なんだよな？　海鳴の」

「ええ、その認識で合っています」

シユテルがその言葉を肯定する。良かった。今、自分が居る部屋を良く見れば、それが海鳴に自分が滞在している間に利用していた部屋と一緒に解る。ただし、住んでからそこに置いておいた私物の類は全て存在していない。つまり、綺麗さっぱり、使用前の状態に戻されているのだ。その為、少しだけ迷ってしまった。

だが戻って来れた。この場所に。

一番最初に始めた問題を解決……できたかどうかは解らないが。

「その顔、聞きたい事が色々あるみたいだね？　無論、解るとも。何がどうなっているか良く解らないって表情だ」

蹴られていた白衣の男が床に転がったまま、良い声でそんな事を言っている。声は良いし、言葉も良い。だが今の状態が致命的に悪かった。床に倒れている状態でそんな事を言われても困る。そう思っていると室内で質量が変動する気配を感じた。天井へと視線を見上げれば、フォーミュラ特有の物質分解からの再構築運動が見えた。それによってフック付きのクレーンが天井に出現し、それが床に

倒れている男を引つ掛けるとそのまま借りてきた猫の様な状態に吊るした。

「イリス」

「触りたくもないし……」

「解りますが、一応生物ですよソレは」

「ソレ扱いしているアミタも地味に酷いですよね」

「だが情報不足なのはこちらも一緒だ。そういう訳で近々情報交換と整理を行おうかと思っている。無論、君がちゃんと考えられる程度に落ち着いてからという話になるんだけど」

「うわ、あの状態で何事もなく話続けてるの気持ち悪っ」

「……」

「あ、傷ついた表情してる」

「流石のファイル・マクスウエルも気持ち悪いと言われるのは辛かったですか」

無言のままクレーンでファイル・マクスウエルという男が運ばれて行く。その姿をイリスと呼ばれた少女が監視するように歩いて追いかけて、アミタと呼ばれた子が空になった皿を受け取って、恐らくは妹と一緒に部屋から出て行く。

そうやって、初対面の者が部屋から抜けて部屋の扉が閉まった所で再びシュテルとレヴィが抱き着いてきた。ベッドの上へと飛び込む様に抱き着いてきた二人の姿を何とか両手で受け止めながらも、勢いを殺しきれずに後ろに倒れる。両腕で飛びついてきた姿を抱きしめるように少しだけ力を込めながら、小さく笑い声を零す。

「は、はは……ははは……ただいま」

「おかえり、なさい……おかえりなさい、おかえり……なさい！」

「馬鹿だよ、本当に、頼んでも、ないのに、馬鹿だよ……」

声を零しながら声を震わせ、泣いているのが解る。ああ、何だろう———こういう時、もうちょっと、気の利かせられる言葉を言えた気がする。だがその言葉が今は思いつかない。だから飛び込んで泣いているシュテルとレヴィの背中を抱きしめながら撫でる程度の事しか、出来ない。

「こんなにボロボロになって」

「要領が悪くてな」

「やらなくてもいいのに」

「そこで見なかったフリを出来る程器用でもない」

「馬鹿です」

「おう」

「アホ！」

「受け入れる」

ふう、と軽く息を吐いて少しだけ強めにその姿を抱いて、声を零す。

「遅れて悪かった。治ったら今度はダイアーチェも迎えに行こうぜ？

な」

言葉を零すと、声を上げて二人が泣き始めてしまった。ああ、悪い。本当にそうさせるつもりはなかったのだ。ああ、いや。これで良いのかもしれない。だがそれはそれとして、ブランケットが濡れてしま

う。

ちよつとだけ、困った。

そう思いながらも、取り戻した重みは心地よく感じられた。

D r e a m i n g Ⅲ

「さて——改めて自己紹介をさせて貰おうかな」

目覚めてから約一日、シユテルとレヴィに看護されるように休んでから次の日には体の調子も良く、歩ける程度には体が回復していた。それこそ一週間も眠りっぱなしだったのだから、当然と言えば当然なのかもしれないが。それでもそうやって動けるし、考えられるのであれば、やっておく事がある。少なくとも、後回しに出来る事ではない。その為、グランツ研究所の家部分、リビングに集まっていた。ソファに座る此方に対して、シユテルとレヴィが両側から挟み込むように座り、頭の上をひよこが占領していた。

そこで白衣の男がリビングのテーブルに足を組みながら腰掛け、自己紹介をする。

「私はフィル・マクスウエル。環境再生とナノ工学の博士だ。そこにいるイリスの父親だって言えばいいかな？ 一応は君を治療した主治医でもあるから、そこら辺は素直に感謝して私の息子になってくれてもいいよ」

「今なんつった」

「この変態の言っていることは話半分が良いから」

フィルの言葉を叩き割った少女——フィルに娘だと紹介されたイリスが続けて自己紹介する。嘆息しつつ軽く髪を揺らし、此方へとテーブル横の椅子に座りながら言葉を視線と共に向けて来る。

「私はイリス……イリス・マクスウエル。海鳴の中学に通ってるこの汚物変態男の娘よ」

「アミティエ・フローリアン、このグランツ研究所のグランツ・フローリアンの娘です。どうぞ、アミタをお願いします。ここでは高校に通っています」

「その妹のキリエよ。私も学生ね」

「女子密度たけえなあ……」

思わずその声を零さなくてはならなかった。戻ってきたシユテルとレヴィを除き、増えたのは女子3、男1という組み合わせだった。

この女子過剰空間に男が二人だけ、というのは中々目の保養には良いものの、生活するにはちよつと息苦しいかもしれない数だった。それはそれとして、

「ユーリもない、か」

「あ、それなら書置きがあります」

「書置き」

シユテルが横からユーリの書置きを差し出してくる。それを受け取りながら内容を確認する。

「旅に出ます。探さないでね！」

無言でその書置きを千切つて捨てる。思春期の家出かよ、とコメントを零しながら軽く溜息とともに額を押さえる。間違いなく逃げたと思えない行動だ。少なくとも単純に姿が消えただけでないのはまず間違いがない。

「とりあえず、完全に事情を把握していると解っている人たちは今ここに集まっているよ」

「他にも色々と海鳴や暁町にも変化はありますが、いったんそれは後回しとします」

シユテルがそこで言葉を区切り、そこからファイルが言葉を引き継ぐ。

「まあ、これが私達に与えられたここでの設定なんだ」

「設定」

「そう、或いは役割だ」

初めて海鳴に來た時、魔法等の言葉に対して設定、という風に使って軽くふざけたのを思い出した。だが今ではその設定という言葉の意味が、ガチな部分に突っ込んでいる。少々、笑えなくなってきた。だから設定、という言葉の意味をファイルへと求めれば、ファイルは笑みを浮かべる。

「そのままの意味さ。私達はここで生きて、生活している。だがここでの生活は全部与えられたものなんだよ。私は元々別の世界、エルト

リアという惑星で環境再生を行う研究をしていた」

「私はその研究の一環で生まれた疑似生命体ね」

「私とキリエは同じ惑星に生まれましたが、多少肉体的な改造を施されているだけで普通の人間です」

「H m m……」

いきなり別の惑星とか言う単語が出てきた。正直、脳が理解できる範囲を今の一言で超越してしまったような気分だった。だけど、同時に良く解らない事でもあった。

「A h……待ってくれ。つまり、偽物の記憶を持っている、つて事なのか？」

「正確に言うと私達が元々生活していた、正しい記憶があります。それに追加されるように、別の記憶を継ぎ足されているんです。ですがそこには経験がない。つまり経験した覚えのない記憶が追加されているんです」

「言いたい事は何となく解る」

つまり存在しない筈の記憶が継ぎ足されているのだ。そりやあ恐ろしいし、違和感の塊だ。

「二週間前、つまり貴方が発見されるその瞬間までは誰もその事に違和感を抱いていなかった。つまり、貴方が発見されてからここにいる皆は自分の記憶の違和感を覚えて、本当の自分の記憶という奴を思い出したのよ。シュテルとレヴィから寝ている間に色々と聞かせて貰ったわ」

この海鳴での生活、そして同時にシュテルとレヴィが最初に言っていた歴史改変の話だろう。だが今となつてはその話も大分怪しい。根拠となる記憶その物が今では信じられなくなっているのだから。

だがとりあえず、情報を共有する事とする。

自分が一人だけ、過去の海鳴と思われる場所へと飛んでからの話だ。

◆

「何で生きてるんだこいつ」

「いや、一回死んでるじゃん」

「あ、そうだった」

イリスとキリエのやり取りに半眼を軽く向けながら、溜息を吐く。なんだかんだであの崩壊海鳴でのやり取りが懐かしい。かなり暴れたなあ、と思う反面、今から思い出すとあの場所での出来事は、

「余りにも都合が良すぎる……そういう話だね？」

「あの時はその事に一切違和感を抱かなかったんだけどな。だけど今となると違和感しかない。普通人間が高压電流に耐えたり、都合よく覚醒したりするかよ。良く考えれば違和感だらけだ。此方を疑わずに中心にするとか、拘束しないとかさ」

「そうですね……流石に不用心という領域を超えている事実です。明らかにおかしい」

だけど誰もそれに気づけなかった。誰もそれを指摘しなかった。今の今まで。ここに戻って来て漸くその違和感やおかしさを指摘し、考えることが出来るようになった。そしてその事実には、誰もが首を傾げる。

「確かそのエレミアってのとセックスしたら治ったのよね？」

イリスが迷う事無く言った言葉にキリエとアマタが顔を赤くしている。ファイルは少し興味深そうに腕を組んで思考しているのが見える。

「ああ、魔力全部と魔法的な才能を消されたよ。だけどアイツの言い分じゃ元々それが余分、というか原因でもあるらしい。或いは原因の一つか？」

「面白い話だね……。君に付与されていた外付けの才能とでも言うべきかな？　これが消えた事によつて、この海鳴において私達は正しい認識力を得ることが出来るようになった。つまり私達が直面しているこの状況、この環境に間違いなく君が関わっているという事になる」

その言葉に両手を上げて広げる。

「割とまじめに覚えがない」

「だろうね」

此方の言葉にファイルが即座に肯定する様に返答した。その早い切り返しに少し驚きつつ、

「マクスウェル所長……今の情報で何かを掴めたんですか？」

「いや、全然。アクセラレイター・オルタ」

イリスが迷う事無く銃を生成し、それをファイルへと向けて発砲した。放たれたエネルギー弾をファイルが超加速によって回避する。そのまま煽るように高速状態でファイルが左右へとブレまくってから再び定位置に戻ってくる。その姿をイリスが言葉に表せない怒りの表情で眺めているが、誰もそれに触れない辺り、触れてはならない類の事だと理解し、言及を回避する。

「まあ、私に解るのは私達が現在存在するこの世界の主はノア君を主人公として見立てている、って事かな」

「主人公？」

ファイルがそうだよ、と言葉を続ける。

「だってそうだろう？ ふらつと現れた青年。不思議な出会い。義憤に燃え、そして力に目覚めて——使い古されたストーリーラインさ。どこにでもある、ね。まあ、その物語を私達に強制させた上で登場退場を自由にコントロールできる存在が居るってことが最大の難点なんだけど……」

その上で相手が誰であるかさえも解らない。そこが問題だろうか？ 後はここがどこであるか、という話もある。海鳴の外に出れないのも確認しているし。それを考えると、この海鳴と暁町の狭い範囲が俺達の世界となってしまう。改めて、とんでもない事になっているのを自覚する。

「自分の記憶さえも信じられないなんてどうすりゃあいいんだ」

ソファに完全に背中を預けるように倒れ込むと、腹と膝の上にシユテルとレヴィが倒れ込んでくる。こいつらもアレか——主人公補正、とでも言うべき奴に引っかけたのだろうか？ だとしたら、本当に申し訳ないとした言葉がない。哀れとも言える。これに関してはどうすればいいんだろうか。そんな事で頭を悩ませる。

「ノアさんは……私達みたいに記憶のダブリはないんですか？」

アミタの言葉に頭を横に振る。

「ない。全くない。俺の人生は一本道で、何も変わっちゃいない」

ほかのみんなはどうやら役割と、そして本来の人生と呼べるべきものを思い出せるらしい。だが少なくとも自分が思い出せる人生は一つだ。それ以外の人生を送ってきた覚えもない。だけど自分はまるで物語の主人公の様に酔っていた。求められるがままに。そしてその結果、こうなっているのだ。自分の人生全てが否定されたような気分になるのかもしれない。

「……」

しばし、室内を静寂が包んだ。だがそれをひよこが頭の上から降りて、肩の上に乗ると頬に軽く身を寄せて来る事で邪魔する。心配してくれているのが解るひよこの行動に小さく笑い声を零しながら、その頭を指の先で撫でる。ぴよぴよ鳴きながらひよこが指を突く。

「ま、いいんじゃない？ 昔の事は。気にしたってしようがないし？」

キリエの労わる様な言葉にそうだなあ、と声を零す。

「まあ、深く考えたってしようがないか……」

そう言っただけに切り替えられる程単純な話でもない。だがそれでも、口で言っておけば少しだけ、マシにはなる。とりあえず、昔の事はなるべく考えない方が良さだろう。俺が誰で、何をして、本当に存在する人間なのかどうかなんて。

ああ、でも、俺がもし想像上の主人公として生まれたのなら、

成す事、喋る事、その全てが何て……空虚なんだろうか——。

「それよりもこれからどうしようか、って話だね。ボクとしては王様を取り戻したいし、グランツ博士も戻ってきて欲しいよ」

「そうですね、父にも母にも戻って来てもらいたいですね……」

「となると基本的な方針はこの……ふむ……都合の良い演者を舞台に上げて好き勝手やっているんだ、《夢界》とでも呼ぼうか。この夢界の攻略になるかな。少なくともどんな結果にせよ、ノア君は此方側へと戻ってきた。彼方で何かを成して、そして戻ってくる事。それが私

達という存在を呼び戻し、そして干渉から解放したなら——」

「鍵はそこですね」

「まあ、その前に色々調査も必要でしょうが」

アミタがその言葉を告げた所で、可愛らしいお腹の音が室内に響いた。音の主であるレヴィの方へと向けると、完全にだらけ切った表情で空腹を訴える視線を向けてきていた。

「おなかすいたー」

「ふふ、そうですね。軽く頭を使うとお腹が空きますしそろそろ昼食にしましょうか？ ノアさんは食欲の方はどうですか？ 何か食べられそうですか？」

「私とお姉ちゃんでは何か作ってあげるから、感謝しながら食べなさいよー？」

「ああ、じゃあなんか軽いもんを頼む。……ありがとう」

アミタとキリエがキッチンに向かう。それにシユテルが腹の上から頭を退けて起き上がり、追いかけて行く。

「あ、待ってください。貴女達だけに任せると肉料理ばかりになりますから！ キリエは大概アミタには甘いですし」

「え、そんな事ないわよ？ ……そんな事ないわよね？」

確認しながら去って行くキリエの背中姿に、イリスがため息を吐きながら言葉を零す。

「バツカじゃないのアイツ」

そう言うイリスはどこことなく、キリエに対して複雑な感情を抱えたような表情をしていた。それをファイルが横から面白がるように見ており、なんともまあ、めんどくさそうな関係性が見えていた。それを見なかった事にするように視線を反らして、ソファにそのまま横に倒れる。

そこによじよじとひよことレヴィが昇ってくる。

「ノア、ノア」

「ん？」

上に倒れ込んできたレヴィへと視線を向ける。

「お帰り」

「……」

ニパリ、と笑みと共にそんな事を言うもんだからもやもやとしていた毒気が抜かれる。レヴィイへと向けていた視線を外す様に頭を降ろして天井を見上げ、

「おう」

短くそう答えた。

情報を軽く整理した所で解ったのが、ここは現実ではないかもしれないという事実。そしてここが一つの世界ではなく、何か特殊なルールと主が存在するという事実だ。

ほとんど、何も解っていないのにも等しい。

だがそれでも、漸く戻って来れた。その感覚が自分の中では強かった。

体にのしかかるレヴィイの重さと熱に軽い心地よさを感じつつも、昼間では少し寝るか、と、目を瞑った。

D r e a m i n g I V

「ふむ……やっぱり堪えているのかな」

「いきなりどうしたの塵芥」

「イリス、君はその本性を一切取り繕うとはしなくなったね？　パパとしては将来が非常に不安になってくるよ」

二度、銃声が響くものの、それをファイルがアクセラレーター・オルタによる戦闘用超加速によって凄まじい反復横跳びを見せながら回避した。その姿を見るからにイリスが露骨な舌打ちをした。それを受けたファイルが両手を広げながら笑う。

「はっはっはっは、なんだイリス。私達は親子じゃないか！　親！

子！　じゃないか！　何せ君は私の娘！　むす！　め！　だからねっ！　そんなに恥ずかしがらなくて良いんだよ!!」

「……」

イリスが二挺の銃を生み出すとそれをファイルへと向けて連射するものの、ファイルは笑いながらそれを残像を残しながら回避して行く。研究肌の男に見えるが、それでもその実力がかなり高い事は既に記憶の中にある、地球での事件を通して理解している。何せ、自分も一度はこのファイル・マクスウエルという男には敗北している。だがアレも連続で戦闘を行い、休養をロクに挟めなかった連戦での状態だ。万全な状態、アクセラレーターを戦闘用のオルタへと昇華させた今、本気でやりあえばファイルをスクラップにできるとは思っている。だからこの場で、或いはこの世界でファイルが何かを行おうとした場合、即座にそれを粉碎制圧するのは自分の役割だと思っている。

故に遊んでいるだけだと確信できるファイルの姿を見て、まあまあ、とイリスへと声をかける。同時にフォーミュラを電力で稼働させて、銃弾によって粉碎された壁の修復を再生する。破片が分解され、素材となってリビングの壁を元の状態へと戻してゆく。

「イリスもマクスウエル所長が遊んでいるだけだと解っているんですから。変に気にしなけばいいじゃないですか」

「この芥はね、それを解つてて的確に私の視界に入り込んでくるのよ。」

ほんと、忌々しい。この場で滅せるなら滅してやりたい所よ」

「はは、そういう所も可愛らしいぞ、イリス。あんなに無垢で純情だった君がこんな風に成長するなんて……パパは感動しているよ!」

イリスが剣を生成して振るう。それをファイルが回避する。解つていてもファイルが露骨にイリスを挑発して来るものだから、イリスも無視するにできないのだろう。そういう意味ではイリスも非常に可哀想としか言えない状態だった。故に軽く溜息を吐く。

グランツ研究所裏——ホームのリビングはすっかり、エルトリア人の集まりとなっていた。イリスとファイルはトムとジェリーの様にじゃれあい、自分とキリエは軽く武装のチェックをリビングのソファで行っていた。普段であれば父であるグランツ・フローリアンが搔つ攫つてチェック等してしまいが、今ここに彼ははいない。優しかった母の姿もここにはいない。そこに寂しさは感じるものの、

ある意味、それが幸福であるかもしれないと思っている。

父も母も、ここにいないのであれば自分たちの様に悩む必要も、苦しむ必要もない。ファイルはここを夢として表現し、見えない敵からの干渉を私達は受けていると説明していた。その説明に成程、と思う。だが同時に、その為に戦い続ける必要がある状況でもある。つまりこれは一種の戦争なのだと理解している。終わりが見えない、という言葉が付くが。この環境でストレスを受け続ける事を考えれば父と母が居ないのはある意味助かった。

「うん、ヴァリアント・ユニットに問題は無し。何時でも使えますね」「そうは言っても何時使うか解らないんだけどね」

ヴァリアント・ユニット、フォーミュラと連動させる事でヴァリアントアームズへと変形するコアユニット。これが自分たちのメインの武装となる。汎用性に優れたユニットを幾つか登録しており、自分とキリエはこれを変形させる事で戦う。故にメンテナンスとチェックは重要事項だ。

それに、意味があるかどうかはまた別の話ではあるが。

「それでも何も準備しない事よりは良い筈です。キリエもちゃんとチェックをしてくださいよ?」

「そこは手を抜かないわよ」

キリエはそう言いながら自身のヴァリアント・ユニットを掲げ、それを見る。だがその表情はどことなく優れていない。

「キリエ？」

「……」

手を降ろし、ヴァリアント・ユニットを軽く手の中で遊びながらキリエはどことなく暗い雰囲気を負っている。暗い、というよりは心配しているという所だろうか。やや俯いている様子でキリエはユニットの表面を親指で撫でて、

「ねえ、お姉ちゃん。彼……大丈夫かな」

彼、という言葉で鬱陶しいアピールをし出したファイルを無視してキリエの言葉にそうですね、と言葉を返す。

「それは——」

キリエが俯いたまま、無言に戻る。キリエは一度、イリスに盛大に裏切られている。子供のころから親友だと思っていたイリスに裏切られ、自分の信じていたことが完全に砕かれた思いを味わっている。故に、根本的にメンタル強者であると自覚している自分よりも、そういう経験をしているキリエの方が良く理解できるだろう。

「……うん」

「ちよつと、アミタ。それってもしかして私を責めてるつもり？」

「あははは……」

イリスの言葉を笑って受け流す。一緒に生活する以上、そこら辺はもう水に流す事になっているが——それでも、偶にキリエにやった仕打ちに関して、姉として怒りたくなる時がある。流石にそこまで簡単に全部は忘れられない。だがそれでも、それを乗り越えて今はエルトリアで生活していた。

していた、筈なのだが。

気づけばこんな事に巻き込まれている。

「私も、気持ちちは解らなくはない……と思う。本人の前では絶対に言えないけど。それでも自分が信じていたものが全部崩れるって事は、凄く辛い事だっけ解るから……」

「あの時のキリエの間抜け面は最高に面白かったわよ」

そうイリスが悪態を吐いているものの、ファイルとは違ってちゃんと名前でキリエ、と呼んでいる辺りがイリスがどう思っているのかが解る所だ。イリスもそういう悪態を吐くのを止めて、もうちよつと素直になつてくれれば、文句はないのだけれど。

「しかし、そうか。彼か……私としても実に興味深い存在だと思うね」
「ファイル塵芥」

名前を完全に呼んでももらえてないのに、どことなく楽し気な表情をファイルは見せる。

「フォーミュラと魔力の相性は良くない。なのに彼はフォーミュラを魔力で稼働させていたらしいね？ それだけじゃなくフォーミュラの半暴走的な動き、そして彼が本当に実在するのかどうか怪しいという事実」

ファイルのその言葉にキリエが睨む。

「マクスウェル所長、今の言い方は」

「事実を否定した所で意味はないよ。私からすれば彼は都合よく配置された物語の主人公に見えるからね。或いはそういう風に出てくるのかも知れない。そう思うと増々興味が出て来る。彼なら或いは、あの高町なのはが見せたような魔力によるフォーミュラの稼働を更に上の段階で——」

勢いよく立ち上がったキリエがファイルの顔にビンタを叩き込んだ。それを今度は避ける事もせずにファイルは受け止め、

「おや、気に障る事を言ってしまったかな？ 事実しか口に出していないつもりだったんだけどね」

「言つて良い事と悪いことがあるのよー！」

怒りを見せるキリエの姿にやれやれ、とファイルは声を零してからキリエから離れるようにキッチンの方へと向かった。なんだかんだで、必要でもなければ無駄に対立などを煽らない男だ。アレはアレで、キリエのガス抜きに貢献しようとしたのかもしれない。そう思いつつファイルの背中姿を見送り、

「まあ、落ち着いてくださいキリエ。私達に出来る事はそう多くはあ

りませんから。こういう心の問題は何よりも当人の心持次第ですし」
「それが解っているからやるせないのよ……どれだけ心配して、言葉をかけようが本人にその気がなければどうしようもないんだから……」

「なに？ キリエもしかして影のある男つかっこいい、とか思うタイプなの？ ああ、そう言えばエルトリアでは他に男も居なかったしそれもしょうがないわね」

「イーリースー！」

煽りオンリーという様子のイリスにキリエが両手を腰に当ててキリエが怒りの様子を見せるも、イリスはけらけらと煽るように笑う。

「別にイイじゃない。寧ろエルトリアに居る限り処女を卒業出来ないんだし、この機会に卒業してみたら？ 彼経験あるみたいだし——」

その続きをインターセプトする様にキリエがイリスへと飛び掛かり、先ほどはファイルとの間に繰り広げられていたトムとジェリーの様な追いかっこが二人の間で始まる。そうやってふざけられる間はまだまだ余裕の証なのかもしれない。

「まあ、落ち着きなさいよキリエ。そんなに知りたいのなら彼のバイタルデータを送信してあげるから」

「そんな猟奇的なものは何も求めてないわよ……！」

イリスのその発言で思い出す事があった。

「イリス」

「なによ」

「彼に通っているフォーミュラ・ナノマシンは貴女の一部で良いんですよね？」

その言葉にイリスは足を止めながらそうよ、と返答する。

「何をしたのは知らないけど、ユーリが彼にあげたフォーミュラは私の肉体を構成するフォーミュラの一部よ」

そのおかげで彼、ノアの体内のフォーミュラはイリスが完全にコントロールを握っている。そしてそのコントロールを取っているイリスがフォーミュラの稼働を停止させているのだ。フォーミュラに関

して、彼の体内で活動しているそれは反応が異常だ。そもそもセーフティ等が働いている筈なので、無制限にリソースを食い漁って人体改造を行う事なんてまずありえない。

無論、イリスや自分、キリエの様な身体的に頑丈なエルトリアの人間が使うことが想定されているのは事実だ。だけど安全ではない物を父であるグランツ・フロリアンが娘たちに使わせる訳もないだろう。だからこんな風に半暴走状態でフォーミュラが機能するのはまずおかしいのだ。今はイリスがプログラムを寝ている間に切り替えたため問題はないが、それでも体内からリソースを勝手に喰らって肉體改造を施す仕様なんて、本来のフォーミュラにはない。

「第一、ユーリよユーリ」

イリスはご立腹という様子で友人の名前を口にした。

「アイツがフォーミュラを仕込んだのよ？ だったらほぼ確実に知っててやった訳じゃない」

「それは……」

解るが、余り信じたくはない事実だった。自分の知る限り、ユーリは優しい子だった筈だ。古代ベルカ時代から稼働している存在だと考えると確かに腹芸の一つでもこなせそうな年月を経験しているだろう。だが普段からそういう様子は見られないし、一緒に住んでいた自分たちだからこそ、そういう面が彼女にはない事を理解している。

「ユーリにも事情があったのではないでしょうか？」

「どうかしら？ 少なくとも友達だと思っていたのは私だけみたいだしね」

イリスのどことない寂しさを帯びた声に自分は何も言い返せずに、溜息を吐くしかなかった。少なくとも、最低限の進展を見る事が出来ればこの閉鎖された環境も少しは広げられるだろうと思う。

とりあえず、ノア待ちだ。

彼が外を歩くだけの元気を取り戻せば変化した街の様子を彼と確認に行ける。それで進歩が出れば……次、何をすればいいか見えて来るだろう。

見えてこない敵の姿と状況にストレスは募るものの、まだ余裕はあ

る。

ただ、何か気が紛れるものが欲しいかもしれない。

そんな事を考えている時に、

「がつでむしつと!!」

解りやすいシュテルの声が響いた。不機嫌な様子でずんずんと足音を慣らしながらリビングにやってくる、キッチンへと向き、コーヒー牛乳のパックを冷蔵庫から奪取する。それを勢いよく飲みながら、露骨に機嫌の悪そうな、面白いシュテルの姿を見た。

「……シュテル、どうしたんですか?」

「あー……あんまり気にしないでいいよ」

続いてレヴィがリビングへとやってくる。確かまだ完治していない彼の世話を二人で申し出ていた筈なのだが、何かマズイ事でもしたのだろうか? そう言う気力がある様には思えないのだが。

「女ですよー!」

キレ気味にシュテルが声を上げながら此方の口に出さない疑問を答える。

「女の匂い! ここに! しつかりとマーキングされているんですよ!! 私のだ、つて主張するように!」

憤慨するシュテルは首筋をタップする。それをレヴィが呆れた様子で眺めている。いや、気持ちは解るけど。好きな人が別の女の匂いをしていたらそれは嫌になるだろうが、

「野性的すぎない?」

「私達、山猫ベースですから」

「ボクは寧ろ上書きする事に寝取りの背徳感感じて興奮するな」

イリスのなんだこいつ、という表情がレヴィに向けられる。それを受けてレヴィは気にするような様子を見せない。そう言えばこの二人は人間じゃなく、元は野生動物の類だった話を思い出す。

根本的な倫理観が人と異なっている所があるのかもしれない。

とはいえ、それで憤慨するシュテルの姿にちよつとだけ笑い声を零しながら、何でもない平穏な一日を過ごす。

きつと、自分たちがここにいる事には、意味があるのだと思って。

D r e a m i n g V

目覚めから数日が経過した。

今すぐにも何かしたいのが本音だったが、今まで寝たきりだったのもあり軽くりハビリをする必要があった。寝ている間に軽く体を動かしてくれていたおかげで起きてから特に違和感を感じた事はなかったものの軽く体力や食欲が減退していたのもあり、無理はさせられないから、としばらくくりハビリの時間を叩きつけられた。だがそれを終えて普通に生活できる程度には体力が戻ってきた所で、漸く話の続きに入る事が出来るようになった。

何時も通りリビングに全員が集まりつつ、定位置にいたら話を始める。

「では、今の海鳴と、前の海鳴での違う所をまず教えてくださいね」

シユテルが話を切り出す。前と今の海鳴、その違いが判るのは彼女とレヴィだけだ。少なくともずっと静養していた自分に、その違いは解らない。

「まずは、翠屋ですね」

「高町なのはさんの家族が経営する喫茶店でしたよね」

アミタの声にシユテルがそうです、と答える。

「前の海鳴にはそもそも最初から高町一家が存在しなかった扱いだったんですが——確認してみると翠屋があるだけじゃなく、普通にここで暮らしていた風に回りの認識も変わっていました。まずこれが一つ目の変化ですね」

自分が海鳴に来た時、翠屋に高町家は存在していなかった。だがこうやって存在するようになったきっかけは……やっぱり、あのもう一つの海鳴で、なのはを助けた事に意味があったのだろうか？ その意味があったのであれば、多少なりとも自分の恥ずかしい行動にも意味はあったのだらうと思えるのだが。

「次がホビーショップP&Tですね。こちらにはテストタロツサ一家、そしてハラオウン一家の存在が確認出来ました。ホビーショップとしてはそれなりに成功しているようで、苦しくはない生活を送ってい

る様子が見れました。ちなみにどちらにも魔法の事などを知る様な様子はなかったです」

「私達とは違うのね」

「知ってるなのはさんじゃない事は残念です」

そして最後に、とシユテルが言葉を続ける。

「この二つはまだ普通に追加されたような形でしたが……最後の一か所が問題です」

「問題？」

「ええ、はい。他の二か所はこの街に馴染む様に出現した存在です。ですがここだけは他のとは違い、明らかに浮いている場所でしたから。というか一回、入って見ようと思いましたが入れませんでした。無論、魔法を使って突破する事さえも出来ませんでした」

「そりや……」

明らかに異常だろう。それも魔法を使って無理なのだから。明らかに、何かがあるというのを伝えているようなものだ。

「八神堂です。ここは古書店なんですが……店の主も、住人も、誰一人存在しないだけではなく、街の人間はそこに触れる事も認知する事も出来ませんでした」

これがこの海鳴に起きた三つの変化。翠屋とホビーショップの出現に、そして八神堂の出現と封鎖。出現している場所がなのはとフェイトに関連する施設である事を考えると、やっぱり過去……の世界になるのだろうか？ あそこでのなのはとフェイトを助けた意味があったのだろうか？

「少なくとも私はなのはの情報ベースに構築されていますし」

「ボクはヘイトの情報から今の姿が作られているしねー」

「フェイト、フェイトですよ」

「ヘイト！」

「駄目だこりや」

なぜかフェイトの名前だけうまく言えないレヴィの姿を数秒程見つめてから、ふうと息を吐いて天井を見上げる。現状、やらなきやいけない事は解っている。というかこうも解りやすく目の前に差し出

されている。

「八神堂の調査、か」

「そうなるわね。私達でダメなんだから、きつと特殊な条件が必要な
のか……或いはその時じゃないのか、どちらかね」

「ま、私はそこは彼が条件だと思うけどね。主人公だけが入る事の出
来るマップなんて実にはらしい展開だとは思わないかな？」

フィルの言葉に確かに、設定としては美味しいと思えるだろうとは
思う。だがこうやって実際経験してみるとクソの一言に尽きる。そ
うやって道筋を定められる事に關しては怒りと、そして吐き気しか覺
えない。結局の所、それは物語の道化であるという事に違いないの
ではないだろうか？ 主人公ではなく、シナリオの奴隷でしかないのだ
ろうか？ 少なくとも、自分という存在を疑い出してから、そういう
考えばかりするようになってきた。

良くない事なのだろうが、それでも偶に死にたくなってくる。

まあ、

本当に死ぬるかどうかが怪しいのだが。

「やるべきことが見えてるのはいいんじゃない？ 少なくともどこを
調査しなきゃいけないかは解ってるんだし」

イリスの言葉に頷きを返す。少なくとも今は間違いなく、八神堂を
調査しなければならぬだろう。これほどまでに分かりやすい物は
ない。それ以外にもこの近辺から出られないという事もあるのだが、
外に今は用はない。故にそれは置いておく。それよりも八神堂の調
査が重要だろう。

そして、

「もう一つ、やらなきゃいけない事がある」

「それは……高町士郎さんに会う事ですよね？」

「ああ、元々俺が海鳴に來た理由だよ」

スマートフォンを取り出しながら、そこに書き込んだある親父の遺
言を確認する。それに変化はない。その事に安心感を覚える反面、こ
れもただだけ信用できたものか解らない。とはいえ、自分の事に關し
て一区切りつけるのであればこれをやっておく必用はあるだろう。

少なくとも今の事件、全部忘れて集中する為には自分の事情周りは全部クリアしておく必用はあるだろう。

「という訳で、軽く翠屋に挨拶しに行こうと思うんだけど……いいよな？」

その言葉にキリエが反応する。

「良いんじゃない？ 別に急がなきゃ八神堂が消える訳じゃないんだし。心に引つかかるならサクッと解決したほうが良いでしょ」

「悪い」

そうキリエに答えると、複雑そうな表情を浮かべて視線を反らされた。何か、マズイ事でも言ってしまったのだろうか？ そう判断する前にアマタが手を叩いた。

「では翠屋へは私が送りますよ。定期購入している常連ですから」

「あそこのパティシエの腕前は認めざるを得ないわよね」

イリスが腕を組みながらうんうんと頷く様子を見せ、それに先日食べたタルトの味を思い出す。味の繊細な良し悪しが解る様な舌をしている訳ではないが、それでも食べたものがかなり美味しいものであるのは解った。少なくともこの女子を満足させる腕前はあるのだ。

帰りに、何個か買ってくるべきなのかもしれない。



「ノアさん」

「ん？」

グランツ研究所を出て、暁町から海鳴への道を歩く。歩きなれた道だけあって、迷うこともなく進む事が出来る。アマタなんかは日常的に歩いている事もあって、ショートカットなんかを頭の中に叩き込んでいるらしい。完全にここの一一般市民レベルで知識があるな———と思う反面、そういう風に知識がインプットされている事を思い出す。となると知っててある意味当然と言えるのかもしれない。

「その、これを私が言うのは間違っているかもしれませんが……あま、自棄にならないでください」

翠屋への道を進みながら横を歩くアミタがそんな事を言ってくる。さて、自分ではそこまで自覚のないものなのだが、

「自棄、か。自棄になっっている様に見えるか？」

「私には何とも……ですがシユテルやレヴィからはキャラが変わったようだと言われてますね」

「あー、確かになー」

少し前の自分はまだ少しオラオラ系だったとも言える。もっと押し寄せというか、まあ……調子に乗っていた部分もあるんじゃないだろうか？

「メツキが剥がれた、って奴じゃないかな？ ほら、自分があーだこーだ、って話をし始めると格好つけるのも馬鹿らしくなってくるだろう？ だから、まあ、自棄になったのとは違うぜ？ ただ……」

「ただ？」

なんとというか、

「格好つける意味も。気を遣う意味もないなって思っただけだよ」

「それは暴論だとは思いますが……ノアさんの現状に関しては、余り知らない私では深くは言えませんからね……」

「気持ち悪いってなら素直に言った方がいいぞ？」

「いえ、私はそうは思いませんから。そもそも私の知っているノアさんはどこかの誰かでも、記憶に居る誰かでもなく」

アミタが此方を振り返りながら微笑む。

「今、ここにいる貴方だけですから」

「……」

その言葉よりも、はにかむアミタにどこもない美しさを感じて、言葉を失う。だが直ぐに正気を取り戻して先を歩き始める。

「本当に俺がここに存在していれば、だけどな」

「大丈夫ですよ。なんとかなりますって」

「気軽に言うなあ」

「へいきへっっちゃら——誰かが言い続けなきゃいけない事でもありませんから」

お姉ちゃんですから、そう言っ拳を握るアミタの姿に、心の強さ

を感じた。誰かが言わなきやいけない。誰かが言い続けなきやいけない。どうにかなる、と。そうしなければ本当にダメになった時に誰も動けなくなる。

羨ましいほどの心の強さだった。

今の自分には少々、眩しい。

「だからノアさんも困ったことがあったらすぐに頼ってくださいね。こう見えてもエルトリアでは大家族を支えている身分でしたから」

「じゃあ寝込みを襲ってくるシユ——」

「あ、それは対応外です」

「おい」

「あの勢いは言葉ではどうしようもないと思いますし」

「クソオ……」

シユテルもレヴィも、都合の良い夢からは覚めたんだからこのまま、夢だったと思って忘れてくれればよかったのかもしれない。

そんな事を考え、歩いているうちにいつの間にか道は暁町を出て、海鳴へとやってくる。海から吹いてくる風を空気に感じつつ久しぶりに見るような気がする、平和な海鳴の姿を目撃する。自分が経験した海鳴は、戦場となって完全に荒れ果てていた。そうなる前は目の前に広がる今の様な姿なのだから、魔法技術という物は恐ろしい。一瞬で街を個人であそこまで滅茶苦茶に出来るのだから。

歩いている人たちも普通の人間で、ロボットが突然出現しては殺しに来るような事もない。

……本当に、アレが夢だったかのように平和な海鳴への徒歩の道のみだった。

「……辺りを見渡しても襲撃されませんか?」

「……!?」

「いや、エスパーか、みたいな表情をされましたも。それにほら、私が居るから大丈夫ですよ」

力こぶを作ってアピールするアミタには悪いが、普通に可愛い女の子にしか見えない。だから見た目だけなら頼りになるといふ風には見えないのだ。これで自分とは同じ、フォーミュラ・ナノマシンの使

い手で、自分よりも数段上の次元の戦闘力を発揮できるといふのだから凄まじい。

凄まじく、惨めだ。

「と、見えてきましたね」

海鳴の商店街。前来たときは翠屋の存在がなかった所だが、空き地だった筈の場所には見覚えのない喫茶店が建っていた。その名前を確認して見れば喫茶翠屋と書かれてある。

「本当にあるんだなあ……」

初めて来たときは存在していなかっただけに、こうやって実在する喫茶店の姿を見るのはどことなく感慨深いものがあつた。しかも、予想してたよりも結構大きい。これは結構、フロアのスペースも広いのではないだろうか？ 家族経営でこれだけの広さなのだ、実はそれなりに儲かっているのではないだろうか、ここ。

タルト、美味しかったなあ……。

「ノアさん？」

「ん？ あ、ああ。ちよつと考え事してた」

「大丈夫ですか？ また後日にしますか？」

「いや、大丈夫だって」

「そうですか？ なら良いんですが」

ぐいぐいと来るアミタに少しだけ気圧されつつも、軽く呼吸を整えてから前へと踏み出す。

喫茶店、翠屋の扉に手を乗せ——開ける。

からんからん、とベルの音が鳴りながら扉が開く。中は広々としたスペースが存在し、ソファで囲んだ団体用のスペースがある広さだった。客の入りもそこそこ、という様子を見せており、学生が何名かソファに座りながらケーキを食べている姿が伺える。その他にもノートパソコンを持ち込んで作業している大学生らしき姿が見える限り、お高く留まったタイプの喫茶店ではないようだ。

「いらっしやいませー！」

店内に入った所で、聞き覚えのある声が出た。声のしたの方へと視線を向ける。

「二名様……あ、アマタさん。また来てくれたんですね！」

「はい、健啖家が多いですからね、うちは」

そう言って笑顔をアマタに向けるのは、シユテルやレヴィと同じぐらいの年ごろの娘——即ち、中学生頃に入る程度の娘だった。もう一つの海鳴で目撃した少女の姿。

隻眼の少女だった。

片目を覆うようにアイパッチを装着している少女——高町なのはが此方を見た。

「あ、ノアくん」

夢の傷跡を引き継ぎ、そして最初から知っている様に名前を呼ぶその姿に、

どうしようもない吐き気を感じた。

D r e a m i n g VI

「……ノアくんお久しぶりです。ノアくん？ ……大丈夫？」

「あ、ああ……なんでもない。ああ、おう」

やばい、吐き気が堪えきれない。吐きそう。眼帯を装着している姿に罪悪感を覚える。彼女がまるで自分を知っているかのように振る舞う事に違和感を覚える。ヤバイ、今、物凄く自分の心がやばい事に気づく。それを表面上、見せないようにするが、それでも心配するようになのはが此方を見て来る。

「あ、なのはさん！」

それをインターセプトする様に、アマタが前に出て視界を遮った。

「高町士郎さんはいますか？ 実にはノアさんが訪ねてきたのにはこちらの方に用事があります」

「お父さんですか？ 裏に居るので少々お待ちください。あ、その間は店内でくつろいで待っていてください」

「ええ、そうさせて貰います」

そうやってなのはが裏へと去ったのを確認してからアマタが此方の背中に軽く手を触れながら、ソファ席まで案内してくれる。横に並ぶ様に座りながら背中を摩り、自分の両手で口元を押さえる。

「大丈夫……ではなさそうですね。ゆっくり呼吸して、落ち着いてください。自分の中にある良い物を思い出してください。大事な物でもいいです。ゆっくりと息を整えながら集中してください」

「ふうー……」

呼吸を整えながらなんとか、自分の中にある、大事な物を探る。だが、ない。そんなものはない。ないに決まっている。そんなもの、少し前に知ったばかりではないか。自分が偽物であるかもしれないなんて。自分が実はただの妄想の産物なんじゃないか、って事実を。人生が、言動が、思考が、誰と会い、誰を好きになり——その全てが設定されていた事であれば？

改めて考えると恐怖で心臓が凍り付きそうになる。

そのまま、目を閉じて耳を塞ぎ、口を閉ざし、死に——。

「ぴよ」

「おぷっ」

ぽふん、と心臓が凍り付く感触を打ち消す様にひよこが顔面に衝突する。それに思考を打ち蹴られた直後、肩に乗ってちよこん、と居座るひよこの姿が見えた。

「今朝から姿が見えなかったってのにお前どこに居たんだよ……」

「ぴよっ」

どうでもいいじゃん、と言つてのけるひよこの姿に軽く溜息を吐く。肩の上では満足できないのか、胸元までやってくると服中に転がり込んでくる。腹の上でもぞもぞしているのを感じる。本当にふてぶてしいな、こいつ。服の中に転がり込んだひよこを軽く服の上から突いて遊んでいると、軽く気が紛れる。

「ふうー……悪い」

「いえ、落ち着かれたのなら良いんですけど……良い子ですね、その子」

「まあ、大事な相棒だよ」

なんだかんだですつと一緒に居てくれているし。そう思うほど、自分にとつての良い物、とはこの小さな相棒なのかもしれない。まあ、安心感があるとも言える。悪くはない。こいつを軽く指先で突いて遊んでいるだけでだいぶ落ち着くのも事実だ。

横からアミタの視線を感じ、其方へと視線を向ければ、アミタが恥ずかしがりながら手を振る。

「ああ、いえ、すみません。ちよつと顔を見ちやつて不躰だったですよ
ね」

「いや、それぐらいは気にしないけどさ」

寧ろこつちが変に心配をかけてしまった申し訳ない。そう言おうと思つた所で、

「すまない、少し待たせてしまったかな？」

聞いた事のない男の声と共に、近づいてくる気配を感じた。振り返ればどことなく、善良そうな気配がにじみ出ているのを感じられる男が近づいてくるのが見えた。彼が来る前に調子を何とか、取り繕える

所まで持ち直せたのは良かったかもしれない。そう思いながら軽くひよこを指先で突く。

「ああ、いえ、此方こそ呼びつけるようなことをしてしまつて」

「そこは気にしてないさ。久しぶりだね、ノア君。どことなく疲れている気がするけど……大丈夫かい？」

そう言つて、彼——高町士郎も、まるで自分を知っているかのように接してきていた。

この世は地獄か。

◆

「そうか、彼が死んだのか……」

親父の遺言を果たしに来たと話をすると、一瞬驚いたような表情をしてから言葉を失い、それからひねり出す様にその言葉を口にした。どうやら、自分が知らない所でそれなりに良好な関係を持っていたらしい。そうだよな、元々はこのために海鳴に来ていたのだ。だとしたらその設定か、或いは役割に殉じればいいのかもかもしれない。そうすることが一番楽なのだろう。

だが一度全てを疑い出すと、何も信じられなくなる。

「その……彼の最期はどんな風に……？」

銃を構えるようにポージングし、発射するのを演じる。

「その、戦地で頭に受けて一瞬で死んだそうです」

「そうか……苦しまないで済んだのは……いや、後に残されたものを考えると素直には喜べないか」

複雑そうな表情で死を悼む士郎の姿に、この人が本当に善人である事を理解し、心が痛む。何故か、自分が騙しているような気分だった。存在しているかどうか怪しい父とその過去の為に悲しんでいる姿を生んでいるのは自分だ。自分勝手な都合だ。最初から存在しないのであれば巻き込まなければよかったんじゃないか？ 何もかも自分勝手な話だ。

「とりあえず、これを」

アメリカから持ち込んできた通帳を取り出し、それを対面側に座る士郎の方へと向けてテーブルに置いてから渡す。

「これは……貸したお金だよね？」

「親父が、死んだら絶対に返すように言ってたので」

「……うん、確かに。たしかに全額揃ってるけど……別に、受け取るのは今じゃなくてもいいんだよ？　これ、かなりの大金でしょ？」

「それは、まあ」

高町士郎への借金の返済。それが日本へと来た理由……だった筈だ。大昔、撃たれた時に必要とした手術の代金、それを彼が出してくれたのだ。自分が生きているのはこの男のおかげであり、だからこそ会った事はないけど頭の上がらない相手だった筈なのだ。なのに知っている様に振る舞われると、困る。というか知らない。知らない筈なのだ。自分の今の記憶にそんなものはない。

『或いは』

フォーミュラを通した秘匿通信を利用し、アマタが此方に言葉を送ってくる。魔法にも念話という似たようなものが存在する。その科学版。極まった科学は魔法と変わらない、というのをエルトリア勢は証明している辺りが恐ろしいのか。

『知っている筈だったのかもしれないね』

　　どういう事だろうか、と考えた所で、

『いえ、ほら。此方が復元された時に周りの認識が修正されたじゃないですか？　たぶんノアさんも周りの認識の復元に合わせて記憶が修正されていた筈なんじゃないでしょうか？　今の状態がイレギュラーなんでしょうし』

『……』

あり得なくはない想像に、ゾツとした。もし自分がジークリンデにあそこで捨てることを選択しなければ、出会った事のないはずの相手に出会っていた記憶を与えられ、違和感もなくこの一連のやり取りを進めていたのだろうか。

その想像と現状が、悪夢だと表現せざるを得ない。

「やっぱり、これは……」

「あ、いや、これは受け取って……ください。お願いします。こっちにもケジメがあるんで」

「その、生活の方は……?」

「こっちで生活できる所見つけてあるんで、心配される程酷くは……まあ、ないです」

「そうか……そうだね、そう言うのなら受け取っておこう」

そう言いながらしまう姿を見て、恐らくは手を付けないで置くだろうなあ、という予測ができた。こっちが本当に困った時、たぶんそのまま渡せるように手つかずで保管するだろうと予測できる。なんとというか、本当に良い人が過ぎる。騙されないかどうか心配だが、そう言えば、

「親父とは……戦友でしたっけ?」

「うん? そうだね、昔はボディガードなんてしてたからね。今じゃ怪我を言い訳に引退してしまっただけ」

「そうですか」

何を言えいいのか、言葉が見つからない。これが実感のある出来事であれば——いや、実感はあるのだ。そう、経験したようには感じるのだ。親父との日々も、出会いも、自分の凄惨とも呼べる過去は覚えている。だがそのすべてが偽物である様に感じられる。そんな状態で今、何を言えいいのかが良く解らない。どう、リアクションを取ればいいのか解らないのだ。

それともアレか、悲劇のヒロインの様に泣けばいいのか。

だが、確かにフィルの言う通りだ。

影のある、悲劇を背負った主人公というのは実に受けが良い。それが格好良さという物なのだろう。

本当に、クソだな。

「ノア君、君が何に心を痛めているかは私には解らないけど……もし、君が助けが必要だと感じたらいつでもウチの頼っても良いからね?」

恭也なら何時も暇しているから、好き勝手使ってくれていいから」

高町家長男、自分のあずかり知らぬ場所を取引される。

「いや、それは恭也さん? に悪いので……」

「アレなら放っておいても孫は見れそうだし、恭也ぐらいならいいよ」
高町家長男、扱いが悪い。それで良いんだろうか、と頭を悩ませているとまあ、と士郎が笑みを浮かべた。

「こういう時、未だに何を言えば良いのか……正解が解ったものじゃないけど、それでも既に君を支えてくれる友人は見つけられているよだし、安心したよ。君の過去に何があったにしろ、今の君には心配してくれる人が居るんだ。その事を忘れずに日々を生きるんだよ」
「……はい」

士郎の言葉に、頷いてそう答えるしかなかった。

◆

代金はいらなからと、お土産に大量のケーキを包んでもらってしまった。ケーキの入った箱を二つ、アミタと一つずつ分けるように抱えながら手にする形で翠屋を出てきた。これによって、自分が元々海鳴へとやって来た理由に片が付いてしまった。ついでに、個人的な資産もこれでゼロだ。もう一つの家鳴——夢の家鳴へと旅立つ前に稼いだ分のお金は、時間が巻き戻った影響か、口座の中には存在していなかったので完全な文無しにもなっている。だがこうやって自分の都合に一つ蹴りを付けた所で、

「予想外にすつきりしたな」

「そうなんですか？」

「ああ」

翠屋から出た所でひよこは頭の上に戻り、座り心地を確かめるように髪の毛をかき分けている。そんな調子で二人と一匹で店を出た所で不思議と自分の中にある重荷が消えている感触を得られた。

「なんというかさ」

「はい」

「……設定されていたのはともかく、自分の都合だったんだし。なんだかんだで持ち込んだ案件が処理出来たってのは良かったのかもな」
考えてみればこれが、自分に設定された都合というものだろう。そ

して自分の記憶が都合よく書き変わらない以上、これ以上増える事もないのだろうと思えば多少は気が楽になりもする。

「それにほら、これで持ち込んだ都合が終わるならさ、逆に言えばこれを片付けちまったんだから後はもう調査しか残ってないだろうする事も？」

「うん、そうですよ。そうやって考えるのが一番ですよノアさん」

こんな風に考えなきややってられないというのも一つの事実ではあるものの、持ち込んできた自分の設定の一部を漸く切り離せるという事実は間違いなく良い事だ。これで漸く自由な身分になれるという気持ちだった。ここからは自分の好きにやらせて貰おうという気持ちも、そうなるに出て来る。

「何事も、前向きになつて向き合わなければ結果が出ててもそれが好ましいものになるとは限りませんからね」

気持ちだけでも勝っていませんと、というアミタの言葉に同意する。何はどうあれ、厄介ごとが減ったのは事実だ。故に軽い安堵の息を吐きつつ、

「これ、たくさん包んでもらっちゃいましたけど、みんなが喜びそうですね」

「そうだな……そうだな」

気にするな、というのは無理な話だろう。だがこうやって向かい合えば、終わらせることの出来る事だつてある筈。その事実は幾分か自分の心を楽にしてくれる。それに次に何をすればいいのかもわかっているのだ。その事を考えれば案外さつくりと、これも終わるのかもしれない。そんな期待を込めながら歩き出そうとしたところでおつと、と声を零した。

「終わったし軽くタスク消去しておくか」

「タスク消去ですか」

「ああ……スマートフォンに親父の遺言やらなきやいけないタスクを書き込んでおいたんだよ、忘れないように。だけどこれももう必要ないしな」

片手でケーキの入った箱を持ちつつ、もう片手でポケットからス

スマートフォンを取り出す。それで画面をフリックして開きながら、メモ帳にアクセスする。そこに残されている最後のタスクを消去した事で、

「これで終わる………？」

消去した所で、タスクが一つだけ残されていた。【重要】と何重にもロックされているものであり、自分がそれを作成した覚えはないタスクだった。そもそも今の今までそれを見た覚えさえない。

「一つだけ残されていますけど………？」

「あ、ああ、そうだな………なんだろう………なんか忘れていたか………？」

嫌な予感をしつつも、何故か、魅了させるように指の動きは真っ直ぐとそのタスクを書き込んだメモへと吸い寄せられるように向かっていた。それを開くのには一秒もかからず、一瞬で展開された。

そして最初に見えた言葉は、

思い出せ。

赤く、血の様に赤いフォントで彩られた文字列だった。

思い出せ。彼女を思い出せ。忘れるな。思い出し続けろ。

恐怖さえ感じさせるほどの凄まじい執念と気迫を感じさせる言葉だった。生きている、そうとさえ錯覚させるような強い言葉。まるで今にも誰かが語り掛けているような、それほどの強さを覚える様な言葉でもあり、

それは展開された端から自動的に、掠れて消えて行く。

まるで最初から存在していなかったかのように、

ただ最後に、

妹を見つける。

こなすべきタスクにその言葉だけを残して、最後の【重要】と書かれたメモは消滅した。今、自分の手の中で行われたホラーを呆然とした様子で受け止めながら、言葉を吐き出す。

「一つ終われば、また次の、か………」

苦痛はそう簡単に終わらせてくれないらしい。

W i n d i n g U p

ヴァリアント・ユニットにより形成された姿はリボルバー、馴染みのあるデザインのそれだ。握っていて一番信頼し、そして安心できるデザインと言えはまずこれだろう。握った時、振り回す時、そして狙ったときに感覚が一番しっくりくる。アメリカで手に入る銃は普通のオートマチックが主要になってくるものの、自分の手に馴染むのは、記憶にある限りは握ったことのあるこいつだ。故に銃を握る、という感覚に違和感はない。

——寧ろ。

「じゃ、行くわよ」

イリスがフォーミュラで生成した小型ドローンターゲットを浮かばせる。早くはないが、不規則に浮かび上がったそれがゆっくりと左右に揺れながら、的を外す様に動いてくる。それをVAリボルバーを握った状態の腕をだらり、と下げた状態で眺め、

「ふう——」

軽く息を吐いた。自分の意識を神経に通す様に集中させる。そうすれば見えて来る。動きが。どうやって撃てばいいのか。体の動かし方が。最適な動作が。まるで自分のものではない様な、そんな業と技術が自分の中に浮かび上がってくる。その内、今一番必要とするものを選択し、自分に装填する。弾丸を撃ち出す銃の様に。それを認識さえすれば後は自然とそのあとの動作を実行するだけで終わる。

腕を振り上げながらリボルバーを三連射。

三つ放たれた弾丸が三機の小型ドローンを打ち抜きながら破壊した。破壊されたドローンはその躯体に穴を開けながらグランツ研究所の実験室フロアに落下し、ショートしながら破壊された姿を晒している。その姿をしばらく、無言で眺めつづけているとイリスの方から声が来た。

「凄いわね……正確さと反射速度はスーパーエルトリア人並みね、貴方。まさかあんなゴリラ姉妹と同等の……ああ、いや、地球にはまだそのポテンシャルの持ち主が居たわね」

『全方面的に失礼ですよ、イリス』

『そうだよ。なのはと比べたらボクたちの方がまだ人類してるよ』

実験室の外で見守っている連中がヤジを入れて来る。高町なのは、精神力がどことなく捻じれ狂っている、というのが自分の素直な印象だった。そんなに人間を辞めている子だったのか、アレ。まあ、隻眼の癖に出撃しようとしていたし。あの小ささでぶっ飛ぶような力を見せていたのだからまあ、やっぱり人類じゃないのかもしれない。

そんな事を考えると緊張の糸が切れてしまった。再びだらりと手を下げながらVARIボルバーをコアの状態へと戻す。

「とりあえず……こんなもんでいいのか？」

「ええ、これで欲しいバイタルデータは取れたわ」

イリスはそう言いながらドローンを解体して元の物質へと戻しながら、ホロウインドウを複数浮かべてこれまでに行って検査の結果を表示させる———といっても使用言語はエルトリアの言語がベースとなっており、何が書いてあるのかは自分の目で見てもまるで解らない。だが実験室に居るイリスはちゃんと理解しているようで、それに目を通してしている。

ここ数日、フィジカルなデータを取るために色々とテストに協力している。

後アルバイトを始めた。グランツ研究所にある資金も無限ではないし、働く必要がある。その為、恥を忍んで土郎さんにはアルバイトとして雇って貰っている。そして空いた時間は次の戦いに備えて体を鍛えようとして———その前に、こういう形でデータを取る事になった。この射撃以外にも色々とやらされてきた。そしてその結果が今、イリスに集まっている。存在そのものがフォーミュラを集めたような存在であるイリスは、生体型のマシンだと表現できる。その為、この程度の情報処理であれば余裕らしい。

『イリス、こっちにもデータ転送を頼むよ』

「もう送った」

『ありがとう……ふむふむ……ほほう』

研究室の方に居るファイルからの声がホロウインドウを通して聞こ

えて来る。空間に投射されるディスプレイを掴んで動かせる光景は、未だに最先端テクノロジーをぶつちぎっていて違和感を覚える。とはいえ、これが魔法のある世界では普通の技術でもあるらしい。特に今はシユテルとレヴィイという魔法側の存在と、エルトリア勢の超科学文明サイドの連中が揃っている。

魔法と科学技術のすり合わせが行われており、ファイルは日夜楽しそうに笑っている姿が目撃出来る。なんでも、ずっとやりたかった事の一つらしい。

ともあれ、そういう事でスペック診断が入る。どれだけ何が出来たのか、何が得意なのか。そういうことを判断する為のテストの数々をこうやって射撃をして終わらせた所で、イリスからの評価が出て来る。

「リンカーコアは——あるわ」

「あるのか。だけど俺は魔力を持たないみたいなんだが」

「そうね。リンカーコアがあるけど、その魔力の蓄積可能量が0なのよ」

「つまり器はあるけど、底がないから何も溜まらない、って事か」

「正解」

「だから貴方が魔法を自分の力で使えるようになる事はありえないわ、絶対に」

「……そうか」

やはり、アレは夢の中の奇跡という奴か、都合の良い夢というか、そういう類のものだったのだろう。魔法、使えるようになったのは物凄く楽しかったのになあ、とは思わなくもない。だがなくなった今としては物凄く清々している。少なくともそう思わなきゃやってられない。

「その代わりに貴方の体、物凄く優秀よ」

その言葉と共に色々と表示されるが、学が薄いのでそれが良く理解できない為、浮かべられた所で腕を組みながら首を傾げる。

『ああ、つまり肉体としてのポテンシャルは非常に高い、って話だよ。理想的な肉質と骨格をしているというか……そうだね、自然に構築で

きる肉体としてはかなりハイレベルな出来上がり方をしているよ。所々骨や筋肉にフォーミュラによる強化改造の痕跡があるけど、それも形を変える物じゃなくて密度を増して素の身体能力を引き上げる為のものだ。つまり君は元々から優秀な素質の持ち主だった、という事だよ』

「ふーん……」

そうは言われてもなあ、と思う。

「だけど俺のパラメータなんてもん、設定されているもんかもしれないぞっ。」

『いや、私としてはそれは違うかな、と思っている部分はある』

ファイルが俺の存在そのものが設定されている、という事実に対して真っ向から反対する。

『そもそもだ、君の肉体に対して魔力、才能、そしてフォーミュラという形で後付けの強化を行おうとした痕跡があるのは認めるよね？』

「ああ」

それは認める。この海鳴に來てから発覚したものだ、全部。この世界が5秒前に作成された様な世界観ではない限り、少なくともそうだった筈だ。そしてファイルはそれが何よりの証拠だ、と声を上げる。『良いかい、君に発見された改造と強化の形跡、或いは後押しは全てこの海鳴にやっつて來てからのものなんだ。つまり私が睨んでいる辺り、我々を巻き込んだ犯人という物が及ぶ力の範囲はこの海鳴を舞台にしている範囲だけであり、その外側に関しては力が通らないんじゃないか？　って思っているんだ。だからこそ君が海鳴にやっつて來てから後付けする様に力を与えたんだ』

「つまり元々の部分に関してはノートタッチ、って事ね」

イリスがファイルの仮説に成程、と頷く。そして自分も腕を組みながらわかりやすい説明に頷いた。元々存在していた部分に関してはノートタッチ……そう言われると確かにそうとも思える部分がある。とはいえ、それを断定できる証拠がある訳でもない。樂觀視する事は出来ない。だがそれでも、自分の体がそうであるのは、元々そういう事だったという事はイリスが保証する。

「ま、変に卑屈になるよりも素直に両親に感謝しなさいよ。私の親はクズでカスでクソの塵芥だけど、貴方の両親はそうじゃないんでしょ？ だったら変にひがむよりもそっちに感謝しておいた方が100倍有益よ」

『イリス、イリス。そろそろパパの心は痛いんだ。偶には一緒にお風呂なんて——』

遠くで発砲音が聞こえて来る。イリスの直ぐ足元ではフォーミュラサークルが展開されており、何かを遠隔起動させているのが解る。またファイルが射殺されて——どうせアクセラレイターで避けているか、と考えてファイルの心配をするのを止める。ここ数日の付き合いであるの科学者がどういうポジションに納まっているかは学習したつもりだった。

「それよりもその銃捌きよ。やるじゃない」

「これは……」

握っているコアを持ち上げて軽く眺めながら、それをVAリボルバーへと変形させる。再び構えるように握り直しながら持ち上げ、軽く回転させてから握り直す。やはり手に馴染む。だがそれ以上の滑りの良さを感じていた。

「海鳴の来る前は銃を扱う時もあったのよね？」

「まあ、そこそこ。俺も悪さしてたからな。だけど、地球でここまでスムーズに銃を使える人間なんて、軍人が相当銃を使い込んでいる趣味人でもなきや無理だろ」

その言葉に、イリスが此方の言わんとしている事を理解する。

「じゃあ、それも《干渉》だって言いたいのか？」

「……どうだろうな」

腕を持ち上げ、銃を真つ直ぐ構える。その動きを支え導く様に手を合わせられている感触があるのだ。自分の力ではない自覚。誰か別人の力を使っているという感触があるのだ。いや、使っているというか、借りている？ そう、誰かの力を借りているという感触だ。こうやって武器を握って体を動かして、初めて自覚できる。空っぽな自分の中にぼんやりと満たされている別人の力があるのを。前は魔力が

あつたそこは空っぽで、魔法の感覚も空っぽになっている。だがそれと入れ替わるようにそこには、別の感触があつたのだ。

だから銃の使い方が解る。滑るように、導かれるように、撫でるように、呼吸する様に体が動く。一番最初に、体の使い方を教えてくれるように、自然と動きを導いてくれる。そんな気がする。

今も銃を構えれば、そのわずかな動きを支えるように手を合わせている感覚がする。

この、どことなく感じた事のある息遣いは、

「……ジークリンデ？」

名前を口にして見るとどことなく納得できる。妙に体が良く動くのはこいつの仕業だ、と。それをイリスが妙なものを見る様な視線を向けて来る。

「ジークリンデ……ってのはアレよね。彼方側の海鳴で貴方を殺したの」

「ああ。繋がった状態で首を絞め折られて昇天。笑えるだろう？」

「完全にハニートラップにかかった……って普通なら見ても良いんだけど。殺されただけじゃなくてこっちに送り返された上で向こうで待ち伏せされていて、それに妙な補正を切らすのに貢献しているんですよ？ 功績だけを上げれば完全に此方側の味方に見えるわよね」

「……まあ、そうだな」

結果を、結果だけを見れば。

だが不明瞭な部分が多いし、明らかに知っていて隠している部分もある。茶化しながらもその割には献身的に尽くしていた事実がある。だがそのまま消えてしまった事もアリ、彼女の真意が一体何だったのかは解らない。

ただなんとなく、繋がりだけは残っている。不思議と自分の存在や存在意義は疑えても、この繋がりだけは本物の様に思えるものがあった。

「ま、海鳴では現在確認の出来ない相手らしいし、今はどうでもいいわね。それよりも思ったよりも早い段階で彼方側へ送り出せそうなことが解ったわね」

イリスの言葉に腕を組みながら目を閉じて思い出す。

八神堂を確認した時を。

一人しか入れない八神堂の奥で確認したものを思い出し、苦い表情を作っているのが解る。あの先へと進むのであれば、まず間違いなくそれなりの力が必要だ。だが現状、このエルトリアチームの中で一番弱いのが自分である自覚はある。その為、こうやって体を動かす前の適性などを調べている。

とはいえ、解り切った事だが自分の体を使う事以外に選択肢はないのだが。

「まあ、何にせよやらなきゃいけないことが解りやすいのは良いわ。アミタとキリエからフォーミュラでの戦い方を、私からフォーミュラその物を学べいいでしょ」

『何とか外部から魔力をストックさせる方法はないものか……そうすれば魔力式アクセラレーターを私の前で……!』

「野望はもう少し声を押さえて口にしてろ塵芥」

止めるのが無駄だと解っているだけに、もはやフィルを止めようと思わないイリスの姿に少しだけ笑い声を零しながらふう、と息を吐いた。

——騒がしい、

実に、騒がしい。

夢の様な非日常が始まりそうだった。

W i n d i n g U p Ⅱ

——言葉よりも早く弾丸が飛来する。

「っ——！」

体を横へと全力で投げながら右手を突き出すように構える。その間も体は横に動き、そして倒れて行く。それを何とか筋力で逆らいながら倒れないようにコントロールしつつ、VAリボルバーに乗せて引き金を引く。銃声と共に銃口からフォーミユラが形成させたエネルギーの弾丸が放たれる。流す様に横へと銃身を引きながら放った弾丸にはその慣性が乗る。故に正面から弾丸は衝突せずに、僅かにズレながら衝突し、削り合いながら角度を乗せて弾く。

それは導くままに当たり、そして逸れる。神技とも言える技能はしかし、行うだけであればそこまで難しくないのは、既に実証されていた。本当の問題はこれを行えるかどうかではなく、常に脳味噌を圧迫するように襲いかかってくる現状だった。

なぜなら今、正面には十数という弾丸が一気に飛翔してきているのが見えるからだ。

「一発対処した程度じゃ駄目ですよー」

正面、ガトリングガンへと変形されているヴァリアント・ユニットをアマタが構え、攻撃を行っている。その砲身から大量に吐き出される弾丸を前に対応を迫られている。どことなく楽しそうな姿にイラつき、叫び返す。

「解ってるんだよー！」

ここで防御してはならない。ここで防御すると上から抑え込まれて、そのまま叩き潰されるだけだ。防御という行動は本当に何もできなくなったときに最後に取り行動だ。なぜなら防御は絶対にリソースの減少を発生させる行いでもあるからだ。故にクレバーなのが受け流す事であり、ベストが回避する事。それらの状況を取得し、即座に判断する必要がある。

故に出来る事に対応するように動く。

武器をVAリボルバーからVAショットガンへと切り替える。そ

のままノータイムで射撃し、散弾で正面に放つ。それで瞬間的に空間に穴を開けて回避できる道を作る。

「残念、不正解です」

「は——」

そうやってできた穴をアマタがガトリングを鈍器に振り上げて入り込んできた。強制的に対応を要求して来る対面にショットガンでは確実に殴り負ける。なら殴り勝てる武器が必要だ。

だがどれだ。

その選択に思考を割いた瞬間、ガトリングの砲身が目前で停止した。

「はい、詰みです」

「……ああ」

武器を降ろしながらゆつくりと息を吐いて、体から力を抜く。アマタも同じようにガトリングを降ろすとそれをコアへと姿を戻す。同じようにコアの状態へと待機させながら首の裏を軽く搔く。

改めて始めた戦闘訓練、その成果は——あんまり、芳しくなかった。

「今、何で対応するかで迷いましたね？」

「解ってる、解ってるんだ……あー、糞！」

軽く吐き捨てながらアマタに背を向けるように逃げた。ジークリンドの武芸が使えるようになったからと言って、強くなったという訳ではなかった。逆にアマタからすればカモの様な物だったらしく、戦闘訓練を初めて以来、惨敗が続いていた。ぼろ負けも良い所で格好良い所なんて何一つありもしない。煙草の一つでも欲しくなる体験続きになっていた。

「思うように動けねえ」

自分が悪いんだと解りつつ悪態を吐き、片手で髪を掻き毟った。

自分の過去を疑い始めてから、何というか——判断が付きづらくなってきた。

一種のスランプとも呼べる。

今まで自分がやって来た事、経験したことが信用できないから、活

用出来ない。即ち経験的なりセット状態だとも言える。その為自分が咄嗟では動けず、反応が遅れる。無論、今の交差を見ればそれが致命的な隙になるのは見えている。故にこのエルトリア組で現状一番強いアマタがスパーリング相手で此方のフォーミュラを使用した戦闘経験を積むのを手伝ってくれている。

こうやって何をした、どうやって動いた、どうやって防いだ、何を使った。それを経験し体に覚えさせることで戦う時、咄嗟に反応を取れたり、判断で迷う事がなくなる。プロのスポーツ選手が何度も何度も試合を繰り返して試合中の動きを試すのと同じだ。型や技を練習して完璧にマスターした所では意味はないのだ。それを正しく運用する経験を積み上げる事で初めて意味が出て来る。

そう言う意味ではあのエレミアという一族はクレイジーの極みを超えていたのかもしれない。最強の個人を生み出す為にひたすら子供へと全経験を継承するというのはあり得ない考えだ。

一番最初にこれを思いついた奴はマリファナキメるついでにコカインも一緒にキメてたんじゃないか？ と今更ジークリンデの話を思い出しながら思う。

「ふうー……あちい」

神経を常に尖らせながらアマタの攻撃を迎撃し、そして次善策を頭から捻り出し続ける。経験を積むためではあるものの、常に全力疾走しているようなものだから、気づけば凄い量の汗を掻いていた。軽く頭を振れば玉のような汗が地面に向かって落ちる。海鳴臨海公園は今、魔法による人除けが張られており、人が近づかない場所として利用出来ていた。その上である程度フォーミュラにも非殺傷レベルまで出力を下げた訓練の為に運用中だった。

「そうですねー……もう4時間続けていますしそろそろ一度休憩を入れましょうか」

「ああ、じゃあ汗を流すわ」

息を吐きながら上に来ていたシャツを脱ぎ、公園の噴水まで近づく。そこで勢いよく頭を噴水の中に沈め、体を一気に持ち上げる。頭からかぶった水を一気に撒き上げて体へと落とし、それが全身を濡ら

しながら戦闘訓練で火照った体を冷やしてくれる。それで雑に汗も洗い流し、軽くリフレツシユする。

「ふうー……」

魔法を使つて人払いをしているから見られたり、迷惑だったりする心配はしなくてもいい。ここは無断で貸し切りになっているような状態だ。そもそも、そういう配慮をした所で意味があるのかどうか、という部分もあるのだが。ここで盛大に暴れた所で国が動くのだろうか？ そこまで設定は出来ているのか？

考えた所で無駄だろうが、それでも考えたくはなる。

「ふう……」

噴水の縁に腰掛けながら軽く頭を揺らして水滴を飛ばす。日差しは暖かく、そして風が吹いている。しばらくすればこれも直ぐに乾くだろう。故にこのまま乾くまで座つて休憩しようかと思つた所で、

「はい、これをどうぞ」

「おう、悪い」

訓練を見守つていたシュテルがタオルとスポーツドリンクを差し出してくる。それを受け取りながら軽く顔を拭き、キャップの外れたそれを喉の中へと流し込んでゆく。かなり体を動かしていた事もあり疲れているが、この疲労はどこことなく心地よく感じられた。

全力で体を動かして得られる疲労——ここまで真つ当なものは、ひさしぶりに感じるものかもしれない。渴いた喉を潤して一気に飲み終わったペットボトルを横に置く。終わった所で正面に、笑顔でシュテルが待っている。

「さあ、惚れても良いんですよ」

「台無しだよ」

シュテルの背後に立っていたアミタが申し訳なきような表情をしている。自分もシュテルを無視し、軽くタオルで顔を拭き直し、髪を軽く拭いてからそれを肩にかける。手櫛でササつと自分の髪の毛を整えて、コアユニットの表面を指で軽くなぞつて弄る。

「アレ、ここは私に熱いキスが来るところでは。そしてそのまま押し倒されてビーストモード……」

「ノアさんはやはり、使う武器の種類をもっと制限して、その上でそれぞれの習熟を上げていくのが一番だと思いますよ」

「おーい」

「何を使うかでちよいちよい悩んでる部分もあるからな」

「おーい」

煩いぞ雌猫、と言わんばかりにひよこキックが飛んだ。顔面を横から蹴り飛ばされたシユテルが転がり、その反動で宙返りを取るひよこが此方の頭の上へと着地して来る。割とよく見る光景なので普通に無視するとして、

「武器……武器かあ」

「ないんですか？ ノアさんは使い慣れた武器の方は」

「あのな、地球って世紀末じゃないんだ。寧ろ銃さえ握ったことのない人間の方がはるかに多いんだぞ？」

「そうなんですか？ その割にはなのはさん、戦い慣れている部分があったので……」

あのクレイジーサイコ戦闘少女、絶対に親に隠して暴れているだろうとは思っている。此方の海鳴では起きてないからまだいいのだろうが、彼方の海鳴のなのはきつと教えていないのだろう。じゃなきゃあんな風に体を使うことが出来る訳がないだろう。まあ、それはともかく、

「俺が触ったことのあるもんなんて鉄パイプとハンドガンとリボルバーぐらいだよ。後はチェーンソーか」

爆薬とかならそれとなく結構弄った覚えはある。爆弾の一つや二つ、今でもまだ作れる気がする。だが武器、と言われると困る。

「ノアはこっちに来る前、悪さをしていたと言ってますが……具体的に？」

「ストリートギャング」

「あー」

その答えにアミタとシユテルが声を合わせて納得の声を漏らした。まあ、本当に存在するのかどうか怪しい過去なのだが。それでも自分に設定されている限りは、ストリートギャングでそこそこ悪さしてい

た。アメリカでは割と楽に銃が手に入るし。一度手に入れてしまえば後は悪さし放題だ……警察に捕まらなければ。まあ、そういう訳で割りと銃を撃つ事自体の経験はあるが、

現代の地球で、そんな武器を持って殴り合いの殺しに発展する様な自体は稀だ。殺し合っても撃ち合いになるだろう。

「うーん、そうですね。ですが武装はなるべく馴染むもの、或いは習熟させると決めたものが良いんですよね。私も武装種類に関しては結構絞っていますし。それに数が少ないって事はそれだけ選択と悩みの余地を削るって事でもありますから。絞れば絞るほど良いです。ですがフォーミュラの強みは多様性。それを完全にも削らない為には」

「何種類かを使い分ける、か」

そう言われても使い慣れた武器なんて思いつかないのだから、困ったもんだ。

「そこまで悩む必要はありませんよノア。大体の武器でしたら補助プログラムを通して最初は基本的な使い方を学べますし。後は使い続ければ勝手に体が覚えます。最初は軽い気持ちで使えばいいですよ。武器の相性なんてもの、飛べばほぼないですし。趣味で選べばいいんです、趣味で」

「身も蓋もねえ……」

「だけどそう言われると……そうだなあ、と声を零す。一番手に馴染むのはリボルバーだ。だからこいつはそのままにしておきたい。その他と言えば、

「あんまりちまちましたのを振り回すのは好きじゃないな。デカいのをガツンと叩きつけたいな」

「ほうほう」

「後は一気にズドン、と叩き込むのも豪快で気持ちよさそうだな」
「成程」

「私達で手伝えそうな範囲で何とかかなりそうな武器モデルを探してみますか」

「ぴよぴよー？」

「ネット使って検索すればいいのか。賢いなお前」

「相変わらずなんで会話出来てるんでしょかこの主従」

「さ、さあ……?」

フォーミュラからインターネットへと接続し、それをホロウインドウとして表示させながら、歴史上存在する武器の数々、そのデータを出現させる。流石先端科学というか、未知のテクノロジー。ネットで出現する武器のデータをそのまま3D投射する事でモデルを出現させる事さえ可能としている。時代はやはりVR、という事なのだろうか。いや、ここに時代もクソもないのだが。

「二応、剣、斧、槍だったら博士のテストに付き合う為に全部習熟しているの、問題なく教えられますよ」

「本当に万能だなこいつ……」

強くて優しく、何でも出来て心も強い。ここまで来てほぼ完璧超人と言いたくなるようなアミタ、果たして彼女に欠点はあるのだろうか? そんな弱点を探る様な風に思考を巡らせる中で、ちよつとだけ気になる武器を見かけた。それは二つの長剣の柄と柄を繋げて作る武器、ダブルセイバーと呼ばれる武器だった。かなりマイナーというか一般的ではなく、長さからすると槍の様にも扱える。ただ形状を見れば解るように、かなり扱い辛く、そして危ない武器でもある。何せ、振り回しているだけで自分をまきこみかねない武器だからだ。

だが、何となく気に入るものを見た瞬間に感じた。

「何か、気に入ったものでもありましたか?」

横から覗き込んでくるシユテルを迎撃する様にひよこが蹴っている。雌臭いと言っているのが解る。お前、最近縄張り主張激しいよなあ、と軽く笑い声を零しながらネットで見た形状を確認しつつ、ヴァリアント・ユニットを軽く握り込んだ。

「こう、か」

そのまま周りの物質を分解して取り込み、それをパーツに変形させる。直径1.5メートルの剣を二本接続してくっ付けた、細長い槍の様なダブルセイバーを作る。持てる部分が中央にしか存在せず、両側に存在する鐔の部分から先は長い刃が伸びている。合わせて全長3

メートル程の長さとなっている。手に感じる重さは——まだ、軽く感じる。もつと重い方が好ましい。反射的に、そう感じてしまった。

「……気に入ったんですか？」

「……おう」

「男の子は好きですね。浪漫とか。実用性が薄いのに」

「おう……否定は出来ない」

そういう言葉にはなんだかんだで憧れがあるというのも事実だ。とはいえ、この武器は——というより形状は、どことなく親近感があつた。

間違いなく今までの生活で自分が見たような覚えはないのだが……ただ、まあ、なんとなくだ。なんとなく、気になっただけだ。だからまあ、これでいいんじゃないか？ とは思わなくもない。

「となると後は遠距離武装ですね！ 重くて大きいと言えぱやっぱりランチャーですよ、ランチャー」

「となるとやはり時代を先取りしてCWSストライクカノンやレイジングハート・ストリーマのデザインや機構を参考にしたモデルとかどうでしょうか？」

「ああ、良いですね。私もルシフェリオン・エストレアとかやってみたいですし」

「近接用砲撃形態……確かに魅力的に感じます」

蛮族系女子の会話だった。モデル、機構、システムの話をされ始めるとまるで意味が解らないので、武器をコアへと戻して膝に肘を乗せるように頬杖を突き、軽く息を吐いた。

夢界から帰還して1カ月。

まだ、海鳴には何の変化もなかった。ただ、日常ばかりが過ぎて行く。

W i n d i n g U p Ⅲ

「じゃ、これを宜しく頼むよ」
「了解です」

慣れない日本語の敬語を口にしつつ、受け取ったトレーを店舗内の席へと運び、置く。その際にメニューを復唱し、確認するのを忘れないう。常に笑顔をキープしておけば問題はない。少なくとも俺の見てくれば悪くはないのだ。笑顔を浮かべていれば相手からの印象は悪くならない。それを終えたら静かに下がってカウンターの方へと戻る。平日という事もあり利用客の姿は少なく、週末のラッシュアワーと比べれば平穏そのものと呼べるような状況だった。元々は恭也の物だった喫茶店の制服にエプロン姿で今、

自分は喫茶翠屋のアルバイトをしていた。

やっぱり、金を稼ぐのは大事な事だ。生活費はかかるし。ファイルがそれなりの資産を抱えているが、アイツに借りを作るのはいろんな意味で危険なものを感じる。となるとやはり、何とか自分で生活費を手する必要がある。となればアルバイトだ。それしかない。いい年した社会人なのだから、働かないという選択肢は今更なかった。そして幸い、やや恥ずかしい話ではあるものの、高町士郎は力になってくれると言ったので、金を借りるのではなくこうやって労働の場を用意して貰った。

結果、こうやってアルバイトとしてウェイターなんてやっている。もつと細々とした雑務を押し付けられると思っていたが、普通にフロアに立たされて驚いている部分がある。とはいえ、フロアに出ているもやる事はそこまで難しくはない。

痴呆の猿でもなければ守れるルールを守るだけだ。

難しい事じゃないだろう。寧ろ社会のニュースで出て来る問題を起こす馬鹿は、なんでこれくらいさえも守れないのか時々不思議になってくる。ああ、いや、自分もそういう馬鹿だったから気持ちには解るには解る。だが馬鹿だろう。そんな事を考えながらカウンターの横に戻る。カウンターの直ぐ向こう側には士郎がいる。

「ありがとう。仕事にはそろそろ慣れた頃かな？」

「まあ、そこまで難しくはないので助かっています」

「その調子のまま週末を乗り切ってくれと助かるよ。最近は土日の利用客も増えてきているしね」

「頑張らせて貰います」

カウンターに寄り掛かりながら軽く息を吐く。翠屋でのアルバイトも始めてから数週間が経過している。初任給はまだだが、あと数日で貰えるところだ。入ったら生活雑貨周りを充実させないとならない。その他にも研究所の方に食費とかの方も入れなきやならないし、しばらくは生活がキツイままだろう。とはいえ、漸くお給料がもらえるとこの事実が中々嬉しい話だ。

ここまで真面目に働くのも、恐らく人生で今までなかった経験かもしれない。

相変わらず、自分に存在する過去かどうかが怪しいが。

疑って、疑って、キリがない。どこかで疑うのを止めなくてはならない。そう思っただけでもずっと、頭の中を自分が偽物かもしれない、という事実がぐるぐると回り続けている。自分はゲームに出て来るNPCのようなキャラクターかもしれない、と。そう思うとどうしようもないムカつきと吐き気を覚えて、

消えたくなる。

「しかしノア君」

「はい？　なんででしょうか」

士郎に呼ばれ、姿勢を正しながら士郎へと視線を向ければ、知ろうがそこまで真面目な話じゃないよ、と苦笑しながら楽にするように手を振る。

「君、もしかして何らかの武術を覚えていたのかい？」

「え？」

士郎の言葉に少しだけ驚きの声を漏らす。

「君の足の動き、自然と音を殺す癖がついているよ。体の重心も安定していて、足腰でちゃんと体を支えるように動いている。武芸の技術が肉体に染みついていっている部分があるけど、何となく無意識的に出てき

ているという部分もある……慣れてない、って感じだけどどうかな？」

「せ、正解です」

ズバッと指摘する土郎の慧眼に恐れ入る。だが思い出せばリアルランボーと噂の親父と戦友だったらしい人だ。そう考えると自分では解らない様な実力者なのかもしれない。土郎はうーん、と声を唸らせる。

「私がもう少し若ければ稽古をつけてあげられたんだけどなあ。今はもう看板を恭也に渡してしまつてね」

「いえ、こうやって働かせて貰っているだけで充分です。それ以上の世話は申し訳ないです」

そうやって土郎と話していると、ベルの音と共に店の扉が開く。反射的にいらつしやいませ、と口にした所で入店して来るのが高町恭也——海鳴の大学に通う青年の姿であるのを目撃する。入ってきたところで土郎が良い所に来たな、と恭也を見て言う。

「恭也、暇な時に軽くノア君に稽古を付けられないか？」

「土郎さん、本当に。本当に良いですから……こっちも対戦相手ちゃんといますから、大丈夫ですから……」

何とか言葉を取り繕いながら押し寄せの様子の店主に落ち着く様に説得していると、苦笑しながら恭也が近づいてくる。

「父さんが済まないな……こう、悪い人じゃないんだけどお節介で……」

「何を言うんだ恭也。困っている人を見かけたら、関われる範囲で助ける。人としては何も間違っていない事だろう？」

「そりやそうだけどさ、相手の迷惑とかを考えようよ父さん」

恭也のごもつともな言葉に、土郎はしかしだなあ、と声を出そうとして、厨房の方から名を呼ばれる。

「おっと、桃子に呼ばれてしまったね。一旦裏に戻るけど、一応考えておいて」

「は、はあ……」

「あそこまで押しの強い父さんも珍しいな……」

厨房へと消える土郎の様子を恭也と共に眺め、軽く息を吐いてから改めて恭也に軽く頭を下げる。それを見て恭也が苦笑する。

「ああ、いいや。それよりもお前も武術をやってるんだらう？」

「まあ、やっているというか継承されたというか……」

使おうとすればいくらでもジークリンデの武芸が引き出せるという感じ、だろうか。本人が喜んで手を添えて来る。その感触が日常に根付いているのが解る。無意識的に音を殺して歩いているのは恐らく、能力の暴発か暴走か。そこらへんだと思っている。少なくとも自分分は。まだこの他人の技を使うという感覚に全く慣れていないのだ。「ふむ……まあ、父さんに言われたから、という訳じゃないけど困っているなら別に頼っても良いぞ？ 俺の事は」

恭也の申し出にちよつとだけ困る。

「いや、それは」

「別段言われたという訳じゃないが、俺も他の流派の技は気にならない。場合によってはウチの流派に取り入れたいし」

「そういうものなのか」

「そういうもんだ」

だからもつと気楽に構えればいいさ、と言って肩を叩きながら恭也が奥へと消えて行く。その姿を見送り、この高町一家という善性の塊の人間たちを良く理解する。

この人たち、一家全体でお人よしなのだ、と。



「ふう、終わった終わった」

長時間の勤務となると一日中世話になっているようなもんだ。昼食付なのは地味にありがたいが、此方から働かせてくれと頼み込んだ分、申し訳なさが残る。自分の存在が余りにも都合が良い、という事実はまるで相手を利用してしている様な気分になってしまい心が休まらない。結局、ファイルは元から存在していた部分は手が付けられないから上乘せする形で付与していたと言った。つまり後から思い出す

様に追加された高町家は、都合の良い展開の犠牲者ではないか、という話だ。

そう考えてしまうと、素直に頼る事もありがたく思う事も出来ない。

結局、俺が巻き込んでるだけだ、と思ってしまう。

消えてなくなりたい。

日に日にその思いが募って行く。誰かに頼る度に、自分一人ではどうしようもない状況を理解するたびに、優しくされるたびにそう思えてしまう。

高町家の優しさが、辛かった。

それでも頼らないとまともに生活出来ないという事実が更に辛かった。

「はぁー……何のために生きてるんだ俺」

ディアーチエ、ディアーチエの為。自分にそう言い聞かせながら翠屋からの道を歩く。正直、ディアーチエが既に戻っていた場合、自殺でも考えているぐらいには今の状況には嫌気が走る。自分という人間がもう解らないし、次から次に出される新しい名称、設定、力、能力、武器、

そんなものが今の状況で楽しめるわけもない。

ただただ、疲れて行くだけだ。だけどそれを顔に出した所で心配されるだけだ。だからそれを何とか仮面をかぶって誤魔化さなければならぬ。だがそれさえ、上手く出来ているかどうか解らない。士郎には多分、無理をしているって一瞬でバレている。だからあんな風に世話を焼こうとしている。流石親父と一緒にリアルランボーしてただけはあると思う。

「……はぁ」

溜息を零す。この国に来てから、此方の言葉に、文化に、そして状況に流されっぱなしだ。

帰る場所があるのだろうか。帰れるのだろうか。俺は存在しているのだろうか。俺は誰なんだろうか。何故、俺なんだろうか。

その考えがずっと頭の中で転がり続けている。一体、どこの悪趣味

なクソ野郎がこんなことをしているのだろう。なんで、こんなに苦しまなければならぬのだろうか。もう、死んで全部終わりにする事は出来ないのか？

苦しくて苦しくて、泣きそう。

消えてなくなりたい気持ち、ただ、助けると決めた。その矜持の為だけに何とか頑張る。だがこれでディアーチェが戻って来た時、

自分が、どういう行動をするかが……ちよつと解らない。

少なくともそのまま普通に生きて行くというのは耐えられない事だ。それにもし、俺が最初から存在しない様な存在であれば、消えてしまえばいいのだ。そうすればどうせ、別の奴が用意されるんだ。その時はそいつに全部押し付ければ良いだろう。どうせそいつが喜んでやってくれるだろう。

次の道化だ。

薄っぺらい言葉で己を誇っていた事に死にたくなる。中身がないと言われればそうだ、としか答えられない。実際、経験してきた人生が消えたのに等しいのだ、信じられないという事は。だから言葉に人生が何も詰まっていけないのだ。何を語ってもぺらい、軽い、意味がない。だったら喋らない方がはるかにマシに決まっているというものだ。

人間、落ちれば落ちるものだ。

それを我が身で良く理解した。

だがそれでも生きていかななくてはならない。それは義務だ。故に帰ってフォーミュラの勉強を進める為にも暁町への帰り道を進もうとしたところで、

「あ、ノアさん」

「ん？ ああ、なのはちゃん」

学校の帰りか、制服姿のなのはが正面から歩いてくるのが見える。そう、中学生ぐらいの年齢なのだから、普通に学校に通っている筈なのだ。そして夕方にもなつてれば帰ってくる。キリエにアマタ、シユテルもレヴィもそこはどうやら学生らしいが、学校を普通に休んで生活を満喫している為、学生らしさは皆無だ。あの連中と比べるとな

ははまだ普通だ。

普通だが、

「ノア君は仕事帰りですか？」

「ああ、今終わった所だよ」

「そうですか、お疲れ様です。おかげで私も休日増えましたし」

ありがとうございますと、とピースサインを浮かべて来る。その真面目に此方の対応をするなのはの姿を見て、素直に感心する。

「なのはちゃんは凄いな」

「へ？ 何がですか？」

此方の言葉に軽くサイドテールを揺らす様に頭を傾けながら、なのはが何の事か解らない、と表情を浮かべるが、

いや、だって、と言葉を向ける。

「なのはちゃんさ」

その言葉でなのはがはい、と言葉を向けて来る。

「俺の事嫌いだよ」

「――」

その言葉になのはが動きを止めた。一瞬だけ呆然として、それから直ぐに表情を取り戻す。

「そんな事ないですよ？ 何を言ってるんですかノア君ってば」

そう言っとなのはは軽く笑うと、

「じゃ、私は帰りますね」

そう言っつてやや駆け足でなのはが横を抜けて翠屋へと向かって去って行く。逃げるように去って行くなのはの姿を見てから軽く頭を書いて、歩き出す。

「年下虐めて何やってんだ……」

年長者の筈だろ、俺は。年下虐めて、年下に面倒みられて。それで生きているのが情けなくはないのか。情けなくて死にたいぐらいだ。

ほんと、平穩で何も無い死にたくなる事だらけの日々が続く。

W i n d i n g U p I V

「ノアー！」

「はいはい、なんだ」

「セックスしよう」

「……」

無言のまま部屋に入って来て宣言するレヴィの顔をアイアンクローで掴みながら部屋の外へと投げ捨てる。数秒後、廊下を転がったレヴィが全力のプリントで戻って来て、部屋の中へと飛び込んでくる。それを瞬間的に引き出したエレミアの武技で受け止め、受け流しながらずらし、そのまま部屋の窓の外へと投げ捨て、窓を閉める。だがそれに諦める事無くレヴィが雷を纏いながら凄まじい速度で姿を消し、気が付く瞬間には再び部屋の中へと戻ってきている。

「ノアー！ ヤらせるー！ 大人しく襲われろー！」

「うるせえ！ 帰れ！ こっちくん！ おい、誰か！ いねえのか！」

「ふははははー！」

「来るな……来るんじゃないぞ!! こっちに来るなレヴィいい——!!」

襲い掛かってくるレヴィを回避、迎撃を続け、救援にやってくるキリエに取り押さえられるまでひたすら襲い掛かってくるレヴィの姿はもう、半ば日常的なもので、キリエもキリエで本当にもう、こいつどうしようもないな、みたいな表情を最近では浮かべるようになってしまった。なお、この時シユテルも居ると攻撃にシユテルも混じってくる。偶にそれを後ろからイリスが支援したり応援したりして状況をまぜつかえす事もあり、グランツ研究所での日々は割と混沌としている。

◆

「つてのがウチでの日常なんだ」

「それを僕に言っただろうってんだ。羨まし……くはないな、なんか……」

「まあ、確かにうらやましいかどうかで言えば割と微妙な所だよなこれ……」

チエーン展開している喫茶店に男が三人集まっている。一人目は無論自分で、二人目は高町恭也。そして三人目はこの海鳴のクロノ・ハラオウン。海鳴で噂のイケメン大学生三人衆である。無論、俺一人だけ大学に通っていないどころか高校すら出ていない。だが世の中、大半の問題は見た目の良さで解決できる。だからこうやってイケメンが三人揃うと大体サービスでオマケしてもらえたりするから、お得意だ。

海鳴に戻って来てもう一カ月半が経過している。こうなるとここでの生活も大分落ち着きを取り戻し、日常生活にもルーティーンと呼べるものが出て来る。P&Tのクロノ、翠屋の恭也、そしてグランツ研究所の自分はまあ、それなりに付き合いのある場所という事もあり、同年代という事もあってしばし顔を合わせる様な事もある。だがこうやって一緒に外に出て遊ぶのは割と珍しい事だったりする。自分も、特に誘って遊んだりするつもりもなかったのだが、

『あんだ、ちよつと頭空っぽにして遊んできなさい。勉強とか特訓は全部私が断わっておくから』

そう言っただけでイリスに研究所から追い出されてしまったのだ。

……精神的に無理が来てるの、イリスにバレたのかもなあ。

察しがついていたのかもしれない。イリスは此方のバイタルをモニターしているらしいし。そう考えると自分も割と最近には鬱に入っている部分もあるし、軽い息抜きが必要だったのも事実だ。そんな気分ではないとはいえ、どっかで吐き出せる分は吐き出しておかないと倒れてしまいそうな気分だった。そこでこの二人を見つけたのだから、

丁度良いタイミングだった。暇をしている、というの。

そうやって野郎が三人、集まった。

「というかお前ら、彼女持ちだしそこらへん遠慮なくファックしてる

んだから別に羨ましいもクソもないだろ」

「そりゃそうだけど、それはそれとして美女に囲まれた生活は興味あるだろ」

「お前はお前でいい加減にしろよって言いたくなるけどね」

「えっ」

恭也は恭也で、割と周辺に美女の姿が定期的に目撃されるらしい。まあ、見た目も性格も良いし、運動も出来るのならモテない理由はないよなあ、とは思わなくもない。

「というかノアはアレ、下世話な話をするなら食えるだろ、それ。それとも年下はダメとかそういうのか？ まあ、でもそうか。年齢はなのはと同じ位だと考えると抵抗感もあるか……」

「いや、年齢はそこまで……」

「マジか」

「うーん……セーフ……？」

クロノが腕を組みながらセーフかアウトかを唸っている。管理局に存在しなければこういう陽気さを見せる事もあるのか、とちよつとだけ自分の知っている正義の執行者とは違う姿に新しさを見る。それはともあれ、

「いや、お前ら普段から寝込みを襲われて体の柔らかさとか感じて理性がやべえのなんのって解るだろ気持ち」

「まあ、解る」

「解る」

どちらも彼女持ちだし、そこら辺のセックスアピール周りに関しては良く解るだろう。だがここは良く考えてみる。

「今、複数人と共同生活の最中だぞ？ これ、一人に手を出せば確実にバレルだろ？ しかもほとんど女子メインのコミュニティだぞ——

—肩身が狭いってレベルじゃねえぞ……！」

「あー」

「僕もエイミーとやるときは別の所へと連れ出す必要があるからなあ。やっぱり家でするのは辛いよね、実家住みだと」

「俺は忍の家で割とやるけど……」

「お前ほんとさあ」

「僕らキレルよ」

「え、なんで」

クロノと半ギレの様子で恭也を責める。そう言えばこいつの女、金があるじゃねえかとついでに思い出して更に怒りそうになる。片手で頭を押さえながら解るか？　と言葉を恭也へと向ける。

「俺なんて少しは抜いてすつきりしたいのに、近くに居るのは女ばかり、部屋で抜いたら鼻が良いのが居るから直ぐにバレるし、風呂場でやろうものなら確実にバレる！　しかも中学生に高校生の集団だぞお前……」

しかもイリスにバイタル見張られているから絶対にバレる。フィンは絶対に面白がつて口を出さずに観察とかしているに違いない。というかアイツ性欲どうやって処理しているんだろ。たぶんインポかなんかだろアイツ。

「手を出してバレた時が怖すぎる……」

「それさえなきや手を出す事自体に躊躇しないって辺りお前凄いな」

「多分僕達3人の中で一番ヤバいの君だよ」

「うるせえわ。ファックでもしなきや気でも紛れねえわ」

酒はまだちびちび飲んでるけど、こつちに来てから煙草は禁止しているし、ジークリンデ以来セックスも出来ていない。まあ、酒を飲めればそこそこ嫌な事を忘れられるから良いんだが。それでもそろそろストレスの限界で死にたくなってくる。ここ最近、思考が悪い方向へと流れ続けるのもきつと、息抜きが出来ていないからだ。ただグランス研究所でおっぱじめようものなら、ほぼ確実にしこりが残る。というかアマタとキリエには特に世話になっているのに、裏切る様な真似は流石に自分の様な屑でも出来ないに決まっている。

「なんか、こう、遠慮なくやれる人知らない……?」

「お前、今人類で史上最低の言葉を口走っている自覚あるのか?」

「いや、別の場所を用意してレヴィちゃん誘えばいいだろ。ロリコン認定するけど」

「だがおっぱいは大きいぞ」

「じゃあ撤回する」

「酒は入ってない筈なんだけどなあ、俺ら……」

ちびちび珈琲を飲みつつ適当に頼んだサンドイッチを摘まみ、それで食欲を満たしながら男にしか出来ない様な馬鹿話をする。

……ああ、そういうえば。こういう会話、長い間してなかったな。

一切遠慮のない男の馬鹿話。こっちに来てから女、女、女。しかもチンコを刺激してくるような見た目の良い女ばかりだ。それだけじゃなく鬱憤は溜まる一方。何もかも信じられない事ばかりだが、こうやって吐き出してみると少しはすっきりして来る。

「いや、仮にも恩のある相手だぞ。簡単に手は出せないぞ。置いてもらってるんだからな、俺は。だから、こよう……やれる相手の紹介とかをだな……」

「お前来る前に酒をキメて来てるだろ」

「寧ろヤバイ薬に手を出してないか」

「失敬な。手を出してたのは数年前までの話だ」

やっぱりかー、みたいな顔をされても困る。いや、そもそも違うだろう。

「お前ら、良い顔をしているけど美女のお相手はしたいだろ！」

「そこは素直に……まあ」

「でも彼女で満足しているし、好きだし、それ以上を求めるのは人間としてダメじゃないか？」

その言葉に敗北感を感じて頭をテーブルに落とす。そのままはあ、と溜息を吐いて目を閉じる。そう……そうだ、この二人は彼女が居るのだ。その気になればラブホテルにでも向かってやればいいんだ。楽な身分どもめ。こっちはあれだぞ、イリスに見張られているんだぞ。とかジークリンデとのクビシメックスの後にちゃんと普通に勃起するか心配になってきた。普通のセックスでもちゃんと勃起するよな？ 公開プレイじゃないと勃起しないなんて事はないよな？

でも常にイリスにバイタル管理されている事考えたら大体常に羞

恥プレイ。

じゃあ問題ねえか。

いや、問題しかねえわ。

「おーい……そもそもお前、彼女の類とかいないのか？」

恭也の声に、居たよと答える。

「過去形。絶対にフラれただろこいつ」

「この本性の悪さがバレたんだろ」

「お前らほんと遠慮なくぼろくそ言うな。いや、俺からフったわ」

頭を持ち上げ、椅子に寄り掛かりながらそう言つてのけると、

「ああ、やつぱりフラれたんだ」

「俺からフったって言つてんだろ」

「正気かこいつ……」

正気だよ！ と答える。

「ただ、まあ、家財一式と家を買っぱらつて、何も言わずに日本に来ただけだ」

「ただの夜逃げだろそれ!!」

「関係解消出来てないじゃないか君!!」

恭也とクロノの発言に大丈夫、大丈夫と言葉を置きながら顎に指をあてる。

「いや、足の付きそうなものは全部処分したし大丈夫だろ」

「明らかに大丈夫じゃないだろ。おい、お前正気でそれを言ってるのか……?」

「え、いや、本当に……? うつわあ……本当にやったのか君……」

「なんでドン引きしてるんだお前ら。蒸発された事ぐらいあるだろ」「ないよ!!」

久方ぶりに、一切頭を使わない会話をしている。こういう会話をしていると酷く落ち着く。少なくとも、多少は精神的にマシになる。頭を何に使わないにしても、こういう脳味噌を完全に殺す様な会話をしている方がはるかにマシだ。まあ、それはそれとして偶に致命的な事を口走ってしまう様なときもあるかもしれないが。

「逆にこいつと付き合える女ってどういう奴なのか気になってきた

……」

「それは……うん、きになるな」

「えー」

「何がえー、だ。吐けよ」

これ以上は素面では辛いなあ、という表情を浮かべながら視線をチラリ、と外へと向ける。それを受けて恭也とクロノが視線を合わせ頷く。こちらも視線を二人へと向け、どうよ、と軽くジェスチャーを取りながら了承を取ってみる。サムズアップが返ってきた。そうかそうか。良いか。

一斉に席を立つ。

「じゃあ割り勘で」

「まあ、あんまり食ってないからここは良いだろ」

「次は酒入るからどこにする？」

「カラオケのフリータイム利用するのが良いんじゃない？ 邪魔入らないし。その代わりにやや割高だけど」

「まあ、それでいいか」

「昼間から飲むのも偶には良いよね」

「そうだな。休日だしこれぐらい許されるだろう」

「僕は昼間から飲むのは初めてなんだよなあ……不安しかない」

大丈夫、夜になる頃には前後不覚になって迎えを寄越してもらおう必要があるからちよつと社会的地位を家庭内で失うだけだから。昼間から酒を飲むのも悪くはないぞ。そんな話でクロノを脅迫しつつ支払いを済ませて外に出る。

そのまま、この頭の悪い会話を続けるために男3人、今度はフリータイムのカラオケへと向かう。

◆

結論から言えば、大失敗した。

普段からはブレイキのかかっている二人組のペースを完全破壊し、泥酔した状態で暴露話で盛り上がり、最終的にそれぞれ家の人間を迎

えに呼んでもらう必要があるレベルで酔い潰れる結果となった。この時やって来た士郎に全員揃って正座で説教される羽目になり、盛大に怒られた。

この時、迎えに来てくれたのは意外にもイリスで、正気を取り戻したときに何故迎えに来てくれたのを聞いてみれば、

「だってほら」

と、イリスが言葉をどこことなく、恥ずかしそうに続ける。

「送り出したのは私なんだから……私が責任を持たなきゃダメでしょ？ つたく、他の皆には黙っておくからまた辛くなったら言いなさいよ。適度に見逃してあげるから」

と、言う事で。

普段は悪態ばかりの女の子だが、実は言動が悪いだけで根の部分は良い子であるという事がストレス解消のついでに知れた日だった。

W i n d i n g U p V

自分を囲むように二つの機械が浮かんでいる。イリスが用意した設計図を読み込んでフォーミュラにより再現されたそれは独立したユニットとして自動的な運動を行っている。形状は菱形に近く、しかしかなり機械的なデザインをするそれは、別パーツとして形成されてから動いており、AI制御によって此方の意思とは関係なく稼働し続けている。ただし、そのエネルギーはフォーミュラ経由である為、エネルギー管理はこちらで行わないと急に落ちる所がある。今のステータスが網膜投射で投影されている。

「VAフォートレス問題なく稼働中」

「よし、問題なさそうだね」

此方の報告を聞いてマクスウエルは満足そうな表情を浮かべた。このフォートレスと呼ばれる装備は元々、魔法技術によって作成された機械兵装であり、とある戦いに置いて使用者を自動防御するために用意されたものだと言われている。物理的な防御力だけではなく、魔法障壁を一つ一つがリソースを割いて纏う事によってスタンドアローンの自動防御ビットとして稼働する他、突撃させる事でバツschussさせる事も可能な完全な科学兵装となる。それによって魔法が通じない相手に対して物理的な打撃効果を生み出す事を目的としているほか、砲撃や射撃メインの魔導士の遠距離戦闘を一定のリソースを最初に割いた後は、フリーハンドで援護する目的で生み出されている。それをファイルがエルトリアの技術で再現、フォーミュラを使用したヴァリアント・アームズのシステムに組み込んで流用している。故にVAフォートレスという名称を付けているが、実際はヴァリアント・ユニットをそのコアには使用していない。素材となる物質さえ存在すれば後はそこから生み出す事が出来るようにフォーミュラに登録、改造されてある。

「やっぱり根幹となる科学理論が同じだからフォーミュラでカレドヴルフ社の兵装は再現できるね……となると技術的にストリーマの再現も出来そうだな。じゃあノア君、そのままヴァリアント・アームズの

起動を頼むよ」

「了解」

フォートレス・ユニットを展開したまま、ヴァリアント・ユニットを稼働させる。フォーミュラによる物質変換を行いながら武装変形させ、まずは基本的なリボルバーへと変形させる。それを実験室に設置してあるのへと向けて構えれば、AI制御されるフォートレスが自動的に射撃体勢に入った此方の動きをサポートするように、死角と隙間をカバーするように入る。

「よしよし、AIの方も問題はなさそうだね。じゃあ次は近接兵装への切り替えを宜しく」

「了解」

リボルバーから今度は両刃剣へと変形させる。中央に持ち手が存在し、その両側から肉厚な刃が伸びている。試作段階では細長い剣をくっ付けたようなフォルムにしていたが、最終的に大剣をくっ付けたような、分厚く、そして重い鉄塊の様なダブルセイバーへとその姿を変えるようになった。重量は重く、普通に振るうには一苦勞するレベルの重さと、複雑な形状をしている。だが片手で握り、肩に担ぐように持ち上げると自動的に自分の握る手を撫でる様な感触を感じる。

見えなくても、聞こえなくても、そこにおいて助けてくれているという感触がある。

ダブルセイバーを構えれば、それに反応して素早くフォートレス・ユニットが動く。先ほどは防御し辛い死角を守ってくれたが、今度は横に展開し、そこで浮遊してから軽く旋回する様に周囲を回り、攻撃に備えた状態へと移行する。近接武装を手にしても、問題なく稼働するのが見える。

それに合わせ、軽くダブルセイバーを振るう。まずは踏み込みからの切り下ろし。重量のある機械的なフォルムの鉄塊を振り下ろせば、それに従ってフォートレスが開く側面をカバーし、振り下ろしから前転する様に重量を流しながら体を滑らせ、持ち上げながら薙ぎ払い、回転させ、重量を受け流す様に動きを連続させる。それに合わせるようにフォートレスは此方の動きの範囲に重ならない様に先に動き、攻

撃の時に開き、カバーしきれないポイントを旋回する。

足を強く踏み、摩擦を生みながら軽くバトンの様に片手でダブルセイバーを回転させてから担ぎ直す。超重量の武器は振り下ろしから入り、そのまま重量を殺す様にそれを流れに乗せて動かし続けるのが基本。そうやって重量に慣性を合わせて、重量というものを流し、負担がかからない様にする。

問題なく、動きの全てにフォートレスがついて来れた。

「動作確認、問題なし」

「うん、後は耐久実験かな。そっちの方はアミタ君かイリスが手の空いている時に頼むとして、今回はここまでにしようか」
「うっす」

ファイルの実験終了コールに全てを解除しながら実験室を出る事にする。

◆

「君も、大分フォーミュラの使い方に慣れて来たね」

キリエとイリスは買物へ。アミタはそんな二人に拉致られる形で出かけている。レヴィとシュテルは海鳴へと定期的にユーリの気配を追いに出かけている。本気で隠れたユーリを見つけ出す事はほぼ不可能に近いらしいが、それでも試さずにはいられないと、二人は定期的にユーリを探しに出て行く。やはり、自分の知らない事を知っているであろうユーリを問い詰めたいのだろう。

そう言う訳で現在、グランツ研究所にはファイルと自分という男が二人だけ残されていた。

普段は女ばかりの姦しいこの環境も、女子が出払っていると無駄に広く感じられる。だがここに住み着いても主観では数か月、という長さになってきた。季節も徐々に夏に入ってきた頃であり、季節の移り変わりという概念がこの世界にも存在する事を教えてくれる。

それに合わせ冷えたレモネードを冷蔵庫に常備する様になり、今も実験終わりにレモネードをグラスいっぱいに入れて、リビングのソ

ファに転がりながら飲んでいる。ファイルも別の椅子に座って、テレビを見ている。

実験後の休憩中に、そんな事をファイルが言ってきた。

「そうかあ？ 未だにまともにアクセラレーター使わせて貰えないんだけど」

「アレはフォーミュラ技術で駆使する最大奥義みたいなものだからね。個人用にフォーマツトする必要があるから、一カ月や二カ月ではどうにもならないものさ。だけどそれを抜きに良くフォーミュラを扱えているものだと思うよ。これは元々地球人向けのシステムじゃないからね」

「そんな事言われてもなあ……」

必要と迫られているから使えるようになった。これはそういうものだろう。出来なきやこの先、苦しんで死ぬってだけの未来が見えているのだし。だったら俺が自分で出来る範囲の事は何でも、完璧にこなせるようにならなくてはならない。高校もまともに出てないし、学もない。それでも一度聞いて、見て覚えた事は忘れないようにしてなくてはならない。馬鹿だから解りませんという理論は通じないのだ。だからやるだけだ。やらなくちゃならないから、やるのだ。

クツソ面倒だ。

「まあ、まあ。賞賛は素直に受け取っておきたまえ。なんだかんだで君は頑張っているという事を私は知っているからね」

「まあ……ありがとよ。俺もあんたが居なきややれない事は多かっただろうしな」

そこは素直に感謝しておく。突っ張った所で意味はないし。それに色々とフォーミュラ周りのメンテナンスや調査に関しては頑張っているのも知っているし。今は魔力をフォーミュラで運用する研究を行っているらしい。だがそれも、シユテルやレヴィが直接フォーミュラを使える訳ではないから、困っている所もあるらしい。そこで自分が魔力を使えれば、助かるのだろうか。

まあ、魔力なんて元々持たない人間なので。

あつたら良かったのになあ、と思っていると、

「ぴよ」

ひよこが口にミニクッションを咥えながらやって来た。ソファに転がっている此方の姿を見つけると、クッションを胸に投げつけ、その上へとダイブして飛び込み、そのまますやすやと胸の上で眠り始める。こいつがこうも寝ているなら、しばらくは起き上がれない。自分もここで一眠りしてしまおうか。

「私はね、元の時間軸か世界か、どちらにしる本来の流れに戻ればただの犯罪者として時空管理局に拘留されている身なんだよ。それがこうやって外に出て自由に研究を行えるんだ。だから君にはね、正直感謝の言葉しかないんだ。おかげでこうやって、唯一の心残りだった魔力によるフォーミュラ運用の研究が出来る」

「正直、俺にはどうしたもんか、って感じだけだな」

「それでもだ。君が間違いなくこの騒動の中心だ。君が居なければこれは恐らく始まらない。だからね、感謝しているのさ」

「そりやどーも」

感謝されても、困るだけだが。正直な話、良い事よりも気持ちの悪い事と、恐ろしい事ばかりで素直に状況を喜べない。これでもう少し、自分の事さえはつきりすれば楽しめるのだろうか……少なくとも、今の自分にそれを楽しむだけの余裕はなかった。あるとしたら全部忘れた時ぐらいだろうがそう簡単に忘れられる事でもないし。ここに来て、男子会以外で楽しむという概念を割と諦めている部分がある。

なのはを脅した部分もある。正直、あっちもどうしたものか、と軽く頭を悩ませている所がある。

「そういう訳でね、私も日ごろの感謝の気持ちをちよつと君に示そうかと思つてね」

「流れが怪しくなってきたな」

ファイルが懐から何かを取り出してきた。もうこの時点で嫌な予感しか感じられないのだが、ファイルは取り出した小瓶を自慢げに見せつけて来る。

「なにそれ」

「媚薬だよ!!」

「嘘だろお前……」

「まあ、正確に言うともうちよつと違うけど、軽く酔っぱらって体を火照らせて、その気にさせる薬だよ!」

「なんてもんを作りやがったこいつ」

「これをイリスの食事に入れてあげるよ!」

「止めろよ!! ほんと止めろよお前!! 冗談じゃないからな!」

今の環境で一人に手を出した場合、間違はなく地獄を見るに決まっているのに、なんでそんな提案をしてくるのだこのカスは。いや、マジでイリスはこいつに関して正しい。こいつただの犯罪者のクズだわ。

「だが待ってくれ、ノア君。君がそのエレミアの武技を獲得する上でセックスしたんだろう? つまり君はセックスした相手の能力を学習できる能力を持っているかもしれないんだ——これはもう、試すしかないじゃないか」

「ほんと自分本位だなこのカスは!」

「何を言うんだ、私は本来拘留中だよ?」

「しかも認めてる……ああ、もう、黙っててくれ。自分から針の筵になる予定はないんだ」

たとえば、そういう能力があつたとしても使う訳がないだろう。そりゃあ美少女の類は大歓迎なのは確かなのだが。それでも一度タガが外れた場合、それを元に戻すには滅茶苦茶苦勞がある。そういう例を知っているのでダメだ。特に今の環境、女だらけでもあるし。一人に手を出したらずるすると次を襲いかねない。だがその前にエルトリア姉妹に殺されかねない。後イリスにも。だから絶対に手を出す訳にはいかない。出来たら外の女を用意するのが一番だが現状、そんな奴は海鳴にはいない。

だから我慢するしかないし、するつもりでいる。なのになんでこの男、それをあつさり破壊しようとするのだろうか。

「第一全員君が押し倒せば解決するとは思わないかい?」

「思わねえよカス。お前の頭おかしいよ……」

「えー」

明らかに不満という様子のファイルを放置して目を瞑る。解った、イリスのこいつに対する態度は大体妥当だったという事実を。今度からこいつにだけは相談するのを止めておこう、そう決めてひよこの腹を軽く指で突いてからファイルから視線を反らす様に眼を閉じ、そのまま眠る事にする。

こいつと喋っていて、良い事がないという事をついに悟ってしまった。

はあ、と軽く溜息を吐きながら早く他の連中が帰ってこないか、それを願いながら眠りにつこうとする。

「……ほんとうにいらない？」

「いら！ ない！」

「こつちの痺れ薬は……？」

「そつちも！ いら！ ない！ 薬に頼らずとも女ぐらい誘えるわ！！

人をなんだと思ってるんだお前！」

「良い実験材料」

「お前さあ！ ……はあ……」

相手するだけ無駄だと理解し、言い返すのを止めて、そのまま目を瞑る。もういい、無視する。そうじゃなくてもやる事はたくさんあって大変なのだから。

この犯罪者死なねえかなあ……。

切実にそう願いながら逃げるように目を閉じた。

W i n d i n g U p V I

「もうすっかり夏ねー」

「夏となると暴れた時を思い出しますね。ほら、キリエとイリスが暴れた時の事ですよ」

「もう、その話はやめてよお姉ちゃん……」

「流れ弾をこっちへ飛ばさないでくれない？」

晩御飯を全員で囲んで食べている——訳ではない。流石に人数が多いので、テーブルとグループを二つに分けて食べている。なお夏という事も全く関係なく、健啖家が非常に多い事実もあって、基本的に肉ベースの料理ばかりを食っている。今夜もテーブルの上の料理の大半はキリエ、アマタ、そしてレヴィが食べつくす。それを自分とシユテルが何時も通りの一人前を食べて眺める。なお、イリスとフィルは肉体が人ではないので、食事を必要としない。あの博士、人の心を持たねえなあ、とは思ったが肉体が人間じゃなかったのだ。

道理で人の心を持たない発言しかしない奴だ、と納得できる。

そう言う事で普通のペースで食えるのは自分とシユテルだけで、イリスやフィルにとって食事は趣向に近い。まあ、それでも十分お腹いっぱいになるまで食べているのだが、それでも暴食の娘たちと比べると少ないと言われるかもしれない。

そんなこんなで夜になる。

「夏の夜かあ……」

食事を終わらせ、自分の食べた分の洗い物を終わらせたら開いているリビングの窓から夜空を見上げる。こちらの夜空はアメリカのもの比べればはるかに澄んでいて、割と驚く。

夜になると気持ちのいい風が海の方から吹いてきて、夏の熱さをしばし忘れさせてくれる。電気代をケチっていてクーラーをつけていないので、開けた窓から入り込んでくる風が気持ち良い。ここら辺、絶対にケチらずクーラー全開にするのがアメリカンスタイルだから、地味に違いを感じる。

「夏になんか思い入れでもあるの？」

「……いや、別に」

窓の外の景色を眺めている所に、キリエがそんな声をかけてきた。

「ただ」

「ただ？」

「ずいぶんと長く、ここに居座つちまつたなあ、つて」

チケツト代稼いだらアメリカに戻るつもりだったが、もう既にここに数か月捕まっている。この暁町と海鳴から出られないというのが一つの原因でもあるのだが。それでも季節が変わるまで、ここに居座るとは一切思わなかった。そもそもこうやって自分が変わって行く感覚さえ、どこことなく遠く感じる。本当は、これが現実じゃなくて全部夢の様な、そんな感覚がいつでもこびり付いている。

夏の夜風を浴びながら、そんな事を考えていれば。

「大丈夫よ」

キリエの方から声がかかってきた。

「全部、何とかなるわよ」

その言葉にキリエの方へと振り返る。はにかみながら、キリエが言葉が続ける。

「私やお姉ちゃんだって強いんだし、そこにイリスだっているのよ？」

大体何とかなるわよ。だから心配しすぎずにどっしりと構えていればいいわよ」

「……だと、良いんだけどな」

ふう、と軽く息を吐いて窓から離れる。キリエには悪いが、状況がそう簡単に好転する様には、どうしても思えなかった。歩いているとひよこがジャンプして乗り移ってくる。それを肩の上に乗せてリビングを出て、自分の部屋へと向かって行く。そもそも今判明している事でさえ、そう多くはない。

その中で何とかかなる、と言われても困る。

その何とかになった時、俺が存在しているかどうかでさえ怪しい。その事を最近は、なるべく考えないように生活している。考えれば考える程ドツポにはまるのが解っているからだ。だから飯を終えた所で、さっさと部屋に戻る。風呂に入るのは何時も女子共のが先だし、特に

見たいテレビもない。

さつきと部屋に戻った所でベッドに正面から倒れ込む。ベッドに倒れた所でぼよん、とワンバウンドして跳ねるひよこが抗議のびよ声を放って来る。悪い、と謝りつつ顔面を枕に埋めて、軽く息を吐く。

「はぁー……クッソ……ほんとさあ……」

最近、自分の情緒が不安定なのを感じる。些細な事で苛立ったり、キレそうになったり、それを忘れて楽しめたり。自分の頭と心の中がごちゃごちゃになっているのが解る。これじゃ、駄目だ。

「もつと、心を強くしなくちゃ駄目だな。この調子じゃ負けたら折れる」

ああ、クソ……格好悪い。

自分で格好悪いと解っているのに、それをどうにかすることが出来ない。心の問題は頭で自覚していてもどうにか出来る訳じゃない。それを今、実感している。頭では笑顔を、もつと愛想良く。そう思っているのに体が、心がそれを受け付けないのだ。だから勝手に落ち込む。優しくされているという事実を惨めに思う。

男の矜持って奴が泣いている。ああ、解っているのだ。しっかりと生きやいけないって。それでもその考えにまるで心が反応しない。つまりはそういう事だ。

察しているのだろうなあ、と思う。

「なんだよ、思い出させて……妹ってなんだよ……クソが……」

文句しか出て来ない。このままいつそ、死んでしまいたい。消えてしまえた方がはるかに楽だろうに。考える暇があればそうやって死にたがっている。生きている事そのものが恥だからしようがないのかもしれない。ああ、だけど……だけど、期待は裏切れない。ほんと、生きているだけで地獄だ。

誰か……助けてくれ。

その言葉を口にしたかった。

——とんとん、とそこで音がする。

扉のノック音だと気づき、体を持ち上げてベッドの縁に座りながら開いているぞ、と声を向ける。

「ではお邪魔しますね」

そう言つて扉を開けて入つて来たのはシュテルの姿だった。部屋の中にやってくると横までやって来て。並ぶ様に腰を下ろしてきた。ばたん、と扉が閉まる音を聞きつつ、視線をシュテルの方へと向ける。

「少し……お話をしませんか?」

「……明日でもいいんじゃないか?」

「いえ、話したいと今思つたので。今話そうかと思ひまして」

「そうか」

「そうです」

「……」

「……」

互いに無言になる。少しだけ、気まずさを感じる。こういう時、どいう言葉と言えば良いのだろうか。昔の自分だったらこう、気取つた言葉の一つでも言つてやれたのだろうと思う。だがあいにくと今の自分には、そういう言葉選びは出来なかつた。ただどうしたもんか、と言葉に迷い、そしてああ、そうだ。思い出し、言葉を選ぶ。

「その、シュテル」

「はい、なんででしょうか?」

「俺に素直に失望したのなら、それでいいからな。無理に付き合う必要はないし、義理とか義務とかそういうの気にしなくても良いから」

お前の、その感情は元々そうなるように向けられたものだ。だから気を遣う必要はない。気にする必要もない。自分の好きなようにやって欲しい。それはきつと、気の迷いだから。そもそも俺との出会いさえ間違ひの様なものだ。出会いさえしなければ、とは思わなくてもない。少なくとも、自分はそう思っている。

だから、

「忘れてくれ」

「……」

そうシュテルに告げる。きつと、俺の存在そのものが間違ひだ、と言う。

それを受けてシュテルは成程、と眩き、やや俯き。

「解りました」

「……そうか」

「今まで茶化していたのが悪い、と。本気にならないと駄目だという事がよくわかりました」

「……ん？」

言葉の直後、魔法の存在を感知した。そして一瞬でバインドの魔法が出現し、両手足を拘束しながらベッドに体を倒された。いきなりシユテルが行ってきた暴挙に思わずちよ、と声を零すが、それよりも早くシユテルが逃げられない様にマウントを取ってくる。その表情を見てみればちよつとキレているようにも見える。

「ええ、私が馬鹿でした。優しくしていれば伝わると思っていた私が馬鹿でしたとも、ええ」

「待て、落ち着け。話を聞け——アクセラ——むぐつ！」

「アクセラレイターなぞさせるものですか……！」

禁止されているアクセラレイターで瞬間的な逃亡を試みようとして、それを防ぐようにシユテルがバインドで此方の口を塞いできた。口頭コマンドなので、口が開けないのではアクセラレイターを発動出来ない。サブシステムとしてのフォーミュラによる魔導解析を行い、バインドの解析と破壊を行おうとするが、それを理解するシユテルがバインドの魔術構築を数秒毎に変更して解析対策を行ってくる。

こいつガチだ……！

絶対に逃がさないとという鋼の決意を感じる。自分も逃げられないというのをほぼ悟り、今までシユテルが此方を襲ってくる上で手加減してきたというのも理解する。そうやって完全に此方の動きを抑え込んだ所で、

「いいですか、ノア。逃げないで聞いてください」

手足を押さええられ、耳を閉ざす事が出来ない状況で、シユテルが上から見下ろす様に、言ってくる。

「確かに——私の恋心はそういう風に仕向けられたものかもしれないせん」

シユテルが、見下ろしながら此方へと言葉を強く向けた。事実を認

めるように。

「そりゃあ、恋つてのは突然ですし、いきなり落ちるものでしょうが早すぎますし、私も必死すぎましたし、思い出してみれば違和感のある部分も多かったです」

なら、

「ですが」

ですが。

思考を言葉で遮った。

「それでも、私は貴方が好きになっただんです」

それはきつと、誘導されたものだろう。

「かもしれません」

用意されたヒロインなのかもしれない。

「かもしれません」

「誰かに人生を遊ばれているのかもしれない」

「ええ、でしょうね」

バインドが剥がれ、言葉が自由に口から出る。そこから出て来る事実をシユテルは認めている。やっぱりそうだ、そう思った所で、

だけど、とシユテルが言葉を挟み込んだ。

「貴方の事が好きです」

「それは——」

「与えられたものかもしれません。ですが今、その事実を知った上でも、私は貴方の事が好きなんです。貴方に恋をしました。それがたとえ用意されていた事であろうとも……」

シユテルは真つ直ぐと此方の両肩を掴んで、瞳を覗き込んでくる。「その事実は、事実だけは私の心が決めた事です。諦めろ、と言われても無理です。私はそういう風にしかもう、貴方が見れないんです」

「俺は……」

俺は、情けない奴だ。迷っているし、力もない。夢に酔ってそれを理解する事さえなく道化を演じていた。それだけじゃなく実在する人間なのかどうかさえも怪しい。そして何よりも、格好悪い。そう、格好悪いだろう、そんなの。今でさえ逃げ道と逃げ場を探している。

そして他人に無意味に当たる。

「私は信じています。貴方を。貴方の心を」

「なん、で」

何もない男なのに。

「いいえ、貴方は格好の良い人ですよ。私はそれを知っていますから。だから……」

体を倒してシユテルが腕を回してくる。抱きしめるように、その体の熱を感じる。

「諦めないでください」

「……」

「辛くて、辛くても……それでも、諦めないでください」

「死にたくて、しょうがない。生きていることが恥ずかしい」

「ええ」

「それでも?」

苦しくて、辛くて、死にたくて、恥ずかしくて、弱いことが嫌になりそうでも、

「それでも、です。生きてください。苦しかったらその苦しみを私が分け合いますから。私の力の全てを、心の全てを貴方に預けますから。だからお願いします——そんな風に、自分を見ないで。この先にはきつと、良い事がある筈だと思って一緒に辛いことを乗り越えていきましよう」

滅茶苦茶、言ってくる。

本当に、苦しいんだ。なんだよ、主人公って。なんだよ、設定って。俺の人生は何だったんだ。アメリカは本当に存在するのか? なんて海鳴から出られないんだ? 昔馴染みの顔を思い出せないんだ。笑いたくても笑っても、本当に笑えている気がしない。自分が今までやって来た事を思い出そうとすると、まともに思い出せないんだ。まるで本当は存在しなかったかのように。それがどうしようもなく、気持ち悪いんだ。

「それでも……それでも——」

既にバインドは解けている。マウントを取っていたシユテルを横

へと転がしながら、上から押さえつけるように手を取り、見下ろしながら口を開く。

「それでも、俺に戦えって言うのか」

「はい。そうじゃないと、誰よりも貴方が救われませんか」

真つ直ぐと、茶化す事もなく此方へと視線をシユテルは向けて来る。嘘偽りも冗談もなく、本気の言葉が伝わってくる。

「貴方の真実は恐らく、この先に待っているんです。だから……たとえ苦しむと分かっても進んでください」

力の抜けた手からシユテルが手を解き、手を伸ばして覆いかぶさる此方の首を包んで、引き寄せられる。そのまま倒れ込みながら、シユテルが頭を抱く。

「情けなくても、良いんです。それを含めて今は全部好きなんだって思っていますから。だから……今は、おやすみなさい」

女って奴は、本当に卑怯だ。

そう思いながら心地よい頭を包む暖かさに、全てを忘れて目を閉じた。

W i n d i n g U p V I I

「おおお——!!」

「はあああ——!!」

ヴァリアントザツパーとグラムレイドが衝突する。ミッド・ベルカ型アームドデバイスの機構を取り入れたヴァリアント・アームズのダブルセイバーはその名称をグラムレイドと改められた。純正のエルトリア式ヴァリアント・アームズよりも更に出力、破壊力、重量を増している武装はエネルギーを吸い上げながら稼働するモンスターマシンと化している。その制御にフォーミュラを回し、両手で握りながら振り回す。両手持ちにして漸く自由に動くというレベルの重量になつてしまった。軽量化、簡易化、技術の進歩に真っ向から喧嘩を売る様な重さへと進化したが、

それでも、凄まじい破壊力はエレミアの武技によって完全にコントロールされ、アミタの握る片手剣ヴァリアントザツパーと正面から遅れる事無く打ち合っていた。

「らあああー!」

「これで……どうですか!!」

アミタが動きを加速させる。それに合わせてグラムレイドを回転させながら両側の刃を振るう事で対応させる。小回りが利く片手剣に対して、リーチと重量と武器を使って破壊する勢いで回転させ、全体を捻りながら動かす事で武器の動きに体を乗せて行く。踏み込み、踏み外し、

アミタの動きに合わせてるように、ダンスを踊るように進み、引く。

「こ、れは……中々!」

「ふう……!」

相手の呼吸を読みながら常に同じ距離を維持する。相手が全力で切り込めば届く距離。だが此方の攻撃が当たり前のように届く距離。それを踊るように回転、切り下してから繋げるように動き、踏み込む事を誘う。それにあえて合わせるようにアミタが飛び込んでくる。明らかに手加減しているが、今は助かる。自分の全力を確かめるよう

に、

全力で斬撃を振るう。

片手で握るように中央の持ち手を握り、回転させながらアミタへと向かって振るう。それを引き寄せてからのバックステップで回避し、距離を開けたアミタがヴァリアントザツパーを、シューターへ——銃へと切り替えて銃口を此方へと向けた。

「ではこれをどうしますか？」

合図を切るように引き金が引かれ——破壊のエネルギー弾が放たれた。

それを剣を投げて防御する事も、フォートレス・システムで防御する事も出来るだろう。回避したければ回避するという選択肢もある。だがそうはせず、グラムレイドを両手で握った状態、踏み込む様に前へと体を押し出しながら、繋がりを感じ取る。

「シュテルッ！」

その言葉と共に、空間に炎が弾けた。瞬間的に出現する炎がエネルギー弾を焼いて消し去った。それにそのまま正面から突っ込む様に突撃し——体に欠片も熱が届く事無く、炎を抜けてアミタの正面まで突貫する。それをアミタが蹴りを入れながら体を回す事で勢いを殺しながら側面を一瞬で奪い、頭の横に銃口を突き付けた。

「はい、これで終了です」

「……ああ、また負けたー」

コアへと戻しながら武装解除し、頭の裏を掻く。今までアミタと勝負してきた中で、一番調子の良い一戦だったが、あっさりとお処されてしまった事実になくはないダメージを喰らう。今回は割と、自信があったのだが割と簡単に攻略されてしまった。ちよつと残念。

普段通り、グランツ研究所の実験室で一戦交えた。そうやって戦闘が終わった所で扉を開けて、観戦していたメンツが入ってくる。今回はある確認もする為に、全員が集まっていた。

「いえいえ、今回のノアさんはかなり良い線を行ってましたよ。フォートレス込みで戦闘すれば多分私から一本取れると思いますよ。ええ、それぐらいにはちゃんと整えられた戦闘力でした」

アミタに褒められ、視線を外しながら軽く首裏を搔いていると、
という声がイリスから来た。

「どうだった？」

イリスの声はシュテルとレヴィイへと向けられていた。レヴィイは
シュテルを見張っており、シュテルもその手にはルシフェリオンを
持っていない。レヴィイが一時的に預かっている。そのシュテルの姿
を見て、うん、と返答しながら頷いた。

「シュテルんから魔力は減ってるけど行使した痕跡はないよ」

レヴィイの言動がシュテルが戦闘中、先ほどの炎を使わなかった事実
を肯定する。先ほど、シュテルの名前を呼んで呼び出した炎は、確か
にシュテルのものだ。だが同時にシュテルが行使した訳ではない。
だが発動は間違いなくシュテルを通したものだ。ただの筈だ。そもそも
そんな炎を俺は生み出せないし、発動させるための魔力もない。だか
らこれはシュテルの力だ。

「シュテル君はどうかかな？」

「……そう、ですね。感覚的には不思議なものです」

ファイルの言葉を打受けて、シュテルが腕を組みながら首を傾げる。
「名前を呼ばれた時に、声とは別に求められている、という感覚はあり
ました。で、脊髄反射で了承しています」

「脊髄反射」

「ええ、まあ……なんというか……」

シュテルが腕を組みながら天井を見上げ、首を傾げ、

「私はここに立っています、なんというか……ノアを通して行使し
ている？ 発動している？ 一緒に発動している？ 憑依している
というか、共有しているというか……そんな感じでしたね」

「ほう、面白い」

ファイルが面白そうにそれに反応する。

「件のジークリンデ・エレミアは本人が居ないから確認できないが、そ
うか。スキル、技能の共有……或いはレギオン化とも呼ぶべき現象
が発生するのか。自分自身の力ではなく他人の能力を使いこなす、力
か。実に興味深い。何故シュテルと君がそうだったのかが更に気に

なる所だけど……?」

フィルの視線に無言の中指を向けて答える。なんか気持ち悪い声を返された。声が良から余計に気持ち悪い。

「別段、昨晩はセックスしてたつて訳でもないのよねえ……なにしてたの?」

「イリス、ちよつと言葉選ばない……?」

キリエが顔を赤くしながらイリスの言葉を非難するが、イリスが構う事無くシユテルに聞いてくる。そこでこつちへと言葉を向けない辺り、誰が答えるのかよく解つていけると言える。だがシユテルはそうですね、と言葉を置き、

「何をしたか、と言つても別段特別な事はしていませんよ? ただちよつと、本音で向き合つただけですよ。……ね?」

シユテルのその最後の言葉に、視線を反らしながらポケットを手に突つ込む。その反応を見ておっおつ、と面白そうなものを見るように、イリスが眺めて来る。

「まあ、私のメインヒロイン適正? が滲み出てしまったかなあ、という感じの話ですよ!」

シユテルが真面目な空気に耐え切れず、茶化し始める。まあ、そつちの方が似合っているよ、とは思ふ。だから、まあ、と声を置き、軽く頬を描く。

「真つ直ぐ見て欲しい、つて言われたら応えるしかないよな……つて話だよ。なあ、シユテル」

「……」

「あ、顔めつちや赤くしてる。うわつ、可愛い——!」

「あ、こら、キリエ! 放してくださいキリエ!」

背中の方から取っ組み合うシユテルとキリエの気配を感じるが、それを無視する。なんとなく、顔を合わせるのには恥ずかしい気がする。大体、シユテルの胸の中で眠ってしまった事を思い出す。だからちよつと、顔を合わせ辛い。まあ、自分も疲れていたんだろうとは思うんだが。それでも男としての面目という物も存在するのだから、ちよつと今だけは許してほしい。とはいえ、調子はいいのだ。調子

は。

「ふむ……肉体的接触ではなく精神的な要素か？ どちらかと言うと信頼関係に近いのか……いや、或いは心を許す事が条件なのかな？ だとしたらそのジークリンデ・エレミアには相当心のガードを開けている事になるんだけど。あり得るのか？ ふむ……」

ファイルの方から興味深い言葉が聞こえてきた。

心を許す、か。

確かにこのレギオンとでも呼ぶべき能力はそれに近い感じがあると思う。ジークリンデに関しては……何故か、最後までは疑えない。どこことなく、彼女を信じている自分がある。彼女が味方だと、信頼している自分が感じられるのだ。そこが不思議でしようがないが、そのせいか、心を許している部分はある。少なくともそうじやなきやセツクスなんてしなかっただろうし。そして結果として、彼女の行動の全てが俺を助けている。

まあ、確かにそれは気を許している、という事なのかもしれない。

「はっ。」

そう思っていると、そんな声が一方からした。

その底冷えする声に、全員が動きを止め、視線を向けた。

実験室の一角では、前髪で目を隠したレヴィが、どこことなく寒気を感じるオーラを纏った状態で動きを停止させていた。それをあのファイルでさえ、無言で眺めていた。そして数秒後、

「……は？」

もう一度、レヴィの声が炸裂した。誰もが動きを停止する中で、イリスがゆっくりと此方へと視線を向けて来る。その視線は明らかに何とかしろよ！ という類の視線だが、それに対して頭を全力で振り、視線をシユテルへと向ける。だがシユテルは全力で視線を反らした。そう、誰も今の状態のレヴィに触れたくはないのだ。地味に怒る、という様子を見せた事のないレヴィに触れるのが恐ろしいのだ。「え、なに？ もしかしてボクの恋っておふぎけや間違いだと思われるた上でその不審者以下だって言いたい訳？ ねえ？ マクスウエル 所長さあ……」

「う、うむ——状況的にそうなるんじゃないかなあ！」

「塵芥……！」

物凄く楽しそうにレヴィの言葉をファイルが肯定した。だけど、言われてみるとシユテルに関して解ったけど、レヴィに関してはまだまだともに話していないし、確かに信じられる要素はないよなあ……と、ファイルの言葉に腕を組みながら軽く頷いてしまった。

「いや、まあ、確かにボクもさあ……恥ずかしいからちよつとふざけたりしたのは悪いけどさ……それでも気の迷いとか間違いだと思われて、そこまで信用されてない訳？ 心の開き方が不審者以下だって話になる訳？ ボク、こう見えて割と本気なのには？」

「レヴィがキレてる……」

「わ、私しーらない……」

キリエがゆつくりとに逃げ出そうとする。お前、マジでここで逃げる!? とは言いたいが、キリエは全く関係なかった。完全に俺が悪いじゃんこれ、そう思った所で、レヴィが顔を上げた。

ちよつとドキつとするが、

「解った。ボクも本気だすね」

「えっ」

その言葉にいや、だって、とレヴィが言う。

「これって究極的にボクがノアを惚れさせられていない事が問題なんでしょ？」

「うん……うん？」

レヴィが物凄く謎理論を展開し始めた。それを聞いたイリスが腕を組み、首を傾げ、天井を見上げてから視線を戻した。

「一理あるわね……」

「待って、今のどこに理があつたの？ なあ、おい」

「でも確かにノアさんの精神的な問題なんですから。それを気にさせないレベルでレヴィさんが惚れさせてしまえばそれで問題解決ですよね」

「寧ろそれでノアが精神的に突き抜けちゃえば更に問題解決ってならない？」

「キリエ、コイバナの気配に帰ってきましたか……」

いつの間にか戻ってきたキリエが好物の話題に食いついてくるような元気さを見せていた。先ほどもまで逃げ出していた姿はどこへ消えたんだお前。だが実際、言っている事に何も間違いはないのだ。真実はどうあれ、そこに説得力がある、それが正義なのだから。シユテルとの関係改善に関してはそれが大きく影響している。

彼女が、俺をそう信じさせたのだから。だからレヴィも同じように俺を信じさせることが出来れば、そうすればシユテルと同じように、レギオン化出来るのかもしれない。いや、そつちじゃなくて純粹にレヴィの怒りをどうにかする方が主題だと思っただけどここは。

じゃあ、とレヴィが言葉を口にする。

「ボクがノアを落として、ボクに夢中にさせれば問題解決だね？」

「ん？ んん!？」

「シユテルんー。もし本気で独り占めにする事になったらごめんね。それでもボクたち友達だよね？」

「それ……もしかして宣戦布告ですか、レヴィ？」

シユテルに対する挑発ともとれる言葉に、レヴィが笑う。

「共有とか、一緒に愛して貰うとか甘いとか温いつて思わないのシユテルん？ 皆一緒よりもナンバーワンでオンリーワンが一番良いよ、ボクは」

「……へえ」

「へへへ、わくわくしてきたわね……!」

助けて……!」

仲が良かったはずのマテリアル娘が、いきなり火花を散らしながら本気でにらみ合い始めていた。助けを求めてフィルへと視線を向けるが、そのフィルはビデオカメラを回して必死に録画の最中だった。そうだ、このクスこういう奴だったわ。そして多分最終的に二人ともコマして黙らせろとか言うタイプだ。こいつ死なねえかな。

「じゃ、ノア」

「あ、はい」

レヴィが此方に近づいてくると、手を伸ばし、襟元を掴みながら顔

を引き寄せ、そのまま耳元に唇を寄せて、

「明後日、二人だけでデートしようね」

「え、あ、うん」

そう言うのとレヴィは此方を解放し、実験室から去って行く。その姿を見て、呆然と見送っていると、ファイルが笑いながら横に並んで、肩を組んでくる。

「どうやらレヴィ君の女が目覚めてしまったようだねえ！ いやあ、ハーレムって現実で見るとこんな衝突ばかりなんだろうなあ！

は、っは、っは、っは！」

ほんとかいつ、殴り殺したい。その気持ちを抑え込みながら、未だに耳に残るちよつとだけぞくぞくと感じた女の気配に、どうしようかと思っただ。

たぶんこれから、レヴィとシユテルの動きから茶化しが消える。

その気配に、狼の群れの中に投げ込まれた子羊の気持ちを味わっていた。

W i n d i n g U p V I I I

「おはよう、ノア」

「あ、ああ、おはよう」

「ふふ、そんなにびくびくしなくなつて大丈夫だよ。ボクはもう、そうやって強引にやるのは辞めたから。それよりも今度のデート楽しみにしててね?」

寝起きの所で会つたレヴィは普段の様な明るさを残しつつ、落ち着きを見せていた。口調は何時も通りなのに、なのに所作に落ち着きの姿が見えた。普段の元気爆発、という様子が見えなくなった代わりに、太陽の様な明るさと静けさ、そして大人に入りつつある女の気配を滲ませていた。その笑顔が気持ちが良いだけではなく、どこことなく美しさを感じるもので、朝から思わずレヴィの見せた変化に口を閉ざしてしまった。

「お、おう……」

「ふふ、じゃあねまた後でね」

そう言うのとレヴィは去つた。間違いなく子供から女へと成長していた。嫌でも感じられる女の気配は自分へと向けられており、その使い方をレヴィは解っていた。そこで敢えてスタイルの良い体を使わず、声と所作だけでアピールしてきた辺りに本気さが伺えた。翌日には大きく変わってきたレヴィの印象。これは間違いなく攻勢が始まっている。そう思つて、自分の状況のヤバさを感じた所で、その日の朝、発生する変化はそれだけじゃなかった。

「ノア」

「シユテル?」

名前を呼ばれて振り返れば、すぐ目の前にシユテルの姿が見える。そのまま、顔がぶつかりそうな所でシユテルは体に触れないように背伸びをし、耳元に口元を近づけ、

「愛してますよ」

と、背筋をゾクリと震わせるような声で囁いた。そして一言、それを囁いたら何事もなかったように離れ、去って行く。

「おはようございます。あまりのんびりしているとレヴィとアマタに全部食べられてしまいますよ？　ではまた後で」

「……」

そうやって一瞬だけ女の顔を覗かせたシュテルのやり口に、心臓がバクバクしているのを感じる。朝っぱらからこうやってささやかれ、視線を送られ、それだけでも何時もと違う二人の本気の女としての姿に自分の籠絡が始まっていることを悟った。静かに両手で顔を覆い、絶対陥落するであろう未来を見た。もうお前らの勝ちで良いからここらへんで止めない？　気持ち的にはそんな気分だった。

「イリス、イリス。アレはなに？　なんなの？　今どんな感じ!？」

「そうね……今のやり取りだけで滅茶苦茶ドキドキしているのが解るわね。多分普段見ているレヴィやシュテルのイメージから離れるのに、無理をしている訳じゃない。何時もの二人の延長線上……ううん、成長して少女から女になった二人の表情に興奮と背徳感を覚えているのよ。今まで体は十分圈内だったのに、言動と行動からそういう風に見れなかったのが二人とも本気になって、完全に女にスイッチを切り替えた影響で、ギャップで殺されているんだわ……!」

「イリス……なんか、滅茶苦茶細かいわね」

やや早口のイリス、完全に外野気分で楽しんでいるのが見えている。キリエも興奮している様子でイリスを掴んで此方を指さしている。

「見なさい、キリエ。アレが恋愛クソ雑魚ノアよ」

「恋愛クソ雑魚ノア……?」

「お前ら、俺が優しいからって根本的に調子に乗ってない?」

そう言うのとイリスとキリエは視線を合わせ、キヤーと言っている。こいつら、やっぱり完全に俺を舐めている。イリスに限っては、完全に見下しながら此方を指さし、近づいては胸を指先で突いて煽っている。

頭来た。

「お前、そうやって煽っていると痛い目を見るぞ」

「えー?　ほんとおー?　クソ雑魚恋愛弱者の分際でー?」

「あ、イリス？　なんか嫌な予感してきたからそろそろやめた方が良
いんじゃない」

「おい、イリス」

「ん？　なに——」

ちよつとムラつと来ているのと、半分キレている事実もあったの
で、イリスが此方を向いた瞬間、その体を軽く支えながら口を重ねた。
「……………?…?…?」

唇を重ねた状態でイリスが頭の上にハテナを浮かべ、完全に思考停
止したのを見て、唇を離してからイリスから離れ、良し、と指さした。
俺もこうやって行動できるならまだ男だ。レヴィとシュテルの攻勢
の前に、そろそろこっちもウォーミングアップしておかないとそのま
ま飲まれて食われるだろうし。イリスは丁度良い練習台だった。

「よし、これで気持ちよく朝食食いに行けるな」

「え、待って！　ノア待って！　イリスが動かないんだけど！　完全
にオーバーヒートしてる！　あ、凄い熱！　というかイリス震えてる
！　あ、駄目そう、顔めっちゃ駄目そうこれ！　写真とつとこ」

背後から聞こえるキリエの外道行為をスルーする。なんだ、イリス
も結局は口だけ番長かアイツ。それを理解した所で朝の気分は一気
に晴れやかな物へと変わった。それはそれとして、これからレヴィと
シュテルの攻勢が始まる前にちよつと、自分の不始末をどうにかしな
ければならないなあ、と思い出す。

軽く調子を取り戻しつつ、頭を搔く。

「うっし——謝っておくか」

◆

「すまん」

朝食を食べ終わったらシュテルとレヴィから逃げるように出てき
た。目的の人物は翠屋にいた為、見つける事はそこまで難しくはな
かった。後は誘って、二人きりになった所で海鳴の道を歩きながら
謝った。

「我ながらちよつといきなりすぎたなあ、とは思ってたけどちよつとムシヤクシヤしてた。という訳で割とすまん。砲撃一発までなら喰らう所存」

「いや、砲撃ってなんですか……」

歩きながら、なのはに謝罪する。割といきなり酷い事を言ってしまった、と。それを告げられたなのは横を歩きながらどうしたもんか、という表情を浮かべながら、言葉に詰まっている。その姿を見ながらあー、と声を零す。

「取り繕う必要は別にないぞ。その目を見れば解るし、お前だつて見れば大体感じ取れるだろう」

「えーと……」

なのはが困ったような様子を見せるが、その、と声を置く。

「ノアくんも——その、自分の事が、好きになれないんですか。やっぱり」

なのはが、躊躇する様にその言葉を口にするので、横を歩きながら両手をポケットに入れた状態で、答える。

「嫌い。死にたい」

「そう、ですか」

その言葉を聞いて、なのははどことなく安心したような息を漏らした。

なんてことはない——同族嫌悪だ。

なのはも、俺も、顔を見れば解るのだ。自分の事が嫌いだという事は嫌悪感だ。人柄とか、性格とか、そういうのが一切関係なく鏡に映る自分の姿を見ているような感じがして、嫌悪感が先立ってしまう。だからなのはを見て、自分への嫌悪感と吐き気を自覚した時、

苛立ちまぎれになのはに、俺の事が嫌いだろ、と言ってしまった。「まあ、すまない。俺もちよつと虫の居所が悪かったのはあるけど、他人にあたるべき事じゃなかったからな」

「いえ……その、大丈夫ですよ？ ノア君の気持ちは解らなくもないですから」

そう言うとなのはが足を止め、溜息を吐きながら空を見上げた。どこことなく憂いを感じさせる表情は、少女らしからぬ色を持つていた。まるで思春期が死んだ様な、そんな気配をなのはは滲ませていた。

「私ね……自分が好きになれないんです。なんというか……なんで、なんでなの？　そう思う事ばかりで、答えが出なくて……でも考えてみればとても自然な事で、答えが解って、それがどうしようもなく気持ちが悪くて——」

溜息を、なのはが吐く。

「こういう事、他の人に言うべきじゃないんだと思うけど……なんか、ノア君を見ていると自分を見ているような気がして、気持ち悪いんだよね」

「自分が何であるのかを自覚しているなら直した方が良いぞ」

「ノア君は？」

「俺？　俺の問題は自覚した所でどうにかなる類じゃないからな」

「そういう事だよ。私も、自分が好きじゃないって解った所でどうしようもないよ——だってもう、10年近くそうやって嫌いな自分と付き合ってきたんだから」

なのはと話しながら歩いていると、自然と足は臨海公園へと向いていた。週末という事実もあって、人の数は子供を中心に多かった。だけどそれに気にする事無く公園のベンチまで進むと、二人で並んで座った。流れる空気はやや重い。内容が内容だけに、仕方がないという話もあるが。

俺は——自分が嫌いだ。

嫌い、というよりは死にたい。消えたい。

自分の存在意義が解らない。何故俺が存在しているのかが解らない。俺の存在が誰かの都合の良いキャラクターである、という事実が許せない。なら俺の意思はどうなる？　彼女たちの意思はどうなるんだ？　いや、俺はまだいいんだ。だけど俺の事以上に、彼女たちの感情がそれに玩ばれる事実が許せない。そう、俺一人の問題だったら消えればそれで終わるだけの話なんだ。だけどそれじゃ終わらない。だから死ねない、消えられない。助けないといけない子がいる。つけ

なきやならないケリがある。知らなきやいけないことがある。だからまだ、死ねない。

「どれだけ自分が嫌い、消えたくても。義務がある。義理がある。」

「それがある限り、消えられない」

「……うん、解る。私もきつと、何かできる事がある筈だつて思っているから。どれだけ自分が嫌いでも。心配してくれる人がいるから。その人たちを心配させられないから……だから、どれだけ自分が嫌いでも付き合っていかなきやいけない。向き合わなきやいけないんだよね……」

そう言うのはは、自分が嫌いであるという事実を自覚し、軽くだが向き合っていた。それはあの荒廃した海鳴の、若いなのはにはなかつたものだ。此方のなのは、考えてみれば夢界のなのはと比べると、5年以上の時間が経過している年齢になっているのだ。此方なのは中学生。しかも管理局に入る事もなく、普通の女子中学生として育っているのだ。

あつちの、歪んだ環境と比べれば、こつちのなのははまつとうに育っているのかもしれない。少なくとも戦う必要はないのだから、歪んで育ったりはしないのだろうと思う。それが彼女を少しずつ癒しているのか。

ちよつと、羨ましい。

「ノア君も」

「うん？」

「自分の事、好きになれるといいね」

「どう、だろうな……」

なのはの言葉に、どうだろうな、と答えた。そして考える。

「自分の事が好きになれる時が来るのが……ちよつと、分からないな」
「大丈夫だよ。……うん、ノア君はさ。なんだかんだで周りの人に好かれてるから。きつと、困った時は皆が助けてくれるよ」

「それが、苦しいのは解るだろう？」

「うん。それでも皆、心配してくれているのは解つちやうから。だから私……ノア君の事、嫌いではないけどちよつと苦手だよ」

「……そうか」

「だけど……自分の事が好きになれるようになりたいから。ノア君の事も好きになりたいと思うよ」

そんな、恥ずかしいことをなのはは言つてのける。やはり、こいつは頭の作りが違う。そこまで、達観して物事を見る事は普通の人間には出来ないし、自分の事を嫌つておきながらそんな言葉を口にする事は出来ない。或いは数年の歳月がなのはに、余裕を与えて考える時間を与えたのかもしれない。

それに比べて、俺と来たらほんと情けない。

とはいえ、情けないままでは居られない。

シユテルとレヴィが本気を出すのであれば、俺も相応に男として見せなければ男の矜持というものが泣く。求められるがままに応えるだけじゃ、駄目だ。それではあまりにも男として終わっている。だから相手が本気なら、俺も本気を出した相手をしなくてはならない。今の所、そこまで自分を持ち上げるのが非常に辛いのだが。

「なあ——」

なんでお前はそういう風に言えるのか。それを聞こうと思つた所であー、と叫ぶ声が聞こえた。

「なのはが告白してる——！——」

聞き覚えのない声に素早くなのはと共に立ち上がり振り返れば、良く似た容姿の姉妹が並んで歩いているのが見えた。一人はツインテールが特徴的な、レヴィに良く似ているが火傷の跡が見える金髪の少女の姿で。もう一人は彼女よりもやや背が低く、しかし傷跡を持たない未成熟な印象を持つ少女だった。その片方の名は知っている。そしてもう片方の名前も。既に、確認して、生きている事を知っている。

故に、なのはが声を震わせながら名を口にした。

「あ、アリシアちゃんにフェイトちゃん……ど、どこから……」

「え？ ノア君の事、好き……って言っているの聞こえたよ？」

「言葉が足りない！ 間に挟まっている言葉が色々足りない!!」

「拡散しなきゃ……!」

「アリシアちゃん！ 待って！ お願いだから待って！ 違うから！
フェイトちゃんも止めてよ！」

「なのは、受け入れて貰える人がいて良かったね。良かったね……」
「なんでフェイトちゃん泣いているの!? というかノア君もアリシア
ちゃんを止めてよ!!」

「いや、なんかそこまで必死に否定されるとショックというか……」
「変な所でナイーブだなあ、ノア君!!」

騒がしい様子のなのはと、彼女の友人たち——もう一つの海鳴では
主役として輝いていた筈の彼女たちの平和な騒がしきを見れば、時
が彼女たちを癒すであろう未来が見えた。戦いのない、平和な日常の
中ではあの海鳴の様に歪む事は、絶対にならない。その未来が解り、安心
感を覚え、

そして真つ先にシュテルとレヴィに編集した音声を送ろうとする
アリシアの姿に悪寒を覚える。

「や、やめろ——!」

叫びながら、無理やり騒ぎに引きずり込まれる。

だが不思議と悪い気はしなかった。

シユテルとは一度デートしているのに、自分とはしたことはないのは卑怯だという理論で、あつさりレヴィにデートを取り付けられてしまった。しかも待ち合わせする必要はなく、一緒に家を出て街へと出ようという事で、デート感は薄い。だがこのために軽く準備をしてくるとか、言動の端から本気さがにじみ出ているのが感じられた。

そんなこんなでレヴィとのデート当日。

研究所の前で、軽く着飾った状態でレヴィを待つ事にした。髪型を軽く整え、シャツやボトムスも普段は使わない様なちよつと洒落たやつを着ている。何時も同じ服装を着ているのでは、流石に相手に悪い。そういう事で事前に店で購入してきた新しいモデルの靴も履いていたりする。相手が真剣であれば、それに応えるのも男の役割という物である。

そう言う訳で、レヴィとのデートである。

ちよつとだけ、期待している自分が居ないと言えば嘘になる。

子供らしかつた頃はまだまだが、今では立派な女と呼べるような気配を見せている。その女の気配をするレヴィの前に、流石に子供扱いする様な事は出来ないし、そういう覚悟できているのなら自分もそういう目線を向けるようになる。つまりは子供ではなく、大人の女として扱う必要がある。今までとは当然扱いが違ってくるし、見方も変わって来る。だがそれを望むのであれば真面目に対応するのが男という生き物だ。

少なくとも自分はそう思っている。

本気の想いに対しては、本気で応える。

そうでなければ、俺も相手も道化でしかない。

「まあ……そうだよな。楽しめなきゃ悪いよな」

シユテルに抱きしめられてあやされたのはちよつと恥ずかしいが——それでもすつきりしたのも事実だ。アレのおかげで自分の精神が少し落ち着いたのを自覚している。だからこうやって余裕をもつて考える事も出来るし、楽しもうと考えられる程度には脳味噌も

回るようになってきている。まあ、それにシユテルやレヴィの事は実際嫌いじゃない。過去が存在するかどうかは怪しい俺だが、それでも彼女たちはここで出会った存在だ。彼女たちは本物で、実在しているのだ。それが解っているから安心する。彼女たちとの出会いは、ちゃんと足跡を残せるのだ。

俺が存在している、という事実を。ならそれで良いだろう。それだけで十分だろう。割とその事実だけで満たされる。過去がどうあれ、今のこの時間は向き合うには十分すぎるものだ。

だから、

「ノア、お待たせ」

「レヴィ——」

研究所の方から、歩いてやってくるレヴィの姿に言葉を一瞬で失った。

何時もであれば、動きやすい短パンを履いて走りまわるのがレヴィのイメージだった。だがそのイメージを正面から砕く格好をレヴィはしていた。

緩く、ふわっとしたイメージの夏のコーディネートをしているが、何時もの印象を覆す様にロングスカートを着用した上で、髪型を変えてきていた。普段は運動するのに邪魔だからとツインテールに纏まっている髪は降ろした上で、リボンを編み込む様に飾る事で普段のレヴィには見えない、女性らしさを強調する様な姿を見せるようになっていた。服装も全体で明るさを象徴する様なものであり、レヴィが元々持ち合わせる太陽の様な明るさを阻害していない。

レヴィの元の持ち味をそのまま、しかし女らしさを見せるようになった。

そのギャップが、今日までして来なかった髪型の変化と服装の変化に、いきなり心を撃ち抜かれそうになる。

それを解っているのか、レヴィは歩いてやってくると目の前に立ち、ニヤリと笑った。

「どうかな？ ボクの姿は。ノアは気に入ってくれたかな？」

「気に入るところか心臓を止められそうだよ……あんまり、それを着

るなよ？ 慣れる前に死んじゃうから。いや、本当に綺麗だよ」

「ふふ、ありがとう。なら頑張ったかいもあったかな」

そう言っただけのりと、レヴィの頬に朱が差す。それでレヴィが僅かにだが化粧しているのが見える。そういう部分でも、何時もは無頓着だったのに。なのに今では薄くだが紅を塗っている。僅かな所でも努力を怠らず、そのすべてが此方へと向けられていると思うと、ちよつとヤバイ。

本気で惚れそうになる。

「じゃ、そろそろ行こうかノア」

レヴィが此方に手を差し出して来る。それを取ると、レヴィが両手の指を絡めるように手を繋いでくる。所謂恋人繋ぎ、と呼ばれる手のつなぎ方をする、横に軽く肩が触れるぐらいの距離で並んだ。

「どこに行くとかは……」

「決めてないよ。そして決めなくてもいいよ」

ボクはね、とレヴィが笑った。

「ノアが好きなんだ。一緒に居てくれる君が好きなんだ。ボクの為に全力で頑張った、傷つきながらも諦めなかった君に心を打ち抜かれたんだ。しなくてもいいのに、義務なんてないのに。そしてその結果苦しんでいる君を救いたいんだ。だからね、ボクは何かをしたい訳じゃないんだ」

レヴィは言う。

「君と同じ時間をボクは独占して共有したいだけなんだ。ボクと君だけの時間が欲しいんだ。ただそれだけでボクは幸せなんだ。勿論、その先があっても全然良いよ！ だけどこのデートはただ、ノアを独占したかっただけなんだから」

◆

「イリス？ どうしたんですかイリス？ なんか名状しがたい表情をしていますけど」

「やだ、そんな顔をするの……？ え、待つて待つて、キツイ。辛い」

「イリス、そこもつと詳しく。ねえ、イリス。ねえ」

「楽しそうだすね」

「アルバム、イリスのアルバムを増やさなくては……アクセラレイター・オルタで加速撮影だ……！」

◆

デートとは銘打ったものの、レヴィは同じ時間を共有したいだけであり、特に行きたい場所なんて存在しなかった。そういう事もあり、二人で軽く相談して向かう場所を決める事にした。海鳴も春からその季節を夏へと移し始めており、大分日差しが暑い季節となっていた。これでインドアのクーラーで涼むというのも一つの手だが、折角海鳴という場所に来ているのだからそれはもったいない。

そう言う事で、レヴィと二人でビーチに来ていた。

まだ完全に夏になったとは言えないものの、既にビーチにはそれなりの人の姿が見える。既に熱くなってきた事もあり、ビーチや海風で涼もうとしている姿が散見できる。ただやはり、まだメインの季節ではない為か、それなりに開いている場所がある。

だからビーチまでやってきたら波打ち際まで近づき、波がギリギリ届かない距離をレヴィと、砂浜をゆつくりと歩く。人が少ない所を選ぶと、そのままビーチに二人で並んで、座り込む。流石にそのまま座るのもちよつと服が汚れるので、フォーミュラで軽くマットを生み出し、それを敷いて座る。

肩を並べて海を眺めながら、海から吹いてくる風を浴びて無言のまま、遠くを眺める。

気まずい無言ではなく、どことない、心地よさを感じる。暖かさという物か。少しだけ身を寄せて肩と肩が触れ合うレヴィの存在が、心強い。

だけどそうか……こうやって、一緒にレヴィとだけ過ごす時間なんて今までなかったな、と思います。そのせいだろうか、ちよつとだけ罪悪感を感じる。ただそれをどう口にすればいいのか、というのが解

らない。だけどレヴィの方はどことなく幸せそうな気配を滲ませ、頭をこてん、と此方の肩へと乗せて来る。

「……レヴィ？」

「ううん、何でもない。ただね……ボクは幸せだなあ、って」

「そう、なのか？」

「うん。ボクはね……マテリアル、ラッセル、そして山猫として三つの記憶を持っているんだ。多分シユテるんもそうだろうけど」

「三つ？」

「うん。それぞれちよつとずつ異なる歴史の記憶。明確にそれを自覚できるようになったのは、ボクがノアのおかげで甦ってからなんだけどね」

そう言うのとレヴィは頭を肩に乗せたまま、黙った。それを受け入れた状態のまま海を眺める。海鳴の外へと出る事は出来ない。だからこの海の向こう側に、本当に世界が存在するかは解らない。自分や皆が全力で攻撃を叩き込んでも海鳴の外に出る事は出来なかったし、海鳴の海から外へと出ていこうとすると、いつの間にか海鳴の方へと向かって飛んで戻っている。まるで無限ループに引き込まれたように、ここから外に出る事は出来なかった。

だからこの海が、いったいどこに繋がっているのか。俺達はそれを知らない。俺は、その向こう側から来たのに。

「ノア」

「おう」

「ありがとう」

「……別に、当然だろ」

お前らを、見捨てる事は出来なかった。少なくともそれが強制された行動だったとしても。俺は、今の状態でも。絶対に——皆を助ける事を選んだだろうと思う。いや、絶対に選ぶ。そこは間違えない。もう、レヴィ達は自分の中では大事な存在になっている。見捨てる事が出来ないほど、大事な物になっている。だから絶対に助け出す。助け出すだろう。その為に俺は止まる事はしない。

「ボクはね、ノア。そのノアの行動力……というか守りたい、って気持

ちはちよつとおかしいと思うんだ」

レヴィの言葉におかしい？　と言葉を呟き返す。その言葉にレヴィが頷いた。

「それはまるで家族に対して向ける様な感情だし、そうやってボクらに向けるには時間が短すぎる。たぶん、今はノアが覚えていない、妹って子に本来は向けられる筈だったもんじゃないかなあ、って思ってたたりするんだ。それを忘れてしまっているから、年下のボクらにその感情を向けているんじゃないかな、って」

「それは……どうなんだろうなあ？　まあ、覚えてもいない事に理由は付けられないし……結局は、全力で助けたと思うぜ」

「そう言っちゃおう？」

「言うよ。何度でも。お前らは俺の中では大事な存在だよ」

「シユテるんよりも？」

「……」

「そこは即答して欲しかったなあ」

余りにも意地悪な問いかけに、うへえ、と声を漏らすとレヴィが笑った。楽しそうにレヴィは笑い声をあげながら後ろへと向かって倒れる。ぼふん、と軽く砂を弾きながらレヴィは倒れてから、声を零す。

「意地悪な質問ごめん」

「いや、いいよ。答えられない俺が悪いしな、今は」

「ううん、今はボクが悪かったよ」

でもね、とレヴィは言う。

「ラツセルでも、マテリアルでも、エルトリアでもね？　ボクたちは大人になれた事がないんだ」

レヴィが、その青空色の髪を砂浜に広げながらその事実を口にする。

「歴史が断絶したのか。その先の未来が存在しないのか。それともボクらはそこまでしか生きられないのか。でもね、僕達が100台の半ばに差し掛かる時なんて一度もなかったんだよ？　三つの記憶を持っているのに。なのに一度もないんだ」

「……それは」

なんて、言えば良いのだろうか。それは或いは、死刑宣告かもしれない。お前はそれ以上生きられない。それ以降は存在していない。と。そう言われているのに近い事なのかもしれない。

だからね、

「ボクはね、ノアには感謝しているんだ」

「俺に？」

「うん」

早急に輝くような笑みを見せて、レヴィは言葉を続ける。

「ボクらは子供のまま終わるんだ。そういう風に全ての記憶が断絶しているんだ。だけどね、ノアと一緒に過ごしているボクたちはその先にいるんだ。その先の成長と未来と一緒に居られるという可能性を——夢をボクたちに見せてくれているんだ」

「夢」

夢——或いは夢^{きぼう}。

レヴィはこの日常に、この生活に本来の記憶にはない命の続きを見た。そしてそこに尊さを覚えた。

「ああ、そうだよ……ボクはこの先も生きていられるんだ。この先も一緒に居られるんだ。大人になって、恋をして、愛して、一緒になって——そんな、当たり前前の人生を普通に過ごせるようになるんだ。ボクにとってノアと一緒に時間はそういう物なんだ。だからね、ボクは君の事が好きなんだ」

レヴィ・ラツセルにとって、ノアという男は、

夢^{きぼう}だった。

だからそこにレヴィは恋をした。終わらない夢を見た。その先に続く未来を見出した。

「だけど、うん。そこまで重く見なくていいよ。ボクは単純に、そういうことがあってふつーにノアに恋をしたって話を知って欲しかったんだ。うん……ボクは普通に恋をしたんだ。それだけの話なんだ」

そうやって恋心を語るレヴィの姿は余りにも眩しすぎた。シユテルの恋心も知っていて、それを誤魔化す事は出来ない。二人の愛を

ちやんと感じている。ストレートにぶつけられる好意を感じる。そしてその本気から、俺も目をそらしてはならないという事実も理解していた。

絆でレヴィとシユテル同様、繋がるのを感じながらも、レヴィの横に倒れて青空を見上げる。砂地は程好く熱を持ち、海からやってくる風がその熱を運び去って心地よさを伝えて来る。

「なあ、レヴィ」

「うん？」

「空が青いな」

「うん……ボクの好きな色だよ」

そう言ってレヴィは笑った。

その笑顔が、俺は好きだった。

W i n d i n g U p X

右手を持ち上げ、そこに集まる電流を見た。

元々は自分に備わっていない能力。しかし、レヴィイの能力、或いは性質の共有が可能になったことで自分も気軽にレヴィイの持つ電気を生み出し、操る力を体得するに至った。これでシュテルの時と同じ事が証明された。その感覚が自分の中で理解できてしまっている。故に手の中でバチバチとスパークする電流を軽く眺めてから、手を閉じる。レヴィイの雷を消し去り、今度は手の中にシュテルの炎を生み出す。そしてまた手を閉じてそれを消し去る。

「結局は、俺の心次第……か」

いや、俺もこの程度で心を開くのだからチョロい、と言うのか。或いはそれだけ、他人とのつながりに飢えているのかもしれない。実際の所、心細さの様なものは少し感じている。俺は誰で、いったい何なのだろうかという疑問。明確な答えが存在しないその問いに対して、答えを求めている。

気にしたってしょうがない、という事実は理解している——それでも、こうやって自分の存在そのものがファンタジーとなってくると、様々な疑問が浮かんでくるし、悩む事だつてある。自分の人生そのものが誰かによって彩られた設定だとして——今の自分には、一体何があるのだろうか。

炎、そして雷が掌の中でゆらゆらとゆらめいている。自分が救い出した命を象徴するように。

手元から視線を外し、空を見上げる。

海鳴海浜公園のベンチに平日から一人で座っていると、まるで職を失ったダメ人間のようだ。実際、職もクソもないのだが。子供たちでさえ今は学校か、或いは昼食でも食べていてここにはおらず、静かな公園の時間を独占出来ていた。正直、人のやかましきは全てを忘れるのに良い。どちらかと言うとそういう騒がしい方が慣れているし、好ましい。

だが偶にはそういう煩い環境から身を遠ざけたくなる。

今の様に。

こうやって人の気配もなく、聞こえてこない場所だと自然と考えが脳内でぐるぐると回り続ける。そうやって気分がどんどんとマイナスへと向かって行くのは事実だ。

だけでも、

思い出さないとならない。

この喪失感はなんだ。

シユテルと、そしてレヴィと心で繋がる。それを感覚的に理解している。だがそうやって繋がればそこにある筈なのに、その先が感じられない繋がりを感じるのだ。知っている筈なのに、知らない。それこそシユテルやレヴィのずっと前から自分と繋がっている存在がある様に思えるのだ。つまり最初から自分とつながっているはずの誰かがいるのだ。だけどシユテルやレヴィのようにはつきりと自覚し、相手の状態まで把握できる繋がりとは違い、こちらの方は繋がっているという事しか解からない。

誰か、誰かを忘れているのだ。思い出さなくてはならない誰かを。

「誰かを……誰かを、忘れている気がする……」

その違和感を感じられるようになった。ほかのことは何もわからなくても、それだけが今——自分の現実のヒントになる。だからその繋がりにより強く、より確かに感じられるように誰もいないこの講演で静かに精神を集中させていた。

だがだめだ。まるで感覚がつかめない。情報が足りない。その糸の先に繋がる存在、その誰かが解からないからか全くその先が辿れない。物理的に遮断されているようにさえ感じられる。

「……ダメか」

落胆を感じながら息を吐く。結局、新しい力を得ても、自分のことは解からず仕舞いだ。結局、俺は何なのだろうか。その疑問が新しいヒントと共に残り続ける。何をどうしたらいいのか、それが見えているだけに、

「まるで餌をぶら下げられた家畜のようだな」

「家畜に神はいない、とは誰の言葉だったっけね」

こぼした言葉に対して返答が返ってきた事実になんか驚けば、正面にはいつの間にかフィルの姿があつた。イリスからはその所業から激しく嫌われている男だが、今のところこつちに来てから娘に意地悪をしているだけの男に見える。そういうことで、この男がそこまで極悪人にはどうしても自分には思えなかつた。所業は聞いているが、それでも今は自制している部分が強いのだから当然かもしれないが。

何もやらかしていない以上、悪印象を抱けというのが難しいのだが、

「や、ノア君。女の子に囲まれているというのはなかなか大変だね？」
「お前はどうかだよ」

「私かい？ 私はそこらへん欠片も興味がないからね。子供を作ることに時間を使うなら私は子供を増やすよ」

「今なんて言ったお前？」

フィルは自分の言ったことをまるで気にしないように笑い声をこぼしながら、懐に手を伸ばし、そしてそこからタバコの箱を取り出してきた。軽く箱を振ってそこからタバコを出すと、その先を此方へと向けてきた。タバコは辞めたんだが——と、口にしようとして、

「所詮は夢か」

「墮落の世界へようこそ」

「まあ、たまには悪くない」

今更、良い子ちゃんぶる必要もないな、と思い直しタバコに手を伸ばし、つまむ。それをそのまま口に咥えて指先にシユテルの火を使つて灯す。隣では同じようにタバコを口に咥えるフィルが見えるので、指先をそちらへと向ければ、フィルもタバコに火を灯した。タバコの煙を吸い込んで、久方ぶりに肺を満たす感覚を味わいながら横で同じようにタバコを吸うフィルを見た。

「タバコ、やるんだな？」

「まあ、研究者時代は隠れて偶にね。こう見えて自分のイメージ作りもあるから目立って吸えなかつたけど、さすがに行き詰った時とかは吸ってたよ」

「へえ」

「ま、悪い大人だからね」

そう言つてタバコを啜る姿はどことなく慣れていている様子があった。爽やかな外見とは裏腹に、割と吸っていたほうなのかもしれないとフィルの姿を横目にしながら軽く考えてから、視線を外す。口に啜えたタバコの煙が空へと向かつて上つてゆき、そして霧散して消える様子をしばらく無言のまま眺める。何か、フィルに言うことでもあったかどうかを考えたが、

特に、こいつに向ける言葉がなかった。

なんというか、特別に選ぶ話題がなくて、困った。

「まあ、私たちに特にこれといった接点はないしね」

「……ん？」

「いや、別に無理して話題を見つける必要はないってだけのことだよ」

「まあ、そうか」

……じゃあ、なんでこっちに來たんだお前？ そんな疑問を一瞬浮かべてしまふも、フィルのほうが用事があつたのかもしれないと思つた。

「私は私であそこにいる間、できないような話をしてみたいとは思うけどね」

ほほう、と声を漏らしながら足を組み、空を見上げながらたとえば、と聞いてみる。

「そうだね……君の恋愛事情とか？」

「普段からキリエに攻め込まれている辺りだからやめてくれよ……」

「いやいや、正直な話だよ。シュテルもレヴィも君を一人の男として認識した結果、意識的な部分で大きな変化を遂げた。彼女たちが君へと向けているしぐさの一つ一つが大変抗いがたい誘惑だろう？ 昔の君はもつと肉食系だという話だったし、正直魅力的に映るんじゃないかい？ 彼女たちのお誘いは」

「お前さあ……」

いやいや、とフィルは口にする。

「そういう下世話な話はするもんじゃないだろう？」

「私たちしかいないところだから話をするんじゃないか。女の子に詰め寄られるのと私みたいな男に話すのでは気分も違うだろう?」

「そんなもんかあ?」

「そんなもんだよ。だからほら、さあ」

ファイルがそんなことを言ってくる。だけどそうだなあ、とぼやいてしまう。真面目な話をするとう女子ばかりに囲まれていてちよつと息苦しさを感じていた部分があるのも事実だ。いや、彼女たちの存在が煩わしいとかそういうことは別にない。見た目はいいし、性格も良いので揃っている。少なくとも目の保養にはなる。だがいくら何でもあんなにも無防備で身近にいると慣れてしまおうし、息が詰まるのも事実だ。

とはいえ、

「悪い気分じゃないな、さすがに。そこまでひねくれちやいない」

「はは、そういうえば君は結構手が速そうに見えるよね——見た目が」
「俺がチャラいつてか」

いや、まあ、食えるならとりあえず食つとくぐらいの軽さはあるのだが。だけど健全な男という生き物は大体そうだろうと思う。食べるのに食わないやつはインポなのかよほど事情があるのか頭が漂白されているかのどれかだ。そして今の自分は事情があるという部分にカテゴライズされる。だから即座に食わなくても許される。

苦笑しながら加えていたタバコを手に取り、煙を吐き出しながらそうだな、と呟く。

「見た目はいいよな。見た目は」

「おや、それでは中身はどうか、って言いたそうだけど?」

「気の強い女は好みじゃないなあ」

「むしろ気の強い子を屈服させるのが好きそうに見えたんだけどなあ」

「勘弁してくれよ……」

気の強い女は相手してて疲れるからもう良い、とさえ思っている。そういう意味ではガンガン押してこられるよりは、少し距離を開けて引き込んで来ようとする今のシユテルとレヴィのやり方が一番効く

のだが。とはいえ、ああもアピールされると心が揺らぐのは事実だ。

「あー……何も考えずにいたい……」

「そうすれば遠慮なく楽しめるから、かい?」

からかう様に言ってくるフィルの言葉にそうだなあ、と呟く。こんな状況でもなければ大歓迎だったかもしれない。

「ふーむ……」

そう答えるとフィルは腕を組みながらでは、と言葉を置く。

「イリスはどうかかな? 親のひいき目ながら中々優れている子だと思うんだけど。見た目もいいし、専門技能もあるし、家事もできるタイプだよ」

「自分の娘を売り込むのかお前……」

あきれた視線を横のフィルへと向ければ、フィルが両手を広げている。

「私だって一応は人の親だ——娘の将来の幸せぐらい願うさ」

「その将来が俺らに存在するなら、の話だけだな」

灰を落としながら息を吐き出し、タバコを啜えなおす。

そう、未来が存在するならの話だ。結局のところ、俺たちに未来があるかどうかという事自体が怪しいのだ。特に自分に関しては実在するかさえ。それを考慮してもここだけの関係であればそこそ楽しんでもいいんじゃないか……とは考えている。

まあ、事実、先のことを考えすぎても気が滅入るだけだ。完全に割り切れてはいないものの、シユテルやレヴィのおかげで少しだけは前向きになれている。少なくともあそこまでアプローチされているところで、自分だけ黙って泣き寝入りを続けるつもりはない。

やられたらやりかえせ。とてもシンプルな理論だ。

男と女の駆け引きもそういうものだろう。

「で、イリスはどうかかな?」

「拘るのかよ……」

まだ追及してくるフィルの言葉にややげんなりとしながら呟けば、フィルがすぐに言葉を返してくる。

「最低限、未来に対して希望は残しておきたいだろう?」

「希望ねえ……まあ、悪い子じゃないとは思うけど。見た目はいいし。あの家にいる子全員に言えることだけだ」

それ以上に口の悪さが目立つ娘だと思っている。あとは悪ぶっている割には意外と中身は善良だということだ。彼女が遠慮なくファイルに攻撃を叩き込もうとしているのは、その程度ではファイルが死なないという信頼感から来ているのだろう。実際、いきなり唇を奪ったことに對して報復らしい事を一切行っていないのが証拠だ。

「よし、少なくとも脈がないってことではないみたいだね！ 将来的にはイリスと君が結婚して君も私の息子になるな……！」

「どこから来るのその発想」

「もちろん、ハートさ」

そこでファイルは自分の頭ではなく、ハートを指した。なるほど、こいつは心臓の病を患っていて、それが脳に達してしまったのかと納得した。仕方がないので少しだけファイルのことを憐れんでおく。それ以上のことは何もしないが。

ああ、しかし。

口の中に広がるこの味は、なんとも懐かしい。

本当に味わったかどうか、それさえ不明なのにこの味には覚えがあった。その感覚が不思議と心を癒してくれる。

「欠片でもイリスの可能性が残っていればいいのさ、未来の可能性を模索するというのも実に大事なことから。何せ、想像しなければその先はないのだから。ほら、考慮するだけならタダじゃないか」「まあ、そりやそうだけだ」

ファイルは笑みを浮かべながら、言葉をはつきりと口にする。

「少しは未来に對して、希望を抱いてもいいんじゃないかい？」

「抱いたところで無駄だと知ったら絶望しないか？」

「いいや？」

ファイルはそう言いながらタバコを捨てて立ち上がり、吸い殻をフォーミュラで分解させる。跡形もなく消滅する吸い殻を背に、公園の出口へと向かって歩いて行く。

「裏切られるのは信じなかった者さ、ノア君。いつだって信じる者は

裏切られないのさ」

「……なんだそりゃ」

去ってゆくフィルの背中姿を眺めながら呟いた言葉にフィルが言葉を残してゆく。

「——主観だよ、ノア君。全ての答えはそこにあるのさ。何故、と君が問わなければならない事がある筈さ」

言いたいことだけを言ってフィルは去って行った。その姿が完全に消え去るのを眺めてから自分も、吸い殻を吐き捨ててそれを靴の裏で踏みつぶしつつ、炎で完全燃焼させた。

あいつは一体、何がしたかったのだろうか。喋りたい事だけを喋ってから勝手に帰って行ったコミュニケーション能力が明らかに欠落しているあの頭のおかしな男のことを考えて、考えるだけ無駄であることを理解し、立ち上がる。

「根を詰めてもしようがない、か」

どうせ、なるようにしかならない。出来る範囲で出来る事を成した結果どうにでもならないのなら、それは最初から希望何てなかったというだけの話だ。だとしたらもはや自分に残されていることは前に進むことだけなのかもしれない。

……そろそろ、次に進むべきなのだろう。

八神堂。

その本格的な探索を近日中に開始する事を考えて、一人だけ残された公園から去るために立ち上がった。

まあ——少なくとも、自分一人じゃない。

それだけは今は救いだった。